

---

# 私の邪悪な魔法使いの友人

ロキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の邪悪な魔法使いの友人

### 【Zコード】

Z9366S

### 【作者名】

ロキ

### 【あらすじ】

若き魔法使いブーナスは念願の塔を購入した。彼はこの塔を、自分の理想の住まいにするため、世界中からあらゆる優れた人材を集めようとする。その手助けをしてもらおうと、彼はまず友人のシヤグランを塔に招待した。自称「新本格ファンタジー小説」より詳しいあらすじは本編に。

## 映画の予告編風あらすじ

「何もかも偽りだつたつてわけか、プラーーヌス・・・」

「いや、少なくとも僕が君に抱いた友情は本物だよ、シャグラーン。

蝶のように白い膚、吸いこまれるように真蒼な瞳、魔法使いなのに若さと美しさを併せ持つた男、プラーーヌス。

その若き魔法使いプラーーヌスは、念願の塔を購入した。

しかしせっかく手に入れたこの塔は問題だらけの物件だった。

不必要な程に多い召使い。

どこからともなく聞こえてくる不気味な女性の泣き声。

前の塔の主が行っていた人体実験の残滓。

そして度重なる蛮族の襲撃。この塔の前の主はその蛮族との戦いに疲れて、健康を害して死んだという。

そんな塔に招かれ、そこで働くことになった肖像画家のシャグラーン。

彼は魔法使いプラーーヌスの古くからの友人であった。

「友達だから君に頼んでいいんだよ、シャグラン。こんなことは信頼できる人間にしか依頼出来ない。だってこの塔の全てを晒してしまつわけだからね」

そうやつて口説かれ、肖像画家の仕事を一時休止し、シャグランは仕方なく塔で働くことになる。

しかしそんなシャグランには奇妙な記憶の空白があった。

いつからこの魔法使いブランと友達になつたのか、どうやって魔法使いなどと仲良くなつたのか、よく思い出せなくなるときがあつたのだ。

シャグランは彼のそんな症状を共有するものに、この塔で出会った。

騎士バルザである。

バルザはファビエル中にその勇名を轟かす騎士。決して魔法使いの塔の門番として働くような人物ではない。

どうやらバルザはブランに何か弱みを握られているよう。

いや、実はバルザは偽の記憶を埋め込まれて、ブランの意のままに操られていたのだ。

少しずつ明らかになるブランの邪悪さ・・・。  
それに戸惑うシャグラン。

そもそも彼らの友情は眞実なのか偽りなのか？

雷鳴のように明滅する偽りの記憶の中で、シャグランは迷宮のよ  
うな塔を彷徨う。

新本格ファンタジー小説「私の邪悪な魔法使い」更新中！

## 第一章 1) プラーヌスからの手紙

私の邪悪な魔法使いの友人、プラーヌスが手頃な値段で塔を手に入れたらしい。

いつでもクールに感情を抑えている彼にしては珍しく、嬉々とした文面でそれを報せる手紙を寄こしてきて、私は少し微笑ましい思いをした。

しかしその手紙から察するとこゝ、そこはかなり問題の多い物件のようだ。

最も近いエリュエルの街からでも相当離れているようだし、鬱蒼と生い茂った樹林に囲まれた場所に塔は建っているらしく、そこまでの行き来はかなり不便を極めるみたいだ。

しかもその樹海には大勢の蛮族が住んでいて、塔はたびたび襲撃されているという。さすがの彼もその対処に手を焼いているようだ。

そんな手紙を読んで誰がそんな塔に行つてみたいと思つものであろうか。

だいたい私も画業のほうが忙しく、病氣がちの母もいる身である。気軽に旅など出来る状況ではない。

しかし相変わらずプラーヌスはほとんど命令口調の横柄さで、私をそこに招待したいと言つてきたのであつた。

断るすべはない。彼がそう決めたのなら私は従わざるを得ない。プラーヌスは私を拉致してでもそこに連れていこうから。

彼は本当に手加減も何も知らないのだ。私に対する嫌がらせのためにも、派手な魔法を使って私を拉致していくに決まっている。そうなればこの静かな街が大騒ぎになつてしまつるのは請け合いである。

そういうわけでプラーーヌスがしびれを切らして私の街にやってくる前に、私はトランクの中から久しぶりに旅用のフードを取り出し、高い金を出して馬車を借りて、ここまで来たのである。

## 第一章 2) カプリスの森

その樹海はカプリスの森と呼ばれているらしい。

私が聞いた話では、その樹海は昼でも夜のように暗く、延々と続く同じ風景が旅人の方向感覚も失わせるとか。

あるいは木々がまるで生きているようにウロウロと移動して、その形や地形を僅かに変えるから、どんな地図も磁石も役に立たないとか。

いざれにしても、どんな人間だってそこに一度入りこむと抜け出すのは不可能だということをあらゆる場所で聞いた。

私はそれを理由に彼の招待を拒むことを本気で考えた。いくらなんでも命懸けで彼に会いたいとは思わない。

しかしその樹海の近くの村に住む人たちによれば、そんなのは風説に過ぎないと一蹴された。

ちゃんとした案内人さえつければ道に迷うことはないようだ。それを見拠にその村人が私の案内人を快く買って出てくれた。

「確かに木々は動きますがね。でもそんなのは問題ではないんですよ」

その村人は言つてきた。「むしろ動いていく木に沿つて歩いていけばある泉に到着するんです。そこから塔まではすぐですよ」

だけどその案内人を雇つために支払わなければいけない金貨の量が、普通の旅人なら誰も払うことの出来ない額だった。  
もちろん私もそれだけの持ち合わせはない。

私は窮した挙句、塔に到着すれば、その主が必ず払うと約束して、何とかその男を雇うことが出来た。

プライヌスは世にも邪悪で意地悪な魔法使いだが、決してケチではない。

まあ、ケチな人間に魔法使いなど務まるわけがない。魔法使いは魔法を使う度に、この村人を雇うよりも高価な宝石が壊れていくのだ。そんな魔法使いたちに真っ当な金銭感覚のようなものがあるわけないのだ。

その村人もおそらく魔法使いのそのような事情を知っているのだろう、私が塔の魔法使いの友人だと知つて、目的地に到着してから金貨を払うことを簡単に了承してくれた。

## 第一章 3) 魔法使いの宝石

馬車の手綱をその村人に任して、私は幌の中で眠っていた。

外から見る限り、木々が密生して歩く道もないほど樹海かと思つていたが、途中までは馬車で行けるらしい。近くの村人たちもその森で狩りをしたり、木の実を探つたりするようだ。

しかし途中までしか馬車で行けないということは、こんな樹海のどこかで馬車を乗り捨てなければいけないことになる。

馬は手で曳いていくとしても車は無理だ。そこにしばらく放置せざるを得ない。でもこれは借り物である。ちゃんと借りた相手に返さなければいけないものなのだ。

だけど私はこんな薄暗い樹海を歩く気になれなかつた。  
少しでこの馬車に乗つていられるのならそれがいい。

そのあとのことは考えていられない。

だいたい、もし私が借り主に馬車が返せないとすれば、それはプラーヌスせいだ。こんな僻地に住んでいるプラーヌスが全て悪いに違ひないのだ。

私はそつやつて開き直つて馬車の中へ眠つていた。

まあ、しかし魔法使いの塔がこれほど不便な場所にあるのには理由がある。

何も邪悪な彼らが街の人間から恐れられ、このような僻地に追いやられてこるわけではない。

魔法を使うには宝石が必要である。

詳しいメカニズムは私の知るところではないけれど、魔法使いは宝石の中に秘められているエネルギーを糧にして魔法を使う。その度に宝石は割れしていく。

魔法は非常に高くつく、この世の高級品なのだ。

だから魔法使いは限られた回数しか魔法を使うことが出来ないわけだ。

まあ、そのおかげで、魔法使いなんかがこの世界を支配してしまうようなことから、辛うじて免れているのであります。確かにこの世は、ろくでもない国王たちも多い。でもそれでも魔法使いたちよりはマシに決まっている。魔法使いが支配する世の中なんて、そんなこと考ふるのも恐ろしいことだ。

しかし宝石を消費しないでも魔法を使うことの出来る、限定された場所がある。

それが世界各地に散在している魔法使いの塔の中だ。

どうして塔の中だと宝石の力を借りずに魔法を使えるのか?

その理由は単純だ。その塔の築え立つ地盤のはるか地下に、鉱床が存在しているからだ。

魔法使いは地下に眠る、宝石の原石の力を借りて、思う存分、心置きなく魔法を使えるらしい。

だから優秀で高名な魔法使いの多くが塔に住んでいる。私の邪悪な魔法使いの友人、プラークスが塔を入れられてこんなに喜ん

でこるのはやうこつわけである。

彼はおそらく塔に閉じこもり、好き勝手に実験に明け暮れているはずだ。そしてその成果を誰かに自慢したくて仕方ないのだろう。

私はおそらく、彼の唯一の友人だ。そういうことで運悪く、私に白羽の矢が立つたに違いない。

## 第一章 4) 蛮族襲撃

奇妙な叫び声と馬蹄の響きを聞いたのは、馬車の振動に慣れてきてようやくウトウトしかけていたときであった。

しばらく私は夢心地でその音を聞いていたが、これは明らかに何か異常なことが起こりつつあることに思に至つて、慌てて飛び起きた。

私は幌から身を乗り出して、村人に叫んだ。

「何事ですか、これは？」

「み、見つかってしました。この辺り、彼らは余り出没しないはずなのに！」

必死に鞭で馬を叩いて、馬車のスピードを上げようとしながら、その案内人の村人は答えてきた。

「見つかって？」

「蛮族ですよ。私たちはもう終わりだ」

「そ、そんな・・・」

弓矢が馬車の幌を突き破り、さつきまで私がもたれていた馬車の骨組みの部分に突き刺さったのはそのときだ。

私は幌から身を乗り出し、弓矢の飛んできた方向を見た。

そこには馬に跨つた、上半身裸の逞しい身体をした男たちがこっちに向かつて走つてくるのが見えた。

確かにその村人の気弱な意見に同意せざるを得なかつた。

その男たちの面構えはどれも見るからに獰猛で、まるで食えたケルベロスかオルトロスを連想させた。捕まれば私たちは躊躇なく殺され、それどころか丸焼きにされ食べられてしまうかもしれない。

「あれは人間なのか、それとも魔物なのか・・・」

私は呆然とつぶやいた。

「まあ、わかりませんが言葉が通じないことは事実です。逃げるしかないですよ」

村人は私を怨むような声でそう言つてきた。「いや、もう逃げても無駄か」

蛮族の男たちは見事な手綱さばきで馬を乗りこなし、木々がせまり合つた林の中を抜け、私たちの馬車の前に回り込んできた。

馬車馬はそれに驚き足を止めた。私も村人も同時に馬車の外に転がり落ちた。

落ちた衝撃で胸の辺りを強打して、息が出来ないことも確かだつた。しかしそれ以上に私は恐怖で顔を上げることが出来なかつた。

何を言つているのかわからない蛮族たちの言葉が少しづつこつちに近づいてくるのだ。

それだつたらまだ、「こいつの足は俺が喰つから、お前は腕をやるよ」とか、「脳みそはみんなで仲良く分けよう」などとはつきり言つてくれたほうがましである。これから何をされるのか把握出来るのだから。

私は思わず、同じように隣で丸くなっている村人の手を握りながら祈りの言葉をつぶやいた。「ルヌーヴォの神よ、これからは一切嘘をつきません。父母も大切にします。だからお願ひします。どうか命だけはお助けを！」

しかしそんな私の敬虔な祈りを蹴散らすように蛮族たちの足音が近づいてくる。

そして鞘から剣を抜く、乾いたあの金属音も聞こえてきた。

私は必死にルヌーヴォの神に祈り続けた。どうか命だけは助けて下さい。まだ妻も娶つていませんし、人生の楽しみの半分も体験してません。

だからどうか慈悲を。

いや、もういつそ殺されても構いません。しかしせめて苦しみなくひと思いに殺して下さい。

そのとき薄暗い樹海の中が一瞬、明るく瞬いたのだった。

私は何事が起きたのかと思い、さっきまでの恐怖も忘れて顔を上げた。まるで真昼の砂漠が見える窓を開けたかのように、私の視界は強い光に包まれた。

光に慣れてきてようやく何が起きているのか理解出来た。七、八人もいた蛮族たち全員が、炎に包まれて、のたうちまわっているのだ。

やがて蛮族は、さつきまでそこに存在していなかつたかのよう、元黒い灰になり燃え尽きていった。私はその光景を、砂時計の砂が落ちていくを見守るように息を殺して見つめていた。

すると背後に何かの気配を感じた。

「この辺りは塔のテリトリーじゃないようだ。宝石が必要みたいだった。君のせいでサファイア、オパールを三つずつ使ってしまったよ」

私は身構えながら慌てて振り向いた。すると黒いローブを着た若い男が、そんなことを言いながらこちらに向かって歩いてくる姿が見えた。

蝶のように白い膚、吸いこまれるように真っ蒼な瞳、銀色の髪が額にかかっているのが見える。

美しい男だ。

喉のところに印象的な傷があるが、それは彼の美しさを無視してするどころか、むしろ美しさを引き立てる飾りになっている。あるいはただその程度の傷と引き換えにして、十全なる美を手に入れたか契約の印のよう。

その男の手の平からキラキラした粉がこぼれ落ちていた。

おそらく壊れた宝石の細かい破片である。その手からこぼれる光のきらめきと相俟つて、少し物憂げな足取りでこちらに歩いてくる様はまるで天界に住む翼人一族のようだ。

しかしこの男こそ、私の邪悪な魔法使いの友人、プラーヌス。

「プラーヌス！ 君のせいで危うく死ぬところだったんだぞ！」

私は思わず彼に叫んだ。

「それが命の恩人に言つ言葉か、シャグラーンよ。僕は君の様子をずっと見守つていたさ」

彼の柔軟な唇が開き、そう私に言つてきた。

「はつ？」

「ほら、君は何を握っているんだ？」

彼の言葉に私は自分の手を見た。

私の手はなぜか木で出来た人形を掴んでいた。  
確かに恐怖の余り、私は祈りの言葉をつぶやきながら、案内人の村人の手を握つていたはずだ。

それなのに村人はどこにもいなかつた。その代わり、赤ん坊ぐら

いのサイズの木の人形がそこにある。

「どうしたことだ？」

「単純だよ、シャグラーン。もともとあんな村人はいなかつたんだよ。あれは僕が魔法で作り出した幻さ」

「えつ？」

「あんなに都合の良い案内人がいるものか、僕が君のために用意をしておいたに決まつていいだろ」

私を馬鹿にするようにそう言いながら、ブランクスは持っていた杖で、地面に堆積する朽葉をかき分け、馬車の周りに大きな円を描き始めた。

「戦利品は馬が八頭か。この程度では割に合わないな。でも仕方ない、シャグラン、その馬たちを出来るだけこの円の中心に集めてくれ」

「あ、ああ」

私が苦労して馬を集めると、ブランクスはロープの懷から革製の小さな袋を取り出した。そしてその袋の中に指を入れて、宝石を二つほど出してきた。

「ダイヤモンドか」

私はその美しさに見惚れながら言った。

「そうだ。馬車馬と併せて馬が九頭、幌つきの馬車、人間一人、それだけいれば最低でもダイヤが一つは必要だ。飛ぶぞ」

「飛ぶ？」

「僕の塔まで瞬間移動だ」

## 第一章 5) プラーヌスの塔

すぐに視界が真っ暗になり、身体が宙を浮くような感じと、勢いよく落下していく感じが立て続けに襲ってきた。まるで嵐の海に小舟で乗り出したかのようだ。気がつくと私は地面に手をつき胃の中の物を吐いていた。

「大丈夫か、シャグラン、生きているか？」

プラーヌスの声が聞こえる。

「あ、ああ、何とかね」

「しかし失敗したよ、宝石が少し足りなかつたかもしだれない」

「えつ？」

「ほら、一緒に瞬間移動してきた馬が」

プラーヌスが指差したほうを見ると、一頭の馬の身体の後ろ半分が無くなっているのが目に入った。輪切りにされたその馬の身体から、内臓や骨や筋肉が露出しているかと思うと、それがドロドロと身体の外に流れ落ちていた。

私はその光景を見て、更に気分が悪くなつた。

「あんなことになるのが君じゃなくて良かつたな」

「な、何だつて？ 僕にもその可能性が？」

「ああ、僕が宝石をケチつたせいだね。あともう一つ、アメジストでも混ぜておけばあの馬も無事に飛べたかもしない」

私は哀れに息絶えていく馬を、ありえたかもしれない自分の姿のようを見つめた。

「何でことだよ・・・」

こんな重大なミスを、このよつた態度で片付けよつとするブライヌスに向かつて、何か辛辣な言葉を言つてやろうと思つたけど、その気力も体力も私にはなかつた。

それにふと視界を上に向けた私は、そんな怒りも吹き飛ぶような驚きを覚えてもいた。

「！」  
「これか？」

「ああ、これさ。我が塔によつて」

そう、ブライヌスの塔が、破壊の限りをつくして立ち去つていく巨人のように、傲然と突つ立つていたのだ。

塔の門がすぐ目の前にあり、それが私の視界のほとんどを覆つていてその全体の像は見えなかつたけど、それはとても巨大な塔だ。まるで天に続く梯子のように遙か高くまで伸びている。

確かに塔は黒くて、暗くて、不吉な印象しか訴えかけてこないが、王の住む宮殿や、リヌーゴーの神々がいる神殿などと比較出来るだけの壮大な建築物である。

「・・・想像していた以上だよ

「そうか」

プライヌスは私の言葉に満足そうに頷いた。だけどもちろんお世辞なんかじゃない。私は本当に圧倒されながらその塔を見つめていた。

黒い鋼鉄製の門には細やかな装飾が施されている。幻想上の生き物の姿や、魔法文字が彫られているようだ。

その門を囲むように巨大な悪魔の石像が塔に張り付いていた。まるでその塔に来た客を追い返そつと威嚇しているごとく。

間違いなく、はるか古代に建設されたものだらう、今の建築様式とはまるで違う。それに悪魔の石像などを守り神のように設えているなんて魔法使いの塔しかないに違いない。彼らは魔族の力を借りて魔法を使うのだ。

私が塔の装飾に目を凝らしていると突然、門が開き、小汚い農夫のような男たちが三人ほどトコトコと出てきた。

プライヌスはその男たちを見ると吐き捨てるような口調で言った。

「おい、馬の死体を処理しろ。くれぐれも僕たちの今晚の夕食になど出すなよ！まあ、食べなければ君達が食べるがいいが」

男たちは返事なのか唸り声なのかわからないような声で頷いて、氣だるげにプライヌスから言いつけられた仕事を始めた。

「ずっとこの塔に住み着いている召使いなんだ。まるでドブの中

の生き物みたいな連中だろ？ 何人かを除いて、彼らを全て解雇するつもりだよ。どうも気にくわない連中なのさ」

プラーーヌスが私に言つてきた。

「で、でもこれだけの塔を維持していくと思えば相当な人手が必要じやないのかい？」

私は巨大な塔を仰ぎ見ながら、プラーーヌスの怒りを滲ませた言葉にせう反論した。

「ああ、その通りだ。だから今すぐは無理だけど、いずれ新しい召使いに取り替える。実は君をここにも呼んだ一因もそれにあるんだ」

「はあ？ どうこいつ」とだよ、それは？

「まあ、詳しい話しさ後だ。とりあえず塔に入つて旅の疲れを癒すといい

## 第一章 6) プラーヌスからの依頼

塔の中に一步入った途端、明らかに違う空間に足を踏み入れたような感覚がした。

背筋を凍らすような冷気、目に見えないが何かが近くをウロウロと浮遊しているようで、心が落ち着かない。どこからジロジロと誰かに見つめられている気もする。

今までこれに似た感覚を覚えたのは、子供の頃、誤って墓場に彷徨いこんでしまったときの、あの何とも言えない心細さに近いかもしれない。

確かに壮大で、凄い建物で、プラーヌスもこの塔を誇らしげに自慢しているけれど、残念ながら私には墓場か処刑場のような、恐怖と不気味さしか覚えなかつた。

ランタンを持った召使いが、階段を上る私たちの足元を照らしてくれている。

石柱や石壁などに細やかな魔法文字が刻まれていて、それがときおり虹色にきらめいていた。

しかしその程度の灯りでは、この塔の暗黒に少しも抵抗出来ていない。

この塔に到着したときはまだ日は暮れていなかつたはずなのに、塔の中は真夜中よりも暗かつた。私は塔を前にしたとき、その外観に心を打たれただけで、中に入った途端、その感動は完全に消えていた。

「応接の間に食事を用意している」

「まあ、まだ客を迎えるように整つてはいんだけどね、応接の間などと呼ぶのもおこがましい殺風景な部屋だ。この塔は本当に巨大なんだよ。僕はまだ部屋がどれくらいの数あるのか把握し切れていない。そしてどれくらいの人数がこの塔で働いているのかもわからない」

「そ、そりゃうね、普通の城館ぐらいの大きさはあるみたいだから」

そのとき何か冷たいものが私の首筋を撫でていったような感触がしたので、私は思わずプラスチックのロープの端を掴んだ。

プラスチックはそんな私をいぶかしげに見たが、気にせずに話し続けた。

「ただでさえ魔法の研究で時間が足りないんだ。僕にこの塔を管理している暇なんてないよ。だから僕にとってこの世で大事な友人である君を、上手く歓待出来ないかもしない。それでも心を悪くして欲しくない」

「プラスチックらしくない言葉だね」

「何か冷たいものが私の首筋を撫でていったのは気のせいだったようだ。私は気を取り直しながら言った。「君にそう言って貰えるだけで十分嬉しいよ」

「いや、シャグラム、でも君にはこの塔を自分の家だと思つて覗いで欲しいのや」

プラー・ヌスが自ら扉を開けて、僕を先にその部屋に入れた。

大きな部屋だ。応接の間には中央に十人はゆうに座れる大きなテーブルがあり、そこに既にたくさんの料理が用意されていた。

給仕人と思しく白い服を着た男が私たちを迎える。料理からは私の空腹を刺激するような香りが漂っていた。

だけどプラー・ヌスの言つ通り、確かに殺風景な部屋だった。剥き出しの石壁が寒々しく、広過ぎる部屋が余計にそれを助長している。華やかな飾りといえば、花柄のテーブルクロスと、皿の上にこれでもかと盛られている果実だけだ。それ以外、その部屋には温もりや華やかさなんものがまるでなかつた。

しかし天井の梁に吊るされたたくさんのランプから発せられる灯りのせいで、幾らか私の恐怖が和らいだことは確かだ。

「君が無事にこの塔に到着したことと、僕たちの永遠の友情を祝して、乾杯」

プラー・ヌスがワインを入れたグラスを掲げた。

「乾杯」

それに余りに空腹だつた私はその用意された料理をすぐに食べ始めた。

まあ、はつきり言つて美味しい料理ではなかつた。カボチャの煮込みシチューや、豚の丸焼きをトマトで味付けたものなど、もちろん食べたことのない料理ではなかつたが、何もかもが粗雑で、味付けは濃過ぎるし、素材にも新鮮さが感じられない。

もしこんなにも空腹でなかつたら、食は遅々として進まなかつただろう。

しかしプラー・ヌスの心遣いは、この料理の豪奢さから十分に伝わ

つてくる。

私はいつの間にか随分リラックスし始めていたと思う。かなり高価なワインもその私のリラックスに寄与していただろう。ワインに料理人の腕は関係ないから。

「美味しかったよ」

「そんな社交辞令はいい、大した味じゃないのはわかつてね。僕はもうこの料理に辟易しているよ」

プラーヌスは白いハンカチで口を拭きながら、少しうるさぎりしたように言った。

「いや、でも僕は嫌いじゃないけどね、毎晩、姉が料理を作ってくれているのだけど、彼女の料理の腕も酷いものだからさ」

「新しい料理人を探しているんだ、宫廷かどうかで働いている、この辺りで一番の腕利きの」

「ああ、それはそれで良い考え方だと思つけど」

私は果物を食べながらそう返事した。果物のほうもあまり甘くなく、新鮮さに欠けていたが、料理よりは悪くない。口直しにはなる。

「料理人だけじゃない。優秀な建築家や家具職人、あるいは部屋をコーディネート出来る人間も欲しい。この塔には永く住むつもりだからね、出来るだけ快適で清潔なほうがいいに決まっている」

「それはそうだね」

「召使いたちだつて僕に忠実であるのはもちろん、心地良い印象を受ける人間たちを雇う。とにかくありとあらゆる分野において一流の人材を僕の下に集めたい。まあ、それにはかなりの手間暇がかかるそうだ。でもワクワクするだろ？ そうやって自分の理想とする住まいを作れる機会なんて滅多にないものさ」

確かに楽しそうだ。そういうことが出来る機会なんて、王か、大成功した商人か、魔法使いぐらいにしか訪れないに違いない。しがない絵描きの私には永遠にそんな機会は訪れる事はないだろう。

「それで最初の話に戻るんだ」

プラスが言つてきた。

「うん」

「そもそもどれだけこの塔に住んで、働いているのか、この塔にどれだけ部屋の数があるのか、そしてどれだけの人材が必要か調べなければならない」

「ああ」

「その仕事を君に頼もうと思つて、僕は君をここに呼んだのさー」

プラスはまるでとても誇り高い、栄誉ある役割を騎士に授けた王のように、血湧げに口調でそんなことを言つてきた。

「は？」

私は自分の耳を疑つた。

それ以上にプラスチックがどういう神経をしているのか信じられない。プラスチックは当然、私が喜んでこの仕事を受けるといった顔で見てくるのだ。

「えーと、そ、それはどういふとかな?」

私はそんなプラスチックの表情を呆然と見つめながら尋ねた。

「別に難しい」と言つたつもりはないんだけど」

プラスチックは再度私にワインを勧めながらそう答えてきた。

「で、でも僕には街に仕事があるし・・・」

「仕事といつても絵描きだろ? そんなもの時間があるときに描けばいいではないか。それより僕のこの塔を円滑に運営する手伝いをして欲しい」

「で、でも、僕は肖像画を描いているわけで、それは街でしか出来ない仕事だから、どこでもいいという訳にはいかないよ」

「わかった、シャグラン、だったら言い方を変える。確かに君はしばらく絵描きの仕事を休む必要があるかもしけない。だけど絶対に損はさせない。給金は弾むから君の家族に迷惑を掛けることはないし、ここでなら君は、普通の人間が決して送れないような豪勢な生活が遅れる。君の人生は一変するさー。」

「いや、もちろん僕だって出来る限り協力はするよ。でもそういう仕事は他の人間でも出来ると思うし、それにしばらくと言つても、

そう簡単に終えられるとも思えない。やはつこの仕事は僕向きじやないよ」

私はそう言った。まあ、じいじへ当然のことと言つただけだと思つ。だつて私の都合を踏み躡つて、一方的に無茶なことを言つているのはプラスのほうだから。そんなことは誰が聞いてもわかることだらう。

しかし私の言葉にプラスの顔色が変わつた。

「そりゃ、君はそんなに、僕の塔で暮らすのが嫌なのか？」

プラスは怒つているとも、落胆しているとも言えない口調で言つてきた。

「……えつ？　いや、そりこづわけではないよ、ただ」

「本当に残念だ。もひこれで僕たちの友情はおしまいだね」

「……いや、早とちりしないでくれよ、プラス。僕はただそんなに長い間、仕事を休むわけにはいかないと言つているだけ、何もこの塔がどうとか、友情がどうとかなんて言つているわけじゃないんだ」

「いいや、君は僕たちの、永遠だったはずの友情を壊そつとしている」

「……ア、プラス、やめてくれよ、そんな子供みたいな態度」

「仕方ない、だったら君を生きて帰らせるわけはいかないな」

プライムスは私を捕えるよつて見つめてい言つた。

「な、何だつて？」

私は口をあんぐりと開けて、彼を見つめた。「ちょ、ちよつと待つてくれよ、そんな勝手な話しがあるかよ」

私は思わず笑い出してしまった。そう言えばプライムスは昔からこういう類の冗談が好きな奴だった気がする。

「なあ、プライムス、僕たちは友達だよね」

私はプライムスを諭すように言つた。

「ああ、さつきまではそうだった。友達だから君に頼んだんだよ、こんなことは信頼する人間にしか依頼出来ない。だつてこの塔の全てを晒してしまっわけだからね」

「うん、僕もさう思う。でもプライムス、これは友達に対する態度じゃないよ」

「その通りだ。君が僕の依頼を断つたとき、友情は終わってしまったんだから」

プライムスのその言葉に私は一瞬言葉を失つたが、じこで黙つていれば本当に何をされるかわからないと思って必死に言つた。

「・・・と、とにかくこんな我儘は間違つてゐるよ。自分の要求

が通らないから殺してしまうなんて、どんな傲慢な魔王だって許されるこじじゃない

「まあ、僕は別に君を説得するつもりはない。嫌なら死ねばいいんだ」

そう言つてフーラースは愛用の魔法の杖を引き寄せた。

そして何か私には理解出来ない魔法の言葉をつぶやいた。すると突然、私の座っている椅子の両脇の床に黒い穴が空き、そこから大鎌を持った、頭部がカボチャで身体は重騎兵の鎧を着たバケモノが一匹現れた。

「な、何だよ、これ！」

私はおののく様にして、席から立ち上がった。

「死刑執行人さ。君の首を切るために魔界から呼び寄せた」

カボチャの頭をしたバケモノの一匹が私の腕を掴んだ。

そいつは凄い力で私を掴んで離さず、私は一步も身動き出来なくなつた。

それにそいつの手はまるで冬の凍結した地面のように冷たい。

私は本物の「死」が自分のすぐ近くに来ているのを嫌でも実感した。そしてもう一匹のほうが後ろに回り、その大鎌を振り上げた。

「わ、わかった、やるよ、フーラース！ 君に言いつけられたその仕事、やる」

私は仕方なく、悲鳴まじりそう叫んだ。

「何だよ、その仕方なくやらされていりつて態度、気に入らないな」

「・・・で、でもプラークス、君のやり方は強引過ぎる、こんなんじや脅しと同じぞ」

「君が喜んで、自ら積極的にやつてくれないとなれば、君に頼む意味が半減する。この仕事はかなり根気もいる。時間もかかる。一切手を抜かないと約束してもらわないと」

「や、約束するよ、だからこのバケモノを早くビックにやつてくれ」

「本当かい？」

「本当ヤー！」

「そうか、きみがこんなにこの仕事を引き受けたいといつなら、君に頼むことにするか」

そう言つて私の邪悪な魔法使いの友人、プラークスは満足そうな笑みを浮かべた。

ようやく力ボチャの頭をしたバケモノも私の腕を離した。私は全身の力が抜けた石畳の床に座り込んだ。

「とりあえず君はこの塔の見取り図と、全人員の名簿を作ってくれ。この中で使える奴と使えない奴をより分けてくれ。それとこの塔の機能を維持していくためにどれくらいの人手が必要かも見積もつてくれ」

「 プラーヌスは何事もなかつたよう平生と話しを進め出した。」

「 わ、わかつたよ」

「 僕はまだまだやらないといけないことがたくさんある。まだこの塔を完全に自分のものにしていない。ここを支配している魔族との契約が済んでいないし、それにこの塔の番人を雇わなければいけない。ここに来る途中、君の乗っていた馬車を襲ってきた蛮族たちがいただろ？ 奴らがこの塔にも定期的に襲撃をかけてくる。この塔をしばらく管理していた魔法審議会からその情報を聞いていたから、あらかじめ街で傭兵を雇つたんだが、まるで役に立たなかつた」

「 でもあんな蛮族たち、君の魔法ならわけもなかつたじゃないか」

私はまだプラーヌスへの何とも言えない感情がしこりのように残つていたが、それを振り払つためにも、いつも口調でそう言つた。

「 それはその通りだが、朝早くから叩き起こされて奴らの相手をするのはうんざりなんだ」

プラーヌスは本当にそれが疎ましいと言つふつ、「苛立ち気に顔を歪めた。「それに前のこの塔の主が早死にしたのも、この蛮族たちとの度重なる戦いのせいだったという話しも聞く。連日、魔法を使い続けると寿命を縮めてしまつものだからね」

「 はあ・・・」

「 それでとある有名な騎士をこの塔の番人に雇うつもりなんだ。そのための準備や何かに色々と手が掛かるのさ」

「 それでとある有名な騎士をこの塔の番人に雇うつもりなんだ。そのための準備や何かに色々と手が掛かるのさ」

「ちょ、ちょっと待つて、騎士を番人だつて？」

私はプラーヌスの突飛な考えに、彼の正氣を疑いながら言った。  
「それはちょっと贅沢過ぎないか。まるで魚を捌くのに王家伝來の  
宝剣を使うものじゃないか。だいたい番人をやりたがる騎士なんて  
いるわけがないし」

「いいや、探せばいるもんさ」

プラーヌスは私の意見も当然だと感じで頷きながらも言った。「  
しかもとても優秀な騎士でね。知ってるはずだ、シャグラン、君も。  
確か名前はバルザ、隣国パルの騎士団団長だったかな」

「な、何だつて？」

プラーヌスはさらりと呟くべき、いや、とても尊い名前を口にし  
た。

バルザ殿と言えば、既にたくさんの吟遊詩人たちが詩にしている、  
生きる伝説の英雄と言つてもいい騎士ではないか。  
槍を持てば戦場では天下無双、兵を率いても彼の前に敵は無し。  
もちろん生きる伝説と言つてもまだ国の重役を担つてているはずだ。  
パル国の騎士団団長で、その国の軍の最高司令官か何かだったと思  
う。

「そ、そんな人がこの塔の番人をするわけないじゃないか」

「それがどうにかなるものなのさ。知恵と工夫次第でね」

「 プラーヌスはさう言つて、とても意味ありげに、不敵な笑みを浮かべた。

「 知恵と工夫・・・? 」

「 そう、知恵と工夫、そして魔法のスペース少々。とにかくこれから忙しくなる。君にもその知恵と工夫の一端を担つてもらうかもしない 」

「 あ、ああ、わかったよ 」

私はもう何もかも諦めるよう言つた。「 だけどその前に家族に手紙を書いておきたい、しばらく家に帰れないだろ? 」

「 いいだろ? 使いの者に届けさせよ? 」

「 良かつた、でもそんな信用出来る奴使いがいることあるのかい? 」

「 いや、そういう人物を君に探しでもらつたためにも、この仕事を頼んだんだよ 」

「 プラーヌスは当然のことのようにそんなことを言つて席を立つた。  
「 東の塔に君の居室を既に用意させてある。そこが気に入らないければ違う部屋を使ってもいい。家具やベッドが気に入らないなら、倉庫にあるものを勝手に使つてくれ。倉庫の責任者には、僕に仕えるように君に仕えるよう言つておくれ 」

「 ああ、わかった 」

私もプラーヌスに続いて部屋を出ようとした。

するとまだ私の隣に寄り添つように立つていた、あのカボチャの頭をしたバケモノが、あらうことか私の後をついてきた。

「なあ、それとプラーヌス、もう一つ頼みがあるんだけど……」

「何だ？」

プラーヌスがローブを翻して、面倒臭そうに振り向いた。「君も要求が多い男だね」

「……いや、ただこのバケモノをさしあと消して欲しいんだよ」

「ああ、これは君に何かあつたときのための、君の身を守つてくれる衛兵だと思えばいい。それにこれがいたら威嚇にもなるだろ？。塔の召使いたちも君の言つことを聞きやすくなるに違ひない。言つことを聞かない奴がいれば、こゝに命令して殺してもいいよ」

私はむしろこのバケモノか、あるいはプラーヌスこそをどうにかして殺してしまいたい気分だつたが、仕方なく彼の言葉に頷いた。

「でもこのバケモノが寝室にまで来るのは御免だよ」

「だつたらドアの前に立たせておくがいい。君の命令に従つようにしてある」

もう要求はないね！　プラーヌスは少し苛立つた声でそう言つて、自分の部屋がある西の回廊に向かつて歩いていった。

私はそれと逆、東の回廊のほうに歩く。

カボチャの頭をしたバケモノたちと、足下を照らすランタンを持った召使いも私についてくる。

「そうだった、シャグラン」

プラークスが角を曲がりかけている私に呼び掛けた。「僕は毎過ぎまで眠っている。夕方、謁見の間で会おう。それまで好きなように過ごしてくれ」

「ああ、やります」

わかつたよ、プラークス、何でも君の言ひ通りにする。

私は余りに腹が立ち過ぎているせいか、自分にあてがわれた部屋に向かう途中、塔の暗闇にも、その不気味な雰囲氣にも、先程までに感じていた恐怖は覚えなかつた。

そんなことよりもプラークスの態度に腹が立つて仕方なかつたのだ。

この悔しい思いをビビリに持つていけばいいのかわからなくて、今夜は到底眠れそうにないと思つていたけど、しかし長旅の疲れと極度の精神的な疲労で、ベッドに横になつた途端、私は眠つていたようだ。

気がつくと朝になつていた。暗黒ばかりが支配していた塔に、かなりの量の太陽の光が差し込んでいた。

こんな塔の近くでも鳥は生息可能なようで、私の街でも聞こえるのと同じような長閑の鳥の鳴き声もする。

私はそんな鳥の鳴き声をベッドの上で聞きながら、見馴れない天井をしばらく見つめていた。

すると何だか笑いたくなつてきた。

どうしてこの私がこんな面倒な仕事を押しつけられないといけないんだ?

いや、そもそもどうして私はこんなところにいるんだ?

そんなことを考えていると自分の運命が面白くて仕方なくなつてきたのだ。

笑いたくなつただけでなく、実際、私は大声で笑つてやつた。

多分、もうどうにでもなれといった気分になりかけていたんだろ

う。

## 第一章 1) 塔、仕事始め

「愛しの姉、エリーサよ、とても面倒なことになってしまったよ。てっきりプラーヌスは、彼が購入したばかりの塔を、ただ私に自慢したいばかりに、こんなところまで私を呼び寄せたんだと思つていたのだけど、少し当てが違つたようなんだ。

なにやら彼は非常に困つているようなんだ。

私は友人が困つているのを見過ごせるような男じやない。母も姉さんも、私のそんなところを誇りに思つてくれているのだろ？

そういうわけでしばらく家に帰れそうにありません。

生活費は私の貯えを切り崩してそれに当ててくれて構わない。出来れば早いうちに幾枚かの金貨を送るよ。

それが無理でも、今の貯え以上の報酬をプラーヌスから必ず貰う予定だから何も心配することはないさ。この仕事が終わればどこか南の島にでも遊びに行けるくらいの余裕が生じているはずです。とにかく私は困つている彼の仕事を手伝つて上げることにしたんだ。

その仕事はどうやら、彼の唯一の友人である私にしか出来ない仕事のようなので、何も嫌々やらされるわけになつたわけじやないから、そのところは気にしなくていいです。

だからそういうわけです。しばらく会えないかもしけないが、お互いにぐれぐれも身体に氣をつけて、この不条理な人生を出来るだけ上手く立ち回ることにしよう。そのためには少しばかりの我慢も必要なはずだよね。

母には姉さんから上手く言つておいて下さい。別にこの手紙を直接見せて構いません。

我が家族に永遠の愛を誓う、シャグランより

私は姉についた小さな嘘に心を痛めながら、手紙に封をした。いや、もしかしたら案外、嘘をついていないかもしない。ところどころ思わず本音が出たところもあったかも知れない。

たとえば「お互いくれぐれも身体に気をつけて、この不条理な人生を出来るだけ上手く立ち回ることにしよう。そのためには少しばかりの我慢も必要なはずだよね」などという箇所なんてそうだ。その考えはまさに今の自分に言い聞かせるようなフレーズ。

手紙を書き終えた私は、少しでも早くブラーーヌから依頼された厄介な仕事を終えるため、朝から仕事に取り掛かることにした。

扉を開けると、カボチャの頭をしたバケモノが二匹、昨夜と同じように不気味な表情で立っていて、私は驚きで心臓が止まりそうになつた。

野ウサギのように飛び跳ねた心臓の鼓動を何とか沈めて、私はバケモノたちに言った。

「ここで待つていい、別に僕についてこなくていいから

そう言つて一、三歩歩いて、ふと私は立ち止まつた。

「……いや、でもこの塔に何がいるかわからないよな

もしかしたら、こいつみたいなバケモノがいて私に襲いかかってくるかもしれない。皮肉なことに今のところ、このカボチャの頭をしたバケモノだけが私の唯一の味方なのだ。

「……やつぱりついて来い」

私は那一匹のバケモノを従え、塔の見回りを開始することにし

た。

回廊は相変わらず薄暗かつたが、高窓から差し込んでくる朝の新鮮な太陽のお陰で、ランタン無しで十分歩けそうである。

しかし少し日が沈むと真っ暗になるだらう。この後、またここを通りることを思うと私は暗然とした気持ちになる。

「少なくともこの通路にはランタンか、蠟燭立てを設えてもらおうかな」

カボチャのバケモノ以外そこに誰もいなかつたが、私は声に出してつぶやいた。「ここが明るくなれば、いくらかこの暗鬱な塔も變せるかもしれないし」

そんなことを考えながら長い回廊を歩いていると大きな鋼鉄製の扉の前に到着した。そこを開けると広大なホールが広がっていた。

昨夜もここを通つて応接の間に到着したはずだが、昨夜はそのホールを観察する余裕はなかつた。私は改めてその部屋を見回した。かなり広大な部屋である。いや、部屋といつより、やつぱりホールと呼んだ方がしつくりくる。

高い天井を振り仰ぐと、月と星が描かれた天井画が見える。四方に聳える石造りの壁は頑丈そうで、冷たく無言のまま聳えている。そのホールにはほとんど装飾的な飾りはなく、ただ石と冷たさだけが出来上がつたかのような印象だ。

但しホールを囲むように数十もの人の形をした石像が並んでいた。しかしそれは部屋を飾るためというよりも、むしろ部屋を陰鬱に演出するために存在しているかのよう。

その石像を拭き掃除している男が四、五人いた。

「この日、私が最初に遭遇した召使いたちだ。

その中に昨日、ランタンを持って居室まで案内してくれた召使いもいるようだ。顔は覚えていないのだけど、足を引きずるよつて歩く姿に記憶がある。

「やあ、おはよう

私はその召使いに話しかけた。

「昨夜はよく眠れたよ。僕はどうちかっていようと旅先なんじゃ眠れなくて苦労するほうなんだけど、昨夜は珍しくぐっすりさ」

私はちょっと不自然なくらい馴れ馴れしく話し掛けた。

何といつても私はこの塔の主の客なんだ。きっとこれくらい打ちとけたほうが向こうもリラックスするに違いないと思ったからだ。しかし彼のほうは、どうして自分に話しかけて来るんだって感じで、いぶかしげに私を見ている。肌は浅黒く、髪の毛はくせ毛で、目が細い。おそらく南のほうの出身に違いない。動作はノロノロとしているせいでもっと年老いているのかと思ったが、近くで見ると顔立ちは若い印象だ。

「そんなに緊張しなくていいよ。ただ君の名前を教えて欲しくてね

私は羊皮紙を取り出し、インク壺を床に置いて、羽飾りのペンをそれにひたした。

「ここで働いている人たちの名簿を作りたいのさ。・・・えーと、それで君の名前を知りたいんだけど」

しかし彼はにらみつけるような視線のまま私を見るだけで、何も  
答えない。

「・・・あれ、僕の言葉が通じてないのかな

問い合わせるよりこそいつ言っても反応がなかつた。

「僕に何か不満があるのか？ いや、やつぱり言葉が通じないだけだよな・・・」

私は黙り続ける彼とじまく見つめ合つた。だけどやつぱり彼からは何の反応も返つてこなかつた。

「仕方ない、君のあだ名は『ダンマコ』にしておぐ。もう仕事を戻つていいよ」

私は用意してきた羊皮紙にそつ書いて、彼の前を去つた。  
そして一応、その他の召使いたちにも近づいた。彼らは作業の手を止めて、私と「ダンマリ」の遣り取りを見守つていたようであつた。

そんな彼らに向かつて、私はさつきと同じような感じで話し掛けた。しかし案の定、他の召使いたちも私の言葉が通じないようであつた。彼らも「ダンマリ」同様、私を黙つて見つめてくるだけ。この調子なら召籠作りですらかなり手間取りそうだ。まず通訳を探さないと仕事が一步も進まないわけなのだから。

プライムスは何という面倒な仕事を私に押し付けてくれたことが。私は肺にある空気を全て吐き出すような、深いため息を吐いた。そして仕方なく彼らにも適当にあだ名をつけて、そこを後にした。



## 第一章 2) 陰鬱な召使いたち

一段と気分を落ち込ませながら、私は北の回廊に続く扉に向かった。確か昨夜、プラーヌスの説明では、そつちに厨房や召使いの居室などがあると言っていた。

ここにまず通訳が出来る人間を探そう。

出来ればハキハキと喋つて、明るく、この塔の事情に通じている、頭の良い人間、ベテランの召使いがいい。

だけどこの陰鬱な塔にそんな人間がいるだろうか。

さつきの召使いたちとの接触で、私は絶望を感じてしまった。言葉が通じないのはまだしも、あんな陰鬱なタイプしかいないのなら、私はますますこの塔にうんざりしてしまいそうだ。

まあ、しかしそんなことも言つていられない。

私は自分の仕事に協力してくれる人間を探さなければいけない。さもないと何も前に進みはしないだろう。このままではいつまでも自分の街に歸ることが出来ないではないか。

北の回廊は、私の客室があつた東の回廊より作りが古いのか、それとも手入れがなされていないのか、石壁には欠けた箇所があつたり、苔が生えたりしている。

しかし東の回廊では感じられなかつたある種の匂いがあつた。それは生活の匂いというか、街の匂いというか、人間の匂いというか。上手く説明出来ないけど、決して不快な匂いではなかつた。何となく安心出来るような匂いなのだ。

何だかその匂いを嗅いでいると空腹感を覚えた。

そういえばまだ朝食を食べていないことを私は思い出した。ついでに厨房かどうかで何か食べるものを頂こう。

しばらく進んでいくと回廊の奥からざわざわした話し声が聞こえてきた。

少し歩調を早めると召使が大勢集まっている広場に到着した。その真ん中には泉があり、召使たちはその縁に腰掛けで会話を交わしながら洗濯物を洗つたり、食器を洗つたりしている。

その多くが女性だった。若い女性もいれば中年の女性もいる。しかし残念ながらまた会話が聞き取れない。

その顔立ちから判断する限り、どうやら中央の塔にいた召使たちと同じ国の出身のようである。

私の存在に気づいて、召使たちは何やらざわめいた。

あるいはカボチャのバケモノを見て驚いているかも知れない。私は敵意が無いことを示すようにカボチャのバケモノに停止を命じ、自分がけ彼女たちに近づいた。

「知っているかな、僕はこの塔の主に招かれたシャグラーンという者なんだけど、彼に頼まれてこの塔で働く人たちの名簿作りをしている。僕の言葉は通じているかな？」

無反応だ。これだけいるのに自分は言葉がわかると名乗つてくる者もないようだ。

だけどさつきの男性たちと違つて、その意味不明な言語で、向こうからも私に何か話し掛けてくれた。

「残念ながら僕も君たちの言葉がわからないんだよ、誰かわかる人はいないかな？ 出来ればそういう人を呼んで来て欲しいんだけど」

私は無理を承知に、身振り手振りでそんなことを伝えてみた。しかしそれが伝わらなかつた結果なのか、それとも協力する気がない

せいなのか、動く者は誰もいなかつた。

「うーん、やっぱり駄目か・・・」

私は彼女たちにこだわるよりも先を急ぐことにした。まず通訳出来る人間を探すことが先決なのだ。こんな状況では名簿作りなど渉るわけがない。

召使いたちが集まっていたその広場から更に奥に通じる通路があった。

私はカボチャのバケモノを連れ、そつちに歩みを進めようとした。するとさつきまで自分の仕事を黙々と勤めていた召使いたちが、慌てて立ち上がり、私の前に立ちはだかつた。

「な、何さ?」

私が彼らの行動に戸惑つていると、召使いたちは手を振つたりしながら何かを言つてくる。

「そつちには行つては駄目だと言つのか?」

もしかしてこつちは彼らの居住スペースかもしれない。それなら彼女たちが怒るのも無理はないだろう。

私が理解を示すように頷いて、そつちに行くのを諦めた。するとそれ以上、彼らは何も言つてこなかつた。やはりそのようだ。

この広場には私が通つてきた中央の塔に通じる回廊と、恐らく召使いたちのプライベートルームに通じる廊下と、その他にもう一つは階段があつた。

私に残された選択肢は必然的にそこしか残されていない。上りと

下りがあるが私は上りの階段を昇つた。

## 第一章 3) アビュ登場

外から見たときは近過ぎてその塔の全貌がよくわからなかつたが、少し中を散策してその構造がいくらか把握出来た。

まず中央にメインの塔があり、その北と西と東それに回廊がまっすぐ伸びている。

北の回廊が召使いたちの居住スペースや厨房など、東の回廊が応接の間や、私が寝た客間がある場所だ。そして西がブランースの私室。その三つの回廊を支えるため、その中央の他に三つの塔が建造されているようである。

私は今、その北の回廊の、それを支えるための塔の螺旋階段をいま昇っているようだ。

少しすると、決して香ばしいとは言えないが、私の空腹を刺激するような匂いが漂ってきた。

どうやら厨房が近いみたいである。まだ階段は上に続いていたが、私は匂いのするほうに歩みを進めた。

するとすぐに多くの食卓が並んだ食堂に辿り着いた。今は無人だが五十人は一度に食事出来るくらいの食卓が並んでいる。狭い部屋ではなかつたがそのせいでかなり手狭に感じる。

厨房はその奥にあつた。

食器がカチャカチャなる音が聞こえるから誰かいるらしい。

そつとそこを覗いて見てみた。どうやら若い女性のようだ。

私はカボチャのバケモノたちを入口の前に残し、咳払いしながらゆっくりとそこに近づいていくと、彼女も私に気づいてこっちを見てきた。

「えーと、僕はこの塔の主に招かれたシャグラントー！」

私がさつきから繰り返している挨拶をしようとしたが、向こうから語りかけてきた。

「あつ、 昨夜来たお客だね」

「えつ、 やう

ようやく言葉が通じたというのに私はそれにすぐ気づかなかつた。彼女も、私やプレー・ヌスのような白い肌をしていなかつたから、異国人かと思い込んでいたのだ。

しかしそく見るとさつき出会つた召使いたちとも顔立ちが違うようだ。

髪は黒く、眼の色も黒い。肌は黒くも白くもない。歳は若そうだ。髪は短くて、動きが敏捷な小鹿のような印象。

「どうだつた？ 昨夜の食事？」

私が更に近づいていくと、その若い女性は私に少しも物怖じしないで馴れ語りかけてきた。

「昨夜の食事？ ああ

そういえばあれは酷いものだつた。昨夜の不満を彼女にぶつけようかと思つたが、ふとある予感を感じたので自制した。

「えーと、まあ、美味しかつたよ」

「そう、良かつた。まだ全然慣れなくて大変だつたけど

女性は胸を撫で下ろすようにそつと語った。

やはり料理は彼女が作っていたようだ。嘘をついて良かった。  
せつかく言葉が通じる相手に出会ったのに、そんなことで心が通じなくなるのは避けたいところであつたから。

「でも慣れないって、料理の経験が少ないんだ？　じゃあそれまでは誰が作ってたんだい？」

私はふとそんな疑問を感じて彼女に問い合わせた。

「それはゲオルゲ族の料理人がちゃんと作つてた。でも塔の主が変わつてからは、ケチなことに自分たち一族のためにしか作つていんだ。まあ、そいつも私と同じくらいの腕だつたけどね、大して美味しくなつたよ」

彼女は強がるようにそう言った。

そのせいなのか、最初の印象よりも更に子供っぽく見えてきた。  
いや、実際、思った以上に若いかもしない。子供っぽく見える  
といつよりも、本当に子供と呼ぶしかない年齢のようだ。

「ゲオルゲ族つて？」

そんなことよりも彼女の言葉に引っ掛かつたフレーズがあつた。

「下にいた連中よ」

「ああ、彼らが、えーと、何だつけ？」

「ゲオルゲ族」

「そう、ゲオルゲ族ね。でもどうして彼らは料理を作るのを辞めたんだろうつか？」

「それは今の新しい塔の主が舐められているからよ」

「舐められている？あのプラスが！」

私は思わず驚いて、大きな声を上げてしまった。

「うん、だつてやけに若い人が主として来たからね。前の主は凄く恐くて、ずるい老人だったから彼らも渋々従つていたけど。基本的にここで働いている人たちとは、何代も前からここで生まれて育つてきた一族だもん、この塔を自分のものだと思つている」

「なるほど」

プラスを侮るなんて、中々恐いもの知らずの連中だ。しかし彼らはその態度を後悔することになるだろう。プラスは彼らを追い出すことに決めている。彼らに舐められていることを知れば、尚更情けを掛けることはなくなるに違いないのだから。

「じゃあ君もここで育つたわけか」

とりあえずゲオルゲ族のことは横に置いといて、私は更に話を進めた。

「うん、まあ、でも私たちは比較的最近で、お祖父ちゃんの代かららしい。ちょうど三代前の主のときから働き始めたみたい」

「どうことはゲオルゲ族だけ？ 君は彼らの言葉はいくらか理解出来るのかな」

「出来るよ、もちろん」

「そうか・・・、じゃあ、君か、君の知り合いの誰かに頼みたいことがあるんだけど」

私は手近にある椅子に坐りながらそう言った。「いや、その前にすぐ解決して欲しい問題があるんだった」

彼女は私と会話を交わしながらナイフで果物をむいたり、竈の炎の調節などをして、甲斐甲斐しく働いていた。

プライマスの遅い朝食か、それとも自分たちの昼食の準備をしているのだろうか。いずれにしてもそれを見ていたら、私は自分が空き箱のよつこ空腹であることを思い出した。

「昨日の夜から何も食べてないんだ。出来ればパンとコーヒーが欲しいんだけど」

「ああ、やうさればお密々との朝食忘れてた！」

彼女はハツとして口に手を当てた。「ちやんと用意するよつこ言われてたのに。私ってそういうところあるんだよね」

彼女は慌ててバタバタと動き始めた。どうやらすぐに私の食事の準備に取り掛かってくれるようだ。しかし慌てて動いたせいで、棚の上の物を落つことしそうになつている。それは落とさなかつたようだが、その代わり床に置いていた樽を誤つて蹴飛ばした。

まるで飛び方を覚えたばかりのカササギガモのよつな騒々しさだ。

しかし何だかその様子を見ていると、彼女に好感を抱かないわけにはいかなかつた。私は思わず顔をほころばした。

「じゃあテザートに林檎もおまけしていくよ。昨夜、パパが村から買い入れてきたばかりなんだ」

彼女は蹴飛ばした樽を元通りに戻しながら言つてきた。

「ああ、それは嬉しいね」

出来ればハキハキと喋つて、明るく、この塔の事情に通じている人間、そんな人がいれば是非通訳を勤めて欲しい思つていたのだけど、どうやら簡単にそんな人間が見つかつたようだ。  
私は彼女を見ながらそう思つた。

## 第一章 4) 通訳兼助手

厨房は広々としていた。

この塔にいる人たちの胃袋を満足させるためにはそれぐらいの広さは必要なのである。石で出来た竈の数が四つも五つもある。木製の大きなテーブルには、まな板や陶器の素朴な作りの皿や、ナイフが置いてあり、そこでなら同時に何人もの人間が調理出来る感じだ。

私は出入りしたことがないが、いわば都などにある大きな宿屋の厨房や、宮殿の厨房はこのようなところなのである。

全体的に窓の少ないこの塔にしては珍しく、この厨房にはいくつか大きな窓があった。そのせいで日当たりも風通しも良く、普通の街の民家にいるような快適さを感じるほどだ。

その厨房の奥、食堂と逆のほうにもう一つ部屋があつて、そこにはたくさんの数の食器やグラスが並べられているようだ。

彼女はその部屋から、凝った装飾が施された陶器を持って戻ってきて、そこにコーヒーをいれてくれた。

彼女の名前はアビュという。

祖父と祖母、そして父の四人でこの塔で生活しているらしい。

母とは離れて暮らしているようだ。母はもともと近くの村の出身で、彼女が幼い頃、この塔での生活に疲れて出ていったという話しだ。

「それは寂しいね」

「まあ、出ていったきり、会っていないからね」

素直にその寂しさを認めるのは嫌なのか、アビュは複雑な笑みを浮かべた。

朝食を食べながら、私はアビュの個人的な事情だけでなく、この塔の詳しい状況も訊いた。

相変わらず、パンと一緒に出してくれたベーコンには何の味付けもされてなくて、味のほうはイマイチだつたが、その会話で私が欲しかった情報はいくらか手に入った。

この塔で働く召使いの多く、七割ほどが、私がさつき下で大勢出くわした召使い、いわゆるゲオルゲ族らしい。

ゲオルゲ族というのは、ここからはるか南の島国に多く住んでいる民族で、どういう事情でそんな南の国からこの塔に連れてこられたのか、もはや昔のこと過ぎて事情はわからないうらしいが、彼らはこの塔に住み着いた一族では最古のようだ。

召使いたちの間でもヒエラルキーがあるらしい。

最多数のゲオルゲ族が一番上で、彼らの下にその他三割の様々な国から来た召使いがいる。ゲオルゲ族がやりたがらない仕事を、その残りの三割がやらされているようだ。

しかしそうは言つても実質、ゲオルゲ族なしではこの塔を円滑に運営するには不可能なよつ。

「なるほど、それじゃあ尚更、通訳が必要だな」

私はアビュの言葉に相槌を打ちながらそう言った。

「そうかもね、ゲオルゲ族の言葉は独特だから」

アビュは私との話しに夢中になつて完全に料理の手を止めていた。何だか彼女の仕事を邪魔している気がしたが、私は更にアビュに尋ねた。

「この塔の事情に詳しい人間と言えば誰が思いつくかな？ たとえば召使いの中のリーダー格的存在入るかどうか知りたいんだけど」

「うーん、リーダーみたいなのは特にいないと思つ」

アビュは思い悩むように、ショートカットの髪を何度も揺らしながら言つた。「それと、この塔の事情に詳しい人も思いつかないね。みんな、自分のテリトリーのことにしか興味がない人ばかりだと思うけど」

「たとえば君のお父さんとかお祖父さんとかは？」

「パパもお祖父ちゃんも詳しいと言つほどじやないと思ひナビ。でも詳しこそていうのは例えはどういうこと？」

「詳しこそていうのは、この塔を維持していくためにどれくらいいの人員が必要かつてことがわかつてているとか」

「ああ、そんな人はいないんじゃないかな。今、多過ぎる」とは確かだけど

「じゃあ、この塔の見取り図を持つてる人は？」

「多分ないと思つ。必要なら自分で作らないと」

「でもわざと見て、部屋はどれくらいあると君は思つ？』

「ああ、見当もつかない。地下牢もあるつて噂だし、主人のいる西の塔は行つたことないし、私たちみたいな下つ端の召使いが立ち

入れない倉庫もあるし」

「えうか・・・」

つてことは結局、地道にこの塔を散策して、見取り図を作り、そして人員名簿を作りなどしなければいけないよつだ。

私はその面倒な作業を思つて大きなため息を吐いた。やはり簡単に終わる仕事では無さそうである。私が街に帰れる日はまだ遠い。とはいへ朝に比べたら大きな前進をみせたことは確かだ。ため息を吐いた私をいぶかしげに見て、アビュに言つた。

「食事は毎食、瓶が作つてるのかな？」

「うん、私たち家族の分と、この塔の主の分、そしてこれからはあなたの分をね」

「この言葉でようやく想い出したのか、アビュはまたナイフと野菜を手に取つた。

「お父さんは手伝ひてくれないんだ？」

「他の仕事で忙しくてやれど、やじらないよ。父はもともと村や町まで食事を買つ出しへ行くのが仕事だから」

「じゃあお祖父ちゃんやお婆ちゃんは？」

「たまに手伝ってくれるけど、もうかなりの高齢だし。それにお婆ちゃんと一緒に料理するといふをいんだ。野菜の切り方がなつてないとか、味付けがどうとか。お前は料理が向いてないって今まで言ってくるし」

「わかつた」

私は彼女に同情するように頷きながら言った。「じゃあプライマスに言つてこの仕事を誰か代わりにやらせよう

「えつ？」

「そうだな、そもそも最初に料理番だったゲオルゲ族の人間にでも。まあ、いずれ宫廷で働いているような腕の良い料理人を雇うつもりだつてプライマスは言つてたしね。とにかくもう君はこの仕事はしなくていいよ」

「ちよ、ちよと待つてよ、私、別にこの仕事嫌つてわけじゃないけど……」

彼女は私の言葉にひどくショックを受けたようで、すがりつくようになに言つてきた。「あつ、わかつた、やつぱり私の料理、口に合わなかつたんだね。お願ひ、これから頑張つて料理上手くなるから、私をここから追い出さないでよ」

私は誤解を受けている様子のアビュに慌てて弁解した。

「違うよ。新しい仕事があるんだ。君にしか出来ないことだよ」

「私にしか出来ないこと?」

「ああ、私の助手兼通訳をやつて欲しいんだ」

「えつ? 何それ?」

「君は頭が良さうだし、好奇心も旺盛のようだ」

それ」「この陰鬱な塔に似合わず明るい。

「字は書けるかな?」

「まあ、多少はね」

「簡単な計算は?」

「一応出来るたび」

「よし、何一つ問題無しだ。文句は言わせない。僕の仕事を手伝つてもらいたい」

「や、それじゃあ塔を追に出でたりわけじゃないんだ」

なんだ、良かったと、胸を撫で下ろしながらアビュはそう言った。  
私もじつやアビュがその仕事を快諾してくれたことがわかつて、  
同じようにホシと胸を撫で下ろした。

「助手兼通訳だつけ?」

アビュが確かめるように尋ねてきた。

「ああ、やつれ」

「何だか面白やうだね。もしかしたらやつて仕事のまつが私向  
きかもしれない」

アビュは上機嫌にそう言った。まるで新しく繕つて貰つたドレスを、鏡の前で試し着している娘のようだ。

## 第一章 5) 謁見の間

塔の中央、樹木で言えば幹に当たる部分、その最上階に謁見の間があつた。

おそらく塔の全ての部屋の中で最も豪奢な部屋だと思う。部屋の四方の隅に、劇場の幕のような深紅のカーテンが垂れ下がっている。堅固な台座の上に、円形の石材が一つ一つ積み重なつて出来た巨大な円柱が、飾りガラスの丸天井まで無数に伸びていた。床は黒い大理石で出来ており、まるで星空の上を歩いているみたいな感じで、上下の感覚を狂わされるよう。

アーチ型の入り口から赤い絨毯がまっすぐ伸びており、その両脇には篝火が焚かれていた。

その炎が天井高くまであがつているが、巨大な謁見の間の天井には到底届かない。

しかし私はその燃え盛る炎の盛大さに目を奪われつつも、むしろこの炎を管理する召使いがいて、その召使いがこのようにきちんと仕事していることに感心していた。

それに謁見の間の床もきれいに磨かれているようである。

プラーヌスは召使いの働き振りが気に入らないようであったが、しかしそうは言つても、自分の職務を忠実にこなしている者も大勢いるようだ。

部屋の一一番奥の石段を三段上がった壇の上に、豪勢な背もたれと肘掛けのある、まるで玉座のような椅子があった。

待ち合わせの時間である夕方、私はその玉座の前でプラーヌスが来るのを待っていた。

玉座は少し趣味が悪いんじゃないかなってくらい様々な装飾が施さ

れている。

しかし派手な割には、どことなくくたびれていた。  
埋め込まれていたはずの宝石も所々欠けているようであるし、革  
もすれて色が変わってしまっている。

まるで遠い戦場から帰ってきた疲れ切った老兵のようだ。タフな  
戦場で手を失つただけでなく、歯まで抜けてしまったという感じの。  
私はそんなことを思いながら、その玉座を観察していたら、プラ  
ーヌスが突然、何の前触れもなくその玉座の上に現れた。  
一瞬、何が起きたのか全く理解出来なかつたが、彼は魔法で瞬間  
移動してきたのだ。

「お、驚かせるなよ、プラーヌス！」

私は無様に尻餅をつきながら言った。

「シャグラン、ふざけて僕の椅子に座るよつなことをするなよ

「どうして？」

「この魔法を使った先に生物がいると、そいつは大怪我を負うこ  
とになるから」

「あ、ああ、肝に銘じておくよ

「しかし酷くくたびれた椅子だろ？」

さつきまで私が何に注意を奪っていたのがわかつたのか、プラ  
ーヌスはその椅子を撫でながら言つてきた。「前の主は趣味が悪か  
つたというよりも、そういうのにおまり気を使わないタイプだった

ようだな。まあ、魔法使いにありがちだが

「当然、この椅子も取り変えたいわけだね」

私はお尻を払いながら、そつきの驚きから立ち直るよひに立ち上がりつた。

「ああ、しかしそんな時間がまだ捻出出来ない。この塔を魔界から支配している魔族と上手く連絡が取れないんだよ。なかなか僕たちに注意を払ってくれないのさ」

プラスは悔しげにそう言つて、ため息を吐いた。

彼もあまり詳しく述べてくれたわけではないから私もよく知らないのだけど、魔法使いといるのは魔界の魔族の力を借りてその魔法が発動される。

そのために必要なのは供給役の魔族、いわゆるプロバイダと呼ばれる存在で、魔界とこの世を行き来することの出来るその供給役の魔族が、魔法使い自身の代わりに魔界の様々な魔族と連絡を取ることによって、魔法使いは新しい魔法を覚えたり、魔界から情報を仕入れたり出来るのだ。プラスがさつき「僕たち」と言つたのは、すなわちそのプロバイダの魔族と彼のことだ。

「一体でいいんだ、それなりに強力な魔族と連絡がつけば、あとは芋づる式に事は運んで、いずれここを支配している魔族に目通り出来る。それで契約を取り付けられれば僕の魔法はもっと強力になる。この塔にいる限り、誰にも負けないくらいにね」

プラスは、はやる気持ちが抑えられないと言つた感じでそうつぶやいた。

まあ、プラーヌスが焦るのも仕方がない。

塔の主になろうと虎視眈眈とその機会を狙っている魔法使いは多いらしい。この塔にもいつ、他に魔法使いが侵入してくるかわからぬのだ。

せっかく塔の主になれたといつに、それをすぐに失ってしまうなどプラーヌスが望むはずもない。それを追い払うため、どれくらい強くなつてもなり過ぎることはないわけだ。

「そんなことより、そつちの仕事の進捗具合はどうなんだ？」

プラーヌスは一刻の時間の余裕もないと言つた感じで私にそう言つてきた。

「ああ、そうだった」

私はアビュと話しあつたことや、この塔に対する感想と意見を簡潔に述べた。

すなわちアビュを助手として雇うこと、そのため彼女の代わりに新しい料理係を選ばなければいけないことを。

「アビュの前任の料理係がいたらしいんだ。しかし今は自分の仲間のためにしか料理を作つていな」よつだ

「ほう、それはなぜかな？」

私はゲオルゲ族がプラーヌスを軽んじてゐるらしいという事實を話そうか話すまいか少し悩んだが、話しの流れ上、正直に話さない訳にいかなかつた。それにそもそも彼らを庇う理由も私にはない。しかし出来るだけソフトな言い回しにしておいた。それでも案の

定、プラーーヌスの怒りは大変なものだった。まあ、表情はあくまで冷静だが、しかしその口調は辛辣極まりなかつたのだ。

「彼らを追い出そう、これまでまだいくらか迷っていたが、今はつきりと確信したよ。よくやつたぞ、シャグラン、見事に重要な情報を引き出した」

「だけどプラーーヌス、ゲオルゲ族でも忠実に働いている者もいるようだ。それに前のこの塔の主人は彼らを上手く仕切つていたようだ。プラーーヌスもその気になれば」

「それは違うよ、シャグラン、恐怖で統治するのは簡単だよ。僕だってそんなことをするのは、引き出しの中からインク壺を取り出すのと同じくらい容易なことだ。問題は、僕はそんなふうに恐怖で統治するのは嫌だつてことだ。僕は怯えた眼差しで見られるのが不愉快で仕方ない性分なのだ。そんなことを親友の君に説明しないといけないとは思わなかつた。そもそも君をここに呼んだのもそれが理由じやないか」

「はあ、そうなのか・・・」

「ゲオルゲ族を追い出す、それはもう決定事項だ。まあ、しかし今すぐは無理だ。代わりの召使いを見つかるまでは我慢するぞ」

プラーーヌスは自分自身に言い聞かせるように言った。「まだそんな時間的な余裕が全くない。その前に魔族との契約も取りつけなければいけないし、何より騎士バルザを勧誘しに行かないといけない。それらが最優先事項だからね」

しかしゲオルゲ族の料理人は許せない。

そいつだけは脅してでも、僕たちの料理を作らせよ。

プライムスはそう言って、玉座のよつた椅子の肘掛けに置いてあつた金細工の鈴を振り始めた。

鈴は手の平サイズ小さなものだつたが、魔法が施されていたのか、その音は塔中に響き渡つた。

しばらくすると、続々と謁見の間に召使いたちが集まってきた。どうやらこの塔にいる全ての召使いたちが、この謁見の間に集まつとしているようだ。

「そういう決まり事もないんだよ」

プライムスは続々と集まつてくる召使いたちを見ながら呆れたようにつぶやいた。「鈴の音がしたら僕の許に来るよう指示してあるだけだから、全ての召使いたちがここに集まつてくる、なあ、シャグラン、至急、そういう決まり事も作つておいてくれ」

「ああ、わかつた」

とりあえず召使いたちの中の代表者的な存在が必要なのかもしない。一度だけ鈴を鳴らすとこの代表者だけが来るといった感じのルールも作つておこう。

謁見の間は先程まで唾を飲み込む音も聞こえるほど静かだったのに、人が集まりに連れて少しづつザワザワと騒がしくなつた。暗くて静かだったこの塔のどこに、これだけの人が潜んでいるのかと驚いてしまうほどの人の多さ。

プライムスの座る椅子は少し高い位置にある。私もその高い段の上にいる。そこからだと集まつてくる召使いたちの様子がよく見渡せた。

その中にはアビュもいるはずだつた。しかし彼女を探すのも苦労するほど人が多くて、私は探すのを諦めた。

「ちょうどいい機会だから紹介しておく、僕の隣にいる男はシャグラント。この塔のナンバー2に就任した」

それは私も耳を疑うような事実であったが、ここは黙つて聞き流しておいた。

「これから僕と彼とでこの塔の大改革を行う。数日の内に、この塔の主が変わつたということを君たちは否が応にも認識させられるであろう。文句があるものは去るがいい。誰も止めない。それが嫌なら僕の分身だと思つて彼に仕えるよ」

プラーヌスはおそらく同じようなセリフを、三つの違う言語で繰り返し述べた。その度に彼の言葉に対する返事が所々から聞こえてきた。

「話しあはそれだけだ。各自すぐに持ち場に戻れ。ただしゲオルゲ族の料理人だけはこの場に残るんだ」

その言葉もプラーヌスは三度繰り返した。

その度に謁見の間から召使いたちが去つていく。最後にプラーヌスの指示通り、ゲオルゲ族の料理人だけが残つた。

ゲオルゲ族の料理人はどこにでもいる街の酒屋の店主のような男で、明らかにイラついているプラーヌスを前に恐怖に震えていた。何か企みや反抗の意思があるようには到底見えなかつた。彼が非協力的なのは、ただ単にこれまでプラーヌスが彼らに訓示するのを怠つていただけのような気がする。

しかし、いずれにしろ、既にプラー・ヌスの逆鱗に触れているようなのだ。もはやプラー・ヌスの気は簡単に静まりそうにはない。

「シャグラン、少し手荒なことをするからこの場を外してくれ」

プラー・ヌスが言つてきた。

「・・・あ、ああ、わかつた」

私はプラー・ヌスの冷たい形相に少したじろぎながらそう答へ、謁見の間から足早に立ち去つた。

そのとき心なしか、ゲオルゲ族の料理人が私に助けを求めるような眼差しを送つてきたような気がしたが、私は見ない振りをした。おそらく彼のプラー・ヌスへの反抗は、この料理人だけの意思ではないだろう。間違いなくゲオルゲ族全ての意思のはずである。彼だけを叱責するのはいささかアンフェアな気もする。

しかしゲオルゲ族全てを首にする余裕がないだけに、彼だけが生贊にされるのも仕方ないかもしれない。彼は不運な籠を引いてしまつたのだ。

私は彼の運命を憐れみながら謁見の間を去つた。私の告げ口からこのような事態に至つたことだし、少し責任を感じないわけではないが、私としてはただ彼の危機を感じる能力の低さを憐れむしかない。

## 第一章 6) 不気味な女性の泣き声

「つてことは私、」の塔のナンバー2の助手になるわけか、悪くないね」

アビュはルルルツとハミングしながら、スキップするよつに私の一、三歩先を歩いてくる。その姿はまさに野原を駆ける元気な小鹿のよけ。

謁見の間を出た私は氣を取り直し、アビュと早速名簿作りを開始した。夕食の時間までまだ少し時間があったので、それまでの間、少しでも仕事を進めることにしたのだ。

「海から来たの？」

アビュは短く切りそろえた襟足をサッと振りながら「ひりに向き直り、突然そんなことを尋ねてきた。

「な、何だつて？」

「海から来たのかつて聞いたの」

「ああ、確かに港町から来たけど」

「やっぱりね。匂いでわかったよ、潮の匂いや。一度だけ父に連れられて海に行つたことがあるんだ」

「別に漁師でも船乗りでもないけど、僕から潮の匂いがするなんて思わなかつたな」

「私、この塔からほどんど出たことないからね、ちょっとした匂いでわかつちゃうんだね」

「ああ、そうか、なるほどね」

アビュに護身のためにつけられたカボチャのバケモノのことも説明しておいた。

さすがにこの塔で生まれ育つたからか、アビュは少し驚いたくらいで納得した。

私はまだ直視するのも嫌なのに、それを何て呼べばいいのか私が答えられない、アビュは彼らの名前を考え出したぐらいだ。

それで彼女の命名によると、いつも僕の左側にいるのは「ワ」で、もう一人が「ギャー」。

そういうわけで、都合四人で私たちは塔を歩き回った。

「倉庫から調べない？ 中央の塔の地下にあるんだけど」

アビュがそう提案してきた。

「まあ、別にいいけど」

「一度その中を見たかったんだよね、そこに近づいただけで死刑に処された人もいるって聞かされていたから。そういう噂を聞くと逆に見たくなるの、わかるでしょ」

「ああ、わかるよ」

私たちは広い螺旋階段をひたすら降りて、やがて倉庫のある地下の階層に到着した。

塔の中は既に夜の闇にどつぶり浸されていたとこうのこ、階段を下りるごとに、更にその闇が濃くなつていくようで、私はまた街が恋しくなってきた。

「蠅燭係という仕事を新しく作りたいんだよな。こうこう滅多に行かない地下は仕方ないとしても、人がよく通る回廊や階段は明るくしたいんだ」

私はこれまでずっと考えていたことをアビュに語つてみた。

「まあ、いいんじゃない、私も賛成かな。でも街つて夜でも明るいところなの？」

「いや、街もそんなに明るくないけど、ここほど真っ暗じゃない。月の明かりもあるし、星も光っている。何より友達がいた。僕の家は小さかったから、廊下を歩くのにこひやつてランタンを持つ必要もなかつたし」

「一言で言えば、暗いのが怖いってわけね

「違う、この塔が怖いんだよ」

私は私たちを真上から圧迫するよつとそそり立つてゐる冷たい石壁を見上げた。

おそらくありきたりな、街の大聖堂の外壁に使われているのと同じような石なのだろうけど、この塔の石壁にはあらゆる邪悪な怨念や願望がしみついているような気がして、私を齎かすのだ。

「そう言えば昨夜聞こえなかつた？ シクシク泣いている女人の声」

「や、やめるよ、こんなところでそんな冗談」

私は思わずビクッとして、アビュに触れるくらいここまで近づいてしまった。そんな私をからかうようにアビュは更に言つてきた。

「本当に、どこから聞こえてくるかわからないんだけど、女の人が泣いてる声がするんだ。他の召使いもみんな聞いてるよ」

「どうせ風の音か、鳥の鳴き声だろ」

「ううん、それは絶対ないよ。あれは明らかに女性の泣き声だよ。まあ、多分、そのうち聞くことになると思うけどね」

「そんなのが聞こえてきたらすぐに荷物をまとめて街に帰りたくなるだろ?」

「本当に怖がりね。でもあんなカボチャのお化けがいるくらいだから、そんなのいても少しも不思議じゃないと思つけど」

「まあ、確かにそうだな」

「そんなことよつ怖いのは、ここには地下室もあるし、多分、誰も気づかれてない隠し部屋とかもあるし。そこに誤つて閉じ込められてしまつて出られなくなつた人とか、どういう罪で囚われたのかわからない人がずっと入れられていて、そういう人が本気で泣き叫んでいると思ったほうが怖くない?」

「恐いよ、だからやめてくれ」

「いやよ、面白いからやめない」

アビュはそう言って、本気で震えている私を指差し、ゼンマイ仕掛けの人形のようにカラカラ笑ってきた。

そういうとこはまるで子供だ。

私は一瞬、助手を選び間違えたような気になつた。もつと色々な候補者に会つてじっくり選んでも良かったかも知れない。まあ、しかしこの暗黒の塔には、これくらい明るくて能天氣な少女のほうがいい氣もするが。

「やういえば君のお父さんに会いたいな

私は心靈話しの話題を打ち切るためにもやう言つた。

「どうして？ もしかしてパパに私を叱らせるつもり？」

「違うよ。頼みたい仕事があるんだ」

姉宛ての手紙を届けてもらう仕事を誰かにやつて貰いたいのだけど、もしかしたらアビュの父親がそれに適任なんじゃないかと考えていたのだ。

おそらくアビュの父親だからそれなりに信頼出来るだろうし、それにそもそも村や町に食料などの買い出しに出るのが仕事で、旅に慣れているに違いない。

「わかった、言つておく

そのとき突然、アビュが立ち止まり、耳を澄ますような仕草をしながら言った。「あれ？ 何か聞こえない？」

「何つて何が？」

「女性の泣く声」

「だからもうこじよ、やうこひのせ」

こんな現象がタイミング良く起るわけがないではないか。やはりそういうところがまだ浅ましい子供だ。もはやこんな脅しに私が恐がるわけもない。

私は下手な演技をしているアビュを置いて、やつせと先を急いでとした。しかしアビュの顔は真剣だった。

「ほり、・・・」  
「

「何言つてんだよ、まだ太陽が沈んで」

間もないじゃないか。そういうことだからかうのない、もつと夜が深まってからにすればいいだろ。

そう言いかけた私の耳にも、しかしアビュが聞いていたその何かが聞こえてきたのだ。

「な、何だ、これ・・・」

シクシクと恨みがましくて、まるで地獄の底から聞こえてくるような悲しみに満ちた声だった。

この世にこんな最悪な悲しみがあることを知りしめて、聞く者的心を地獄に引きずり落とすかのような。

「ずっと前から私が聞いていた声、」  
「

アビュが言った。

私はそれに答えず、ただ黙だめて立ちすくんでいた。

それは本当に私を凍りつかせ、しばらく言葉を奪つたのだ。

「た、確かに聞こえるよ」

ようやく私は絞り出しきった。

「嘘じゃなかつたでしょ？」

「ああ」

だけど嘘ならどれだけ良かつたことか。

「どうあれ上に戻る」

私はそう言ってアビュの手を引つ張り、来た道を戻るために思い切り走つた。

「ちよっと待つてよ、どうせこの部屋にいても聞こえてくれるよ。」

そう言いながらアビュも、私を追い抜く勢いで走つていった。

## 第一章 7) 問題だらけの物件

「いつたいこの塔を買つたのにどれだけ苦労を重ねたことか。はつきり言って僕は多くの人を破滅に追い込んできたよ。無垢な人を騙し、自分の命も危険に晒した。それでどうにかこの若さで、この塔を買えるまでの財力を手にしたんだ」

あの女性の泣き声はプラークスの部屋にも聞こえていたようだ。夕食のとき、応接の間で私と顔をあわせて早々、プラークスは憤りをあらわにして、じつまくし立ててきたのだ。

「ijoはとんだ、いわくだらけの物件だよ。蛮族がいつ襲来してくれるかわからないというのは事前に聞いていた。それが理由で割安だつたからね。だから騎士を雇つてそれに対処させる。それで万事は上手くいくと思っていたのに」

しかしこんな泣き声が聞こえてくるなんてことは聞いてなかつたよ。

プラークスはあの女性の泣き声を、「まるで生きているのに間違われて葬られてしまった者が、その事実を知らすために棺の内側を叩いたり、ひつかいたりしているかのような切羽詰まつた音」と表現した。

「魔法の研究が持らない。よつやくこの塔を魔界から支配している魔族と会つことは出来たんだ。それで前の塔の主が魔族と交わしていた契約を破棄させた。あと一步で移譲されるところまで来たんだよ。それなのにこの気持ちの悪い声に邪魔されて、魔族との交渉に集中出来なかつた。魔族を見失つてしまつたんだ。またゼロから

やり直しだよ

そういうわけでプラスは私にまた新たな仕事を言いつけた。

「すまないがシャグラン、この問題を解決してくれ。君だつて嫌だろ、買つたばかりの部屋でこんな声が聞こえたら」

「それは嫌だけど、でもこれは生きている人間が出している声なんだろ？ そうじやなかつたらどう考へてもプラス、君の領域じやないか。僕にどうこう出来る問題じやない」

「うむ、そうだね、だつたら言い方を変えよつ。原因を探つてくれればいい。解決まで君に期待するのは酷だつた」

「わ、わかつた。出来るだけのことはしておぐ

「ああ、頼むよ」

プラスはいつもの優美な表情を歪ませ、本当に呑みこなしあつてそう言つた。

まあ、確かにせつかく大金を支払つて買つたのに、こんな家だつたときの落胆は計り知れないものがあるだろ？

私だつていつか結婚をし、世帯を持つて独立して家を購入することもあるはず。

そのときこんな家に当たつてしまつたらと思つと、プラスが苛立つ気持ちが十分にわかるというもんだ。

しかしそんな苛々としていたプラスであつたが、よつやく運ばれてきた料理を一口食べ、その表情を少し輝かせた。

「どうやら今夜から料理を作ることになつたゲオルゲ族の料理人が口に合つたようだ。私もプライムスに続き、その料理を口に運んで思わず唸つた。

料理はシンプルでありふれたものだつたけど、それは本当に美味しかつたのだ。

細かく刻まれたキノコが入つたオムレツに、仔ウサギの肉のステーキ、酸っぱいドレッシングがかかつたサラダ、そしてこんがりと焼かれたたパン。どれを取つても絶品だった。

「君のアドバイス通り料理人を変えて正解だつたな。これまでこの塔で食べていたものが料理なんて呼べる代物ではなかつたつてこと改めてわかつた気がするよ」

プライムスは私もこの料理に感動しているのに気づいたのかそう言つてきた。

確かに昨夜の食事と比べると格段に違う。私の大切な助手のアビュを悪く言つつもりはないけど、プライムスの言う通りあれは料理と呼べるたぐいものではなかつたかもしれない。

「本当にどこかで一流の料理人を雇おう。これ以上に美味しい料理が毎日食べられるなら生活にも潤いが出ると言うものだ」

プライムスは少し機嫌を直したようにそう言つて、フォークとナイフをカタカタ鳴らして夢中で食べ始めた。

プライムスの機嫌がよくなるならどんなことでも歓迎だ。

美味しい料理でワインも進んだのか、プライムスは本当に上機嫌になつたようで、その食事中、彼にしては珍しく懐かしい思い出話しさを語つたりもし出した。

ちょうどこうやって、街の食堂で一人して、初めて食事をしたと

きの話しだ。

プラーヌスに申し訳ないことに、私はほとんどそのことを覚えていなかつたが、プラーヌスの言葉に適当に相槌を打つてゐるうちに、何となく思い出されてきた。

そういえば以前にも、こんなふうに一人だけで向かい合ひ、美味しい料理に舌鼓を打つていた。

何だかそのときの匂い、そのときの料理の味、周りの喧騒なども同時に蘇つてくるようだ。

「あの頃は貧しかつたけど、毎日が楽しかつたものだね。戻れるのなら、今でもあのときに戻りたいくらいさ」

プラーヌスは少し遠い目をしながらそう言った。「まあ、しかしこうやって今は一人で食事をしてゐるんだから、あの時期に戻れたも同然かもしれないけどね。だったらこの幸福で満足しておこうか」

「まあ、僕はあの頃と何も変わってないからね。君は今や塔の主だけど、僕はまだまだ駆け出しの肖像画家だよ。どこに戻つてもその事実は変わらないだ」

しかしこれはこの会話の流れに全く即した感想ではないのだけど、こうやって二人だけで食事をして改めて私は、プラーヌスは本当に美しい顔をしてゐると思つてしまつた。

それなりに付き合いの長い友人相手にそんなことを思うなんておかしいと言われそうであるが、一緒に向かい合つて食事をしていくのも、何だか照れ臭くなつてくるくらいなのだ。

プラーヌスを女性だと間違える人間はいないと思うけど、その優美で纖細な顔立ちは明らかに女性的な美しさに属してゐるような気

がする。

料理を口元に運ぶ指先も丁寧で柔らかだ。魔法使いのプラーーヌスが貴族出身のはずなどないが、どんなに格調高い社交界に出席しても、その美しさと共にその仕草も絶賛されるに違いない。こうやって一人だけで食事をするのが何だか勿体ない感じなのである。これはもっと多くの人間に見せる値打ちがある。

「どうしたのさ、シャグラン？ 僕の顔に何かついているのか？」

どうやら私は不自然にチラチラとプラーーヌスの顔を見ていたのだらう、彼がスープに口をつけながら怪訝そうな表情で訊いてきた。

「い、いや、別に何も・・・。それにしてもこのオムレツは美味しいね」

とにかく、この美味しい料理のお陰で、この塔に来て一日目の晩は平和に過ぎていいくかと思われた。

しかしまた、あの女性の泣き声が聞こえてきたのだ。それでプラーーヌスの顔色は一瞬で変わった。

「この声だよ、シャグラン」

プラーーヌスは持っていたワイングラスをやけに丁寧にテーブルに置いた。大きな怒りか、もしくはうんざりして呆れている気配が感じられる仕草。

「・・・あ、ああ、僕が聞いたのもこれだった

私もナイフとフォークを置きながら言った。

せつかくの私とプラーーヌスの和やかな食事の時間をこの泣き声は

邪魔してきたのだ。このとき私は恐怖よりも怒りすら覚えた。

それにプラー・ヌスの手前、この声の謎を解かなければいけないと  
いう立場もあつたかもしれない。これが聞こえているうちに、どこ  
から声がするのか探ろうと、すぐに私は椅子から立ち上がった。

しかしそのとき、その泣き声を書き消すようにして、何者かの絶  
叫が聞こえてきて、私はビクッとして立ち止まった。

その声は塔の回廊を響くように聞こえてきて、どこから聞こえて  
くるのかわからぬあの女性の泣き声とは全く異質な感じであった。  
どうやら本当に召使いの誰かが発した声のよう。いずれにしろこ  
れで完全に、静かで温かな夕食の時間は中断されたことは確かだつ  
た。

「何か事件が起きたようだな」

プラー・ヌスも苛立ちをあらわにしきり立上がつた。「しか  
し次々に問題が頻出する塔だな。いくら割安だったとはいってま  
で酷いとはね」

そのとき応接の間を慌ただしくノックする音がした。現れたのは  
青ざめた顔をしたアビュだった。

「わ、私もよくわからないんだけど」彼女は切れた息を整えなが  
ら言った。「何か怪物が現れたつて」

「怪物だつて？」

私は問い合わせるようにアビュを見た。

「へ、うん、私も見てないからわからないけど・・・」

「か、怪物なんていくらなんでも大袈裟じゃないのか。どうせどこから迷い込んできた『ライアスガエル』を見たとかだろ・・・」

私はその報告を認めたくなかったばかりにやつぱり泣いた。不気味な泣き声に続いて、謎の怪物まで現れるなんて、もはや私はついていけない。

それにこれ以上、プラーヌスを苛立たせる材料が増加されるのもうんざりである。

「そ、そうかもしれないね・・・」

アビュも私の言葉に曖昧に頷いた。

「じゃだ、とにかくそこに案内するんだ」

しかしプラーヌスは事態を重く見たのか、そう言ひながらすぐに部屋を出でていった。

プラーヌスはやはり苛立つてゐるようだ。その口調は一見穏やかだったが、明らかに怒りが滲み出でているのが感じられる。そんなプラーヌスの後をアビュが慌ててついていった。

私はこのような騒ぎに関わるのは御免だったが、ここで留守番しているのもなんなので、仕方なく彼らに従つた。

## 第二章 8) グロテスクな同居人（前書き）

多少、グロテスクな表現があります。ご注意下さい。

## 第一章 8) グロテスクな同居人

召使いたちは恐怖に凍りついた表情を浮かべ、壁を背に、這うようにして立っていた。

まるで斬首を待っている捕虜の群れのようだ。

私とラーヌスとアビュは、召使いたちの前を通り抜け、彼らをそんなにも怯えさせている何者がいるらしい場所に向かった。

北の塔の、召使いたちの住居や食堂などがあるエリアである。

中央の塔から西の回廊を通り、泉のある広場に着いた。その泉の広場で、召使いたちは身を寄せ合いつぶにして大勢集まり、口々に何か言いながら下りの階段のほうを指差している。

そこに何かいるようだ。

広場は薄暗く、召使いたちの持つていてる松明や、もともと設けられてるランタンだけでは到底照らしきれないほどで、特に部屋の隅のほうにある階段は真夜中同然だった。

私はそんな闇だけでも怖いといつて、その怪物とやらに立ち向かえるだけの度胸はなかつた。

しかしラーヌスだけでなく、アビュも歩調を緩めずその闇に向かつて歩いていくので私も逃げるわけにいかない。

ラーヌスが何か唱えると、彼の持つていてるロッドが光り始めた。

それでラーヌスの周りだけ真昼のように輝いた。

その光を頼りに、私は恐る恐るその階段のほうに目をやつた。

まだ何も見えない。しかし魚の腐るような匂いが鼻をつく。

そして確かに階段のほうに何者かが存在している気配がした。

ぐぢやりぐぢやりと、まるで柔らかい生肉をかき混ぜているかの

ような奇妙な音が聞こえるのだ。

「ちよつと待てよ、プラーヌス」

私は彼の背中に呼び掛けた。「本当に何かいるみたいじゃないか」

「ああ、間違いなくくる。その階段の下だ」

さすがに怖いもの知らずのアビュも、臆したようで足がすくんで動かないようだった。しかしプラーヌスだけは私の警告を氣にも留めず、まるで歩き慣れた散歩道を進むように階段を下りていった。五、六段階段を降りる音がした後、プラーヌスの足音が止まつた。アビュは怖くて堪らないようであつたが、好奇心のほうが勝るのかゆつくりとその階段のほうに近づいていった。

私も仕方なしに彼女を追い越した。そしてありつたけの勇気を振り絞り、階段の下に手をやつた。

何がが一体、階段を這いながらじりじりと近づいてくるのが見えた。

裸の人間のようだつた。顔は苦渋に歪んでいて、まるで溺れてでもいるかのように、何かを掴もつと、じりじりと手を伸ばしてくるよう見える。

最初はそんなに怖がるほどるものではないよつて思つた。哀れな人間が苦しんでいるだけに思えたのだ。しかしその姿がまともに田に入り、私は思わず悲鳴をあげそうになつた。

一体とも胴から先がなかつた。まるで強引に引き裂かれたかのようで、奇妙に胴の先端が先細りになつてゐる。

しかしおかしい部分はそこだけではない。それはとんでもなくグロテスクな生き物だつたのだ。

一体のまつは背中に何か斑点のような模様があると思つたら、全て田であった。

おそらく人間の田なんだろ。田玉が動いたり、あるいは閉じたり開いたりしている。丁寧にまぶたもついているよつだ。しかし本来なら田のあるはずの顔に田はなくて、何か肉の塊が不気味に突起しているだけだった。

もう一体は額の部分にネズミの大きさほどの「じぶがつ」ていた。それが膨れ上がりつたり、縮んだりしている。どうやら心臓のようだ。体中の血管が身体の表面に浮かびあがつていて、その心臓につながっているのだ。

近づいてくるにつれて息をするのも辛いぐらい悪臭も強まってきた。

「見ないほうがいいよ、アビュ」

私は呆然としながらつぶやいた。

「うん、でもむづばつちり見ちゃつた……」

さすがにアビュもそれから田を逸らしながら、深い後悔を込めた感じの声でつぶやいた。「だけど怪物って本当にいたのね」

私もアビュの言葉に頷いた。

こんな怪物が存在しているなんて本当に驚きだ。これまで生きてきてこんなものに出会わしたことなんてない。

確かに抒情詩や古い物語などで聞いた記憶はあるけど、あくまであれは『伝説か作り』ことの中のお話しだ。

「ブ、プラーヌス、これが魔界の魔族つて奴なのか……」

私は彼の背中に問い掛けた。

「まさか、これは魔族ではない。魔族とは人間よりも数等美しいものや」

「じゃ、じゃあ何なのさー！」

「さあ、わからない。しかしグロテスクなだけで、二つとも何か危害を加えようとしているようでないことは確かだ」

プラークスはロッドを掲げてまた何か咳いた。  
すると光っていたロッドの先に橙色の炎が浮かび上がった。  
それをその一体のグロテスクな怪物に向かつて差し伸べた。二体の怪物はその炎から逃げるように後退し始めた。

「ほらな？ 部屋の中に誤つて迷い込んだ蛇かネズミのよつなものだ。こっちに敵意はないようだ。でもだからと言つて僕もこれ以上この生き物を直視していられない。それに何より自分の塔にこんなおぞましいクリーチャーが動き回っていることに怒りを覚える。こんな怪物は存在しているだけで害だ」

プラークスはそう言つてはロッドの上に浮いていた炎を二体の怪物の上に放つた。

炎に取り巻かれ、二体の怪物は激しくのたうち回った。何か叫んでいるように見えるが、口がないのか喉がないのか知らないけど悲鳴は聞こえなかつた。

すぐにその怪物たちは灰になつて消滅した。

プラークスはその光景を見つめながら、本当にうんざつしたように言った。

「想像して以上に、様々な問題があるようだな、この塔には」

そう言つてプラスは黒いローブを翻して、荒々しい足音をたてて階段を上がってきた。

「蛮族の定期的な襲撃、それだけじゃなく、訳のわからない不気味な女性の泣き声、そしてこのクリーチャーの出現、これでは全く魔法の研究が進まない！ いや、それどころか生活すらままならない。昼夜問わず、この塔の全ての出入口を固く見張つておくんだ！」

私に向かつて言つたのか、この場にいる召使い全員に言つたのか、プラスは声を張り上げそう叫んだ。

プラスのあまりに怒りに満ちた口調に、その言葉がわからぬい召使いも頷いていた。

「これまでにこのよつな怪物を見たことはある者はいるか？」

そのプラスの問いに、どの召使いも、アビュも首を燒てて振つた。

「そつか・・・、この怪物の出現にこれほどに怯えているのだからそれは嘘ではないな」

プラスはしばらく思案気に俯いていたが、すぐに顔を上げた。「いざれにしろ今日の門番たちは全て打ち首だ。明日、謁見の間に連れてこい！」

プラスは一人の召使いを指差しそう言いつけたが、すぐに首を振つた。「待てよ、もともとこの塔に潜んでいた可能性もあるな・

・。打ち首は正するー もつ少し様子を見よつ

その召使にはホツとしたよつこ、「わかりました」と返事した。

「しかしだとするとまだどこかに潜んでいるかもしれないな、倉庫を這いまわるネズミがその一匹たりと限らないよつこ」

独り言のように呑みしきりに、アーラーヌスは私のほうに振り返つた。

「シャグラン、君も気をつけろよおいてくれ

「あ、ああ、わかつた」

私はこの塔に潜む怪異に心底怖氣ついていた。この塔に充満する、夜よりも濃い闇だけでもうんざりだつたのに、不気味な女性の泣き声が聞こえたかと思つたら、プラーヌスですら正体が掴めない怪物まで出現する始末なのである。もうすぐおまじこから逃げ出したい気分だつた。

しかし逃げる先がある私はましだ。ここ以外に行き先がない、アビュや召使いたちは本当に不安そうにしてゐるのである。それを見ていたら、いくら氣弱な私でもそんな氣分は消えた。とにかくもう一度とこのような事件が起きないことを望むだけである。

だけどもその日の深夜、更なる事件が起きた。

奇しくもさつきのプラーヌスの不安は的中するのだ。

## 第三章 1) 大群大発生

その日の夜、どうもぐっすりと眠れなかつた。

あまりにもインパクトのあつた、あのグロテスクな怪物の姿が脳裏から消え去りはしなかつたからだろう。

もしかしたらあの怪物の夢を見ていたかもしれない。

そうじゃなくても、まだ私の近くをうろついているような気分がして、眠りは少しも心地良くなかった。

私は何かの予感に打たれたせいなのか、それともまるで眠りと呼べないくらいそれは浅かつたからか、浜辺に打ち上げられるようにして深夜に目覚めた。

それからも眠ろうと必死に努力した。たとえ夢の中であの怪物に追いかかれよつとも、夜の闇と、あの怪物の気配に怯えているほうが嫌だ。

せめて眠りの中に逃げ込みたい。そして少しでも早く朝の光を見たい。

しかしながら眠りは訪れてくれなかつた。

するとまたあの悲しげな女性の泣き声が聞こえてきたのだ。

シクシクという、あの恨みがましい声がして、私はビクリとして跳ね起き、まるで背中に冷ややかナイフでも押し当たられたような気分で部屋の中を見回した。

もうこれで到底眠れそうになくなつた。

しかしそれは更なる事件のプレリュードに過ぎなかつたわけだ。  
それから少し経つて召使いたちの悲鳴が聞こえてきた。

この塔は広大で、私の部屋から召使いたちの居住室まで、街で言えば一件の靴屋から違う一件の靴屋までぐらいの距離があるはずなのに、まるで一個の管楽器として設計されているのか、気持ちの良いくらい

い声が響いてきた。

またあの同じような怪物が出たに違いない。

そう思つて私はすぐに部屋を飛び出た。

あの怪物を見るのはもう懲り懲りだし、私が出向いたところどうじつ出来る問題とも思えなかつたが、ここでじつとしているよりも大騒ぎになつてゐる現場に出向いたほうがマシな気がしたし、それに一応この塔のナンバーとしての責任感が私をそうさせたのかもしれない。

とにかく私は部屋を出て東の回廊を駆けた。

中央の塔に着くと、ちょうどアビュが北の回廊の扉を開けるところだつた。

「また出たわー。」

アビュはベッドからそのまま這い出てきたのか、寝床で着るような薄い衣服をまといつた。夜の涼しさに寒そうに見えたし、身体の線もあらわだつた。

思わず私は田のやり場に困つた。

いや、もちろん、まだ子供のような体つきのアビュのそんな姿を見たからつて、私がそれに動じるわけはない。そんなの当然だ、言い訳するまでもない。

だけど彼女のその慌て振りが事態の緊急性を感じさせ、私を緊張させたのだ。

「しかもさつきみたいに一匹や二匹じゃない。あの怪物がそこへ中へ戻っているのー。」

アビュが怒鳴るよつに言つてきた。

「ウヨウヨつて？」

「大群よ、巣穴を突いて蜂がブンブン出てきたかのよつな」

私はその様を想像して、思わず足をすくんでしまつた。それにこの事態はどうやら私一人の手に負えそうもない。

「わかつた、プラスを呼んできた方がいいな」

「もう来ているさ」

西の回廊に通じる扉が開き、プラスが現れた。  
表情を見るまでもなく、その足音だけでどれだけ機嫌が悪いのが感じ取れる。

それでも恐る恐る振り返りプラスを見た。彼はなぜか静かに微笑みを浮かべていたが、それが逆に彼の怒りの大きさを証明している気がする。

「なあ、シャグラン、なぜ僕が太陽に背き、こんな真夜中まで起きて魔法の研究をしているか知らないわけじゃないだろ？ 夜のほうが魔界と接続しやすいからだ。そっちのほうが魔族たちとのミニユニケーションが上手くいくからだ」

プラスは夕食のときに着ていたのとは違つ、全身を覆うよつな黒いロープをまとい、自分の背丈よりも長いロッドを持っていた。その暗黒のロープのせいで、彼の肌がいつそう白く引き立つていて。これが魔法使いの正装だろう。魔法使いの詳しいことはわからないうが、彼が何かの作業に打ち込んでいたことは間違いない。

「ここの時間はとても貴重なんだ。一刻の遅れが大変な喪失につながる。相手は世にも氣まぐれな魔族だからね」

そう言い終わった後、プラーヌスは私の前で立ち止まつた。

「大変な数の怪物が出てきたようなんだ・・・」

私は言い訳するようにそう言つた。本当に、その作業中断も仕方ないくらいの大事件が起きていることを祈りながら。

「アビュの報告に拠れば足の踏み場もないくらい、あの怪物たちで溢れているらしい」

私は同意を求めるようにアビュを見た。しかし彼女は、プラーヌスの前ではいつもはつらつとした性格を無くしてしまつようだ。アビュは私の言葉にも遠慮がちに頷くだけだ。

「門番たちから何も報告はないな」

プラーヌスが言った。

「あ、ああ。ないよつだけど」

「だとすると奴らはやはり塔の中に潜んでいたわけか。いいどう、今夜でのこの件は徹底的に片付けよう」

## 第三章 2) 魔法の人体実験

私たちは急ぎ足で、召使いたちの居住室がある北の塔に向かった。そこですれ違う召使いたちを捉まえては、どういう状況なのか尋ねて回った。

それで幾らか確たる情報を得た。その怪物たちがどこから現われたのか判明したのだ。

召使いたちの幾人かが、地下の廊下に不思議な扉を発見していたらしい。

そんなものはこれまでなかつたようだ。そしてそこからあの怪物たちがウヨウヨ這い出でてくるのを見たものがいたらしい。

その報告を聞いてプラスは何かわかつたようだつた。

「おそらくそれは前の塔の主が作つた魔法の隠し扉だろう。昨晩、僕は前の主が結んでいた魔族との契約を破棄させた。それで彼がこの塔に残していた、あらゆる魔法が解けたのだ」

前の塔の主はそこに何か大切なものが、もしくは後ろ暗いものをそこに隠していたようだな。

プラスはそう言った。「もちろんこの場合は後者、後ろ暗いものを隠していたに違ひない。前の主は人体実験をしていたんだろう」

「じ、人体実験だつて？」

「ああ、昨夜、あのグロテスクな姿を見て僕もすぐ気づくべきだつたけど、あまりに改变されていたから思わず見逃してしまつた。しかし前の主は人間の身体をいじくり回し、新しい生き物を創

造しようとしていたのさ」

「えつ？ ジャ、じゃあ前に現れたあれはもともと人間？」

私は心の底から驚きの声を上げた。

「わ、おそれくその実験結果さ」

プライヌスは私の言葉に頷きつつも、更に独り言のようにつぶやいた。

果たしてあれは彼にとつて失敗だったのか。いや、あるいは成功だつたのかもしれないな。どれだけグロテスクな生き物を創造出来るのかと競つていたとしたら。

「いずれにしろかなり悪趣味な主だつたようだ」

「そ、そんなの」

悪趣味とかそれどころの問題じやないではないか。それは殺人以上の罪悪、人間性を踏みにじる最悪の所業！

だけどあの怪物たちの姿を思い出すと、あれが以前は人間だつたなんて想像も出来なくて、上手く怒りを感じることが出来なかつた。それよりもまだ恐怖や忌避感のほうがずっと強いのだ。

「とにかくその魔法の扉のあるところにまで案内し」

プライヌスは召使いたちにそう命じた。

何人かの勇気ある召使いが頷き、私のような臆病者はオドオドと後ろに下がつていった。

私だつてこれ以上ついていきたくなかつたが、そういうわけには

いかない。仕方なくプラスの後に続いた。

## 第三章 3) おやまつせ光景（前書き）

多少、グロテスクな表現があります。“注意下さい”。

## 第三章 3) おぞましき光景

壊れた魔法の扉があるという、地下の一角に近づくにつれ、足下を這うあのグロテスクな怪物たちの数が増えてきた。

私も最初はそれにいちいちビクビクしていたが、あまりにも数が多く、驚くことにも恐がることにも疲れてきた。

プーラースもそれを見つけるたびに、松明を持った召使いに焼き払わせたり、自ら魔法の炎で焼き殺したりしていたが、彼もいちいち関わり合つことを止めて先を急ぐことを選んだようだった。

しかしそれは元人間であつたらしいのだ。こうやって、まるで害虫やネズミを退治するように殺していいのか疑問に思わなくもない。いや、私だつて平氣でこの元人間たちをグロテスクな怪物などと呼んでいる。

考えてみればそれだつて無礼なことだ。

彼らはこつちに一切敵意を向けてきたりしない。おそらく一方的な被害者。前の主の狂つた所業のせいでこんな醜い姿にされただけなのだ。

しかしこのグロテスクな元人間たちに関する、あらゆることが私には耐えがたかった。

その怪物たちが発しているに違いない、まるで魚の頭が腐つたような匂いが辺りに漂つていた。

プーラースもアビュも私も、そしてついてくる召使いたちも、布や衣服などで鼻から口まで覆つて、少しでもその匂いを避けようとしている。

しかしそれもあまり効き目がなかつた。プーラースですから、それに耐えかねたよつこときおり咳きこんだりしている。

その見た目のおぞましさに関しては、もはや語るまでもないだろ  
う。

詳しくそれらの怪物の個性を観察する気になんて到底なれない。  
一体一体微妙な部分が違つてゐるようだが、どれもが足がなく、  
腕の力でしか前に進めないようになされているといふのは共通している  
ようだつた。

だけど人間としての原型をほとんど留めていないくらい改变され  
た怪物は、それほど気持ち悪くないかもしない。

むしろ逆に、ほどよく人間の名残を留めつつ、しかし確実に別の  
何かに変えられている怪物のほうが、私の胃をムカつかせた。

たとえば一体の胴体に顔が三つも四つも付けられている怪物など  
は、一人の人間以上に人間性が過剰であり、よりグロテスクさを感  
じさせているのだ。

だけどそのような直接的な不快感よりも、もしかしたらこんな醜  
い生き物が、元は私たちと同じ人間であつたという事実、どんな不  
運に見舞われたのか知らないが、このような悲惨な目にあつたとい  
う運命、そういうことが私を氣疲れさせ、彼らへの同情を阻んでい  
るのかもしね。

私の脆弱な神経では、それを受け入れることは不可能なのだ。

そのグロテスクな生き物たちを跨ぎながら階段を下り、やがて私  
たちは地下の円形の部屋に到着した。

そこで私はまた息を飲んだ。その円形の部屋が、足の踏み場もな  
いくらい怪物たちで溢れかえっていたからだ。

私たちはしばらく階段の途中で佇んで、階下のその光景を眺めて  
いた。

地下室はもちろん暗くて、プラークスの持つてゐるロッドの光や、  
召使いたちの松明だけではそこを照らしきれない。

そのおかげで直接的に地獄のような光景を目にしないで済んだよ

うだ。しかし私たちのすぐ下で、あのグロテスクな怪物たちが大勢蠢いている気配はしかと感じられた。

「いつたいどうこう目的で前の主は人体実験なんて？」

私はその気配に慄きながらプラススに尋ねた。

「そんなの単純さ」

プラススが返事した。「心臓が一つあればそれだけ長生き出来るし、脳が二つあれば思考力も増す。これはなかなか有益な実験なさ。しかしそれにのめり込むうちに、前の主は横道に逸れていってしまったのかもしれないね。ただどれだけグロテスクな作品を作れるかに血眼を注いだのかもしれない」

そのうち、クチャクチャ、ネチャネチャと、そんな不気味な音がどこから聞こえてきた。

「な、何、これ・・・

アビュはそう言つたかと思うと、うずくまって吐き始めた。

そんなアビュを介抱してやろうとした寸前、私もその音の正体に気づいてしまつて嘔吐感を覚えた。

そのクチャクチャとまるで肉片を踏みつぶすような音、それはどうやら怪物たちがあ互いの身体をむさぼり食つている音だといつことに気づいてしまつたのだ。

「どうやら彼らは腹を空かせていたようだな」

プラススが苦笑いしながらそつと呟つて、私の意見を追認した。

「前の主がいなくなつたせいで、彼らへの食料の供給が止まつていたんだろう。それで怪物たちは空腹に耐えかね食料をもとめて地下室から飛び出てきたのかもしれない。しかし食料は容易に見つからず、いつの間にか共食いを始めたといひじるか……」

「共食いだなんて彼らも人間だつたんじゃないのか？」

私は吐き気を抑えながら、訴えかけるようにプラスに言った。

「貧しい寒村では、飢餓のとき人を食べるのは珍しくない。長い籠城戦でもそうだ。それに彼らは人体実験で脳にも改変が加えられているだろう。いくらかの人間性を失つっていても驚くことじゃない」

しかし全て焼き殺す。

プラスはそう言った。

「この光景は神に申し訳ないからね」

心なしか、彼のその声には怒りが感じられたかもしれない。

プラスは一、三歩階段を下り、持っていたロッドを掲げて何かブツブツと唱え始めた。

しばらく何も起きなかつたが、しかし徐々に部屋中が蒸し暑くなつれきた。

そうかと思うと、床からチロチロと炎が湧き上がつて来て、グロテスクな怪物たちがまるで網の上で焼かれる魚のように、少しづつ炎に包まれていくのが見えた。

炎から逃れようとするかのように怪物たちの動きが慌ただしくなつた。だけど炎はそれ以上の勢いで燃え盛つていき、やがて部屋中

の怪物たちを真っ赤に染めた。

## 第三章 4) 囚われのフローリア

プラー・ヌスの放った魔法の炎は、地下の円形の部屋でお互いの身体をむさぼり合っていた怪物たちを一瞬にして焼き尽くした。

今は床に灰が薄く散り積もっているだけとなつた。

肉の焼ける匂いと煙が立ち込めている。

煙が立ち込める中、私たちもプラー・ヌスの後に続き階段を下りていつた。

彼は灰を踏み締めながら、部屋の奥の地下室の入り口の扉があるほうにさつさと向かっていく。しかしプラー・ヌスの足元は何だかおぼつかないようであった。

もしかしたら強力な魔法を使つたせいか、体力をかなり消耗したようだ。一步步ぐごとに呼吸が荒くなつていき、魔法の扉の前に辿り着く頃には肩で息をするまでになつていた。

しかしこまだ、その壊れた扉の残骸の隙間から、あのグロテスクな生き物たちが溢れ出てこようとするのが見えた。

プラー・ヌスは心底からうんざりした表情をこっちに向け、召使いたちに指図し始めた。召使いたちはプラー・ヌスの命令通り、松明の炎で怪物たちを威嚇した。怪物たちは炎を恐れて隅のほうに逃げていき、私たち一行のために道を開けた。

魔法の扉の向こうに階段があつて、うねうねと曲がりくねりながら、はるか下まで続いているのが見えた。

私たちは石と石の間に苔が生えている階段を、滑らないように踏み締めながら下りていつた。階段の壁をなす石組は茶色の水に濡れ、まるで不治の皮膚病にでもおかされ、止まらなくなつた膿が滲み出しているかようだ。

黴と腐臭の合わさった匂いが更に強まり、もうそれが我慢しきれないぐらいまで達した頃、ようやくその部屋に辿り着いた。

地下室は広いが、天井の高さがかなり低いせいか圧迫感を感じた。

私はどつちかというと背は高いほうなので屈まなければ歩けないほどで、フラー・ヌスが持つロッドも天井につかえそうだった。

しかしそんなことよりも、私はその部屋の、あまりのおぞましい光景に言葉を失っていた。

部屋の奥立つところに木製の手術台があつた。その隣の台にはメスやハサミ、斧やのこぎりや繩など、人体実験に欠かせない道具なのであるつか、そういうものが並べられている。

部屋の隅の棚や、あるいは床のいたるところに、透明の液体の入った瓶が無造作に置かれていた。

その瓶の中には、人間の手首から先だけとか、各種の内臓とか、馬の首とか様々な大きさの脳みそとかが、浸けられている。

「酷い……」

アビュが私に同意を求めるようにそう言つてきた。  
私も心痛な面持ちで頷いた。

その部屋の奥に鉄の柵で区切られた広いスペースがあつた。  
その牢獄の柵はすさまじい力でねじ曲げられていた。

そこにあのグロテスクな怪物たち、いや、人体実験でみんな姿にされた人間たちが閉じ込められていたようだ。まだ少し残っているクリーチャーたちが、今も床をうろうろと這つていた。

突然、召使いの一人が恐怖に満ちた声をあげた。

私もその悲鳴の主と同じくらいの恐怖を覚えながら振り向くと、一体のクリーチャーがまるで人懐っこい小動物のように、その召使

いの足にすがりつこうとしているのが見えた。

召使いは手に持っていた松明をそのクリーチャーの顔面に押し付けるが、クリーチャーはなかなか逃げようとしない。

「だ、誰か助けて！」

召使いは恐怖に満ちた声を上げながら後退するが、背中が鉄の柵にぶつかり逃げ場がなくなつた。

プライヌスが面倒そうに、横にいた身体の大きな召使いに合図した。

彼は手術台の横に置かれていた斧を取り、それを怪物に向かって振り落とそうとする。

「やめてください！」

そのときどこから若い少女の声がした。プライヌスは斧を振り上げた召使いを制しながら声のほうを向いた。

私もその声がどこから聞こえてきたのか探した。

「お、お願いです、この人たちを殺さないで下さー」

格子の向こうに、さう言つて声を上げている少女の姿が松明の光の中に照らされた。

「何者だ、君は？」

プライヌスはさう言つながらその少女のほうに向かつてゆっくりと歩いていく。

かなりみすぼらしい格好をした少女だ。しかしこちらをしつかりとした眼差しで見つめてくる。私も彼のあとを続いた。

柵がねじ曲げられた牢獄の他に、壊されていない別の牢獄もあって、その柵の向こうにその少女は立っていた。

いや、その少女だけじゃない。彼女の後ろに、壁の隅で怯えたようにならざりて立っている十数人の人もいた。その十数人は老いた女性や中年の男性、幼い子供など様々であった。

「そうか、生き残りか」

彼らの様子を見ながら私はだいたいの事情を察した。その者たちはちゃんと衣服をまとい、傷もないようで、何とかまだ人体実験の餌食にならずに済んだ者たちのようだ。

格子を掴んでいた少女はプラスチックが近づいてくるにつれて、さつきまでの気丈な表情を失い、少しづつ後ずさつていった。

「怯えるな、僕はこの塔の新しい主だ、君たちの命を救いにきた」  
プラスチックのその言葉に少女だけでなく、隅にいる十数人の男女たちも感動の声をあげた。

「だけどあの人は殺さないで下さい」

少女は召使いの一人にすがりついてまだ離れないクリーチャーを指差した。召使いはとっくに氣絶していたようで、怪物はその身体の上をのそのそと這いつぶつている。

「もしかしたら父か母だったものかもしれません。そうじゃなくとも以前までは私たちと同じ人間でした」

「知つていい。しかし生かしておいても彼らの人生にどんな光が差すのだろうか？ 脳まで犯されているようではないか。空腹のあまり共食いを始める始末だ」

「で、でも……」

少女は何か言いたげなまま下を向いて黙つた。

少女は瘦せていた。頬はこけ、髪の毛は長い間手入れされていないようだ垢じみ、着ている服も汚れている。

「君はここに入れられてどれくらいなんだ？」

プラスチックがそう尋ねた。

「わ、わかりません、太陽の光も差し込みませんから。いつ一日が終わり、いつ始まったのか知ることも出来ませんでした」

「今、田に稻が実り始めた頃だ」

「私が村を出たとき、ちょうど稻が実っていました」

「そつか……」

ということは一年も、ここにこうやって閉じ込められていたわけだ。しかもいつ次の実験台になるかわからない恐怖に怯えながら。

「どうこう経緯でここに連れられてきたんだい？」

私も彼女に尋ねた。

「父と母は仕事がなくて困っていました。やつと働き口が見つか  
つたのがここで」

「騙されたのか・・・、それは本当に可愛そなことだったね、  
でも大丈夫だ、君たちはもう自由だから」

私はさつきから田についていた、小さな木製のテーブルの上に放  
り投げられたように置かれてある鍵を手に取った。

おそらくこの牢獄の鍵であろう。  
彼女たちが閉じ込められている牢獄から、このテーブルまで五歩  
か六歩の距離である。しかし鋼鉄の柵が、その間を無限に隔ててい  
る。

「いや、少し待つんだ、シャグラン」

鍵をその牢獄の鍵穴に差し込もうとしていた私にプラーヌスが言  
つてきた。

「彼らを簡単に解放するわけにはいかないな

「どうして？」

私は愕然としながらプラーヌスのほうを見た。

「よく考えてみるがいい。もしかしたら前の塔の主の悪行が、僕  
の悪事として受け取られる可能性がある

「えつ？ でも、そんなの」

「噂はどう伝わるかわからないではないか。カプリスの森にある塔の主が代替わりしたなんて、少し離れた街の住人が知るはずないからな」

「だ、だけビープラーヌス！」

「わ、私たちは決して他言しません」

「この展開に私以上にショックを受けたのか、今までずっと黙つて、その少女の後ろに隠れるようにして立っていた髪の白い女性が、跪いて哀願してきた。

「いえ、たとえ話したくても、あれほど恐ろしい出来事はもう思い出したくありません。だからどうか私たちを自由にして下さい、この魔の塔から一刻も早く出して下さい。これ以上ここにいたら気が狂いそうです！」

しかしプラスは無下に首を振った。

「この魔の塔という呼び方が気に入らないんだ。君がそうやって吹聴すれば、悪評が広がる。それにそもそも僕が君たちの口約束なんかを信じると思うのか？」

「そんなんあ・・・」

「プラス、その仕打ちはあまりに酷いよー」

私も彼を非難するように声を上げた。「この人たちは被害者だ。君に何か害をなそとしないさ」

「シャグラン、こちだつてとんだとばっかりだよ。まさかこの塔でこんなことが行われていたなんて思いもしなかつた。この事実は徹底的にみ消さなければならない。一片たりとも同情の余地を残すわけにはいかないんだよ」

プラーヌスの言葉に牢獄の向こうの人達は絶望的な表情で天井を振り仰いでいた。

あの少女と同様、まだまだこの先の人生のほうが長い若者たちもいる。あるいはこの先の短い余生を、せめて故郷で静かに送らせてあげたくなるような老人もいる。

その者たちは皆、せつかく命が助けられたというのに、それ以前と同じような絶望的な表情になっていた。

「じゃあこの塔に軟禁させ続けるのか？」

「あるいはこの塔で死ぬまで働いてもらひつかだ」

プラーヌスは皮肉な笑みを浮かべながら言った。「しかし僕も悪魔じゃない。何が何でもこの塔を出たいといつのなら、出してやつてもいい」

突然のプラーヌスの言葉に、牢獄の向こうの人たちは喜びよりも戸惑いつよいにざわめいた。

「ただし条件がある。この塔にいたこと、この塔に来た事実、その間の記憶を消させてもらう。それを承諾するなら出してやつてもいい」

「記憶を消す？ そ、そんなことが出来るのか？」

戸惑っている牢獄の中の人たちに代わり、私がプラークスに尋ねた。

「ああ、そういう魔法は僕の得意な分野でね。幾らか時間はかかるが簡単だよ。どうだ？」

プラークスの問い掛けに、少しも悩む様子もなく皆が一斉に頷いた。

「むしろ嫌な思い出を消してもらえないなら、それは嬉しいくらいです！」

「しかしほっかりと空いた数年の記憶は、君たちに居心地の悪い虚無をもたらすかもしれない。それ埋め合わせようといふから一生、無駄な探求に時間を費やすことになる可能性もある」

「私はそれでもかまいません」

先程プラークスに跪いて哀願していた老婆がいち早くそう答えた。他の者たちも口々に頷いた。

「よし、だつたらそれでいいだろ。君たちを解放してやる。その代わり明日、一人ずつ順番に謁見の間に来るがいい

そう言つてからプラークスは近くにいた召使いに指示を出した。  
「すぐに新しい衣服と食糧を用意してやれ。それに馬車と幾らかの金貨を『えるんだ』

「ありがとうございます、この恩は決して忘れません」

檻の向こうにいる全員が深々と頭を下げた。プラークスは彼らの感謝に素気なく頷きながら、少し皮肉な笑みを浮かべた。

「いや、君たちは僕への恩も忘れてしまったよ、ここに来た事実そのものを君たちの記憶の中から消すんだからね。僕への恩も確実に忘れるのか」

私は牢獄の鍵を開けてやつた。  
彼らはまだ恐々としていたが、勇氣を振り絞るように外に出てきた。

おそらく凶々しい記憶を思い出しているのかもしれない。この牢獄から出た順に、人体実験をされたという事実を。

「生き残っている怪物たちは一人残らず焼き殺せ。ビッグセラもあんな姿で生きているのは酷な話しだ」

プラークスが手の空いている口使いにまた新たな命令を発した。  
それから私に言った。

「シャグラン、僕はもう疲れた。魔法でかなりの体力を消費したようだ。全ての後始末は君に任せろ。先に寝室に引き下がらせてもらひよ」

「ああ、任せてくれ」

プラークスが苦しそうに息をしていることはずっと気になっていた。私は当然そう返事した。

「お待ち下さい、新しい塔のご主人様」

しかしそのとき我々に最初に声をかけてきたあの少女が、歩き去らうとしたプラーヌスを呼び止めた。

「『ご』主人様、数々の『ご』厚意には『ごくらく』感謝してもしきれません。だけどどうかあの人たちにも『ご』慈悲を」

「慈悲だつて？」

プラーヌスは足を止め、怪訝な表情で振り返った。

「は、はい、どうか焼き払うなどと仰らないで下さい。今はあのよつな姿になつてしまつたが、少し前まで私たち同じ人間でした。いえ、たとえあのよつな姿にされよつとも、今だつて人間です」

「フローリア、もう余計なことを言つな」先程の白髪の女性が少女を窘めた。「これ以上、いつたい何を望むとこうのだい！」

「だけどおばさま、私たちがこいつやつて無事なのは、みんなが私たちよりも先に犠牲になつてくれたお陰じやないです。ご主人様！」

そう言つて少女はプラーヌスに再び向き直つた。「私があの人たちの世話をいたします。最後まで看取らせて下せーーー！」

「ほう、なかなか面倒な性格をしているよつだな。君はあるの怪物たちが気味悪くないのか？」

部屋から去るうとしていたプラーヌスは面倒そつではあつたが、いくらか好奇心を覚えたような表情で少女に近づいていった。

「少しも気味悪くありません、私の父と母もあのような姿にされました。だからあの人たち皆が、私の父であり、母であると思います」

少女はそう言いながら、少しも臆することなく、まっすぐな視線でプラスを見つめている。

利発そうな瞳だ。しかもその目は純粹な優しさで満ち溢れているようであった。

私はその純粹そうな瞳を見ながら何だか不思議に思つた。

この少女はこれまで散々、悲惨な残虐行為を目に見てきて、自らも悪い人間に騙され、その身体を踏みにじられる寸前であった。それなのに、どうしてそんな優しさを宿し続けられるのだろうかって。普通、とんでもない悪を前にしたら、心は荒むものじゃないのか？ 少なくとも余裕を失つて、自分の身の安全しかしか考えられなくなるものだと思つ。他の人質たちはそのようだ。

しかし彼女の心だけまるで特別な囮いがあつて、どんなものにも汚されることがない仕組みにあつてゐるかのよう。

「君の名は？」

プラスも私と同じような感想を持つたのだろうか、少し感心するような表情でそう尋ねた。

「フローリアです」

「フローリアよ、面倒を見るなど簡単に口で言つが、それは想像を絶するほどの苦行であろう。」の悪臭は耐えがたいし、ほとんど者が手も足もないものばかり、糞尿の始末も大変だ。それになぜ

かどいつもこいつも性器だけは元のまま残されている。食欲同様、性欲も消えずにあるという証しであろう。そんな生き物を君のこの痩せた細い腕だけで面倒看るなど不可能だ。悪いことは言わない。手厚く葬ることは約束する」「

「しかし主人様、さつきも言わせていただいた通り、私がまだこうして息をしていられるのは、私より先に犠牲になつたあの人们のお陰です。その恩はどうやっても返せそうにありません、せてその最後は安らかに」

プラーヌスはフローリアといつ少女の言葉に説得されたといふりも、その真摯な眼差しに心動かされたに違いない。

「わかった、フローリア」

渋々とではあつたが、プラーヌスは仕方ないと感じで頷いた。「面倒なことではあるが、君のその風変わりな望みを叶えることにする」

全ての召使いに通達せよ。哀れな姿をしたこの者たちは呪われた種族でも、罪を犯した幽鬼でもないと。決して手を掛けることを許さぬ。

プラーヌスは黒いロープを翻しながら振り向き、周りにいる全ての召使いに喝令した。

「ありがとうございます！」

「シャグラン、生き残りはどれくらいこごると想ひます？」

プラスが私を見た。

「わあ、確かにことは言えないけど、少なくとも三十体はいただ  
るつね」

「フローリア、三十体もいる彼らをこの塔の外に出すわけには当  
然いかない。彼らを看取るまで、君はこの塔に軟禁することになる  
けど？」

「別にかまいません」

フローリアはまっすぐプラスを見上げたまま、力強く頷いた。

「よし、それならこの塔でじぱりと暮らすがいい」

「こでもいい、この塔の中で彼女と彼らが静かに暮らせる部屋を  
設けるんだ。」

この命令はまだこの塔に不慣れな私に適さないと判断したのか、  
プラスは近くに控えていた召使いにそう命じた。

「しかし僕も僕以外の塔の住人たちも、もう一度と彼らの姿を見  
たくない。決して部屋から出さないと約束しろ」

プラスはフローリアを再び見つめ、厳しい口調でそう言い渡  
した。

「もちろん、お約束します」

「君の記憶はしばらく残そう、しかしこの塔から出るとか、必ず  
私の前に来るんだ。君も例外扱いにはしない」

以上だ。

プライムスはもう何も言われても聞き耳は持たぬと言つた感じで、断固としてそう言い放ち、わざと出口の階段に向かつて歩いていった。

プライムスが部屋から去ると、ずっと頭上近くを飛び交っていた蝙蝠の大群がどこかに飛び立つてくれたような感じで、緊張感がふつと緩んだ。

どうやら真夜中に塔を騒がせる事件が起きたという事実よりも、苛々しているプライムスと一緒にいるこのほうが私を気疲れさせていたようだ。私は思わずホッとしてため息を吐いた。

しかし部屋は田も当てられないくらいの惨状である。

あのグロテスクな生き物たちが足下をうろついていりし、わざとまで捕えられていた生き残りの人たちは皆、これからどうすればいいのか問い合わせるような表情で立っている。

てきぱきと指示しなければいけないことが山ほどある。それが今、全てが私の肩に圧し掛かっているのだ。

しかもプライムスの前ではキビキビと動いていた召使いたちも、私と同じように明らかに気が緩んだようで、見るからにだらけ始めていた。

何もかも明日に引き延ばして、わざと部屋に帰りたかったが、それも許されない。

私は自分も奮い立たせるように手を叩きながら、だらけ始めた召使いたちを急き立てた。アビュの通訳に協力を仰ぎながら、細かい指示を言い渡していく。



## 第三章 5) 夜の後始末

長い長い夜が終わり、自分の居室に向かって東の回廊を歩いていた頃には、既に朝の新鮮な太陽の光線が高窓のほうから差し込んでいた。

その角度からすると、気まぐれな太陽は今朝、北よりの空から通つて昇つていつとしているようだ。

言つまでもなく私は疲れ果てている。

全く寝ていないのだから当たり前だ。

膝の裏がチクチクと痛くて、部屋に帰る足は、魔法を使った直後のプラークスの足取りのように覚束なかつた。

ぐつすりと、誰に邪魔されることなくゆっくり眠りたい。

お腹もペコペコに空いていたが、何よりも今、私が望んでいるのはそれだ。

それほど寝心地の良いベッドでもないけど、私はそれが愛おしくて仕方なかつた。まあ、おそらくこんな口ぐらい、休みを取つてもプラークスも文句は言わないだろう。

どうせ彼も夕方まで寝ているんだ。私も今日だけはそれに倣うことにしよう。夜明けまで駆け事や女遊びに興じる遊び人のように、太陽に背いた眠りを貪ることにしよう。

ふと誘われる様に高窓から差し込む太陽を眺めると、その光が目の中に突き刺さつてくるようで、それが私の眠気を吹き飛ばすどころか、疲れている目をしょぼしょぼさせて逆に眠気を刺激してくる。

いつもときに太陽を見るのも悪いものじゃないな。

私は疲れ果てていいのけど、夜のうちにやれることはだいたいやつたという充実感があつて、気分は良かつた。

何だか心地良い眠りに興じれそうだ。かなり苦労はしたけど、それなりに首尾良く事は進んだのだ。

しかし苦労したことは確かだつた。

とりあえずの措置として、あのグロテスクな生き物たちをもう一度、牢獄の中に閉じ込めることにしたのはいいけど、その作業は本当に過酷を極めた。

元は人間だつてことはわかつてゐるし、こつちに何ら敵意を抱いていなきことも知つてゐる。

しかし毒がないとはいへ蛇を好んで触る人がいないように、あのグロテスクな生き物を率先して触ろうとする召使いはいなかつた。アビュですら尻込みしていたのだ。

私が率先してやつてみるしかなかつた。いや、實を言つと私もそれに関しては自慢出来る働きをしていない。

本当に動いたのはフローリアというあの少女だけだ。

しかし元々、彼女の我儘と言つてもおかしくない申し出によつてそういうことをする破目になつたのだ。それも仕方ないだろう。あのグロテスクに改変されてしまつた人たち全てを回収出来たわけではなく、まだこの塔のどこかをウロウロしているだらうが、それも彼女に任せるしかない。

だけどそういうこと以上に大変だつたことがある。

それは囚われていた人たちに新しい衣服を用意してやることだつた。

この塔には余分な衣服などないようなのだ。地下には大きな倉庫があるようで、だから倉庫の責任者を呼んで聞いたのだけど、鎧や防具などはあつても、そういうものは一つもないということだつた。だから仕方ないから、召使いたちの私物を徴発するしかなかつた。

しかし彼らも代わりの服に余裕なんてなく、誰もが出し済つた。いざれ街の古着屋で新しい服を買ってやることを条件に、ようやく人数分の服を手に入れられたのだけど、その説得が大変だったのだ。

私がまるで召使いたちに威信がないかよくわかった。

それどころか信頼もされていないようだ。

ナンバー2なんていうのは名ばかりなのだ。

いざれ街の古着屋で新しい服を買うということだって空約束である。プラーーヌスの機嫌の良いときに、彼に改めて申し入れなくてはならないのだ。

もしそれをプラーーヌスに断られたら私は嘘つきになってしまい、ますます信頼を失つてしまふだろう。

まあ、もちろんプラーーヌスは馬鹿じゃないし、いや、むしろ嫌になるほど計算高い人間だから、その可能性はないだろうけど、不安は不安である。

本当にこの塔で仕事をするためにはもつと実質的な力が必要な気がした。

たとえばこの塔の財政を管理して、召使いたちの給料などを払う立場に立つとか、あるいはアビュ以外にもつと直属の部下を増やすとか。

しかし下手にそんなものを手にしたら、この塔から永遠に出られなくなるかも知れないとも思う。

私なしではこの塔が運営出来なくなるなんてことになつたら、プラーーヌスはこの塔から私を解放してくれなくなるに違いないのだから。

だけどそういう権力がなければ、私の仕事は円滑に進んでいかないことも確かだ。

いざれ、どっちを取るべきか私は真剣に考えなければいけない

もしけないだろ？。

さもないと中途半端な立場のまま、ブランースと口使いの間でいつまでも板挟みになつていなくてはならなくなる

とはいえ、ただひたすら眠りたいだけの私は、今、そんなことを真剣に考えるつもりはなかつた。

そういう面倒なことを忘れるためにもぐつすり眠りたいのだ。

幸いなことにこの塔は基本的に静かである。

街にある私の住居だと、石畳を走る馬車の音や、物売りの子供の声で昼夜まで眠れたものではないだろう。だけどこの塔で起きる騒音は、昨夜のあのグロテスクな生き物が巻き起こした騒動くらいである。あれは一応、解決したのだ。もうそういうことはないだろ？。

汗はかいたし、あのグロテスクに改変された人間たちと長時間同じ場所にいて、身体中が何か汚らわしいものに穢れているような感覚がしたけれど、私は服も脱がず、新たな衣服に着替えることもなく、そのままベッドに倒れこんだ。

そしてすぐに眠りに落ちていったようだ。

## 第二章 6) 蛮族襲来

頭がガンガンする。

何者かが私の頭を、胴から無理に引っ剥がそうとしているような感覺。

私は何者かのその無礼な行為に必死に抵抗していたけど、残念ながら力及ばず負けてしまった。

私の頭はその何者かに引っこ抜かれ、部屋の外に持ち出されようとしていた。

それはやめてくれ！

そう思つて、その何者かを追いかけようと立ち上がつたら目が覚めた。

夢を見ていたようだ。

それにしてもなんて田間めの悪い夢、起きてもまだ頭がガンガンすると思つたら、部屋の中にも鐘の音やら銅鑼の音やらが鳴り響いていた。

「畜生！ いつたい何事だよ！」

滅多にそのような口をきかない私も思わずそう叫んでしまった。

眠気も疲れも全く解消されていない。

無理に眠りの世界から外に出されたからか頭が痛い。

その頭の痛みに沁み込んでくるように、鐘の音やら銅鑼の音やら響いてくる。それでも私はあまりの眠たさにもう一度ベッドに横たわった。しかしこの騒ぎの中では到底眠れそうにはなかった。

私は大変な怒りを覚えながら起き上った。

もしかしたらほんとんど眠れなかつたのかもしない。部屋の外に出て窓のほうを見ると、光の差し込み方が眠る前とほんとんど変わりないようと思えた。

やはりろくに眠れなかつたようだ。

私は渋々、騒ぎが起きているほうに向かつた。西の回廊を歩き、中央の塔に到着すると既にプラーヌスがそこにいた。

プラーヌスもイラついているのがわかる。

足下に控えている召使い、恐らく大柄だから門番などを勤めていれる召使いだろうか、その男に向かつて声を荒げていた。

それを見て私は少しホッとした。もしかしたらいつもの時間に起きてこない私を起こすため、プラーヌスがこんなことを仕向けたのではないかと一抹の不安を抱いていたからだ。

しかしプラーヌスの様子を見る限り、そんな感じではない。

「何の騒ぎなんだよ、プラーヌス、僕はほんとんど眠つてないぞ」

だからってわけではないけど、僕は少し強気にそいつ言った。

「蛮族の襲来だよ、シャグラン」

よつこよつここんな日、こんな時間にね！

プラーヌスが声を荒げたから、私は自分が責められたかのようこそ、元気よく首をすくめてしまった。

しかし蛮族の襲来だつて？

「前にも言つただる、ここに来る途中、君の乗つていた馬車を襲つてきたあの蛮族たちが、この塔に定期的に襲撃をかけてくると」

ああ、思い出した。それでプラスは番人に騎士を雇うなどといふ、無茶苦茶な願望を口にしていたつけ。

「奴らは律儀でね。普段はこんな朝早く襲撃を掛けてくることはないらしいのだけど、今日はどういう風の吹き回しか知らないがやつてきたらしい」

角笛の音と、馬蹄の響きが、少しづつこちらに近づいてくるのが聞こえてくる。

プラスの意識がそつちの方に向いたのかきつかけに、私も恐怖と好奇心が織り交ざつた気持ちでバルコニーに出た。

このエリアには窓一つなく、その様子を見るには扉の外のバルコニーに出るしかない。

私のいるバルコニーよりも数階高い場所に見張り台があった。そこで召使いたちが蛮族の襲来を報せる銅鑼や鐘を叩いている姿が見えた。

私は叩き起こしたのはその音のようだ。

その音に混ざり、蛮族の鳴らす角笛や、自らを奮い立たせる鬨の声が聞こえてくる。

確かに蛮族たちがやつてくる。

塔の近辺以外は深い森が広がっていて、それに隠され彼らの姿はまだ見えない。しかし確かに何者かの大群がこちらに押し寄せてく

る音が聞こえるのだ。

「百人程度は来ているな」

プライヌスが私の背後に来てそう言つてきた。

「ひや、百人だつて？」

「前もそれぐらいだつた。放つておけば塔の中に侵入して来て略奪が始まる。何としても撃退しないといけない。しかしそれで魔法のエネルギーを使い切り、僕の一命は台無しさ。しかも塔の外に出ていかなければいけないから、宝石も使わなければいけない」

「ぼ、僕も武器を持とうか？ 手伝えることがあれば言つてくれ！」

事の重大さがわかつて、ようやく眠さも疲れも一気にどこかに吹き飛んだ感じだった。私は意氣込むようにプライヌスに言った。

だけどプライヌスは私のその言葉を一蹴に伏した。

「足手まといになるだけ、シャグラン、君は絵筆しか持ったことのないだろ？ ここで黙つて見とけばいい。でも僕は君のそういうところが好きなのさ」

プライヌスは私を見て、少し嬉しそうに微笑みながらそう言った。

「ほ、本当に大丈夫なのか」

私は彼の微笑みに少し照れながら、しかし気遣うように言つた。

「ああ、問題ない、あんな未開の蛮族に僕が負けるわけがないさ。しかし僕が騎士を必要に感じるのも理解出来るだろ?」

「そ、そうだね」

戦場の音が近づいてくる。

幸いにも私はこれまで一度も本物の戦場に立ち会ったことがない。戦乱に明け暮れている恐るべきこの時代ではあるが、生まれたところが良かつたせいか剣すら握つたこともない。

しかし私が出来るだけ避けてきた戦いが、今、間近で起きようとしている。

私は湧き上がつてくる恐怖を止めることが出来なかつた。昨夜、感じた恐怖とは別種の恐怖。何か氣味の悪いものと遭遇する恐怖ではなく、本当に命が危険にさらされる恐怖だ。

「クズクズしていられない。蛮族はもうそこまで迫つてゐる。君はここで見ているがいい」

そう言つてプラーーヌスは何か魔法の言葉をつぶやき、私の前から消えた。

## 第三章 7) 魔法の稻妻

プライヌスの予想通り蛮族たちの数は百ぐらいだろ。裸馬に跨っている者や、徒歩の者などが、隊列を組むわけでもなく漠然と入り乱れ、角笛を鳴らし、奇声を発しながら、塔の唯一の入り口に向かつて殺到してきた。

プライヌスは彼らが突撃して来るその行き先の真ん前に、突然ふつと現れた。

まるで最初からそこにいたように、何かの障害物のせいで私の視界に入つてなかつただけのような、あまりにも自然な現れ方。

蛮族たちも、突然目の前に出現したプライヌスに驚いたふうもなく、自然とプライヌスを取り囲むように一歩に分かれていきながら進撃を止めた。

どの蛮族も弓や棒きれのような槍ぐらいでしか武装していない。防具は更に粗末で、寒さを防ぐくらいの役にしか立ちそうにない毛皮をまとっているだけだ。

しかしその数は圧倒的だ。そして全身から漲る殺氣は旺盛で、士気もかなり高いよう。

「なぜ敵わない相手にこうやって無益な襲撃を繰り返すんだ？」

プライヌスは蛮族たちをゆっくりと見回しながら、大声でそう言った。「それともまだ、勝てる見込みがあると思つてているのか？今すぐ去れば命だけは助けてやつてもいい。しかし一步でも動けばどうなるか」

その言葉が通じなかつたのか、あるいはプラーーヌスの脅しへ蛮族たちに空々しく響いたのだろうか、蛮族たちはプラーーヌスの警告をものともせずに一斉に襲いかかつてきた。

蛮族たちが一斉に襲いかかつてきて、プラーーヌスの姿が再び消えた。

かと思うと彼らの上、蛮族たちが槍を突いてもギリギリ届かない辺り、まるでアルファベットの上のアクサンテギュの位置にプラーヌスは浮かんでいた。

それに気づいて蛮族たちは武器を弓矢に切り替えた。  
最初の矢が当たりそうになつた寸前、プラーーヌスはまたもや消えた。

そのとき晴れ渡つていた空が突然黒くかき曇り始めた。

蛮族たちが突然の天候の変化に驚き、空を見上げた。  
空は曇り出しただけでなく、風が強まり、湿気を帯び始めた。  
更に空から大量の雨粒が落ち、雷の音が遠くから聞こえ始め、そしてそれは次第に近づきだしたかと思うと、稻妻はまるで意志をもつた生き物のように次々と蛮族の上に襲いかかつた。

私はその光景を呆気に取られながら見ていた。

稻妻は一瞬にして蛮族の半数を死滅させた。

生き残つた蛮族たちは腰を抜かし、呆然とした様子で空を見上げている。

肉の焼け焦げる匂いと、蛮族たちの感じた恐怖が、煙と共に空に立ち昇つしていくのが見えるようだ。

「この塔にいつたい何の用なのだ？」

その言葉と共に、フラーーヌスはまた私たちの前に姿を現した。

蛮族たちは酷く怯えながら後ろを振り向いて、彼を見た。

「一度とこの塔に近づくな、もしまだ近づけば」

彼はそう言ってロッソドを振り下ろした。

黒い空は再び不穏な唸りを上げ始めた。

蛮族たちは算を乱して逃げ出そうとしたが、恐怖のあまり足がもつれ、まるで氷の上を滑っているかのようだった。

「前の襲撃のときはやつてきた蛮族を一人残らず殺してやつた。僕の力ではそれぐらいのこと容易いことだ。ポケットの中の櫛を取り出すくらいの労力もいらない。しかし今回はあえていくらか逃がしてやつた。この塔に住む魔法使いの恐りしさを仲間たちに伝えさせるためだ」

プラークスがいくらか興奮した面持ちで帰ってきた。

さすがの彼もこれだけ人を殺した後は平常ではいられないようだつた。巨力な魔法を使って疲れているせいもあるのだろうけど、いつものプラークスと様子が違う。

沸き上がつてくる感情を抑えられないと言つた感じで妙に早口だし、どつちかというと常に無愛想で、突き放すような態度でしか話さないのに、今のプラークスはやけに人懐っこい笑顔を浮かべている。

「奴らもこれで懲りて、しばらくは近寄つてこないだろ?」

プラークスはそう言つて、満足げに白壁に引き下がつていった。

しかしそれでも蛮族はやつてきた。

その襲撃の翌日、以前と同じくらいの兵力で彼らはこの塔に攻め寄せてきたのだ。

そのときのプラークスの落胆と言つべきか、怒りと言つべきか、何と表現すればいいのかわからないけれど、とにかく蛮族たちが彼の警告にまるで耳を貸さない事実に、プラークスは本当に絶望していた。

もちろん再び、プライマスは自ら蛮族たちを撃退した。それは以  
て二回目こう二回目も勝利を終つた。

前と同じようにアラーヌスの圧倒的な勝利で終わる。

前回散々に負けたのに、いつやつて懲りずに攻め寄せて来るくらいなのだから、蛮族側は何か新しい策でも携えてきたのかと思ったがそういうわけでもないようだった。

ただ前と同じように正面から突撃して来るだけ。

どう見積もつても、蛮族たちは魔法使いプラークスの敵ではないよ。

しかし連日、いつもやつて蛮族を相手にしなければいけないことに、  
プラーーヌスは心の底からうんざりしていた。

そういうわけでブランヌは少し予定を早めて、騎士に会いに行くことを決意したようだ。

蛮族が再び襲来したその日の夜の夕食の席、プラークスはその計画を私に語つてきた。

「僕は騎士バルザをこの塔の門番に勧誘するためにバルに行つて  
くの」

プライムの目当ての騎士はパルの国に住んでいたらしい。

「塔の里で駒はノルの國に住んでいたらしい  
パルがどこにあるのか私は詳しく知らないけど、その国がどこに  
あらうがそこまで行くのにプラーヌスの魔法なら一飛びであろう。  
しかしそこで、その騎士との折衝やら何やらに最低三日か四日は  
塔を留守にしなくてはならないらしい。」

そういうわけで、それまでの留守番役をどうするかフランスは頭を悩ましていたようだ。

てつきり留守番役を任されるのかと思ったが、プラークスは私のことなど念頭になかったようだ。

「君では役不足に決まっているだろ？、蛮族を追い払うことも出来ないではないか。君には街で手伝ってもらいたいこともある。一緒に来るんだ」

その代わり、塔の留守は僕の複製に務めてもらひました。

「複製だつて？」

「複製だつて？」

「そう、複製さ。それなら四口、五口ぐらいに誤魔化しあきく。蛮族とも戦えるし、他の侵入者も撃退出来る。何なら僕よりも残酷な複製だよ。魔族にその中身を務めさせたからね」

「魔法ならそんなのも出来るのか」

百人の蛮族を一瞬で殺し尽くすことが出来るくらいだから、今更驚くべきことではないかもしれないけど、私は改めて感動するよつて言つた。

「まあ、複製と言つてもそれほど正確なものじゃない。四、五日しか継続しないし、ただ蛮族を殺すことだけしか出来ない代物だ。しかし今はそれで十分」

ただし塔を留守にするのに一番の心配事は蛮族のことじゃない。プラスは不安そうに表情を曇らせながら言った。

「他の魔法使いが僕の留守中にやつてきて、この塔を占領されることのほうが怖い。それ相手では僕の複製などといつ稚技は通用しないからね」

だけどそれもどうにか計算はたつたらしい。

「まだ完全に、この塔を魔界から支配している魔族との契約を取り付けたわけじゃないが、もうあと一步だ。他の魔法使いが勝手に交渉しに来ても、一、二週間ぐらいでは移譲されないぐらいまでの信用は取り付けたのさ。まあ、魔族相手に信用と言つのもおかしいが」

魔族との契約のことは私もよくわからないが、プラーヌスが以前から言つてることを自分なりに整理して説明すると、こうこうことだ。

ただ塔に住んだからといって、この塔の完全な主になれるわけではない。

塔を魔界から支配している魔族との契約を取り付けなければ、ただこの塔に間借りしているような状態に過ぎない。

すなわちそれでは、他からフラリとやつてきた魔法使いと立場は同じということ。

確固として自分の塔にするためには魔界からこの塔を支配している魔族と契約しなければいけない。それでよつやく、塔の主としての様々なアドヴァンテージを魔族から得ることが出来る。

そうなると、この塔を簡単に失うこともない。

それまでプラーヌスが自分の書斎に籠り、夜中まで忙しく働いていたのはそれをやつていたようなのだ。

「主要な魔族との契約は取り付けた。この塔が完全に僕のモノになるのはもう時間の問題さ。そういうわけでバルザ殿に会いに行く時間も出来た。そのついでに街で買い物も済ませよう

プラーヌスがワインで口を潤した後、そう言つた。

「久しぶりに街に行けるのは嬉しいけど、でも買い物って何を買おんだよ？」

私もメインディッシュの羊の肉のカツレツを食べながら「プラーヌスに尋ねた。ゲオルゲ族の料理係になつてから本当に料理が美味しいなつたものだ。

「まず花が欲しいね。あのグロテスクな怪物たちの残した腐臭がまだ塔中に漂つている。塔中に花を飾つて、花の香りでこの悪臭を追いつかせるやつだ」

「ああ、それはいいかもね。暗い塔が少しは華やかになるかもしない」

塔を花で飾る「アーティスチック」の趣味はどうかと思うが、私がさすがに少しだけこの塔が明るくなればそれでいい。

「単純に塔を華やかにするだけならもうと良い方法がある。小汚い召使いたちを追い出せばいいのだ。もっと若い、見目麗しい召使いたちに入れ替えるのさ。しかしながら新しい召使いを探すだけの時間はない。だけど街で家具や調度品を買う時間くらいはあるだろう」

「いいな、街か。何だか心が湧きたつよ」

久しぶりにこの塔から出られるとあって、私の表情もほころんだ。来る日も来る日も、この暗鬱な塔をぐるぐる回つているだけの生活にはさすがに飽き飽きしていたのだ。

「しかし君と一人で買い物をして歩くなんて、まるでデートみたいだな」

プラークスが微笑みながら言った。

「男同士でデートなんて、馬鹿なことを言つてゐるんじゃないよ」  
私はプラークスの冗談に苦笑いしておいた。しかしそれでも街に行けるのは本当に楽しみなことだ。

「まあ、その街に娼館もあるだらう。久しぶりに女を抱けばいい」

プラークスが澄ました顔でこんなことを言つてきた。

「いいよ、そんなの」

私は首を振つて断つた。いざ街に着くとまた気分は変わるかもしないが、今はそんな気はないし、それに何よりプラークスの勧めに従つて女性を抱くのも何か嫌なもんだ。

私がそう言つて断つたら、プラークスは何を勘違いしたのかこんなことを言つてきた。

「ああ、どうか、シャグラン。君はあの召使いに既に手を出して済ませていいわけか?」

「はあ? あの召使いって?」

「君の後をチヨロチヨロつゝ回つてゐる女の子がいるじゃないか」

「も、もしかしてアビュのことをしてゐるのか? あんな子供を

そんなふうに見てなによ

私は慌ててフーラースの言葉を否定した。いくらなんでもその勘違いは酷過ぎる。

「まあ、いいさ、どうでも君の好きにすれば」

焦る私を尻目に、フーラースはもうその話題に厭きたといった感じで、さつさと話しづを変えてきた。

「そういうえば名簿作りのほうは？」

「え？ ああ、少しずつ進んでいるかな」

私は話題が変わったことに内心ホッとしたがら言った。「明らかにこの塔の住人は多過ぎる。仕事も無く、時間を弄んでいる者は多いね」

「いざれ首にする。だけどまだ混乱は避けたい」

「召使いで思い出したんだけど、牢獄に閉じ込められていた人たちの新しい服を、召使いたちから借りたんだ。そのとき引き換えに新しい服を買ってやる約束をしたんだけど」

「それも街で買おう。まだしばらくその召使いたちには働いてもらわなければならないからね」

「あと、まだ残っているその元囚人たちが五人いる。いつでも塔を出て行ける準備は出来ているけど」

彼らをこの塔から自由に解放する条件が、この塔に居たところ記憶を魔法で奪つてからというものだつた。

しかし蛮族の襲来やらで、その作業が予定通り進んでいない。

「残念ながらそんなことに費やしている時間は無いな。魔法で街を行き来しなくてはいけないから、余分なエネルギーを彼らに避けない。僕が帰つてくるまで、まだこの塔で待機してもりおつ」

「彼らにそれを告げるのは心苦しいな

あつと彼らは、この塔から一日でも早く出てこけるのを心待ちにしているはずだ。

「怨むのなら前の主か、蛮族を恨めども言ひ聞こだ

「わかつた、仕方ないな」

「ラーヌスが彼らのために自分の予定を一日一日遅らせるはずもない。私は諦めるようにその言葉を飲み込んだ。

「そうだ、忘れるとこがだつた、シャグラーン、倉庫から女性ものよつな指輪を用意しておいてくれ。安物で構わない

部屋を去り際、ラーヌスが私を呼び止めてそう言つてきた。

「ああ、指輪だね、用意しておくれよ。誰かのプレゼントかい？」

「そう、騎士バルザ殿にね。この指輪一つで彼は僕たちの仲間になるはずだよ」

プラスはさう言つてど」少なく不気味に微笑んで、部屋を出  
ていつた。

## 第四章 1) エリュエールの街へ

その次の日、エリュエールの街に私たちは着いた。そこはプラーヌスの塔と、バルザが住むというパルの都のちょうど中間辺りに位置する。

本当に魔法ならどんな場所でも一瞬で到着する。

しかし突然、街の真ん中に現れるわけにもいかないので、私たちが着いたのは街の外れにある野原だ。そこに私たちを乗せた一頭引きの馬車は静かに到着した。

そこからは普通に馬車を走らせて街に向かつ。

「魔法ならどこにでも好きなところに行けるのか？」

この瞬間移動は船酔いのような症状に襲われる。しかしこれを体験するのも一度目で幾分慣れたようだつた。

今回も少し吐き気を覚えたが、それから氣を逸らすためにもプラスにそんなことを尋ねた。

「いいや、以前行つたことがあつて、あの魔方陣の残つているところか」

私は馬車から身を乗り出してプラーヌスが指差したほうを見た。草叢に隠れてよく見えないが、確かに地面に何か模様が残つているようだ。「あるいは仲間の魔法使いが迎え入れてくれる所だけだよ。パルには行つたことがないから仲間の魔法使いを頼つっていく

「パルに友人の魔法使いがいるんだ?」

「いや、会つたこともないから友人とは言い難いけど。魔界を通じてパルに住む魔法使いにコンタクトを取つたのさ。運良く親切な魔法使いに出会えた。これでわざわざ馬車で行かなくて済む」

「魔界を通じてコンタクトって？」

「魔法使いのことを説明していけばきりが無いけど、魔界には距離が無い。魔界に接続出来る者とは誰とでも話しが出来る。魔法使いとも、もちろん魔族とでも」

「自分では魔法使いのことを多少知つていたつもりだったけど、まだ何も知らなかつたみたいだよ」

「そりだらうね、当然、魔法使いは秘密主義者が多い」

だけれどにきて魔法使いの実態に興味が出てきたようだねと、少し嬉しそうにプラスは言つてきた。

それはこんな便利で凄い魔法を見せられ続けていると、私の好奇心は刺激されざるを得ないだろう。

こっちの迷惑も顧みず、プラスには振り回されることも多いけれど、それと同じくらい、いや、それ以上に彼と一緒にいると刺激的なことが多い。

最終的にその採算がプラスになるのかマイナスになるのかわからなければ、今はプラスと友人であることが、この世の僥倖のように思えてきた。

だってこんな凄い魔法使いを友人に持つている者なんてそうはないだろ？

父が宝石商だったとはいえ、魔法使いとそれ以上の接点があるわ

けでない私がプラーーヌスと友人になれたのはちょっとして奇跡だ。

あれは確か、・・・あれ、どういうきっかけで私たちは知り合つたんだつけ？

私は久しぶりの街を前にして舞い上がつてゐるのだろうか、昔のこと�이よく思い出せなかつた。

まあ、友情の始まつたきつかけなんてそんなものかもしれない。そんなことよりも街を守る城壁が見えてきた。

私たちと同じように街を目指して歩いている人の姿も散見されるようになった。城壁などはこれまで嫌になるぐらい見てきたけど、私は何とも言えない懐かしさを感じた。

「まだ日暮れ前だ。面倒な誰何も受けず街に入るだらう

プラーーヌスは馬に鞭を当てて馬車を急がせた。

ここまで来ると道も整備されてきて馬車の揺れも酷くなくなつている。少々スピードアップしても大丈夫だろう。

その通行人たちを追い越したりしているうちに、エリュエールの街に到着した。

## 第四章 2) 吟遊詩人「プラーヌス」

私たちは念のため旅の吟遊詩人の格好をしている。

まあ、私は画家だから、いつもの格好と全く変わりがないが、魔法使いの「プラーヌス」はそのままでは目立ち過ぎるということで、よそ者であつても滅多に怪しまれることのない吟遊詩人の扮装を選んだ。

いつもの黒いローブを脱ぎ、その代わり羽飾りのついたつばの広い帽子をかぶり、ひざ丈のキュロットを履き、裾の長いジャケットを着ている。

おまけにリュートを背中に背負っているから、どこから見ても吟遊詩人だ。

そういうこともあつて、私たちは安々と街に入ることが出来た。

まず街に到着した私たちは、おそらく街で一番大きくて豪華な宿屋に部屋を取つた。

もちろんこの宿を選んだのは「プラーヌス」である。こんな贅沢な旅は、魔法使いと一緒に出来ないものだ。

まあ、貴族や成功した商人などはそもそも宿屋に泊らないものだから、私が泊まることになつた部屋も大したものでもないかもしれません。

所詮、旅人向けの庶民的な部屋に過ぎないだろう。

しかしそれでも貧乏画家の私にとっては充分過ぎる贅沢である。

私が一人旅で泊るような部屋は、大概見知らぬ旅人と相部屋だから。だけど「プラーヌス」は贅沢なことに私にも個室を取ってくれた。まあ、その理由はただ単に、彼は誰かと一緒にだと眠れないからのようだけど。

さて、時間に一刻の猶予もない私たちは、宿屋の前に馬車を置いてさつそくエリュエルの街を散策に向かつた。

石畳の整備された街路の両脇に同じ様式の家が建ち並んでいる。私の故郷の港町とそれほど距離も離れていないせいもあって、驚くような街並みではないけど、私の住む街に比べると行きかう人の数も建物の数もずっと多い。

大聖堂の尖塔を田印にしながら、私たちは街の中心に向かつた。そこに近づくに連れ、物乞いや浮浪児の姿が目に付くようになつていた。だけど他の街と比べてもそれほど多くはないだろう。

傷痍兵の姿は一切目に付かなかつた。戦の影が差し込んでいないのも、この街の豊かで安定している原因なのだろう。

ところで街をプラスと一緒に歩いて気づかされたことがあつた。

それはすれ違う女性たちの多くがプラスに見惚れているつてことだ。

中には振り返っている女性もいた。あるいは咄嗟に色目を使つてくる女性までいる。

プラスは慣れているのか、いちいちそんなことに気を留める素振りを見せなかつた。

まるでそういうのは当然のことといった傲慢な態度で、自分の美を賛嘆してくる女性たちを街路に並ぶ並木か、店の前の看板程度にしか感じていな様子。

確かにプラスは美しい男だと思つ。

背は高いほうではないが、均整が取れたすらりとした体形をしているし、やけに瞳が青くて、それにじつと見られると不気味だけど、パツと見には海みたいに奇麗な目をしていると勘違いされることで

あらう。

細い鼻や、少し尖った顎はどう考へても神経質そうな性格を連想させ、いざ付き合つとどれだけ面倒なタイプか思い知るに違いないが、女性のように真っ赤な唇は肉感的で、逆に第一印象は人懐っこい印象すら受けるかもしれない。

まあ、人目を惹く魅力に溢れていることは間違いない。

更にこのとき、いつも暗黒の魔法使いのローブではなく、緋色のジャケットをまとつた吟遊詩人の格好をしてくる。これでは見るなというほうが間違いであらう。

だから私も別にそんなプラスチスと対抗するつもりなんて少しもない。

そんなの滅相もないことだ。

だいたい私は私だし、この世にたつた一つある永遠の愛さえ見つけられればそれで満足で、あらゆる女性の注目を集めたいなんて思わない。

むしろプラスチスみたいに生まれなくて良かつた。こんな容姿だと始終格好に気をつけていなくてはならないだらう。

しかしである。しかしこうやってあからさまに区別されると、同じ男として悔しいというか何というか、やはり嫉妬を覚えざるを得ないことも確かだ。

だつてこうやって隣を歩いていると、完全に私が引き立て役なんだから。

だけど同時に、そんな人目を惹いてやまないプラスチスと友人であることが誇らしくもある。

やつぱり単純にこいつこいつとは嬉しいものだ。

何だか強くて目立つ者の仲間になりたがる子供のような幼稚な感情かもしれないけれど、おそらくプラー・ヌスと友達である私を羨ましく思っている人は多いはずだ。もし私がそっちの立場だったら、そう思っていた気もある。

とにかくそういうわけで、何だか複雑な感じを受けながら、私はプラー・ヌスとの街を歩いたのである。

## 第四章 3) 黒猫と鴉

さて市場は夕暮れ間近で閑散としていた。

まだ物売りの姿も散見出来たが、花や野菜などは朝市でしか買えないようであった。

そういうわけで花は明日、私が朝早く起きて買い集めることにした。プラーヌスは旅でも自分の生活のペースを保つつもりしつゝ、朝に寝て夕方に起きるサイクルを変える気はないよ」だからだ。

やむを得ずといつわけでもないけれど、その次、私たちは古道具屋を探して街を歩いた。

その途中、プラーヌスは路上で熱心に蠅燭を売り歩いている少年を突然呼び止めた。

蠅燭なんて塔に帰ればたくさんあるのに、どうしてそんなものが必要なのかと思っていたら、プラーヌスはその蠅燭売りの少年にこんなことを言った。

「黒猫と鴉を一、二匹捕まえてきたら、君の持っている蠅燭を全部買い取ろう。更に金貨一枚もおまけでやる、どうだ、やるか?」

「え、金貨一枚? や、やるよ、もちろん…」

少年は突然舞い込んできた幸運を逃して堪るものかといった表情で、今にもプラーヌスにしがみ付かんばかりに言つてきた。

「よし、出来れば明日中に捕まえて来るんだ。僕たちが泊つている宿は、シャグラン、どこだっけな?」

「えつ、えーと、確か『三匹の羊亭』だつたつけ

「そう、その宿屋の一一番良い部屋に泊つてゐる。そこに捕まえた黒猫と鴉を持つてくるんだ。ただし黒猫も鴉も生きたままだぞ」

「わ、わかつた、お安い御用さー。」

「ああ、待つていろや。」

蠅燭売りの少年は建物の庇に降り立つた鴉を見つけ、早速それを追いかけて走つていつた。

子供の力で生きたまま鴉を捕まえるのは簡単ではないだろうが、金貨一枚のためなら知恵を絞つて必死に頑張ることだろう。それがあればしばらく働かなくとも暮らしていくるぐらいの大金なのだから。

「素直な子供だな。僕が約束を守らないかもしれないなんて疑う素振りもなかつた」

プラスヌスが少年の後ろ姿を見つめながら言った。

「まさか彼が持つてきても金貨を払わないつもりなのか？」

「いや、もちろん、ちゃんと約束は守るよ。けつこう利発そうな少年だつた。確實に役目を果たしてくるだらうね。だけどあんなに利発そうなのに、釣り合わない好条件を頭から信じるなんてやはり子供だよ。大人だつたら逆に誰も受け合つまい。それ相応の相場の謝礼を言い渡す必要があるし、なぜ黒猫や鴉を僕が欲しがるのか余計な忖度をしてくるだらう。」

「ああ、それはそうかもしない。プラーヌス、僕がまさにその余計な忖度をしたがる大人だよ、いつたい黒猫とか鴉なんて集めてどうするつもりだよ？」

確かに蠅燭は塔ではかなり入用で、いくらあっても無駄ではない。だけどプラーヌスが黒猫や鴉なんて動物を愛する趣味があるとは知らなかつた。

「拡張子として使うんだよ」

プラーヌスが私の質問にそう答えた。

「何だい、それは。聞き慣れない言葉だけど・・・」

「いわば魔法の道具さ。黒猫や鴉が、僕の手先のように勝手に働いてくれると説明すればわかりやすいだろうか」

「わからないな、それでも」

「黒猫や鴉も、バルザ殿を仲間にするためには必要なんだよ」

「黒猫や鴉が？」

「ああ、これまでも既に何匹か拡張子を放つてはいる。今でもそれらは、僕のために頑張つて働いているはずさ」

そのとき初めて、私はプラーヌスが何度か繰り返し言つていた、「バルザを仲間にするという言葉」に、どこか邪悪な響きも込められていくような気がした。

だつて普通に仲間にするの?、」のような魔法の細工が必要だらうか?

「 プラーヌスは何か良からぬことを企んでいるような気がしたのだ。  
いだろ?」

私は足を止めて彼にそう言つた。

「うん?」

「 プラーヌスは私の真剣な表情に気づいて、肩をすくめた。「まあ、君も少しあわかつてゐるだろ? バルザなんて大物が塔の番人を喜んで勤めるはずがないことを」

そんなこと当たり前だ。名だたる騎士が魔法使いの塔の番人など、どれだけ金貨を積まれてもやりたがりはしない。

まして相手はファビエル中に勇名の轟くバルザである。わざわざ プラーヌスから教えられるまでもないことである。

「 だけど僕はバルザを嫌々引きずり込むつもりもない。彼が心から塔の番人を勤めたくなるように仕向けるのに、幾らか細工を施す必要があるつてことだよ。別に悪いことじやないぞ」

「 プラーヌスは立ち止まつてゐる私を放つて、さつと先に歩いていった。

「 何も知らないまま、悪の片棒を担がされるのは嫌だよ」

私は慌てて彼の後を追いながら言つた。

「ああ、君に悪が似合わないことは僕もよく知っている。何も心配する」とはないや」

私はもう少しここのことを取りしょとと思つたが、プラーヌスはもう聞く耳を持たないといった態度でぐるぐると歩いていった。

結局、それでこの話題は終わってしまった。

どうやら上手く誤魔化されたようだ。それにかねてからバルザ殿のことを話すとき、プラーヌスは本当に楽しそうにしているので、そういう意味でもこのことを執拗に追及する気になれなかつた。しかしながら釈然としない気分を感じたことは事実である。

## 第四章 4) 憧れのルーテティア

何だか割り切れない気分を抱いたまま、それから予定通り、何件かの古道具屋に入った。

だけどどの店にもあまり良い品がなく、といつか少なくともプラーヌスが欲しくなるような家具はなくて、私たちは買い物をせつさと切り上げることになった。

彼はこれから、そのような予想をしていたようで、少しもがつかりした表情も見せなかつた。

だけどこつちにすればかなり残念だった。

確かにこの街の古道具屋には、私の住んでいる港町にもあるような品しかなかつたことは事実だけど、こういう店はウロウロしているだけで楽しめるものである。

そういうこともあり、旅が始まつてまだ間もないのにもう私はうんざりするような気分だった。

まだバルザ殿の件で心は引っ掛かつているし、そもそもプラーヌスの気儘さに引き回されるのはもうたくさんだつていう気分である。まあ、いわばプラーヌスと付き合つようになつてから度々感じる、絶望感といえば言い過ぎだけど、彼と友人になつたことを後悔したくなる、あの何とも言えない気分に陥つたのだ。

とはいえさつきから私も、彼と友人であることを誇りに思つたり、まるで逆の感じのことを思つたりで感情の振幅が激しい。

まあ、でもそれがプラーヌスという人間と付き合つということなのだろづ。

それを証拠にそのあと、私はまたプラーヌスのちょっとした言葉で、沈んでいた心が一気に浮き立つてしまつたのだから、それは間

違いない。

「 プラーヌスにしてみれば何てことないことだつたろうが、彼は  
こいつ言ったのだ。」

「 やはりアンティークものの家具を買うなら、ルーテティアまで  
行く必要があるね。日を改めて、何もかも落ち着いてから行こうで  
はないか、シャグラーン」

「 ルーテティアだつて？」

私がどれだけルーテティアの街を憧れているのか、プラーヌスが  
知つていたかどうか知らない。しかし芸術や工芸品などに関して、  
ルーテティアは最も有名な街である。

ルーテティア、そこは世界中から様々な種類のアーティストが集  
まる自由都市だ。画家である私がそこに憧れを抱かないはずがない。  
かねてから、絶対に死ぬまでにはいつか行ってみたいと思つてい  
た場所なのだ。

だけど自分で行くにはルーテティアは遠過ぎた。船に乗つて遙か  
なる大洋を渡らなければいけない。私の財政状況では到底手の届か  
ない場所だった。

しかしプラーヌスと一緒に話しさ別。魔法なら一飛びである。  
正直言つて、プラーヌスと友達でこんなに良かつたつて思ったこと  
はなかつたかもしれない。

「 今から楽しみにしているよ、プラーヌス！」

私はさつきの蠅燭売りの少年のように、今にプラーーヌに掴みかからんばかりに興奮しながら言った。

「ああ、必ず行こう。しかしそうこう長旅のためにも、バルザと  
いつ優秀な番人は必要なのを、わかるだろ、シャグラン」

## 第四章 5) 悲しきハイネの物語

街に到着したのが遅い時間だったせいもあり、そんなうちに日はすっかり暮れた。

プラーヌスは旅の準備が忙しくて昼食を食べていらないらしく、もう夕食を食べようとしたことになった。

そういうわけで私たちはとある大衆食堂に入った。

まあ、どこで食事をして構わなかったのだけど、客引きの女性に執拗に誘われたのがこの店を選んだ理由だろう。

それにしばらく静かな塔で生活していたせいか、久しぶりにこういうガヤガヤとした場所に行きたくなつたという訳もある。とにかく酒も食事も出来る大きな店だったので、ここにでゆっくりしようといつになつた。

しかしここには食事をしながら劇も見られる店だった。なぜだか知らないがプラーヌスはこれが気に入らなかつたみたいで、「つまりない劇に時間を費やすのは勿体ない。食事を食べたらやつせと出よう」と不満を言い出した。

古道具屋のこともあり、どこで食事をするのか私に選ばせてくれたようだけど、実際、店の中に入ると、いつもの我儘が顔を見せたのだ。

しかし驚くことに最初は嫌々その劇を観ていたプラーヌスが、いつのまにかその劇に夢中になつていた。

その劇を観終わったあとなど、ちょっとした興奮状態と言つてもいいほどであったのだ。

私たちはそこで、チキンの唐揚げやウサギのパイ包みなどを食べながら、「悲しきハイネの物語」という芝居を見た。

「 プラーヌスはどうだか知らないが、それほど芝居好きといつわけでもない私でも知っている物語である。」

妻もいるある高名な騎士が、自分の腹心の妻であったハイネという女性と禁断の恋に興じてしまつといつ、ありふれたラブストーリーなのだ。

確かにこの旅芸人の一座の芝居は悪いものではなかつた。しかし プラーヌスみたいに感動する程では到底なかつたと思つ。

「 そんなに気に入ったのかい？ プラーヌス」

芝居小屋が終わつて、ビールを飲んでいる間もその話しばかりする プラーヌスに私は尋ねた。

「 芝居自体はありきたいなメロドラマ、だけど、ハイネという登場人物がね、大変に気に入ったのさ」

芝居小屋の喧騒の中でも不思議に通る声で プラーヌスは言つて きた。

「 ふーん、 プラーヌスはあんな女性がタイプなんだね」

物語の中のハイネは世にも美しい女性である。

実際、演じている役者は、少しも浮世離れした美しさなんてものは感じさせなかつたけれど、物語に没入していくにつれて美しく見えるようになるのだから、よく出来た芝居だったのだろう。

「そういうわけじゃないわ。これも使えるんだよ。バルザ殿を仲間にする材料にね」

またしてもこのセリフだった。

「使える？」

「ああ、この芝居を見て本当に良かった。どうやってリアリティを出すべきか悩んでいたんだけど、これをそつくりそのまま使わせてもらひ」

私は少しばかり険しい表情でプラスを見ていたんだと思ひ。プラスはそれに気づいて苦笑いしながら言つてきた。

「おつと、またそんなことを言つたら君に怒られるな。さつきの言葉は聞き流してくれ」

「・・・プラス、君を止める力は僕にはないけれど、君の前から去ることは出来るんだから」

私は申し渡すように静かにそつて言つた。

「わかつてこるや、天使のように優しいシャグラソク君。前から言つているように、そんな君だから信頼出来るし、僕は君が大好きだつてな」

プラスは私を優しく宥めるように言つてきた。

そういうとき、プラスはどんな行商人よりも上質な愛想笑いが浮かべられるよつた。デザートに出でている南国産のフルーツより

も甘い笑顔。

「・・・わかつた、もうこれ以上、このことで責めるのはやめる」

私はまだまだ不満はあったが、ビールの泡と一緒に飲み込むことにした。

「ありがたい、君に責められると僕も心苦しかったからね。せっかくの旅なんだ、仲良く行こう」

プラークスは私が飲み干したグラスにビールを継ぎ足してきた。プラークスがこんなことをしてくれるなんて珍しいことだ。私ももう怒っていないという印に、彼のグラスにビールを注ぎ返した。

それから時間を忘れて私たちは飲み続けた。

そういうのが旅の良さだと思います。

明日もいつもと同じ時間に起きるつもりだけど、どこか解放感があつて、いくらか羽目が外せられるのだ。

この店を出ても、私たちは違う酒屋で飲み続けた。

本当に愉快な夜だったと思う。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていないくらい私たちは酔っぱらったのだ。

プラークスも私に負けないくらい飲みまくっていた。

いや、プラークスがいつものように冷静だったら、私も酔えるわけがなかつた。

だけど今夜のプラークスは普段のクールな表情をかなぐり捨て、

ゼリードでもいる労働者のように飲みまくっていた。

プラーヌスは、一介の庶民に過ぎない私とはまるで違う世界に住む、本当に恐るべき魔法使いだけれど、こうこうこうこうは人付き合いの良い普通の男になれる。

どうして私がこんなにプラーヌスと仲良くなつたのか、改めて思い出せたような感じだつたかもしれない。

こんなふうに、お互い本当の自分を曝け出して酒を組み合わせる仲だから、私たちはこんなに仲良くなり、今まで友達であり続けてきたのだらう。

やつこつのが思い出せた、とても実りのある夜だったと思つ。

その代償というわけではないけど、次の日の朝は大変気分が悪かつた。

こいつ、一日酔いは久しぶりである。ベッドの上のこよこのことは一応、無事に宿に帰つて寝ているようであるが、しかし昨夜の記憶はほとんどないから、間違いないく プラーヌスのお陰で帰り着く事が出来たのであらう。

プラーヌスもしたたかに酔つていたはずだけど、やつぱり彼はどこか醒めていたのかもしれない。

そう思いながら、クラクラする重い頭を何とか持ち上げてベッドから起き上がつたとき、プラーヌスがベッドの下で眠つている姿を発見して、私は酔いが醒めるかとくらう驚いた。

私は思わず笑いそうになつた。

誰かと一緒に寝れないと言つて、わざわざ個室を取つていたプラーヌスが、私の部屋で、しかもこんな恰好で寝ているなんて！

盛大に寝息をたて、無防備に背中を見せ、少しお尻をつき出したような姿勢で眠つている。髪は乱れ、皺ひとつなかつたシャツもしわくちゃだ。

恐るべき魔法使い、プラーヌスらしからぬ姿である。

だけど友人の私にすれば、謁見の間の玉座にふんぞり返つて いる プラーヌスより、こいつのプラーヌスのほうが好感を持ってるのは間違いない。

そもそもじつちが私の知っているプラスなのだ。

プラスをベッドまで運んでやるつと思つたが、起こすのも悪い氣がしたので、背中に布団をかけるだけにしておいた。

私は足音をたてないようじつやり部屋を出で、用意されてあつた桶で顔を洗い、そのまま階下の食堂で朝食を食べに行つた。

食堂にはあまり人はいなかつた。

窓から差し込む太陽の感じからしても、朝方という感じはしない。明らかに正午前か、それを過ぎてしまつているかだ。

「今朝の太陽はどうちから出たのかな？」

私は自分の食事を受け取りながら、その食堂を切り盛りしているおじさんに尋ねた。

「うん？ 気まぐれな太陽さんは今朝、西からおいでなすったよ」

「つてことは？」

「Jは住み慣れた街ぢやない。じつちが北か南か見当がつかないのを思い出して、彼に尋ねた。

「まだ昼前や」

「よかつた、朝市はまだ開いてるね」

「ああ、まだまだ大丈夫だろ？ ね」

私は朝食を食べ終え、すぐに朝市に向かつた。場所は昨日の散策でだいたい把握しているから迷うことなく到着した。

食堂のおやじさんの言つ通り、市場はまだまだ人通りが多く活況を呈しているようだつた。

市場には、この街の平和と豊かさを象徴するよつて、たくさんの品物が並んでいる。

プラーヌスの塔から最も近い街はここだから、私たちの塔で必要な生活物資や食糧など、主にこの街で買い出ししているはずである。それを思うと、並んでいる果物や野菜など、普段接しているものばかりで、そういう意味では新鮮味は欠けるが、こつやつて色とりどり並んでいるのを見るとまた格別である。

私自身あまり市場に足を運ぶタイプではないせいもあるだらうけれど、何だか遙かなる場所に旅に来た気分で楽しかつた。

私はしばらく市場を散歩して回つた。  
美味しそうな果物などを買って、その場で齧つたりして束の間の自由を満喫した。

幸い、この辺の人とは言葉も通じる。  
まあ、訳のわからない言葉を喋るゲオルゲ族など身近にいないのが普通の世界である。

そんなのがうろちよろしている、あの塔が異常なのだ。それをお難く思う私の感覚のほうがおかしくなり始めているだけかもしれない。

市場を気儘に歩くのはそれぐらいにして、まず私は古着屋で召使いたちの衣服を買い集めた。一、三十着の衣服は、軽くはないけれど持てない量じゃない。

それから私はありつたけの花屋を廻り、ここにある限りの全ての花を買うから、私たちが泊っている宿屋に持つてくるよつと重つて回つた。

予想通り、どの花屋の主人にも鼻であしらわれた。

私の吟遊詩人風の格好を見て、そのような財力を有しているとは思いもされなかつたのだ。

しかしこつそり金貨を見せ、持つてきてくれば必ず払うことを見束する態度が変わつた。

出来ればあまり金貨を持つてることを知られたくなかった。どこでその遣り取りを見ている、スリやら強盗やらがいるかも知れないのだ。

今は隣にプラースもいないし、私を守ってくれる衛兵代わりのあの力ボチャのバケモノもいない。特に治安の悪そうな街ではないが用心に越したことはないはずである。

しかし金貨を見せなければ話しが進まなかつたのだから仕方がない。

それにどの花屋も、どうしてこんなに大量の花がなぜ必要なのか不思議がっていた。

私は適当に説明したが誰も納得した様子を見せてくれないのだ。とにかく代金を払つから持つてきてくれと言い張るしかなかつた。

そういうわけでもう少し街を見て回りたかつたが、身の安全のこと第一に考えすぐ宿に帰ることにした。まあ、とりあえず衣服と花を買ったのだから、それでよしとしよう。

宿に帰ると、昨日の少年が入口に座っていた。

プライムスが黒猫と鴉を捕まえようと頼んだ、あの蠟燭売りの少年である。

モ「モ」と動く麻の袋を持つているとじぶを見ると、あらんと仕事を果たしてきたようである。

「おい、黒猫と鴉、一匹ずつ捕まえてきたよ

私の姿を見ると、少年はホッとしたように顎け寄ってきた。

「部屋まで持つていったんだけど、あの人に凄い剣幕で怒られたんだけど」

「・・・ああ、まだ眠っていたんだろう。彼は起ころれるのを何より嫌う」

「まだ寝てんの？ もうお昼だぜ」

「子供には理解出来ないかもしぬないが、世の中には夕方まで眠る人間もいるんだ」

私も夜遅くまで飲んでいたせいで寝不足だった。そんな話しおしていると眠たくなってきて思わず大きな欠伸をした。

「だけど彼も喜んでいるはずだ。ほら、約束のお駄賀だよ

私は少年を誰のつかないところまで引っ張つていて、その手に金貨一枚を握らせた。

それにしても金貨一枚は子供にとって大変な大金である。

いや、子供にとつてだけじゃない。大人でも金貨一枚稼ぐとなれば、一日一日不眠不休で働いても難しいだろう。

私たつて花を買うためにプラーーヌスから預かっていなければ、金貨など持ち歩いていない。

とにかく黒猫と鴉を捕えるだけで手に出来るものではない。到底それに見合わないのだ。

しかしプラーーヌスが約束したのだから仕方ない。

私はプラーーヌスの無責任さを憂うると共に、その子の行く末も案じながら金貨をあげた。

少年も約束だから支払つてもらえなければ怒つただろうが、実際それを目にすると怖氣ついたように震えていた。

「誰にも見せないほうが身の為だぞ。それか思い切つて親に預けるか」

「親なんていないよ。怖い親方しか」

あつ、これ、昨夜の分と今日の分の蠅燭だよ。全部売り切らないと親方にブン殴られるんだ。

そう言いながら大量に蠅燭が入つた箱も私に手渡してきた。

「そうか」

それで昨夜あんなに必死に働いていたのか。「君も大変だな」

「それでもないさ。でもこれでいつか商売を始めて、さつたとこ

の街を出でいく

「商売？」

「うん、誰にも舐められないくらい大きくなつたら、これを元手にして商売をするんだ。それで世界一の金持ちになる」

どうやら私の心配は杞憂だつたようだ。歳の割りにかなりしつかりしてこるようだ。

「そ、うか、頑張れよ、次から蠟燭は君のところで買つことにするよ、買い出し担当に者に言つておいてやるよ」

「本当？ それはうれしいな。あれ？ でもあんたたちって旅の詩人だろ？」

「いや、まあ、少し訳ありでね、実は正体は別にある。だけどもちろん秘密だぜ。君を信用するから教えてやってるんだ」

「ああ、俺は口がかたいから安心して」

そう言つて少年は私に手を振りながら走り去つていった。

## 第四章 7) 水晶玉の向い

部屋に戻るとプラスチックは既に目覚めている、私の部屋で何やら作業をしていた。

ベッドを壁に立てかけ、テーブルも脇に移動させ、板敷きの床に何か模様を描いている。

その横に大きな水晶玉と、それより一回り小さいのと、二つの水晶玉を置いていた。

更にその周りに、いくつかの宝石が無造作に転がっている。

「やあ、帰ってきたか。窓から見てたよ、少年との遭り取りを。何やう心が通じていたようだつたじやないか」

プラスチックは私が手に持っている麻袋を見ながらそう言つてきた。

「えつ？ ああ、感心したよ、まだ幼いのにしつかりした少年だった。またいつか会いたいものだね」

プラスチックに見られていたとしたら、他の誰かにも見られていたかもしれない。そんな危惧を少し感じた。

まあ、しかしたとえ見られても、事情を知っているプラスチック以外、私があの少年に金貨を渡したことは気づかれていないだろう。それほど心配することもないとは思う。

「あの少年にとつてはかなり印象的な出来事だったはずだ。彼がどう受け取るか知らないが、こういう出会いはいつまでも記憶に残るものだろうね。シャグラン、とりあえず僕が合図したら、その黒猫と鶴を一匹ずつその魔方陣の上に置いてくれ

プラー・ヌスが床に描いた模様を指差しながら言つてきた。

「えっ？ ああ、わかつた」

プラー・ヌスの目の前にある水晶玉の中に、どこかの街並みが映つていた。

大きな屋敷だ。

貴族か、成功した商人か、もしくは国の高官が住むような。その屋敷の前を行き来する通行人の姿も見える。

「よし、準備は出来た。おい、応答してくれ、こちら、CPだ」

プラー・ヌスがそう言つて呼び掛けると、小さな水晶玉のほうもチカチカと瞬き、しばらくすると何かの映像が映り出した。それと同時に床に転がっていた宝石が一つ割れて粉々に消えた。

「パルにいる僕の協力者の魔法使いを呼び出しているのさ」

プラー・ヌスのしていることをいぶかしげに見ていた私に、彼は説明してきた。「魔界を通じての通信だよ」

そう言いながらプラー・ヌスは懐から仮面を取り出し、それをかぶった。仮面といつても目だけを隠す仕様のものだ。

「シャグラン、僕の後ろに立つなよ。魔界を通じての通信は正体を明かさないのが基本なんだ。だから仮面をして仮名を使う

しばらくして、小さな水晶玉の前に人の姿が現れた。その人もプラー・ヌス同様、仮面をかぶっているようである。

「・・・まだ眠っていたぞ、」ひりひりだ

その水晶玉の向こうの男の声がさう言つた。私たちよりも年配のしわがれた声だ。

この声はプラスが手に持つてゐる陶器の瓶のようなものから聞こえてきた。

もちろんプラスの魔法の力によるのだろうけど、こんな現象に立ち会つたのは初めてだつたので私が驚いたのは言つまでもない。

「それはすまない、旅に出てるんだ。僕もまだ眠つていたかったけど、少し生活のサイクルが狂つてゐる。迷惑だつたら他の魔法使いに頼むけど?」

プラスが小さな水晶玉に向かつて言つた。

「いいよ、受け合おう

少し不服そうだが、プラスの脅しに屈するような声が聞こえてきた。「その代わりきつちり謝礼はもらひだ? 便利な魔法だろ?」

「もちろんだ、何がいい? 最近、面白い魔法を見つけたよ。あらゆるものをお新鮮に保つ魔法だ。それを使うとその建物内にある花や野菜、肉や魚など、なかなか枯れたり腐つたりしなくなる。どうだ? 便利な魔法だろ?」

「そんな魔法、使い道に迷うな、他には?」

プラスの通信相手が言つた。

「ならば雨雲を呼び、雷を落とす魔法。その雷は大人数の相手に

「有效だ。弱点は屋外でしか使えないこと」

「まあ、それでいい。多分、私の知らない魔法だ」

「そうか、だつたらいつものアドレスに落としておく。それで本題だけど、こっちからの依頼はまたバルザの件だ」

「ああ」

「これから拡張子を飛ばすから、バルザの屋敷に上手く行き着くよう仕向けてくれ。黒猫一匹に鴉二羽だ。これが最後の拡張子だ」

そう言つと、プラスは私に合図をしてきた。

私は慌てて麻の袋を魔方陣の上に置いた。

プラスが落ちていた宝石を拾い、それを掴みながら何か言葉を囁くと、一つの麻袋は私たちの目の前から消え失せた。

「到着した、活きの良さそうな拡張子だな、きちんと取り計らつ」

水晶玉に向ひの男がそつと走ってきた。

「よし。今夜、予定通り僕もそつに行く。直前に連絡出来ないだろうから、ずっと魔方陣を開けておいてくれよ」

「わかつている。あんたを怒らせるようなミスはしないよ。どっちの魔力が上か、ちゃんとわきまえているからな」

「よし、それでは今夜、会おう」

小さな水晶玉の中に映っていた映像が消えた。それを確かめてか

「うわー、ラーヌスは仮面を取った。

「よし、全て順調だ。そつちまじりだ?」

「あ、ああ、ありつたけの花を買つてきたよ。夕方頃、届けるよ  
うに言つてあるから、もうそろそろ来るかな。だけど到底、馬車一  
台には収まりきらないござ」

「うん、それも魔法で何とかするわ」

ラーヌスは立ち上がつた。「これから忙しくなるぞ。花が届い  
たら君を塔に送るづ。帰る準備をするんだ」

「わかった。ラーヌス、君は?」

「僕はまだまだやることがある。今夜にはバルに移動するし、そ  
の前にやつておかないといけない野暮用もある。その前にお腹が空  
いたな。食事をとらひ、多分、この街で最後の食事になるだらつ」

## 第一章 8) 朝食もしくは昼食

花屋が持ってきた花を、プラーヌスは自分の魔法で次々と塔に送つていった。もちろん花屋には魔法使いだとばれないようにして。花屋が来る前にプラーヌスは馬車の中で何かゴソゴソしていたから、そのとき細工をしたのだろう。

それから私たちは近くの食堂で、プラーヌスにとっては朝食、私にとっては昼食となる食事をとった。

「この旅でかなりの量の宝石を使つただろうな。いや、これからもまだまだ使う必要がある」

プラーヌスがパンをかじりながら、少し不満そうに言つてきた。  
「また何かでしつかり稼いで宝石を補充しないとな。さもないと僕は、塔以外では魔法を使えない間抜けな魔法使いになつてしまつ」

「だけど魔法使いなら、宝石の十個や二十個分の金貨、すぐに稼ぎ出せるだろ?」

魔法使いは引く手数多だ。大金持ちの貴族や、大成功した商人たちが様々な依頼をしてくる。

いや、それどころか、ときには王が戦争の助力を頼んでくることもあるし、冒険家と共に冒険することもある。

その依頼を幾つかこなせば金貨や宝石などあつといつ間に溜まるはずである。

「いや、僕にとってそういう時間もおしいのさ。俗人たちの依頼を叶えてやる時間があれば、魔法の研究をしていたい」

プラークスは言った。「しかしそうも言つていられない。魔法使いも労働しないと魔法使いでいられない。シャグラン、だから塔の人員を出来るだけ削る必要があるんだよ。塔には不要な召使いを雇つていられるほどの余裕はないわけさ」

「ああ、そうだね」

プラークスのその言葉で、私は塔でやらないといけない自分の仕事を思い出し、少し憂鬱な気分になった。

もうすぐ旅は終わるとしているのだ。

あまりに短い旅だった。しかし逆にまだ旅の最中でもあることが確認出来て、時間が許す限りこの街を堪能しようという気分になる。

「多分、魔法使いが望む究極の魔法は、無から金を作る魔法か、ただの石ころを宝石に変える魔法だらうな」

プラークスが最後の一 口のパンを食べながら言った。

「さすがの魔法使いもそれだけはまだ不可能なんだね」

「ああ、それが出来れば世界は邪悪な魔法使いが支配することになるよ」

## 第四章 9) プラーヌスの複製

owlerは食後すぐに、どこかに出ていった。何やらやらなければいけない準備がかなりあるようだ。

私はその間、街を散歩した。

しばらく街をウロウロしていたら、大聖堂の前で絵を描いている中年の男性を見つけた。

職業柄、こういうときどれだけの腕前か気になるものである。私は背後からそっと覗きこみ、絵の出来栄えを見てみた。それほど達者ではなかつたので、それを生業にはしていないうだ。ちょっと洒落者の貴族か、成功して余裕のある商人が暇潰しに絵筆を持つてているだけである。

だけどそれを見ていたら私も絵が描きたくて仕方なくなつてきた。ここ最近、時間に余裕がなくて、まるで描いていない。

仕事が一段落したらowlerに掛け合うかして、何が何でも自分の時間を作ろう。一応、鞄の中に絵筆を入れておいた良かつた。ないだろ?って。

まあ、私がこういうことを思つのも、ある意味、覚悟を決め始めているからであろう。もう簡単にowlerの塔を出ることは出来ていた。

これまで自分の中の塔に帰れば絵を描く以外やることはないのだから、そんなことowlerの塔に来てまでやるものではないと考えていた。

しかしどうやら塔での生活を私の日常にしなくてはいけなくなつてきた気がするのだ。

それに今、描きたいものがたくさんある。

あの巨大な塔や、その周りの風景を描きたいし、プラーヌスの肖像画も描きたい。

塔の召使いたちもそれぞれ出自が違うから、顔立ちが皆違う。考えてみれば私の画家としての嗅覚を刺激してくれるものばかりではないか！

そんなふうに気持ちも新たに、少し妙な興奮に包まれた状態で宿に戻つたら、既にプラーヌスも帰っていた。

しかもまた彼は新たな扮装をしていた。華やかな吟遊詩人の格好から、かなり小汚い、すれ違うものは誰もが避けたくなるようなんよりした格好。

顔まで隠れる黒いローブだけど、上質な魔法使いのローブとは違う、これはまるで墓穴を掘る雑夫のよう。

「ちよつとした変装だよ。こういう格好も似合つだら？」

プラーヌスが自分の姿を見下ろしながら満更でもないといった感じで言つてきた。

おそらくこれもバルザ殿を仲間にするための細工の一つなのだろう。

バルザ殿を仲間にするために、こんなことまでしなくてはいけないのかと呆れた気分だったが、またそんなことを言つてプラーヌスと揉めるつもりはなかつた。

「帰りの準備は出来ていいか？」

プラーヌスが急くように聞いてきた。

「大丈夫さ、荷物はまとめてある」

「よし、だつたらすぐに塔に送る。僕が帰るのは早くて明後日になるだろ?。それまで僕の塔を頼むぞ、シャグラン」

「わかった」

そう返事しながら私はまとめてある荷物を持ち、馬車を止める外に出ようとしたら、プラーヌスに引き留められた。

「帰りは馬車を使わない。バルザ殿を乗せるのに使うからね。シャグラン、君はこの魔法陣の上に立ってくれ」

プラーヌスはさつき黒猫や鴉を送った、三角や丸などで組み合わされて描かれた模様を指差した。

「そりいえば初めて塔にこうやって瞬間移動していったとき、宝石が足りなかつたとかいつて失敗してたよね」

私はふとそんなことを思い出して嫌な予感を覚えた。

「ああ、馬を半頭分、移動させ損ねたことがあつたな。でも安心するんだ、君一人を移動させるのに、僕みたいな習熟した魔法使いが失敗することはない。間違いなくサファイア一つで無事に飛んで行けるぞ」

私は荷物を持って、プラーヌスが魔法陣と呼ぶ模様の上に立つた。

「もちろん、信頼しているけどね」

「じゃあな、シャグラン、また明日後日会おう」

その言葉に返事しようとしたとき、ブラーーヌスが何か言葉をぶつぶつと唱え出した。

その瞬間、目の前が真っ暗になり、グルグルと振り回されるような感じがしばらく続いたかと思うと、私は塔の前に座り込んでいた。

あつという間に到着したようだ。間違いくブラーーヌスの塔である。

しかし何だか様子がおかしい。

私の前を十数頭の馬が砂埃を上げながら駆けていった。

すぐ傍で断末魔の悲鳴が聞こえる。

何かが耳元を掠めて飛んでいった。鳥か何かかと思つたら矢だつた。違う矢だが、私の足元に突き刺さったのでそれがわかつた。

私は思わず悲鳴を上げた。

もつれる足で後退して、出来るだけその場から離れようと努力した。

だけどそんな私の前や背後を、人が乗つた馬が駆けていく。

槍を持ち、弓矢を放ち、努号を発している。

裸馬を巧みに操り、殺氣だつた表情で駆けていく。

まさに今、塔は蛮族の襲来に見舞われているようだ。

何という最悪のタイミングで帰還してしまったことか。

私は重い荷物を担ぎながら必死に走って、戦場の只中から退避し

た。幸いなことに蛮族は私の存在に見向きもしないで、塔に向かって駆けていく。

自分の安全もだけど、プラーヌスのいない塔の安否も気になった。しかしもちろんプラーヌスはそのための備えはある。塔の前で何者かが塔を守っているのが見えた。その何者かが、押し寄せてくる蛮族たちを次々に撃退している。

見た目はプラーヌスである。

いつもの黒のローブをまとい、彼の愛用のロッドを握っている。しかし確かにそれは「ペーだつたはず」。プラーヌスが旅に出る前に言っていたが、中は魔族がその姿を借りている。

私はその偽のプラーヌスの戦い振りを、息を飲んで見守った。

実際、プラーヌスの戦い方とはまるで違った。

そのプラーヌスの姿をした魔族は蛮族に喰らいついたり、素手で殴り飛ばしたりしている。完全に戦意を失つて地面に伏している蛮族にも、その槍を奪い刺し殺していく。

口は血塗れで、黒いローブは返り血で別の色に変わつていった。いや、返り血だけじゃない。蛮族の弓が背中に刺さつたり、槍が脇腹を貫通したりしている。自ら流した血で汚れてもいるようだ。

しかしそれでも少しもダメージを負つた様子を見せず、ひたすら目の前の動いている敵を殺し回つていた。

血の匂いと生き物の臓物の匂いが辺り一面にじんわりと漂つていた。首や手足だけじゃなく、あらゆる場所に内臓が飛び散っている。

戦いは終わったが、その偽のプラークスの蛮族への殺戮はなかなか終わらなかつた。

そういうえばプラークスは言つてゐた。一一の中身はかなり残酷だつて。

確かにその通り、プラークスの偽物は、戦意を失い、助けを請う敵にも次々と止めを刺してゐるし、蛮族が乗つてゐた馬にも喰らいついていた。

塔に襲来してきた蛮族はおそらくほとんど逃げ切れることなく、残らず殺されたようだ。

私はその姿に怯えながらも、しかし塔の前で突つ立つてゐるのは疲れるし、いつまで待つていてもその殺戮は終わりそうになかつたから、意を決し、その魔族の横を素通りして塔の中に入ろうとした。

かなり距離を取つて、こゝそり歩いたつもりだつたが、その魔族は血塗れの顔を上げて私に声をかけてきた。

「シャグラント？　あんた」

「えつ？　ああ、そ、そつだけビ」

私は恐々と振り向きそつ答えた。無視なんかしたら、逆に何をされるかわからないと思つたから。

「あんたがシャグラントじゃなければ、あんたもこの馬のように食つていたぞ」

「はあ、そ、そつかい・・・」

そう返事しながら、そんなつもりはなかつたのだけビ、プラークス

スの偽物の顔をまともに見てしまつた。

確かにそのブランチの偽物はブランチによく似ていた。

顔かたちはそつくりそのままだ。

しかし表情がまるで違っていた。目は血走っていて、口元はいび

顔は瓜二つだけど、いじま

見間違える者はいない気がする。

「あんたも馬を喰うか？」生きている馬は美味しいぞ」

「い、いらっしゃないよ。食事は塔でちやんと用意してもらつから」

卷之三

を見ていた。

助けてやれない自分の無力さから目を逸らして、私は力なく言い返した。

「それが、二んなご美末しーのこ。アラーヌスはまだか?」

「も、もうすぐ帰るらしいけど」

「あんな奴、永遠に帰つて来なければいいのにな。」  
「こうやつて人間の姿を借りて暴れるのも楽しいものだぜ」

そう言つてプラーヌスの姿をした魔族はケラケラと笑い出した。  
私はどうしていいかわからず、追従笑いのよつなを浮かべながら  
、さっさと塔の中に駆け入つた。

## 第四章 10) 再び聞こえてくる女性の泣き声

塔に着いたのはまだそれほど夜も遅い時間でもなかつた。偽のプラー・ヌスの戦い振りを見張り台や窓から見守つていたアビュや、召使いたちや、カボチャの顔をしたバケモノまでもが、私の帰りを迎えてくれた。

「いいな、私もどつか遠いところに旅したいな」

そう言つてアビュがいつも通り快活に私に声を掛けってきた。しかし偽のプラー・ヌスの衝撃で、まだ私は呆然自失とした表情をしていて、そろそろ私を見て、アビュが理解を示すように言つてきた。

「最近のご主人様、ずっと変なんだよ。毎日、塔の前に立つて見張りを続けてるし、眠るのも外なんだよね」

「えつ？　ああ、それは実は内緒にしてたんだけど」

私は少し迷つたが、アビュになら言つても構わないだろうと判断し、他の召使いたちがから少し離れたところに連れていつて言つた。

「実はプラー・ヌスも僕と一緒に旅に出ていたんだよ。あれは複製というか、偽物つていうか、とにかくプラー・ヌスじゃない」

「えつ？　嘘！」

アビュは本当に虚を突かれたような顔をしていた。  
「つちからすればあんなプラー・ヌスに騙されるのは蛮族ぐらいだ

るつと思つていたけど、アビュもまだまだプラークスの実像を少し  
も知らないのかもしれない。

「よく見れば全然違つ、とんでもない悪魔だよ、あれは。少し考  
えればわかりそつなものだけど」

「でも誰も気づいてないよ。確かにおかしい氣はしてたけど、本  
当はああいう人かと思つていた」

「わすがのプラークスも生きている馬は食べないだり」

「そう言わればそつかな」

首を傾げているからあまり納得していないようだけど、アビュは  
そう言つた。

アビュは以前から、どうもプラークスを冷酷非情な悪魔のような  
人間だと思い込んでいたようだ。少なくとも彼に心を開いていない  
のは間違いないだろう。

「そうだ、食事はどうする?」

アビュが言つてきた。

「えつ? いや、食欲なんてないよ。あんな壮絶な光景を見せら  
れた後じゃ、何も喉を通らないさ」

私は内臓剥き出しにして死んでいた蛮族の死体や、塔の周りに  
漂つていた血生臭い匂いを思い出しても吐き気を覚えた。

何だか無性に美しいものが見たい。あるいは麗しい香りを嗅ぎた

い。

そう、例えば花とか。

街で買って、プラーヌスが魔法で送ったはずの花を早速、塔中に飾る。ちょうど真合の良い仕事があるようだ。

「ところで留守中に何か変わったことは?」

「特には別に。突然、謁見の間が花だらけになつたけど」

「ああ、それは予定通りのことだよ。街で大量に花を買ってきたんだ、塔に花をいっぱいに飾るからね」

「何それ、ちょっと悪趣味じゃない」

アビュは吹き出すよつて笑つたかと思うと、私のセンスを心底疑うといった感じの表情を向けてきた。

「いや、花を飾れば塔が明るくなるし、あのグロテスクな生き物の残した悪臭も誤魔化せるだろ」

「でも花なんてすぐに枯れちゃうじゃない」

「そんなの魔法でどうにかなるや。プラーヌスと一緒に旅をして改めて魔法の凄さを実感したけど、魔法に不可能なことはそつはないよ」

「うーん、まあ、そう言われると悪い考えじゃないかな

花でいっぱいになつた塔を想像しているのか、アビュはふとニヤし始めた。「うん、全く印象が変わるわ

「アビュももちろん手伝ってくれよ、一人じゃ到底作業が進みそうにならへりの量だ」

そう言いながら私は一端、自室に引き上げようと東の回廊に向かつた。

さつさと新しい洋服に着替え、顔を洗つてさっぱりしたい。自分の服や身体に、血の匂いがべつとりと染み着いている気がするのだ。

「あつ、もう言えれば思い出した。また聞こえ出したんだよね、あれが」

そんな私を引き留めるようにアビュが声を上げた。

「聞こえ出したって何が？」

私はまるで見当がつかなくてアビュに尋ねた。

「あの女性の泣き声よ」

アビュは恥まわしいものについて喋るかのように、表情を少し歪めた。

「えつ？ でもあれって……」

「数日、旅に出る前からあの声が聞こえなくなっていた。ちょうどあのグロテスクな生き物の問題が解決したと同時にあの声は止んでいたのだ。

だからあの女性の泣き声と、あの哀れなグロテスクに改造された人々は、何か関連しているのかと考えていた。

つまり私は、あのグロテスクに改造された人が、自分の運命を呪う嘆きだって解釈していたわけだ。

確かにどういう関係があるのかと説明を求められれば答えられないと。

しかし物理的な距離を無視して塔中に響き渡る声なのだ。  
もともと超自然なものだから論理的な説明は不可能。  
でもとりあえずその問題は解決したのだから、あの泣き声ももう  
聞こえなくなるものだと思っていたのに。

「・・・本当か、また面倒なことになりそうだな」

あの声の正体は何なのか、その謎を解いてくれとプーラーヌスに言  
われている。

ここしばらく聞こえなかつたから彼も忘れていたかも知れないけ  
れど、いざれプーラーヌスもその声を耳にするかもしれない。

「ほらー、噂をすれば」

そのときアビュが飛び退くよつて言つてきた。

確かに聞こえてきた。

前に聞いたあの声と瓜二つ、確かにあの女性の泣き声だ。  
それがどこからかわからないが、確かにほつきりと聞こえてくる。

「本当だね、わかつた、ビリビリかして解決しないとな」

まるで恨みとか悲しみとかが、じちにも伝染してきそうな声だ。  
自分が泣いているわけでもないのに、自分が泣いているような気

分にさせられる。他人の感情なのに自分の感情と取り違えそうになる。

その女性のすすり泣く声はますます高まってきて、部屋中に響きわたつた。まるで四方の壁からその声が発せられているかのように。

## 第五章 1) 悲しきバルザの章 前編

国境守備隊には大胆な挑発行為を繰り返していた隣国の兵も、バルザの名を聞いただけで逃げ出すのが常であった。

今回もバルザ到着の報と共に、隣国の兵は引き上げようとしていた。

しかし簡単に逃げ去ることをバルザは許さない。

バルザは機動力に優れた選りすぐりの精兵だけ率いて、疾風のように国境を越え、ほとんど休まず荒野を駆け、後れを取つた者は置き去りにし、何匹もの馬を乗り捨てて、敵軍に追いつくと同時に僅か五百の兵で相手の五千の兵に狼のように襲いかかり、ズタズタに切り裂いていった。

まさかここまで追つてくるとは思わなかつた敵軍はバルザの急襲に不意を突かれ、指揮系統は乱れに乱れ、本隊はガラ空きになつた。バルザはその隙を突いた。

敵の将の首を打つたのである。

敵軍は算を乱して逃げ、ほつほつの体でようやく城塞に逃げ込んでいった。

バルザは自軍の兵をまとめ上げ、悠々と引き上げていく。

バルザは強かつた。

兵を自らの手足のように動かす才に長け、剣を持って戦つても無敵であつた。

兵たちはバルザに全幅の信頼を寄せ、その命をバルザのために惜しみなく投げ出した。

四方を強国に囲まれ、常に周辺の国から脅かされ続けていた小国

のバルが、ここ十数年に渡り絶対的な安泰を見せていくのも、最高司令官バルザの率いる部隊が、一分の隙も見せずの大勝をおさめてきたからである。

今やバルザの名声は味方も恐れるほどで、心ない者はいつか国王の権力も越え、その地位を篡奪する日も近いのではないかと噂していた。

しかしバルザの名声を真に搖るきないものにしてるのは、バルザの騎士としての高潔な人柄にあった。

厳しい騎士の典範を守り、一度仕えた王に忠誠を誓い続け、部下を大切にし、一人の妻のみを愛して、決して私利私欲に走らないその人間性が、バルザの名をいつそう高めているのである。

騎士団団長を歴代最年少にして就任したバルザはまだ若く、これから先の長い活躍を嘱望されていた。

いつかバルザの率いる遠征軍が、バルの国の版図を広げるのではないかと臣民たちは期待し、彼もその期待に応えるために日頃から綿密な作戦を練るのを怠らなかつた。

そんなバルザが圧倒的な勝利をおさめて、都に凱旋したその夜、しかし彼は最悪な知らせを聞くことになる。

「バルザ様、至急、お屋敷お屋敷にお戻りくださいませ」

自分の屋敷で働く使用人が血相を変えて宮殿に現れる姿を見た瞬間から、バルザは嫌な予感を覚えた。

「なぜだ?」

バルザはその使用人に尋ねた。

「奥様が何もかに誘拐されました」

そう耳打ちされた瞬間、数々の修羅場をくぐり抜けてきたバルザの強靭な心臓も止まりそうになつた。

## 第五章 2) 悲しきバルザの章 前編

バルザは気が動転して、王宮からどうやって自分の屋敷に辿り着いたのか覚えていない。

戦場を駆けるときよりも速く馬を走らせ、街路を歩く通行人たちを乱暴になぎ倒しながら屋敷に戻った。

普段のバルザなら考えられない行動だった。すれ違う者たちはバルザの慌てた姿に驚き、戸惑っている。

屋敷に辿り着いたバルザは、屋敷の中がまるで墓場のように静まり返っているのを見て、妻が本当にいなくなつたことを確信した。いや、実際に屋敷は静まり返っていたわけではない。

大勢の使用者たちが先程のバルザのように慌てふためいていたのだから、むしろ普段よりも騒がしかつた。

しかしバルザにとって妻の姿がないだけで、屋敷はまるで花が摘まれ、緑の茎だけになってしまったような寂しさなのである。

しかしバルザは以前にも、このように静まり返つた屋敷を体験したことがある。

赤子を身籠つていた妻が流産した夜のことである。  
あのとき彼女は死んだように眠り続けた。それで屋敷も死んだようには静まり続けたのだ。

あのときバルザどうやって妻を慰めればいいのかその術がわからず、ただ自分の無力を呪いながら、庭で剣をふるうだけだった。

もし彼女が本当に拉致されたというなら、今度こそ自分の力で彼女を助けなければならない。

バルザはそう心に誓つた。

あのときは何も出来なかつた自分が、もう一度と彼女を闇と戯れさせてはならない。

「いつたい何が起きたんだ？ 詳しいことを教えるんだ」

バルザは一向に落ち着いた様子を見せない使用人たちを集め、険しい形相で叱り飛ばした。

使用人だけではない。万が一のため、日頃から屋敷を防備させていた自分の部下たちも招集した。

そして彼らからこれまでの詳しい状況を丹念に聞き出した。

しかし使用人たちや部下たちの供述は食い違う部分があまりに多かつた。

ある者は夕暮れ、妻が馬車に押し込まれたのを目撃したと話し、ある者は屋敷の庭に突然大きな穴が開いて、その穴に落ちたのを見た氣がすると言い、またある者は屋敷の中で黒いローブをまとった怪しい人影が妻を抱えて飛び立つたと答えた。

更にはバルザ自身が、妻と手を取つて屋敷を出たのを見たなどといふ者もいた。

バルザは話を聞くにつれて更に混乱に陥つた。

「いつたい我が妻の身に何が起きたのだ！」

とにかく屋敷の中に妻がいなくなつたことは確かで、彼は妻を取り戻さなければならないことは間違ひのないことである。

しかしあまりにそれは唐突で、謎が多く、いま一つ実感を伴わないから、まるで悪い夢の中を彷徨つてゐるよつであつた。

そのとき突然、屋敷中の灯りが全て消えたかと思うと、花や陶器の器などを飾っていた出窓から黒い鴉が侵入してきた。

その黒い鴉は嘴に咥えていた手紙のようなものを、まるで無礼な配達人のような仕草で、バルザの足元に放り投げてきた。しかしその様子も、バルザは夢で見ているかのような気分で眺めていた。

使用人たちにはその突然の侵入者の出現に慌てふためき、悪魔の仕業などと口走りながら、逃げ惑っていたが、バルザだけは遠い世界の出来事のようにしか感じられない。

しかし鴉の不吉な黒さを見ながら、ふとバルザは思い出したことがあつた。

妻が近頃、不可解なことを口走っていたことを。

何か不吉な黒い影が私に付きまとっていると。黒い猫、黒い犬、黒い鳥、黒い人間・・・・、そんなのが始終私を見ているの。決して私を一人にしないで。

そうだ！　妻はそんな恐怖を訴えていたんだ。

なぜ私はそれを馬鹿げたことだと笑い、可憐な妻の心配に耳を傾けなかつたのだろうか。

バルザは苦々しい表情を浮かべながら、鴉が咥えてきた紙切れを拾つて読んだ。

そこにはこう書かれていた。

妻を返して欲しければ、夜明け前に、迎えに行く黒い馬車に乗れ。ただし必ず一人で来い。もしもその約束を違えば、あなたの妻は狼の餌になる。



## 第五章 3) 悲しきバルザの章 前編

手紙の中にはこんなことも書かれていた。

愛用の武器を携えて来い。槍、鎧、そして血漫の大剣、舌を真つ  
一につに断ち切つたという伝説の剣も必ずと。

山賊が身代金目的で誘拐したのなら、そのようなことを書いてく  
るだらうか。

普通なら武器を持たずに来いと書いてくるであらう。

いや、そもそもあえてバルザの妻を狙つてくる愚かな賊などいる  
はずもない。バルザは最強の騎士なのだから。

だとしたらどこの国の罷なのだらうか？

やうだとしても、そのような姑息で卑怯な罷など、皆のよつに真  
つ一につしてくれよう。

腕に絶対的な覚えのあるバルザは豪胆にもやう思ひ、臆すること  
は少しもなかつた。

いや、それどころかむしろ戦意が湧き上がつてくる。

背中に大剣を背負い、槍を携え、鎧を着込み、バルザは手紙の文  
言通り屋敷の前で待ち続けた。

手紙に書かれていた通りの黒い馬車が、夜明け前にやつてきた。  
闇の中から蹄の音もなく近づいてくる馬車を見て、バルザはよう  
やく理解した。これは悪魔の仕業か、あるいは悪魔を仲間として慕  
う、邪悪な魔法使いの仕業であると。

しかし悪魔が、悪魔を仲間として慕う邪悪な魔法使いが、いった

「この私に何の用があるとこりうのか。

馬車はピタリとバルザの前で止まった。

そこから汚らしい襤縷をまとつた若い男が降りてきて、バルザに馬車に乗るよう促してきた。

どこの農夫の息子か、石工か、あるいは墓掘り雑夫か、そのような雰囲気の男だ。

バルザはその若い男に詰め寄つて激しい口調で妻の安否を問い合わせたが、その男は怯えた表情で、自分はただ使いの者だと言うばかりであった。

それならば早く妻の許に連れて行けと、バルザは自らその馬車に乗り込んだ。

## 第五章 4) 悲しきバルザの章 前編

馬車はひたすら闇の中を走り続けた。

しかしいつまでも馬車の外は夜で、とうに夜明けが来ていてもおかしくないくらい時間は経っているはずなのに、いや、それどころか夜が明け、そしてまた口が沈んでもおかしくないぐらいのに、外は変わることなく闇であり続けた。

バルザは自分の時間の感覚がすっかり狂っていることが不快で堪らなかつた。今、馬車がどの方角に走っているのかも検討がつかない。

そのとき突然、馬車が止まつたかと思つたら、先程の小汚い若者が馬車の扉を開け、外に出るようになつてきました。

バルザは彼の言つ通り外に出る。外の光景が見たかつたし、縮こまつていた四肢を広い場所で十分に伸ばしたくもあつたからだ。

馬車は暗い森の中に止まつていた。

着いたのかと聞くと若者は首を振り、バルザにパンと飲み物を渡してきた。休憩ですよ。

食欲はなかつたから飲み物にだけ口をつけた。甘草が入つた冷たい水だ。まるで今さつき、泉から汲んで来たような。

若者も空腹だつたのか、むしゃむしゃとパンを食べていた。硬そなパンだ。大麦かライ麦のパンだろう。

若者はバルザの正面の倒れた丸太の上に座つてパンを食べながら、彼を不羨な視線でじつと眺めてきた。

そうかと思うと突然、その若者は騎士の典範について質問してき

た。

騎士は一度忠誠を誓つた相手を裏切ることはないのかとか、騎士は一度愛した女性を生涯愛し続けるのかとか、典範を破つた騎士はどうなるのかとか、騎士でなくなつた騎士はいつたい何者なのかとか。

バルザは呆れる思いだった。  
むしろ数々の質問を抱えているのせいひのほつだと。  
妻は無事なのか?  
なぜいつまで夜が明けないのか?  
だからバルザはその男からの質問に答えず、逆に若者にその問い合わせ返した。

「無事です。塔におられます」

どうせ質問に答えはしないだろうと黙つていたら、若者はほつきりとそう答えてきた。

「塔だと?」

「はい、塔です。それと、どうしてこつまでも夜が明けないのか  
といふと、それは馬車が近道を通つてこるからだそうです」

「近道?」

「近道、遠回りの反対です。とにかく騎士様、僕は質問に答えた  
のだから、騎士様も僕の質問にお答え下さいよ」

若者は「ヤーヤ」と笑いながらそつまづ。

汚い粗末なロープを頭からかぶつていて、口しか見えない。

しかしその話し方や仕草などから、まともな教育を受けられなかつた下賤な者だということは容易に想像出来る。

何者かに、おそらく邪悪な魔法使いなのであらうが、金で雇われ、汚い仕事に力を貸しているのであらう。

「わかつた」

しかしバルザはそんな相手にも誠実に対処することにする。

「君の質問に答えることにじよつ。騎士は決して裏切らない。主君も、妻も、臣民の期待も。典範を破つた騎士はもはや騎士でなくなる。一度でも破れば、これまで築いてきた名誉も誇りも全て失う。審問会で騎士の資格を剥奪されるのは当然のこと。もしかして君がこつやつて騎士について詳しく聞きたがるのは、このような汚い仕事をから足を洗つて騎士になりたいからか？ だつたら私が力になろう。騎士には簡単になれないが、君はまだまだ若いようだ。どうにか努力次第で道は開けるもの」

「誠実なお答と僕の将来に対する心配、痛み入ります。だけど僕は大きな夢を叶えたばかりなので遠慮します。そんなことより騎士様、確かに騎士はどんな苦境に陥つても自ら死を選ぶことは出来ないんですよね」

「ああ、もちろんだ、自死は悪だ。典範によつて絶対的に禁じられている」

バルザは答えた。

「それと騎士は自ら騎士を辞めることも出来ない。騎士の資格を剥奪出来るのはあくまで審問会のみですよね？」

「その通りだ」

「だったら例えばこんな場合はどうなるんですか？ 騎士の典範の誓いを破つてしまつたのに、ある理由で騎士の資格は剥奪されず、ただ恥辱の中で生きざる得なくなつたが、騎士ゆえに自殺も許されない。このような状況に陥つた騎士は？」

「君の言つている意味が私にはわからないな。そのような状況になるわけがないのだから。騎士は典範を破つたことを認識したとき、自ら審問会に出向くもの。それが出来ない者は騎士ではない」

「しかし審問会に出向ける状況ではなかつたり？ それまでは自ら死を選ぶことは出来ないとこつことですよね？」

「確かにその通りだ。しかしもし戦に敗れ、敵国の虜囚になつたとしても、敵国が我々と同じルノーヴォの神を信奉しているのならそのようなことはしない。敵国にも騎士はいるのだから、騎士によるような辱めを『えはしない』

「では異教徒の国では？」

「たとえ異教徒でも、一いちらが正々堂々と戦えば、向こうもそれなりの礼儀を認べますもの。そのよつなことは杞憂に過ぎないこ

うことですか？ ではそんな状況は滅多に起ることはないといふ」とです。とりあえずわかりました。僕は考へ過ぎだつたみたい

いですね

若者は笑みを浮かべてそう言った。「ではもうやるやうに出発してもよろしいでしょ？ あと少しで塔に到着します」

## 第五章 5) 悲しきバルザの章 前編

馬車が突然激しく揺れ始めたので、ウトウトしていたバルザはその衝撃で目を覚ました。

彼は目覚めてすぐに剣に手を掛け、周りを威嚇するよひりみ回す。

馬車の中だ。

誰もいない。

彼は緊張を解いて窓の外を見た。

どれくらい眠っていたのだろうか。外は依然として夜で、その風景は特に変わっている様子もなく、それだけではどれくらい時間が経過したのか計ることは出来ない。

しかし馬車が激しく揺れていることに気づいて、初めてバルザは今まで少しも揺れなかつた異常さに思い至った。

そもそも馬車はこのように激しく揺れる乗り心地の悪い乗り物なのに、まるで今まで空中を滑走していたみたいだった。

今よひりやく、小石や産みがある、現実のデコボコした道を進み出したかのようだ。

馬車はそれから上下動を繰り返しながらしばらく進み続け、時折激しく左右に揺れたりして、そしてやがて止まった。

馬車が止まつたかと思つと、ひつきの若い男ではなくて、その若い男よりもずっと身綺麗な男が馬車の扉を開け、丁寧な口調で外に出るようバルザに促してきた。

外に出ると田の前に塔があつた。

巨大な塔だつた。

夜の闇を切り裂きながら上方に突き立ち、すぐにその傷口を縫い合わせたかのように、塔が闇と闇の間をつなぎ合わせている。

バルザの住む、パルの都に建つ建物群とは違う様式だ。

バルザの住む都の多くの建物は、オレンジ色の外壁で、窓は大きく、降り注ぐ太陽の光との相性を考えて設計されているが、この塔は太陽ではなく、闇と共存することを前提に建てられているよう。まるで冬の枯れた樹木のような印象。

あるいは瘦せた野犬のあばら骨のよ。

だからと言つてその塔はみすぼらしいわけではない。怖いもの知らずのバルザを威嚇するような迫力があつた。

バルザはその塔を見た瞬間から、塔から発せられる邪悪な雰囲気を感じ取っていた。

このまま進めば、その先に決定的な破滅が待ち構えていることが予想出来た。

引き返すなら今この瞬間が最後の機会ではないか。

武人の勘がそう耳打ちしてくる。

しかし自分にそんな選択肢など存在していないこともバルザ自身が一番知っている。

たとえこの身と引き換えるも、妻の命を助けなければならない。

それが騎士としての務めであり、愛する妻を守る夫としての当然の望みであるから。

馬車の扉を開けた男はバルザを賓客でも扱うような態度で、塔の中へ案内しようとしている。

バルザはその男に導かれるまま、塔の中に入つていった。



## 第五章 6) 悲しきバルザの章 前編

大剣を背中に背負い、槍を携えたままのバルザは、武器を携帯したまま塔に入つていいのかと逆に問うた。

男はあっさりと頷いて、足下にお気をつけ下さいと言ひながら先に進んでいった。

この男、妻をさらつた組織の一員なのであるつか。

しかしそうきの馬車を運転していた若者の軽い雰囲気とは違ひ、思慮深げな雰囲気を漂わせている。

年齢は若者と同じであろうが、身なりも言葉遣いも丁寧で、それなりの教養を伺わせた。

どうしてこれほどの人物が身をやつし、悪に手を貸しているのだろうかと不思議に思うほどだ。しかし人はちょっとしたきっかけのみで、悪に転落してしまつ生き物なのだろう。

塔の中はまるで誘うよつな、怪しい香りで満ちていた。  
その原因は花の香りのようだとすぐに気づいた。

塔の至る所に花が飾られているのだ。

階段には一段置きに花瓶があり、あるいはただ無造作に花束が置かれていたり、もしくは廊下に花弁が冬の落ち葉のようにまかれていたりする。

花の香りは甘つたるく、バルザの頬や脇腹を優しく撫でるようであつた。

まるで田に見えない大勢の女性が、近くを行つたり来たりしてゐるかのようだ。

彼はもちろん一度も足を踏み入れたことはないが、宮殿の奥の後

宮はこじのよつまな香りがしているのかもしれないと思つた。

しかし花が豪勢に飾られているわりには、塔の廊下や壁は冷たい  
石が露わなままで、後宮の雰囲気とは程遠く、ひぐはぐな感じもす  
る。

もしかしてこの香りで五感を狂わして、不意打ちを狙つているの  
かもしれないとバルザは氣を引き締める。

しかしこんな程度の子供騙しが彼に効くわけもない。

「ここの上の部屋で、塔の主がお待ちしています」

せつときまでずっと黙つたまま淡々と階段を上つていた男が、バル  
ザの方を振り返つて言つた。

「妻もここにいるのか?」

「全ての質問には、ここの塔の主が答えるでしょう」

## 第五章 7) 悲しきバルザの章 前編

階段を上がり、手の込んだ装飾の施されたアーチをくぐると、広々とした部屋に出た。

富殿で言えば、王のこころ玉座の間のよう。

バルザが仕える富殿よりははずつと小さく地味ではあるが、床は大理石が輝き、天井は夜空に似て遠い。少なくともさつきまで通り過ぎてきた、塔の質素な廊下に比べると豪勢だ。

まっすぐ赤い絨毯の伸びる向こうに派手な作りの椅子があり、そこに何者かが座っていた。

その人物の座る椅子はあるでこの空間の中の消失点の「」とくで、何もかもがその一点に集まつて収斂されていくかのよう。バルザもそこに吸い寄せられていくように歩み寄つていく。

「お待ちしておりましたよ、騎士殿」

椅子に座っている人物が声を張り上げて言つてきた。

どこかで聞いたことのある声だといふことに、バルザはすぐに気づいた。

男にしては少し甲高い、金属的な声だ。

そこから傲慢な性格が窺える気がする。しかし決して、人に対しても命令し慣れていない声。

「女一人の安否を確かめるために、わざわざこんな遠いところまでお越しいただくとは。あなたの命は今や、國の一つか三つに相当するぐらいに重要なのにね」

全身黒ずくめのローブをまとい、横柄な姿勢で足を組んで座っていた。

若い男のようである。

確かにこの声、どこかで聞いたことがある。

昔の部下なのだろうか。何かの過ちを犯して、罰として我が部隊から放擲した昔の部下が、それを恨みにこんな無謀なことを企てるのか。

それとも以前に戦場で対峙した敵の一人であるつか。そういう者がこのよつた形で復讐を図ったのか。

いや、どうりでもない。

「そ、そなた……」

バルザは思い出した。

昔の記憶を深く遡る必要などなかつた。最近に出来つた者の中でも最も不愉快な人物。

「覚えておられますか？ わざわざ都まで馬車でお迎えに伺つた者ですよ」

その若い男は今も黒いローブをまといているが、あのとき着ていたのとは違うローブだ。

あのときはまるで物乞いのよつたな粗末なローブであつたが、今この若い男がまとっているのはまさに魔法使いの衣装。

「やはり魔法使いの仕業だつたか・・・」

「そうですよ、騎士殿は魔法使いに見初められたのです」

その魔法使いは笑みを浮かべながらそつそつと走ってきた。

ローブで隠されていた顔が今は露わになつてゐる。

陽になど当たつたことのないよつたな白い肌。

女のよつたな真つ赤な唇が不敵な笑みに歪んでゐる。

富殿でときおり見かける、貴族の放蕩息子によくいゝ、男か女かわからない細面な顔立ちだ。

そういう者はしばしば武芸や政などに見向きもせず、だらしなく樂の音と色に溺れ、朝に眠り、夜に起きる退廃の生き物。

だけどこの魔法使いがバルザを見つめてくる眼差しは、鋭く堂々としたものだつた。

貴族の放蕩息子とは比べ物にならないほどの圧倒的な知力と自信を感じさせる。

悔しいかな、只者ではないことが見て取れる。

とはいゝ、この者の前にいるだけで、今までの騎士としての人生全てを否定されていくよつた気がしてしまつ。

この邪悪な空氣、バルザのこれまで築いてきた一切を軽視してい るような態度。

バルザは同じ空氣を呼吸するのも腹立たしかつた。

「シャグラン、すまないが少し下がつていってくれ。バルザ殿と二人で話すことがある」

塔の入り口からこの部屋まで案内してくれたシャグランと呼ばれた男に、魔法使いがそう言つた。

シャグランと呼ばれた男は頷いて去つていった。

「実は騎士団団長というから、僕の父親ぐらいの年齢を想像していたんだけど、兄としても充分通りそうですね」

シャグランという男が去つて、しばらくしてから魔法使いが言つてきた。

「無駄話はいい、さっさと妻を返してもらおうか。もし大人しく返すのならば、その首はつながったまま、明日も朝日を眺めることが出来るであろう」

「おお、なかなかの迫力ですね。その脅迫に何の根拠もないのに。だけど堂々とおっしゃられるのはさすがだ。まるで手負いの獣の前に立たされているような気分ですよ。しかも別に、軍や王の力を後ろ添えにして脅迫するわけでもない。あくまで己の力の身一つで僕を脅そうとする。何と頼もしい方だ。ますますその人柄、気に入りましたよ」

「妻を返せ！」

「もちろん僕だってあなたの奥さんを返してあげたい。これほどのお方が、たかが奥様が誘拐されたと知つてあんなにも取り乱され

「そなたの首と胴がまだつながって自由に話し出来る間に、何が望みか聞いておひつ」

「では話せる間に言つておきましょつか。僕は門番が欲しいんですよ、騎士殿、もちろん謝礼はたんと弾む」

「も、門番だと？」

「そうです、この塔をしつかりと守ってくれる門番を」

「た、たわけたことを…」

「奥様の安全は永遠に保証いたします。誰も指一本触れないことを誓おう。あなたは塔に侵入者が来たときにだけ働けばいいんです。楽な仕事ですよね？ それとも「魔法使い」ときの門番を務めるのは、あなたの誇りが許さないと言うのですか？」

「そ、そなたは、私にこのようないふことをさせるために、妻をわざい、そして私をここまで呼び出したといふのか・・・」

バルザは信じられない思いだった。

騎士団団長にして、バルの軍の最高司令官である彼を、たかが塔を守る番人として使うために、これ程大それたことを企てたなんて！

バルザは怒りに溢れた表情で、背中の大剣を鞘から抜いた。

「下衆な魔法使いよ、心せよ…」

「話しが飲み込めていないようですね、騎士殿。それとも奥様の安否など、もはやどうでもいいとおっしゃられるのではないでしょうね」

「わ、私はそなたの馬車に乗った時点で全てを覚悟していた」

バルザは大粒の涙を、その清廉な瞳から大量にあふれ出しながら言った。「妻は自分が捕まつたせいで、私がお前の言いなりになることを恥じ、もはや自ら命を断つているだろう。騎士の妻とはそういうものなのだ。お前は騎士の典範について質問してきたが、騎士の妻の覚悟に関する知識が徹底的に足りなかつたようだな」

「な、何だと？」

「死ぬがよい、愚かな魔法使いよ！」

「お、落ち着きなさい。だけど剣で魔法使いに勝てると思いなんですか？」

「たとえ私がそなたに勝てずとも、魔法使いの番犬として使われる」とことなど決してないのだ！

愚かな魔法使いは取り乱し始めた。

椅子から腰を浮かし、慌てて手に持っていた魔法使いのロッドを構えようとする。

バルザは剣を振り上げ、猛烈な勢いでその魔法使いに向かつて突進した。

もしかしたら一太刀さえ浴びせかけることが出来れば、この魔法使いに勝てるかもしない。

これまでの騎士としての輝かしい戦歴の中でも、バルザは魔法使いと戦つたことはなかった。だから相手がどのような攻撃をしてくるのか想像もつかない。

だが、もうこの距離はバルザの距離だつた。

何もかも圧倒的に有利。もはやこの大剣を打ち下ろすだけで相手の首は飛んでいくはず。

いくら魔法使いでもここから逆転するのは不可能であろう。

現に相手は酷く慌てている。ようやくロッドを構え始めたばかり。しかしそのまま突進してくる。魔法使いは不敵な笑みを、その酷薄な唇の端に浮かべた。

「騎士殿、実は僕はあなたの秘密を知っている

魔法使いはそう言いながら小指を立てて、バルザに向か見せつけてきた。

魔法使いの小指には指輪がはまっていた。魔法使いの細い小指でも小さ過ぎる、女性ものの指輪のようだ。

バルザはその指輪を見て、凍りついたように動きを止めた。

## 第五章 8) 悲しきバルザの章 前編

「魔法を使わなくても騎士の突進を止められるなんてね。ところ  
で下衆な魔法使いとやらはどこにいるんだろ? かな?」

魔法使いはバルザの大剣をさすりながらゆづくじと押し返してく  
る。

形勢は逆転してしまった。

魔法使いの貧弱な力に抵抗せず、バルザは押されるがままになっ  
た。

「この指輪に見覚えがあるりのようだね、騎士殿」

魔法使いはさつきよりもいつそう冷酷な笑みを投げかけてきた。  
「あなたには愛人がおられる。彼女も実は僕の手の中にあるんだ。  
この指輪はあなたが彼女に贈つた者ですよね?」

「ひ、卑劣な・・・」

バルザは再び剣を持つ手に力を込めようとした。

「卑劣だつて? 誰が? 僕ですか? もう貞節振るのはやめ  
るがいい、騎士の典範とやらなど、聞いて笑つてしまつよ」

魔法使いはバルザの横を通り過ぎ、堂々と背中を見せながら歩い  
ていった。

「その愛人に、騎士の妻としての教育は行き届いているのですか

? 行き届いていませんよね。確かに奥様はさつさと自死されてしまった。騎士には自死は許されていないのに、妻にはそれが奨励されているというは何とも言えないことだが。しかし夫に迷惑をかけまいと、その決心は早かつた。一方、愛人のほうはまるで逆。命だけは助けてくれと哀願するばかり。まあ、まだかなりお若いのだから仕方ないですね

魔法使いは振り返つて、勝ち誇ったような表情を向けてきた。

「まず剣を捨てよ。僕の足元に放り投げて跪け。さもないとあなたの美しい愛人を、白い柔肌に飢えた下層民たちの慰めものにしてやる・・・。もしかしたらその下層民の中に僕も入っているかもしれませんよ」

ああ、ハイネよ。

バルザの全身から力が抜けていった。

強く握りしめていた大剣が手から滑り落ちた。

バルザは上から押さえつけられたように崩れ落ちた。

「もう私の騎士としての人生は終わつた」

いや、もうとっくの昔に終わっていたのかもしれない・・・。ハイネを愛してしまつたあの瞬間から。

「あなたは卑劣な騎士だ。妻の他に愛人がいるなんて！ まさに魔法使いの番犬に相応しいじゃありませんか。だけど僕はあなたの武人としての実力と、仕事に対する責任感は認めてあげよう。コソコソと、妻の他に愛人をこしらえる卑怯な男だとしても、高い給金は払つてあげますから」

「い、一時の気の迷いだつたんだ」

だけどそれがいつしか、本当の愛に変わってしまった・・・。

「ハイネは私の優秀な腹心の妻だつた。その腹心が戦場で戦死して、その死を報せに行つたとき、彼女と出会つてしまつた。私の妻は生まれることの出来なかつた赤子を失つて以来、人が変わつたようになつた。そのせいか、お互い伴侣を亡くした者同士のように惹かれ合つてしまつた」

「騎士殿、御見苦しいですよ。僕に向かつて言い訳ですか？ それにしても騎士の典範などといつのは邪魔なものですね。そんなものに縛られていたら不自由にしか生きられない。誰もが、より愛するものを愛し、より自分の能力を發揮できる主君の下に仕えればいいのに」

魔法使いはバルザの剣を拾い上げ、それを力一杯遠くに放り投げた。

剣が大理石の床に跳ね返る金属音が、バルザの耳に差すように貫いた。

「僕は既に都に噂を流しておきました。騎士団長だったバルザという男は妻を殺し、愛人と共に隣国に逃げたと。民たちの反応は、それは見事なものだつた。これまでの恩も忘れて、皆、あなたを裏切り者だと、不逞の輩だと罵つていましたよ。でも事実ですよ？ もうあなたには帰る場所はないのだ。あなたはこれから愛人の命のためにここで生きていくしかない。この塔の番人としてね」

「・・・ま、魔法使いよ、慈悲をくれ。私とハイネを一人して殺

して欲しい

バルザは屈辱に歯噛みしながら、声を振り絞るようにして言った。

「駄目だ。あなたは愛するハイネのために生き続けるがいい」

膝をついて呆然としているバルザの正面に、魔法使いは足音を傲慢に響かせながらやつてきた。

「彼女の命は保証しよう。どんな人間も一切手を触れないことを約束する。だけどハイネとあなたを逢わすわけにはいかない。下手に逢わせて一人で心中など画策されたたまつたものではないからね。だけどどうか、騎士は自死出来なかつたんだよね。なんて馬鹿げた規律だらうか！」

魔法使いは天を振り仰いで高らかに笑つたかと思うと、瞬時に厳肅な表情に変わつた。

「あなたは僕に忠誠を尽くさないかもしない。しかしあなたのように责任感が強い御仁は、たとえ意に沿わぬ仕事だとしても、申しつけられたことはやり遂げるはずだ、決して中途半端なことはしないだろうし、わざと敵の手にかかるて死ぬこともないと信じている。あなたが死んだときはハイネも死ぬときだけね」

そう言いながら歩いていき、魔法使いは玉座のよつな椅子に再び腰を下ろした。

「バルザよ、明日から早速、門番としてこの塔を守れ。これは僕からの命令だ。それともう一つ約束してもらつ。この塔に住む者に、全てのことを内密にしておくのだ。妻の死、愛人が監禁されている

「ひと、何一つ口外してはならない」

そう言つて魔法使いはバルザの目の前にハイネの指輪を放り投げてきた。「その命令に従わなければ、あなたの愛するハイネに大変な屈辱を『えよ』」

その指輪は、最初は馬車の車輪のように軽快にバルザに向かって転がってきたが、しかしまるでバルザの辿った狂つた運命のように、突如バタリと横に倒れた。

「どうだ、全て御理解されてかな?」

バルザはこの耐え難い屈辱に、身体が引き裂かれるような怒りを感じ、奥歯をギリギリと噛み締めていた。

すると口の中で何かが割れる音を聞いた。

唇の横を血が流れる感触を感じて、奥歯が割れたことに気がついた。

## 第六章 1) 上機嫌なプラーヌス

バルザを馬車で連れ帰ってきたその日の夕食の時間、いつものようには私たちは夕食を共にしたのだけど、そのときプラーヌスはすぐ上機嫌だつた。

おそらく何の問題もなく、予定通りバルザを仲間にすることが出来て安心したのだろう、いつもよりも饒舌だったし、ワインを口にするペースも早い。

「次は腕の良い料理人だな。今夜の料理は悪くないが、料理人が二、三人いても構わないだろう。交互に作らせたらその味に厭きることもない。その次は召使いを総入れ替えする。しみつたれた下層民のような輩は追い出す。専用の仕立て屋も雇おうかな。富殿のように揃いの制服を用意させるんだ。そうだ、大工も雇おう。少しでもこの塔を住みやすく作り変える」

どんなときでもドライなプラーヌスが熱い口調で将来を語つている。

それは本当に珍しいことだ。

多分、プラーヌスの心を覗けば、野原に花が咲き誇り、そこで無垢な子供が走り回っているような風景が見えるかもしない。

それくらい幸せそうに見えるのだ。

「まあ、それにはかなりの金貨が必要だけね。今回のことでの宝石もかなり消費したし、いずれ大きな仕事を請け負わないといけない。それはそうと、街から傭兵が来たはずだけど」

上機嫌まま、プラーヌスはそう言つてきた。

「ああ、今朝着いたよ。何やらガラの悪そつな連中だつたけど…」

「わかつてゐる、まるで精査せず、暇そうな奴らを安値で雇つただけだからね。しかしそんな連中もバルザが率いれば精銳に生まれ変わるはずだ。塔を守る素晴らしい番犬になるだろう」

とにかく僕はこれで魔法の研究に専念出来る。待ちに待つた生活だよ。

プラスはそもそも万全だといった感じで、夕食のエビのパイ包みを頬張り、大豆のスープに口をつけた。「うむ、美味しいな、これは。料理係に伝えておいてくれ、シャグラン、僕はビーフや、エビのパイ包みが好物のようだ」

「わかつた、言つておくよ」

プラスは本当に美味しいそつにモグモグと食べている。そんなプラスの機嫌の良い表情を前に言つのはためらつたが、「僕はこれで魔法の研究に専念出来る」という言葉を聞いたとき、彼に報告しておかなければいけないことを思い出した。

「プラス、実はまだ一つ、厄介な問題が残つてゐるんだけど」

「厄介な問題?」

私は少し躊躇したが、むしろ機嫌の良いときに言つておくべきだと考え、思い切つて言つた。まだあの女性の不気味な泣き声が、どこからか聞こえるということを。

「あの声が聞こえたら集中力が途切れる。騒音ではないが、わざわざいことこの上ない」

私の報告を聞いてブラーーヌスは少し眉をひそめたが、それほど不機嫌になつた様子もなくそう言つてきた。「あのグロテスクな生き物の問題が解決して、その声も止むと思つたのだけど関係なかつたのか」

「ああ、僕もそう思つていた。だから安心していたんだけど、何の関係もなかつたようなんだ・・・」

「いや、おそらく何の関係もないはずはないな。どこかで関連しているはずだ。一時的とはいえ、それからじばらじばら声が止んだことは事実だろ？」

ブラーーヌスはナイフとフォークを置いて、思案気に皿を見つめた。「そういえばあの女性、まだ生き残りのあの生き物の世話を名乗り出た女性がいたじゃないか」

「ああ」

もちろん覚えている。確かに名前はフローリア。

自らも囚われの身であつたのに、あの改造された哀れな人たちの世話を最後まですると言つて出たのだ。

そのことは大変に印象的で記憶に残つている。いつたい何を考えているのか驚かされたものだ。それに利発そうで、美しい少女だったという記憶もある。

「その少女と、あの改造された者たちの様子を見ててくれない

か。何か気になるんだ

「えっ？ ああ、もちろん、いいけど」

「あの少女はどこか普通じゃないね。上手く説明出来ないが、何か他の人間と感触が違う気がする」

プラークスは口達者な自分が、上手く言葉に出来ないことに苛立つ感じでそう言った。

「そ、そろかなあ、まあ、確かに元は人間だつたとはいえ、あんなグロテスクな人間たちの世話をしようなんて並みの人間じゃ無理だけど。よっぽど心が優しいか、責任感があるのか」

「そうだ、僕には理解しにくいタイプだ。だからそう感じるのかも知れないが」

自分の極度に利己的な性格をよく認識しているのか、プラークスは苦笑いしながらそう言つてきた。「まあ、とにかくさつさと解決してくれ。あれが完全に解決されないと、完全なる平穀を手に入れことにならない。もちろん僕も出来ることがあれば手伝う。どこかにこういうことに詳しい者もいるかもしれない。魔界を通して情報収集しておぐ

「うん、是非、お願ひするよ」

そう言いながら私も、プラークスが気に入ったというHビのパイ包みを口にしたときであった。

またあの泣き声が聞こえてきたのだ。

その声は、色とりどりの食事で飾られたテーブルの上を、まるで蛇かネズミが横切ったような不快さで、わたしたちのせっかくの楽しい時間に黒い影を投げかけてきた。

「つむ、改めてこれは実に不快な現象だな。旺盛だった食欲も一気に萎える」

ブランヌは怒りを滲ませた口調で言った。「さすがにこういうことはバルザ殿でも解決出来まい。僕たちで何とかしなければいけない」

「うん、出来るだけ僕で何とかするけど・・・」

しかしまたしてもである。ちょいびいの泣き声の噂をしていたら、折よく聞こえてきたのだ。それはこの前、アビゴとのときもそうであった。

これは偶然で片付けられるのか。

この泣き声に何か意志でも込められているのではないか。  
すなわちこの泣き声の主は私たちに伝えたいことがあるといふこと?

いや、この泣き声に主なんものがいるのかどうかわからない。  
何か意志が込められているかもしないといつのも、こいつの思い込みかもしれない。

しかしそれにしろブランヌの言つ通り、あのフローリアという少女と、生き残りのグロテスクに改造された人たちに会つ必要があるだろ?!

少なくともこの声のことを探ろうとしたら、まず思いつく行動は

それぐらいしかない。

そういうわけで私は夕食後、早速行動に移すこととした。

## 第六章 2) アビュとバルコニーで

私はフローリアという少女がこの塔のどの部屋で寝泊まりしているのか知らなかつたので、彼女の居所をアビュに聞きに行つた。アビュは食事を既に終えていて、それから寝るまでの時間を持て余していたのか、北の塔のバルコニーで歌をうたつていた。

確かに天気は良く、星がきれいに見える夜だ。歌いたくなる気持ちもわからないではない。

しかしどうやらアビュはそんな場面を見られたのが恥ずかしかつたようで、少しバツが悪そうに顔を赤らめながら言つてきた。

「えーと、確か東の塔の地下に牢獄があつて、その近くの部屋を使つていると思つけど」

さすが私の優秀な助手である。私の知らないことも大概把握している。

しかしアビュのその答えに私は愕然となってしまった。

「牢獄だつて？」

私はアビュを咎めるように思わず声を荒げてしまった。

「そ、そうみたいだよ、別に私がその部屋を用意したんじやないから怒られる筋合いはないけど・・・」

「だけど罪人でもないのに牢獄なんて」

「正確に言えば牢獄じやないよ。牢獄の下にある部屋なんだけど・・・でも多分、他に適当な部屋がなかつたんだよ。それにボスも

最初、檻の中に押し込んでたじやないか

「この頃、アビュは私のことをボスと呼ぶよくなっている。  
そんなふうに呼ばれた経験なんてないから変な感じだけど、しか  
しそのわりには私の対する意見は容赦ない。

「まあ、確かにそうだけだ……」

私はアビュの言葉に思わずたじろいだ。

確かに最初、私は彼らを牢獄に押し込んだ。

しかも前の主に閉じ込められていたあの実験室の檻の中にである。

しかしそれはあのときもう夜も遅く、誰も疲れている様子だった  
ので、一時的な措置のつもりだったのだ。  
まさかそこからの移動先が、また別の牢獄になるなんて考えてい  
るわけもない。

私は召使いたちの仕打ちに対し、怒りを通り越して呆れ返った。

まあ、もちろん私だって皆があのグロテスクに改造された人たち  
を忌避する気持ちは分かる。

出来るだけ自分たちの部屋から遠いスペースにしたかったのだろう。

う。

しかしさすがに牢獄に閉じ込めておくのは間違いである。

まして、いくらあのグロテスクに改造された人たちと起居を共に  
しているからといって、フローリアという少女の部屋まで牢獄にす  
るなんて言語道断。

「でも鍵はかけてないよ」

アビュが言い訳するよつて言つてきた。「自由に田舎を往来するよ  
うになつているはずだよ」

「それでも牢獄は牢獄じゃないか。そんなとひり寝泊まつしろ  
と言われたら氣分は悪いだる。とにかく一田でも早くそれを知れて  
良かった」

「うん」

まあ、細かい指示を出せなかつた私も悪かつたとは思つ。  
今までそういうこと一切気にかけてこなかつたことも事実だ。

「ところどころから彼女に会いに行くんだけど、君も来るか？」

私は当然、受け合つだらうと思つてアビュにそう呼び掛けた。

「え、遠慮しとくよ、」ればっかりは・・・

しかしどんな仕事でも喜んで飛びついてくるアビュにしては珍しく、後ずさりするようにして私の誘いを断つてきた。

私は一瞬、彼女を叱り過ぎて嫌われたのかと焦つたが、どうやらその表情を見る限り、あのグロテスクに改造された生き物のもとに行ぐのを忌避しているようだ。

まあ、実はそれは私も同じで、彼女たちに会いに行くのはかなり  
気が重かった。

「一人じゃひとつも少しばかり心細いじゃないか、これも仕事だ、  
君も来いよ」

「嫌だよ、こればっかりはこへりボスの命令でも」

アビュはまるで肥溜に頭を無理に押し込められるのは拒否するよ  
う、激しく首を振ってきた。

「どうしてもか?」

「どうしても嫌だ!」

「・・・・・うか、わかった、こゝまで嫌なら、もういいナビ」

私がそう言つと、アビュはホッと胸を撫で下ろした。しかしこんなアビュの表情を見ると、ますます私も彼女たちのもとに行く気が失せてくる。

「ねえ、ボス、何だか断つたのにこんなこと言つたの? どうかと思つ  
んだけど」

アビュが言いにくそうに口を開いた。「そのフローリアアつていう女性、の人たちを連れて夜中に塔をうろついているのを見た人がいるって聞いたんだよね」

「うろついてる? どうして? まさか誰も彼女たちに食事を用意していなかつたんじゃないだろ? うね」

「違うよ、それは途中まで誰か運んでくるよ」

「そうか、安心した」

「でも夜の散歩とかされたら洒落にならないじゃない。みんな、

す」「嫌がってるから」

「だけど彼女たちも、新鮮な空気を吸いたくなる」ともあるだろ。  
それぐらいは我慢すべきだ」

しかし私もあのグロテスクな生き物と真夜中、ふいに遭遇なんか  
したときのことを想像して、思わず背筋に冷たいものが走った。

「わ、わかった、無暗に出歩くなとは言つとくけど。だけど牢獄  
のままじゃ駄目だ。どこかに新しい部屋を用意する必要があるな」

「うん、それはそうだと思つたけど、私たちのエリ亞の近くはやめ  
てよ、本当に」

「ああ、わかってるよ」

普段は素直なのに、あのグロテスクな生き物のこととなつたら我  
儘になるアビュと別れて、私はフローリアに会いに地下のほうに向  
かおうと歩を進めた。

しかしその前に私は振り向き、アビュにもう一度言つた。

「なあ、アビュ、もう一度聞くけど、本当に一緒に来る気はない  
のか?」

「ないよ、私、本当にあの人たち怖くて仕方ないんだから!」

## 第六章 3) 地下の更に地下にある牢獄

かなりこの塔にも慣れてきたので、私はあの護衛人代わりのバケモノ、カボチャの頭をした鎧の騎士「ワ」と「ギャー」を連れて歩くのを先の旅から帰つてから一切やめていた。別に大切な物を置いているわけでもないが、私の居室の前の守衛として立たせているだけだ。

しかしフローリアのいる牢獄に一人で行くのは心細くて、久しぶりに彼らを伴つて行くことにした。

フローリアたちがいる牢獄は北の塔の地下にある。

以前、彼女たちが閉じ込められていた地下の実験室の近くである。そういうこともあってその部屋をあてがつたのだろうが、それでも牢獄とは酷い話である。

私は「ワー」と「ギャー」を従え、ランタンで足下を照らしながら地下への階段を下りていった。

やがて牢獄の並ぶエリアに到着した。

牢獄は廊下の両脇に十数室並んでいた。しかしその牢獄に彼女たちはいないらしい。更にその階下の牢獄に入れたそうである。

そこから下へ、更に階段を下りていくにつれて、さつきまでと様子が変わり始めていることに私は気づいた。

ネズミが足下を横切り、無数の蜘蛛が我の顔で巣を張り、天井を占有している。

空氣もジメジメし出して、鼻をつく匂いも漂い始めた。牢獄までの階段は掃除がそれなりに行き届いていたが、それより下は完全に見捨てられているようなのだ。

これは酷過ぎる。

私は顔を顰めながら首を振った。もしかしたら彼女たちが以前閉じ込められていた地下室よりも、もっと酷い環境ではないか。さすがにこの部屋にフローリアにあてがつた召使いを咎めておかなければいけないと思った。

確かにあのグロテスクに改造された人たちを塔の中心部に済ませておくわけにはいかないだろうけど、だからってこんなところまで追放しなくてもいいではないか。

この環境は人が暮らすところではない。

下まで降り切ると、すぐそこに木製の半分朽ちかけた扉があった。それが部屋の扉のようだ。

下半分が腐っているような扉では、確かにアビュの言つた通り、彼女たちが監禁されているわけではないとは言える。

しかしこれでは逆に、ネズミも冷たい風も防ぐことは出来ないであろう。部屋としての体をなしていないのだ。

しかしフローリアたちがいる部屋はここのようなだ。

私が怒りで顔が熱くなってきた。

さつきまで彼女たちに会うことになっていたが、今はむしろ早くここから助け出すことしか念頭になかった。

私は怒りと焦りの織り交ざつた気持で扉を叩いて声を掛けた。

「フローリア、話しがある、開けてくれ」

しかしそう呼び掛けても返事が来なかつた。もう一度、強めに扉を叩いた。

しかしました返事がない。私は少し迷つたが扉を押し開けてみた。

扉を開けた瞬間、あの独特の激しい腐臭が、更に猛烈な勢いで嗅覚に襲いかかってきた。

私は吐き気を我慢しながら、ランタンの光で薄暗い部屋を照らした。

部屋の中は朽ちかけた扉以上に酷い状態だった。

中は意外に広いが、むしろ広過ぎて部屋と呼べるようなものではなくて、ただのガランとした空間という感じ。

足下に水溜まりがあり、私の足を濡らした。

地下水がどこから漏れているようだ。

窓はもぢりんなく、部屋の端にベッドと椅子があるだけのようである。

部屋の隅に蠅燭や、ランタンがあつて部屋の中をかすかに照らしている。

フローリアが部屋の中央に座っているのがすぐに見えた。  
こちらに背を向けているが、あの少女の背中に間違いないだろう。  
その膝の上にあのグロテスクに改造された人が横たわっているのも見える。

「勝手に部屋に入つてすまない」

彼女が無事に生きていることに安心しながら私はゆっくり近づいた。

「フ、フローリア？」

私はそう呼び掛けながら、横から回り込み彼女の顔を覗きこもうとした。

長い髪の毛が垂れ下がって顔の表情がよく見えない。もう一度声を掛けようと思つたとき、フローリアの身体が少し動いた。

「いま、最後の一人が死んでしまいました・・・」

フローリアが前を見つめたまま口を開いた。

「え？」

聞こえなかつたわけではなかつたが、私は聞き返した。

「この人が最後の一人でした。やつぱり皆、身体をこんなふうにされて、かなり生命力が弱つていたみたいですね」

フローリアは膝の上の遺体を優しく撫でながら、こちらに顔を向けてきた。

彼女は前に会つたときと少しも変わりなく、まるで街角ですれ違つて、挨拶でも返してくるかのような表情だった。  
もちろん悲惨な死を前にして悲しげに見える。しかしこの過酷な環境によつて、彼女の表情は暗く汚されていないう。何だかそれに、私は心をうたれたような感情を覚えた。

「・・・そつか、死んでしまつたのか」

私は返事した。

「はい」

私は部屋をさつと見回した。

遺体はフローリアの膝の上にいる者だけで、他にはいなかつた。確かに数十体はいたはずだ。

もしかしたら他の遺体はきちんと埋葬されたのかもしれない。そのため彼女は夜中、塔の中を歩いていたのではないか。

そのときフローリアは膝の上の遺体をゆっくりと床に横たえて立ち上がり、私のほうを向いて何か言おうとした。

しかし突然、崖の上で強い風に煽られたかのように、フローリア

の身体はふわりと揺れた。

私は急いで彼女の身体を抱き止めた。

フローリアの身体は燃えるように熱かつた。

服は汗にしつとりと濡れていって、顔は紅潮し、息も荒い。

酷い風邪でもひいていたようであった。

私はフローリアをしつかりと抱き上げ、急いで部屋を出た。

## 第六章 4) 塔の医務室

「アビュー、この塔に医師はいるかい？」

「医師？」

アビュはまだバルコニーにいた。もしかしたら事の成り行きが気になつて、私が戻つてくるのを待つていたのかもしれない。  
しかしさかこんなふうに戻つてくるとは予想していなかつたようで、私が抱えていたフローリアを驚きながら見つめている。

「えーと、医師ならミオンおじさんがいるけど、どうしたの、この人？」

アビュが言った。

「大変な熱があるみたいだ。すぐにそこに案内してくれ」

アビュのいた北の塔のバルコニーの近くに医務室はあった。  
かなり粗末でみすぼらしくあつたが、設備自体は街の医院とそれほど変わらないようだ。

棚にたくさん薬が並んでいる。

ベッドも清潔できれいなシーツがかかつている。

私はフローリアをその医務室のベッドに静かに横たえ、部屋の照明器具に火を灯した。

白いシーツに横たえて、フローリアの纏つている服がいかに汚れているのかに気づいた。

それまでどれだけ悪条件の中で暮らしていたのかそれが示してい

るみつである。

アビュはそのミオンおじさんという医師を呼びに彼の部屋に行ってくれてこる。おそらく医師は既に眠っているのだろう、起すのに手間取つているようだ。

私は一人が早く来ないかと焦りながらフローリアの様子を見守つた。

彼女は酷くうなされていた。

しきりに首を振つて、苦しみと戦つてゐる。

額に浮き出た汗を拭つてやることくらいしか私には出来なかつた。あとは精々、頑張るんだと声をかけてやること。

実際にはそれほど待つていらないのかも知れないが、ようやくアビュが医師を連れてやつてきてくれた。

私は彼らが到着してホッと胸を撫で下ろしかけたが、ミオンおじさんという医師を見てそれまで以上に不安になつてきた。

ミオンおじさんという医師は大変に年老いていたのだ。

足取りは覚束なく、腰が曲がつていて、吹けば飛んでいきそうな小さい老人だつた。

昔は優秀な医者だつたかもしれないが、今、ちゃんとした思考力を有しているのか不安になるほどだ。「どれどれ、急患は君か?」と私を診察しようとしてきたのだから。

しかし私の助手のアビュは彼を信頼しているようだから、その医師に任せらるしかないとばかり。

「うむ、かなり熱があるようだな

医師はフローリアの額に手を当てて言つた。かと思ひと、いきなり彼女の胸をはだけ始めた。

すぐに白い豊かな乳房が現れたのに気づき、私は慌てて眼を逸らそうとしたが、思わずその美しさに釘づけになってしまった。

だって医師はただ当たり前の処置を行つていいだけという手つきだし、それにそれは本当に美しくて、私は頭に血が上つてしまい、少しボーッとした状態になつてしまつたのだ。

「ちよつとボス? 何、ジロジロ見てるのよ」

アビュが私の脇を強めに小突いてきた。

「えつ? いや、別に」

それでようやく私は田を逸らした。

「しづまうへ外に出でて」

バカじやないの。信じられないわ。ここぞとばかりに、女人の裸を見よつとするなんて。こんな変態だつたなんて! 私も気をつけないとね。

アビュが私を心底軽蔑するような眼差しで見ながら悪態をつくる。私はその言葉から逃げるよう医務室を出た。

## 第六章 5) 医務室の夜

「いいよ、もう来ても」

医務室を出て北の塔のバルコニーの上で風に当たつていたら、しばらくしてアビュが私を呼びに来た。

少し外に出て落ち着いたと思う。

風が私の頭の中のモヤモヤをきれいに吹き飛ばしてくれたようだ。しかしアビュの後に続いて医務室に入り、ベッドに寝ているとフローリアを見ると、またさつきの光景が甦ってきて頬が赤くなつた。

私はそんな自分を振り払うため、咳払いをしてから事務的な口調で医師に尋ねた。

「治るんですか?」

「はあ?」

「治るんですかって聞いたんですけど?..」

「えつ?」

私は医者の耳元にまでしゃがみ込み、大きな声で怒鳴つた。

「ああ、治るかどうか聞いておるのか? それはわからない、何か悪質なものが彼女の身体の奥深くまで侵入しているような気がする・・・まあ、いずれにしろ、あんなに酷い環境にいたら、どんな体が丈夫な戦士でも病に倒れるだろうな」

ミオンおじさんは椅子に座り、緑色の草をすり鉢で擂り潰していった。「とりあえずこの薬で様子を見よつ。出来れば朝までにもう一度飲ませたほうがいいのだが」

そう言いながら老医師はその擂り潰した薬草の中に水を加えていった。

そしてそれを皿らの口に呑んだかと思つて、やにわにフローリアに口移しで飲ませ始めた。

私はミオンおじさんの診察模様を何気なく見ていたのだけど、いきなりこんなことをし始めたのを見て、再び激しく取り乱してしまつた。

手に何かを持っていたら、間違いなくそれを落としてかもしだないくらいに。

フローリアの小さな唇がかすかに開き、そこに老人のひび割れた唇が重なる。

彼女の喉がゆっくりと動き、ときおりこぼれ落ちるよつに緑色の液体が口の横を流れていった。

老医師はそれを何度か繰り返した。

「ねえねえ、羨ましいって思つてるでしょ？」

私が呆然とその様子を見ていたら、何だか嬉しそうな様子でアビュが言つてきた。「だつてキスと同じじゃん、あれ」

「か、彼女は病氣で倒れてるんだぞ」私はフローリアから目を逸らし、アビュをにらんだ。「少し不謹慎だ、もういゝ加減にしろよ」

「はいはい」

「おー、そーの君」

ミオンおじさんが私に言つてきた。「わしはもう寝るから、後はあんたに任せたぞ。あんたも同じよひにして薬を飲ませるんだ」

「えつ？ 僕が？」

私はきつと驚きのあまり、間の抜けた声を発したんだと思つ。そんな私にほとほとあきれたのか、アビュが押しのけるよひにして言つた。

「いい、私がやるよ」

「まあ、誰がやつてもよいが、ちやんと様子を見ておくんだぞ。夜明け前に、同じよひにして薬を飲ましてやるんだ」

「はー」

「何かまた異変があつたら、わしを起いせばこー」

老医師は来たときと同じよひで、トボトボとした足取りで部屋に帰つていつた。

「はあーあ、今夜は眠れないのか」

アビュが大きな欠伸をしながら言つた。

「眠りたかったら眠つてもいいぞ。薬の時間に起しそうから」

「いいよ」

するとアビュが何とも嫌みな微笑みを浮かべながら言つてきた。  
「ボスの前でなんて安心して眠れないよ。寝ている間に、私の服を脱がせて裸を見ようとしてくるからかもしれないから」

「馬鹿なことを言つんじゃないよ。そんなことするわけないだろ  
ー。」

「そうかな、到底信用出来ないよ。だってフローリアさんの裸を見てたときのボスの視線、どんな切れ味の良い剣よりも鋭かつたよ」

「あ、あれは、少し驚いただけだ。・・・」

「まあ、そういうふうにしておいてあげてもいいけど」

本気で私という人間のことをそう思つてゐるのか、それともただ面白くて私をからかっているだけなのかわからないが、いずれにしろアビュにあんな自分を見られたのは不覚だった。

確かにあのときアビュがいなければ、私はフローリアの素肌からいつまでも目を逸らすことが出来なかつたかもしれない。

アビュが私にこうこうことを言つてくるのも仕方がないだらう。

しかし思い起こせば、氣を失つて私の胸に倒れ込んできたフローリアを抱きかかえていたときから、私はいつも冷静さを完全に失していたかもしない。

あのとき非常事態に心は焦りながらも、フローリアの身体の柔ら

かさと、その体温のあたたかさに陶然となっていた。

何ならずつとこのまま、フローリアを抱きかかえていたいと思つていたかもしれない。

フローリアがあんなに苦しそうな息使いをしていなければ、私はいつまでそうしていたことか。

「でもこの人、こんな奇麗だったっけ？」

アビュがさつきまでの私を嘲笑するような口調とはうつて変わり、まるでふと見つけた蝶の美しさに心から感嘆するような声で言つてきた。「この髪の毛、櫛を通すと凄く綺麗になるよ。それに今、顔色は悪いけど肌は白くて奇麗だし。まあ、ボスがおかしくなつちやうのも仕方ないね」

ねえ、そう思わない？

面倒だから何も応えないでいると、アビュが腹立ち気に声を上げた。

「ああ、確かにそうだね」

私は仕方なくそう言つた。

「でも同時に、何だか汚らしい……」

アビュが真剣な面持ちで、少し悲しそうに言つた。

「えつ？ デウコウ」とだよ？

確かに服は、汗や垢で変色していくくらい汚れていたようだし、

もしかしたらこの塔に拉致されてから水浴びすらしていないかもしない。

それどころかあのグロテスクな人たちと生活を共にしていったからか、彼らの腐臭も沁みついている。しかしそんなのは仕方ないではないか。

「そういうことじゃなくて、この人の行動がよ

私が反論すると、アビュは少し苛立つようにして言つてきた。「確かにあのグロテスクに改造された人たちみんな元は人間で、何の罪がないというのはわかるし、の人たちが犠牲になつたから、この人が助かったのは事実かもしれないよ。だけど人間には我慢出来る範囲があるでしょ？ この人の行動はそういうのを越えてるよ。凄いというより理解出来ない。いえ、それどころか生理的に何か気持ち悪い・・・」

「プラーヌスもそう言つてよ。君みたいなことを

私は冷たく言い放つた。

「えつ？」

「彼も彼女のことが理解出来ないって言つてたな。君が嫌いなプラーヌスと同意見みたいだね」

アビュはプラーヌスが苦手なようだった。

どうにもあの冷たそうな性格が耐えられないらしい。彼の前だと態度が硬くなるのはそのせいだ。

「な、何よ、その言い方・・・」

アビュは少し傷ついたように言った。「別に私、ここのは主人様のことは、前ほど嫌いじゃなくなつたし……」「

「そつへ、だつたら良かつたじゃないか、怒ることじやない」

「な、何よ、・・・もつ、いいわよ」

アビュはそつと私の背を向けて。

私も別にアビュの怒りを和らげる氣にもならず、そのままにしておいた。

医務室の中はずつと沈黙が続いた。

アビュはその空氣に疲れたのか、「薬の時間になつたら起きて」と不貞腐れたように言って、医務室のもう一つのベッドで横になつた。

しばらくして寝息が聞こえてきたので本当に眠ってしまったようだ。

私は少し迷つたが、医務室を出て、北の塔のバルコニーで夜明けを待つことにした。

私も眠気を抑えられそうになかったからだ。

それに無防備に眠つてゐる女性の部屋にいるのも緊張を強いられる。

もちろん眠つてゐる間に何かおかしなことをするなどあらがひないが、そんな欲望と戦つよりもバルコニーで風に当たつてゐるほうがいい。

その間に私は大切なことを思い出していた。

そもそも私がフローリアの部屋を訪れた訳を。

私はあの泣き声の正体を探りに行つたのだ。もしかしたらフローリアと、あのグロテスクに改造されたあの人たちから、何か少しでも情報を得られはしないかって。

フローリアがこのような状態でそれどころではなくなったけど、いつか健康が戻れば改めて尋ねておかなければいけないことである。眼下のところそれぐらいしか、あのことについての情報を得られそうなところはないからだ。

そんなことを考えながら、待ち疲れるくらい待つて、とうやく地平線が明るくなってきた。

今夜の夜明けは南のよつだ。気まぐれな太陽は南から空に昇り始めた。

私は医務室に行ってアビュを起こし、彼女があの例のやり方でフローリアに薬を飲ませたのを見届けたあと、自分の部屋に戻つて眠ることにした。

まあ、フローリアの様態はいくらか安靜になつたようだし、隣でアビュが寝ていればそれで事足りるだろう。

いつまでも私が付き添つっていても仕方ないという判断だ。

ところでアビュを起こしたとき、彼女の寝起きは悪かつたけど、しかし私は改めてアビュのさっぱりした性格に感心した。

まあ、もしかしたら寝起きで、まだ頭が回つていなくて、その前に何があつたのか忘れていただけかもしけないが、その前の諍いをすっかり忘れたような態度で、いつも彼女に戻つていたのだ。

そういうアビュを見てしまうと、先程あまりに冷たくし過ぎた気がした。そんなことを反省しながら私はすぐに眠りに落ちた。



## 第六章 6) 夢と現実との狭間の夢

女性が田の前で泣いている。

馴染みのない異民族の衣装をまとった、髪の長い女性だ。背中を向けていて顔は見えない。

だけど彼女こそが、あの泣き声の主であるよつだとこつとに私はすぐに気づいた。確かにこの声に聞き覚えがあるのだ。

「なあ、どうして泣いてるんだよ?」

私は尋ねた。

「君がなぜ泣くのかその理由を問い合わせよつ、プライマスに頼まれてているんだよ」

ところで私は夢を見ているよつである。

なぜ夢の中にいるのに夢であることが自覚出来るのか、その理由を説明出来ないのだけど、しかし私が今眠っていることは確かなのだ。

私は今、東の回廊の部屋のベッドの上で眠っている。

いや、もつと正確に言つと、これは夢であつて夢でないことにも最初から気づいていた。

夢と現実の狭間、田の前にいる女性はそいつた狭間の中ではしかその姿を現すことの出来ない何者かに違いない。

なんてことを私は考へてゐるのだけど、その夢と現実の狭間の世

界というものがよくわからない。

そんなものが存在しているなんて聞いたこともない。

しかし私はそれで妙に納得しているのだ。

そしてその泣き声の主と出会えたのを幸いに、もうこれ以上迷惑をかけないでくれと、きつちり申し入れしよつと思つた。

「私を解放するんだ！」

そのとき突然、その女性が顔を上げながらそう叫んだ。

まるで草むらの中から、虎かそれに類する凶暴な野獸が飛び出て生きたよつな驚きで、私は尻餅をつきやうになつた。

目は赤く血走り、目尻はつり上がり、小鼻はひきつけ、口は抑えきれない怒りの衝動で歪んでいる。

しかしここの女性の怒りよりも気にかかつたことがあつた。  
ここの目の前で叫んでいる女性が誰かに似ていることに気がついたのだ。

肌が白く、艶やかな黒髪が肩まで流れ、思わず見とれてしまいそうな整つた姿勢をしている。

年齢は私より少し年上、激しい恨みと怒りで我を忘れたようになつてゐるが、この女性はフローリアに似ている・・・。

「君は何者なんだ？」

だけどフローリアではないことも間違いないことだ。

確かに似ているが他人である。

それはいちいち違う部分を数え上げる必要もないくらいだ。

たとえば年齢が違うよつだし、背の高さも違うかもしれない。それにあんな温厚で優しいフローリアが、地獄の住人のような表情を浮かべるわけもない。

「早く私をここから解放しろー。さもないと報復は永遠に終わることはない」

女性は私に向かつて、またそう叫んできた。

「ここから君を解放しろだって？ ど、どうしてひとじだよ？」

私がやつ尋ねようとしたら田が覚めた。

田覚めるとベッドの上だった。

やはり夢だつたようだ。

だけど夢に過ぎないとも言い切れない。何だかこの部屋の中こそつきまで何者かがいた気配が濃厚に残っている気がするのだ。

私はまださつきの女性がこの部屋の近くにいるのではないかと思つて部屋を飛び出た。

しかし廊下は当然のように静かで、部屋の前に「ワ」と「ギャ

ー」が立つてているだけだった。

せつかく何らかの情報が得られたかも知れないのにと悔しさを感じると共に、どこか安堵感も覚えた。

だつてさつきの女性の私にらみつける眼差しは尋常じやなかつたからだ。まるで私が彼女の親を殺したとでもいった感じ。

それほど長い時間眠れなかつた氣がするが、今更寝つけそうないと判断して私は起きたこととした。

いざにしるフローリアのことが気になる。

彼女の様態が気になるし、さつきの夢の女性とフローリアが似て  
いるように見えたことも気になる。

それが私の勘違いだったのか、それとも正しい判断だったのか確  
かめるためにも、まださつきの記憶が定かな間に彼女に会いに行こ  
う。

私はすぐに服を着替え、彼女が眠っている医務室に向かった。

## 第六章 7) 掃除婦フローリア

中央の塔に向かつて歩いていく私の肌を、高窓から差し込んでくる正午の若々しい光が刺し貫く。

出来ればこの廊下にももっと窓を増やしたいぐらいだ。

プラスが光は嫌いでも、せめてこの東の塔ぐらいは街にある普通の住居のようにしたい。

そんなことを思いながら北の塔にある医務室に向かつ途中、私はフローリアとすれ違った。

突然、彼女から声を掛けられ、廊下を掃除している召使いの女性がフローリアだということに気づいたのだ。

「フ、フローリア？」

私は驚愕しながら彼女を見つめた。

「おはようござります」

私がフローリアに気づかなかつたのは、彼女がこんなにも早く元気になつてゐるとは予想していなかつたからだけでなく、彼女が見違えるようだつたからでもある。

身につけている衣服は清潔で真新しいものに変わり、髪も櫛が通つたようにきれいにとかれ、まるで湯浴みしたばかりの香りもした。

「もう大丈夫なのかい、フローリア？」

「大丈夫です。心配かけて申し訳ありません」

フローリアは駆け寄るようにして私のすぐ近くまで来て頭を下げた。「えーと、あの人たちは昨夜、最後の一人が亡くなってしまいました。もう私もこの塔にいる理由はなくなりました。でも行くところがなくて、・・・だからどうかこの塔で働かせて下さい。お願ひします」

「えつ？ それは全然構わないと思つけど・・・」

「本当にですか？ 安心しました。一生懸命仕事をします」

もしかしたらそれが、フローリアがこうやって無理して働いている理由かもしねない。

嬉しそうにそう言つたフローリアの眼の中に、疲労の残りの火のよつなものが、ゆらめいているのが見え、私はそう思つた。

まだ到底動き回れるよつな体調でなくとも、働かなければいけないと気が焦つているのだろう。

「だけどこれは君に強く求めたいことがあるんだけど」

私はフローリアに言つた。

「な、何でしょつか？」

「まづはゆつくり休んだほうがいい。君はまだ

私がその先を言おうとした時、フローリアの目の中の疲労の振幅が大きくなつたかと思うと、彼女の身体もフラフラとゆらめき出し、フローリアはまた私の腕の中に崩れるように倒れ込んできた。

私は慌てて彼女を抱き止めて、また大慌てで医務室に走った。

医務室にフローリアを抱えて運んで運んで行こうとしている途中、北の回廊でアビュと会つた。

「これはちよど良かつたと、私は彼女を叱らうとした。

フローリアをゆっくり休ませず、早々に働かせたことについて、あの老医師共々、恐らくアビュにも責任があるだらうと思つたのだ。

しかしその前に、先にアビュに言われた。

「またそのお姉さんと抱き合つてるの？」

「な、何だつて？」

「イチヤイチヤするなら他でやつてよ」

冷たくそう言い放つてアビュは私の前からさつさと去つていつた。

## 第六章 8) バルザ出陣

私は医務室にフローリアを運んでいった。

他の患者を診察していた老医師は、倒れたフローリアを見て呆れたように言つてきた。

「だから言わない」とじやない。しばらく寝ておけとあんなに言ったのに」

「患者がそいつ言っても、何が何でも止めるのが医師の仕事じゃないのですか?」

私は少し苛立ちながら言い返した。

「なかなか頑固な女なのじや。言つてわからないのなら、身をもつて知るしかない。これで懲りてしばらく安静にしているだら」

「だけども・・・」

私は昨日と同じベッドにフローリアを横たえた。  
そして更にこの老医師に文句を言つうと思ったが、フローリアが倒れることも見越し、あえて働かせたというなら言つことはないかもしない。

「とりあえずかなり回復したことは事実なんですね?」

私は尋ねた。

「ああ、この女にはわしの理解を超えた生命力を持つておる。も

う少し寝ておればすぐに健康になりそうだ

「はあ」

いつでも飛び跳ねるように歩くアビュならともかく、こんなに弱そうな女性が、「理解を超えた生命力を持つている」なんて言われても今一つピンと来ないが、確かに昨日のフローリアの様態と比べると見間違えるように回復していることは事実だろう。

今は光が消えたように眠っているとはいって、さっき廊下で働いていたフローリアは到底病み上がりには見えなかつたのだから。

「まあ、とにかく次に目覚めたら呼んで下さい。彼女の部屋を用意しておきます。そこに移しても問題ないですよね？」

「ああ、このベッドは別に彼女専用ではないから助かる」

私は早速部屋の準備に取り掛かり、医務室を出た。

それと同時に鐘の音が鳴り出した。

これは確か蛮族襲来の音だ。

私はそのまま走つて中央の塔の見張り台に向かつた。  
バルザ殿がこの塔に来て初めての襲来である。まだ大した準備も出来ていないので、私はその戦い振りを見てみたかった。

見張り台には既にたくさんの口使いが集まつていた。

彼らの内のどれだけがバルザ殿の高名をかねてから知つていたのかはわからぬが、少なくとも有名な騎士がこの塔の門番を勤めたという噂は伝わつてゐるようで、私同様的好奇心に動かされて高みの見物にやってきたようだ。

バルザ殿と、彼が率いる部隊は、塔の前に既に展開されていた。

私はバルザ殿が率いる兵の数を一人ずつ数えていったのだけど、あつという間に数え終えてしまった。

その数、僅か三十人だ。

それに反してこの塔にやつてくる蛮族は百を超える。

確かにプラーヌスは一人で蛮族百人を相手にして涼しい顔をしている。

しかしそれは彼が魔法使いだからだ。

一方、バルザ殿とその部下たちの武器は蛮族と同じ弓と槍。

少し装備は豪華かもしれないが物理的には敵と同じ。

しかもその三十人の兵は確かプラーヌスが街で適当に雇つただけの傭兵である。

いや、傭兵と呼ぶのも勿体ない。私が会ったときの印象では、ただの街のゴロツキ。

しかし私のその心配は杞憂だった。

バルザ殿率いるその部隊の動きは蛮族の動きとは質が違つたのだ。

蛮族たちはそのときどきの間近にある攻撃対象にすぐに心を奪われ、各自バラバラに攻撃をしているのだけど、バルザの兵は一つに集まつたり、あるいはときに散開したりと、その動きに統制が取れているのだ。

まあ、私はそもそも兵士であったことはないし、戦いそのものには無知だからよくわからない部分もある。

だけどそんな私でもバルザの部隊の統制の取れた戦いは一目で見

て取れた。

それに実際、次々と蛮族たちが倒れていくのだから間違いないだろい。

おそらくバルザ殿は自らをあえて危険に晒し、囮として敵を引きつけていた。

蛮族がバルザ殿に気を取られたところを残りの兵が攻撃する。そういう作戦だと思う。

最初はその連携が上手くいかない場面も見られたが、実戦ならではの緊張感からか、あるいは死を前にしての緊迫感がそうさせるのか、バルザの兵の戦いは徐々にまとまりを見せていった。

戦いも中盤に差し掛かり始めると、まるで兵たちはバルザ殿の手足のように動くようになつていったのだ。

そして何より驚くべきのは、バルザ殿の強さだった。

槍を一振りするだけで無数の蛮族の首が飛んでいくのである。まるで巨人と子供のケンカのようだった。

バルザ殿の動きには何一つ無駄がなく、わずかな動きだけで相手の攻撃を全て避け、逆に彼の攻撃は全て相手に致命的なダメージを与えていた。

そんな指揮官に率いられているのだ。兵たちが彼に全幅の信頼を寄せられるようになるのも不思議ではない。

もしかしたら戦闘が始まるとまで、傭兵たちはバルザ殿のことをさほど信頼していなかつたのかもしれない。

しかし戦いが終わつた頃には彼らはまるで、ルヌーヴォの神を崇めるようにバルザ殿を見上げていた。



## 第六章 9) 戦いの神バルベス

戦いはもちろんバルザ軍の圧倒的な勝利で終わった。

蛮族たちは算を乱して逃げていった。バルザは無駄な深追いをせず、すぐに兵をまとめて塔に帰還してきた。

プラー・ヌスは自分の部屋で何らかの魔法を使い、その模様を觀察していたらしい。

バルザのその戦い振りに、プラー・ヌスは大変満足しているようだ。

「これで僕を最も悩ましていた最大の問題は消えた。これから日夜、ゆっくり魔法の研究に集中出来る。無駄な戦闘に魔法も使わなくて済む。僕の寿命はかなり伸びたろうね」

いつもの時間、謁見の間での会合で、プラー・ヌスは上機嫌にそう言つてきた。「彼を仲間にするのは大変に手が掛かつたけれど、存分に報われそうだ」

確かにバルザの戦いはまさに戦闘の神バルベスのようで、私は是非とも彼に会つて、直接その労をねぎらいたい気分であった。

いや、正直に言うと、噂にたがわぬ実力を持つ、有名なバルザ殿の姿を一目でいいから見たいという、まるで人気の吟遊詩人を熱烈に追いかける、浮ついた婦女のような気持ちに近いかもしれない。いずれにしろバルザ殿の雄姿は私の目に焼き付いて離れない。

「ところで次は君の番だぞ、シャグラン」

プラー・ヌスが言つてきた。

「えつ？　ああ、あの女性の泣き声の件だね」

私は雄々しい騎士が踊るよつて戦う戦場の夢から醒めて、いつも現実に引き戻された。

「残念ながらまだ何も進展はないよ。あの少女と、前の主に哀れに改造された人たちに会いに行つたんだけど、彼らは全員亡くなつたみたいだし、それにフローリアという少女は体調を崩して寝込んでいて話しを聞けていない」

「そうか」

「いざれにしろ彼女に話しを聞いても、何かわかることがあるとも思えないんだけどね。彼女は至極まつとうな普通の女性だよ。フローリアとあの不気味な現象が結びつくなんて想像がつかないな」

私はあの奇妙な夢のことをプラークスに黙つていていた。どことなくフローリアに似た女性が、ここから自分を解放しようと迫つてくる不思議な夢。

いや、夢と言い切れない妙な現実感を伴つてている現象だった。

あれを話すとプラークスは更に彼女を疑い出すに違ひない。

だけど私にすれば、そのような夢を見たにも関わらず、彼女との不気味な泣き声に何か関係があるとは思えないのだ。

まあ、そんのは当たり前だつ。

本当にフローリアはどこにでもいる普通の女性に過ぎない。確かに美しくて、人並み外れて優しい性格をしているかもしけないけれど、私はこの手でフローリアの体温を感じた。

それは湯浴みする時のお湯のように温かかった。

心臓だって呼吸のリズムと同じリズムで鼓動していた。

私や、私の母なんかと変わらない、どこにでもいる普通の人間と同じである。

あのどこから聞こえてくる不気味な泣き声と関連があるわけないではないか。だってあれは何か怪異な者の仕業に決まっているのだから。

「だとしたらこれ以上、調査しようがないわけか。そんなことならシャグラント、この調査もバルザ殿に任せたほうがいいようだね」

プラスチスは冷たい声で私に言つてきた。まるで私の無能さに呆れるような感じ。

「いや、でももう少し僕に任せて欲しい。フローリアが元気になつたら色々と聞いてみるつもりだし、まだまだお手上げつてわけじゃない」

そういう扱いをされると私も不本意だ。思わず必死の形相になつてプラスチスに食い下がつた。

「だけど君には他にも仕事があるだろ？ この塔を運営するためにどれくらいの召使いの数が適切なのかっていう大事な仕事が」

「まあ、そつちはそれなりに順調にいッているよ。アビュにも手伝つてもらつて、だいたい名簿作りは終わつたからね。後はどれだけの仕事があつて、それにどれだけの人員が必要かつて分析ぐらいかな。とはいえるその分析にかなり骨が折れそうなんだけど・・・」

そのためにはやはり塔の隅々まで自分の足で回る必要がありそうで

ある。

最近、何かと忙しく肝心のその仕事はあまり進んでいない。  
もちろんこういうことも何人かで手分けしてやれればいいのだろうけど、残念ながらまだアビュ以外、信用出来る人物にも出会えていないのが実情だ。

私がそんなことを思つて表情を曇らせていると、プラスが立ち上がりながら言った。

「わかった、とりあえず全て君に任せると。何と言つても君は僕がこの世界で唯一信頼出来る友人なんだからね。色々と忙しいだろうけど、よろしく頼む」

プラスはさつきまでの厳しい表情をにわかに緩めてそう言った。

「あ、ああ

私はそんなプラスを見て、ホッと胸を撫で下ろした。

「とにかく事態は良い方向に進み始めている。一時はどうなるかと思つたけれど、何もかも少しずつ解決に向かつてることは事実だ。少なくとももうあの怪物どもは一掃されたし、蛮族の問題もうにかなつたんだしね。この問題もいづれ解決するだろ?」

「うん、時間はいくらか掛かるかもしれないけれど全力を尽くすよ

プラスは謁見の間を出て、西の回廊のほうに歩いて帰った。  
それと入れ違うように、謁見の間にアビュがやってきた。おそらく

く苦手なプラスが部屋を去るのを待っていたのだらう、偶然にしてはタイミングが良すぎる。

「ボス、今、時間ある?」

プラスが出ていった西の回廊に通じる扉のほうを気にしながら、アビュが言つてきた。

「ああ、少しくらいならあるけど」

アビュは昨夜のちょっとした諍いや、今朝、手酷く私をからかったのをすっかり忘れて、いつも表情である。

まあ、私はそういう性格のアビュが大好きなのだが。

「よかつた、バルザさんがボスに会いたいらしいんだ」

「バ、バルザ殿が? どうして?」

私は驚いてアビュに問い合わせた。

「さあ、この塔に来てすぐ、この謁見の間今まで自分を案内した人は誰か知りたいって言つててさ、多分それはこの塔のナンバー2のシャグラントという人だと思うって教えたら是非会いたいって

「ああ、確かに僕が謁見の間にまで案内したけど・・・」

「私もどうしてボスなんかに会いたいのかよくわからないんだけどね。だってバルザさんって男の中の男つて感じじゃない。めちゃくちゃ強いし、なんか優しそうだし、声は低くて、直接耳の中で囁かれているように話すし、とにかく紳士よ。それに引き換えボスは

寝て いる女性の裸を見て喜んでいた ような最低の男なの」

「おーおー」

じつや いら顔や態度には出でていなかつただけで、アビュ せまだそのことを覚えていたよつだ。

「ああ、とにかく みゆうじ 医務室にこらへから来てよ

アビュ はそつ つて私の手を引か、医務室に引つ張りつけられて 連れて いった。

?

## 第六章 10) バルザからの誘い

バルザの兵も圧倒的勝利とはいえ、激しい戦の中いくらか負傷者はいたようだ。

塔の医務室に数人の負傷兵が簡単な治療を受けていた。  
それでまた私は驚いたというか、呆れさせられたのだけど、その治療行為の手伝いを看護婦と、共にフローリアがやっていたのだ。

「フローリア！　いい加減にしないか！　しばらく安静にしてなくてはならないじゃないか」

上半身裸の傭兵の肩に包帯を巻いていたフローリアに、私は声を荒げてそう言った。

しかし私がそう言つと、逆に私のほうがおかしなことを言つているといふように彼女に叱られた。

「怪我をしている人を前に、のんびり寝てろつて言つんですか？  
それぐらいならもう一度倒れたほうがましです」

「だ、だけど・・・」

「おいおい、兄ちゃん、固いこと言つくなよ」

フローリアに包帯を巻かれている傭兵が私に言つてきた。「俺もどうせなら、あの中年の女性より彼女にやつてもらいたいよ。あんただつてそうだろ？」

そう言いながらその傭兵はガハハと大口を開けて笑つてくる。他

の傭兵たちもそれに賛同するように声を上げて笑った。

さつきは世にも雄々しい戦い振りを見せたが、正体はこのようなガラの悪い男たちなのである。

私は眉をひそめながらも、しかしフローリアの行動を制限出来る立場でもないから、彼女から注意を逸らした。

ふと視線を向けた先にバルザが座っていた。

銀色の胸当てをしているだけの軽い武装で武器も持っていない。傭兵たちの遣り取りを笑うでもなく、憤るでもなく、ただ穏やかな表情で眺めている。

先程、戦場を鬼神のように走り回った人とは思えないほどの静謐さだ。

しかしこの堂々たる体躯、そして私に向けてくる優しいが鋭い眼差し。

間違いなくバルザ殿である。

「恐れ入ります、シャグラン殿、わざわざおこに起こしなられたとは。会いたいと申し出たのは私のほうですから、どこども出向かせて頂いたものを」

バルザは坐っていた椅子から立ち上がり、丁寧にそつまつしてきた。

「そ、そんなこと、滅相もないことです。それにちよびりこりこり用もありました」

私は恐縮しながら言った。

「あなたはこの塔のナンバー2だと聞きました。こくらかお願ひしたいことがあるのですが。それともそういうことは直接、塔の主に申しつけぬほうがよろしいのでしょうか」

「いいえ、ある程度のことば私が請け負いましょう」

「そうですか。ではお話をさせていただきましょう。しかしこれからの戦いに関わる重要な話もあります。人の多ことこのほかなく、他の場所で」

バルザがそう言ったので、私は彼を東の塔にある応接の間にまで案内することにした。

応接の間は私とブランヌスがいつも夕食を共にする部屋だ。まだきれいに整えられていない塔の中で、ここが客を迎えるのに最も適した部屋である。

私はアビュートコーヒーを持ってくるみづみづ頼み、バルザ殿と共に応接の間に向かった。

## 第六章 1-1) 奇妙な記憶の混乱

「戦いが連日続く恐れもあると聞きました。出来るだけこぢりの被害を少なくするようにしたいのは言つまでもあります」

バルザ殿は席に着くや否や、すぐにそう言つてきた。

おそらくこれがこの人の仕事のスタンスなのだろう。無駄な前置きなど省き、常に单刀直入。

そういう姿に、これまで勤めていた騎士団団長としての働きぶりの一端を垣間見ることが出来た気がした。

本当に優秀な司令官でもあつたに違いない。私は改めてこの人が塔の番人をしていることの違和感を覚えた。

しかしバルザ殿はそんな私の複雑な心中など知る由もなく淡々と話していった。

「来襲してくる敵は強敵ではありませんが油断も出来ません。このような戦いが続けばこの塔を守る兵たちの疲労は溜まり、いずれ後れを取る者も出るでしょう。それを防止するためにもせめて今の二倍の兵は必要です」

「えーと、今現在は?」

私もバルザのモードに合わせようと、仕事の出来る役人のような口振りで尋ねた。

「私を抜いて三十一人です」

「ではあと三十人程ですね。まあ、それくらいならすぐに用意で

きるでしょ。手が空いている召使いは多いですし、その中にはそれがなりに武具を扱うことに慣れた者もいるようですね」

「そうですか、それならすぐに集めて下さい。訓練にそれなりの時間もかかります。とにかくこの馬鹿げた戦いで一人たりとも犠牲者を出したくない」

「は、はい・・・」

まるで目の前にこの馬鹿げた戦いが存在しているかのように、バルザはそれへの怒りをあらわにして言った。  
別に私が叱られているわけではないのに、その迫力に思わず謝りたくなった程だ。

「それで更に、こちらの優位を確固とするために砲も作りたい。その為の人員と資材も用意願いたい」

「砲ですか？まあ、それは少し時間が必要でしょうが、もちろん何とかします」

「砲の設計や、工事の監督も私がします。とりあえず人手と資材さえあれば何とかなるでしょう」

「わかりました。突然、塔の前に砲が出来れば主も驚くでしょうから、彼の許可が必要ですが、プラスチスも反対することはないでしょう」

扉をノックする声が聞こえ、アビュがよつやくコーヒーを持ってきた。

持つてくるまでに時間がかかった氣がすると思つたら、どうやら

アビュはさつき着ていた服を着替えていたようだ。

いつもの動きやすい服ではなく、まるでどこの舞踏会にでも出掛けのような格好で現れた。しかもおまけに頭に髪飾りまでつけている。

「どうぞいたてのコーヒーです」とバルザ殿の前に置く手が緊張で軽くふるえていた。

「ありがとうございます」と返事するバルザ殿の声を聞いて顔を赤らめている。

まさに初めての恋に舞い上がっている乙女の姿である。

私はそんなアビュの様子に苦笑を禁じ得なかつた。

コーヒーを置いても、なかなか部屋から去ろうとしないので、仕方なく私は彼女に出ていくよう言い渡した。

「何か用事があれば申しつけやせ」

「ないよ、何も」

バルザ殿に言つたのだろうけど、私が代わりに応えておいた。

バルザ殿に見えないよう私は舌を出しながら、ようやくアビュは部屋を出た。

「想像したよりも賑やかで、穏やかなところですね

バルザ殿はコーヒーに口をつけながら言つた。「もっと暗鬱で、陰気な場所かと思つていきましたよ。だけば驚くほど笑顔もある

です」「そうですね、ここは俗界から遠く離れ、ある意味平和なところ

「うむ、ある意味平和か・・・」

私のその言葉にバルザ殿は複雑な表情を浮かべた。

「あつ、すいません、平和といつてもバルザ殿はさつき戦われて  
きたばかりでしたね」

「いえ、戦いは私の宿命です。謝られる必要はありません。一度、  
人を斬ったものはいずれ誰かに斬られるのが定め、どこに行こうが  
血と剣に出迎えられるものです。それよりも私が意外に思ったのは、  
・・・言葉が過ぎるなら聞き流してもらつて結構なのですが・・・、  
もつと何というか、皆がこの塔の主の圧政のもとに虐げられている  
のかと」

「まあ、確かに一部の人間はプラークスのことを恐れています。  
そしてほとんどの召使いが彼を嫌つていてるでしょう。だけど彼は  
ほとんど自分の部屋から出てきませんし、普段、誰が何をしてよう  
が興味を持つていません。圧政とは程遠い状態です」

しかし彼が今いる召使いに興味がないのは、いずれ多くの召使い  
を解雇しようとしているからかもしれない。

そういう意味では、私がバルザ殿に言ったことは正確な言葉では  
ないかも知れない。

とはいって、プラークスが恐怖によつてこの塔を支配しているわけ  
ではないことは確かである。

この塔は間違いなく、穏やかな場所ではある。

「プラークスとおっしゃられるのですか？　この塔の主の名は？」

「は、はい」

どうやらバルザ殿も、プラーヌスのことを話すときはその表情を暗く曇らせるようだ。

それまでは力強く、どこまでも晴れ渡つた空のように雄大だった表情が、嵐が来たように曇つたのだ。

私はそんな彼の姿を見て、プラーヌスがどういう方法でバルザ殿をこの塔の番人に招き入れたのか、改めて気になった。

それが公明正大に行われた訳はないとは考えていたが、このバルザ殿の表情を見る限り、私の想像を絶する類の悪行が想像されるのだ。

しかし私は事の真相に触れるのを恐れるように、バルザ殿から思わず目を逸らした。

たとえバルザ殿の意に沿わない形でこの塔に招き入れられたのだとしても、私にはどうすることも出来ない。

私はあくまでプラーヌスの側の人間なのだ。

どんなにバルザ殿が高潔で素晴らしい人間であろうが、だからと言つてプラーヌスを裏切ることはありえない。

何だか私のそんな心の動きを機敏に察知したようにバルザ殿は言つてきた。

「あなたとこの塔の主、プラーヌス殿とはどういう御関係なのでしょうか？ ただの主従関係でも、雇主と従者でもないようですね」

「ああ、まあ、一応、彼とは友人関係です」

「『』友人？」

「はあ、そうです」

私はなぜだかその事実がとてもおかしいことでもあるかのようこそ、照れ笑いを浮かべながら答えた。

「そうですか、ご友人ですか、何だかそんなことを言うのは大変失礼な気がするのですが、しかしども不釣り合いと言つか……」

それまでずっとハキハキと明朗に話していたバルザ殿が少し口籠るようになつた。

「いえ、そう思われるのも無理もありません。確かに僕はしがない絵描きです。一方、プラーヌスは天才的魔法使い。大洋を泳ぐ魚と、池のカエルくらい接点がない。おっしゃられる通りだと思います」

「いや、そういう意味ではなくて」

バルザが慌てるように言い足してきた。「あなたののような真面目で誠実そうな御仁<sup>仁</sup>が、一般的に邪悪で計算高いと言われる魔法使いと同じ友人であられることが私にとって不思議なのです」

「はあ……」

「私にとつて魔法使いというのは、ときおり里を襲う残虐な賊と同義。いや、悪魔を崇め、それを使役する点に置いて、賊よりも悪質……すいません、言葉が過ぎましたね、しかしルヌーヴォの神に仕える騎士としてそれは当然」

バルザ殿は出来るだけ感情を交えずそう言つたつもりだったのか  
もしそれないが、魔法使いへの、いや、プラーヌスへの侮蔑は隠し切  
れていないようだつた。

私はバルザ殿と、このような会話をプラーヌスに内緒でしている  
ことに一抹の不安を覚えた。

プラーヌスのことだから、どこかで聞き耳をたてているかもしれ  
ないのだ。

確かにバルザ殿の言つて居ることに一つの間違いもないと思う。  
そもそも聖なる存在である騎士と、魔族と親しむ魔法使いは対極  
の存在。

こうやって同じ場所にいることが誤りなのだ。バルザ殿がそのよ  
うな不満を抱くのは当然であろう。

とはいえ塔を守ることを課せられた者がそのようなことを言つべ  
きでないのも間違いないと思つ。

それはバルザ殿自身も重々承知しているようで、かなり言葉を選  
ぼうとしているのは口振りや表情からも明らかだった。

それでも隠しきれない苦い胸中に、私は事態の深刻さを感じてい  
る。

「だけどプラーヌスはああ見えて良い奴ですよ

私は少しでもバルザ殿のプラーヌスへの嫌悪感を和らげようと、  
そんなことを言つてみた。「バルザ殿も彼と酒を酌み交わすことが  
あれば、その印象は変わりますよ。普段は本当にゴーモアもある奴  
なんです」

しかし案の定、そのような白々しい言葉にバルザ殿が心を動かさ

れた様子はなかつた。

ただ一言、「そうですか」と言つて、次の話題に映つた。バルザはまだ私とブランヌスが友人であることに疑惑を感じているのか、こんなことを質問してきた。

「ところでシャグラン殿でしたね、あなたとの塔の主はどうでお知り合いになられたのですか?」

「ああ、それはですね、えーと、確か、あれ? エーと・・・」

私は一瞬、健忘症に陥つたかのように頭の中が真っ白になつた。この塔に来る以前の、ブランヌスと過ごした記憶が全く思い出せなくなつたのだ。

もしかしたら高名なるバルザ殿との会話で舞い上がり、緊張しているせいかもしれない。

もう既に一杯のコーヒーを飲み終えるのに充分な時間を過ごしたけど、それでもまだ私はバルザ殿の何とも言えない偉大なオーラに飲まれている。

「ああ、そうだった!」

私はようやく頭の中が整理出来てきた。「どれくらい前なのか正確に思い出せないんですが、一度、彼に命を助けられたことがあつたんです。僕は肖像画家なんですが風景を描くのも好きで、美しい風景を求めて遠くまで歩くことがしばしばありました。そういうとき絵を描くのに夢中になつてしまい、帰りの時間も計算に入れず日暮れまで描いていることもあります、それで帰り道、取り囲まれたことがあるんですよ、盗賊たちに」

「城壁の外はどこでも物騒です。私の国でもそういう事件が頻繁に起きていました」

「僕もまあ、その有り触れた事件の被害者になりかけた訳です。しかも自分の不注意が招いた事態。あのときは本当に死ぬのを覚悟しました。奴隸として売られるならまだましだとも。しかしそこを偶然通りかかったのがプラーヌスでした。私は間一髪のところで助けられたんです」

「なるほど、彼には恩義もあるのですね」

「そうですね、しかし彼は決してその恩を着せるような男でもありません。まあ、確かに強引なところはありますが、そういうところにつけ込んだりはしませんよ」

「そうですか」

バルザ殿自身は私のプラーヌス評価に同意出来ないと感じているかも知れないが、私がプラーヌスに抱く友情は充分に共感出来るといつた表情で頷いてくれた。

「実は父は宝石店を営んでいて、僕が幼い頃、魔法使い見習いの少年に殺されたんです。だから僕も魔法使い全般に良い印象はありませんでした。恨んでいたと言つても過言じやありません。だけどそんな偏見を覆してくれたのも彼でした」

「亡き父上にお悔やみ申し上げます」

バルザ殿はそう言って短い祈りを捧げてくれた。

騎士団長にそのようなことをされるなんて、亡き父もきっと喜

んでいるであら。

「それでこの事件をきっかけにプラーーヌスと出会って、それから…  
・、あれ、えーと、それからどうやって仲良くなつたんだっけ…  
、えーと」

私はまた頭の中が真っ白になつた。

さつきのように上手く思い出せなことか、そんな感じではなくて、まるで読み進めていた本のページが突然白紙になつたかのように、頭の中が真っ白になつたのだ。

「どうなされたのですか？」

慌てる私に、バルザ殿がいぶかしげに尋ねてきた。

「いえ、どうしてだかプラーーヌスのこととなると、記憶があやふやになることがあります…」

これまで時折、そういうことを感じることはあった。

プラーーヌスの存在が私の人生史の中で上手く収まつていかない。極端な言い方をすればそういうことを感じたことが度々あったのだ。

しかし別に私の記憶の機能が狂つてはいるよひではなきやつだ。

他の記憶はしつかり思い出せる。

母のこと、父のこと、姉のこと、他の友人のこと。

だけどその記憶とプラーーヌスの存在が関係していかない。

私は首を傾げながらバルザ殿に言った。

「また後で思い出せたら説明したいと思いますが、とにかくプラーヌスとはこいつのまにか、このように仲良くなつたんですよ」

だつてこれ以上、思い出そうとしたら頭がどつこかなつてしまいそうなのだ。

私は自分の混乱から逃げるよつて、そんな自分を笑いで誤魔化した。

「記憶の妙な混乱ですか？」

バルザがふと真剣な面持つでそつ尋ねてきた。

「は、はい、記憶の妙な混乱、まさにそんな感じですね」

その記憶の混乱が何か実生活に悪影響を及ぼすところではない。だからこれまでさして真剣にそれに向き合つことはなかつた。しかしそれは看過出来ないくらい不気味な事実であることは確かであろう。

「私も最近、それを感じていますよ

混乱している私を憐れんでくれたのか、バルザ殿がそつ言つてきた。

「そ、ですか？ そういうことって誰もありますよね。良かった、そんな歳でもないのに、何だか自分の脳味噌が駄目になつてしまつたのかと思つて焦つてしましましたよ」

「私もある人物のことがよく思い出せないんです

いや、ただ私を憐れんだのではなさそうだ。  
バルザ殿自身も当事者としか思えないほど、深刻な面持ちでそう  
言つてきたのだ。

「もしかしたら私はあなた以上に重傷かもしない。どんなに記憶を辿つて思い出せないことがある・・・いや、しかしこのことについてあまり他言するようなことではござりません。聞き流して下され」

「はあ・・・」

バルザ殿は私に何かを打ち明けようとしたが、ふと我に返つたよう口を噤んでしまつた。

そんな態度を取られると、そのあと言おうとしたことが気になつて仕方ないが、バルザ殿は席を立ち上がり私に言つてきた。

「あなたと話せて楽しかつたです。またいつかこいついう機会を是非設けていただきたい」

「そんなの、こちらのセリフです。僕のほうこそバルザ殿と話せるのを楽しみにしていました。それがこんなに早く叶えられて本当に嬉しかつたです。実際、こうやって話せたバルザ殿は聞き知った噂よりもずっと素敵なお人柄、感動余ります」

「私は運が良いのかもしだれませんね、どんなところに行つてもこうやって出会いに恵まれるのですから」

それでは失礼します。

極端なくらいの背筋を伸ばして、曲げた右手を胸に当てる、正式な騎士の挨拶をしてバルザ殿は部屋を出でいかれた。

私は恐れ多くて、どうやってその礼に応えていいかわからず、卑屈な商人のように何度も頭を下げるだけであった。

## 第六章 12) 不吉な胸騒ぎ

バルザ殿が部屋からいなくなつて、私はドッと疲れを感じ、へたりこむように椅子に坐つた。

バルザ殿が醸し出すオーラは凄まじい。

口調は丁寧で、眼差しは優しく、その印象はあくまで温厚な僧か、知的な学者という感じである。

しかし先程の戦い振りを見ていたせいか、その温厚で知的な表面の下に、とんでもなく凶暴な野獸を裡に抱えているのも感じ取れるのだ。

それが私を終始脅かしていたかも知れない。

あまり正確な喻えではないかもしれないが、獰猛な野獸が閉じ込められている、檻の前に立っているような感じなのだ。

但しその檻は絶対的に頑丈で、その野獸がいくら暴れようと壊れることはないと保障されている。

だけど野獸のその迫力を鼻先に感じ続けられるのだから、こっちとしては断じて平静でいられない。

プラークスと一緒にいても疲れるることは確かだ。

あの一人旅以降は多少慣れたけれど、プラークスも檻の中に凶暴な獸を飼つていて、しかもその檻の鉄格子はバルザのよりも遥かに壊れやすい。

野獸がちょっとした刺激で飛び出しきそうで、そういう意味ではプラークスのほうが厄介は厄介である。

しかしプラークスは自堕落などいろがあって、自らを何かで厳し

く律しているところがない。

何かと要求が多い主ではあるが、どこか好い加減な部分が見て取れ、そんな奴に何を言われても気は楽なのである。

基本的に彼は孤独で、個人主義者である。

プライムスは何も他人に期待していないと思う。

そもそも他人を信用していないに違いない。何か下手なことをやらかして怒らせさえしなければ扱いは簡単なのだ。

一方、バルザ殿はそういう意味ではまるでプライムスと正反対だと思う。

バルザ殿はストイックで、大変に高いレベルに生きている。

私は普通に話していくも、終始彼を見上げているような気分にさせられる。

いや、しかしそれが不快なのかという決してそうではない。

そんなバルザ殿に魅せられて、むしろこいつも彼のレベルに合わせなければいけない気にさせられるのだ。

そう、何かバルザ殿といふと、いつもの自分以上の自分であるくなるのだ。

だからバルザ殿に率いられた兵たちは自分たち以上の力を出すのかもしれない。

誰もがバルザ殿の期待に応えたい、バルザ殿に認められたいと張り切るから。

しかしそういう人と一緒にいると疲れるのは間違いないだろう。特に私のような、部屋に籠つて絵を描いているだけで幸せを充分

に感じられるタイプは、バルザ殿の太陽のようなエネルギーは苦手である。

長時間、太陽の光の下にいるとその熱で体力を奪われるようになり、全身汗だらけでくたびれ果ててしまう。

そういうわけで私は疲れ切っていた。

しばらく椅子に座って休んでいた。

何だか自分のパワーを全てバルザ殿に吸い取られたような気分である。

私はプランス同様、もしかしたら太陽と相性は悪いのかもしれません。次にバルザ殿と会うときは貴婦人が持つような日傘が必要だ

うう。

そんなことを考えながら椅子に座り休んでいたら、そこにプランヌスが現れた。

その表情から明らかに、私とバルザ殿の会話をビリやつてか盗み聞きしていたようであった。

しかしプランヌスはその事実をことさら言いたてる事もなく、まして言い訳もすることもなく、そもそもそれは当然だと嘆息つきで話し始めた。

「拙いことになつたかもしれないよ、シャグラン」

プランヌスはさつきまでバルザ殿が座っていた椅子に腰かけた。

「な、何がだよ？」

私はバルザ殿との会話の中で、何か彼の気を損ねるようなことを言つていたのかと思つてドキリとした。

そう言って私に語りかけてきたプーラースの表情は暗く曇っていたのだ。

「いや、バルザ殿のことや。せつかく優秀な門番を見つけたと思ったのに、すぐに彼を解雇しなければいけない事態になるかもしれない」と僕は危惧している

「どうして？」

どうやらプーラースは私のことでその表情を暗く曇らせていくわけではないようだ。

それがわかつて私は少しホッとしたが、バルザ殿を解雇するなんてどうしたことだ？

「バルザ殿はやはり只者ではない。ただ強いだけの乱暴者ではなく、かなり頭も切れるところだよ。恐るべき勘の良さだよ」

「……何のことを言っているのかさっぱりわからないけれど、確かに彼は頭も良さそうだね」

「まあ、僕も少しばかり無茶なことをしたことは事実なんだ。無から有を生じさせるのは、あまりに強引なやり方だったかもしれません。記憶を奪つてしまつとね。ましてや指輪一つでそれをやるなんて、今から思つて正氣の沙汰とは思えない」

「だから何のことと言つてるんだよ？」

私はプーラースの話している言葉の意味が一つも理解出来なくて苛々してきた。

「まあ、独り言のよつなのものだね」

「 プラーヌスは苦笑いしながらそつ言つた。『君には永遠にわからぬことさ。教えるつもりもないよ。だけどそれぐらいの愚痴は許してくれ』

「 愚痴なのかい、これは・・・」

「 ああ、愚痴と後悔さ。もつと念入りに、バルザ殿の心の奥に入り込んで操作すべきだつたつて今、心底から後悔している。しかしまあ、あれだけの人物だ、多少の小細工じやどうにもならなかつたかもしれないが」

「 本当に訳がわからないよ、プラーヌス」

私は呆れるよつに声を上げた。

「 いざれにしろ、来るべき時は来てしまうだらつてことさ。バルザ殿が僕たちの許から去つてしまつときが」

君は彼を尊敬しているな。

「 プラーヌスがふと口調を変え、私にそつ尋ねた。

「 ま、まあね、だつてあれだけの人物だもの」

「 この塔の召使いたちも彼に魅せられている者は多そうだな」

「 ああ、あの強さと彼の人柄に、誰もが心酔しているかもしだな  
い」

「では彼が去るまで精々、得られる物は得とへよつ、君から皆に話しておくんだな。それがいつになるのかわからないが、その日は近いぞ」

結局、彼が何を言いたいのかこっちにはわからないまま、プラーヌスは部屋を出でていってしまった。

それでも私がわかつたことは、私とバルザ殿の会話を盗み聞きしたプラーヌスが、バルザ殿はいつかこの塔を出やるを得なくなると考えたということだ。

それを悟るに至つた事情は、その会話のどの断片からなのか私はまるでわからないのだけど、プラーヌスはその事実を確信しているということ。

プラーヌスがそれを確信しているというのなら、どうやらそれは事実に間違いないということ。

私はその事実を前に取り乱さざるにはいられなかつた。  
バルザ殿と話すと汗をぐつしょりかくほど疲れるが、彼にはこの塔を出ていって欲しくない。

そんなの寂しいに決まつてゐるではないか。

確かにバルザ殿はこの塔にいるのが不本意かもしけない。だけどせつかく得られた門番なのだ。

この塔の人間として、そのような大切な人材を失いたくないのは当たり前だ。

それにバルザ殿が出ていくといつのは、プラーヌスの計画がどこで失敗したということである。

それは何らかの不幸な結末を招くかもしれないのだ。  
私は勘の良いほうではないが、嫌な胸騒ぎを感じざるを得なかつ  
た。

## 第六章 13) 平穏なる日々

しかしそれからしばらく、日々は平穏に過ぎたと言つていいと思つ。

もちろん相変わらず蛮族は来襲し、バルザ殿と傭兵たちは戦場を駆けずり回つてゐるのだから、平穏という表現は間違つてゐるかもしないが、少なくともブランヌスが危惧していたようなことは起きなかつた。

その間、私の仕事はけつこう捲つた。

まあ、まだあの女性の不気味な泣き声については何の前進も見せなかつたが、この塔の全貌を把握し、どれだけの仕事にどれだけの人員が必要か調べる、例のライフワークについてはそれなりに星がついてきたと言つていいと思う。

バルザ殿に頼まれた、新たな兵の補充も順調に進んだ。バルザ殿のカリスマ性に打たれた塔の住人は多く、自らその徴兵に応じる者の数がけつこういたのだ。

フローリアの体力も徐々に回復し、彼女は掃除婦として働いている。

言つまでもなく彼女の仕事ぶりは真面目そのもので、ただの掃除婦にしておくのは勿体ないくらいである。

実は老医師や、彼女自身も看護婦として働くことを希望していた。確かに彼女の神経の細やかさと、人当たりの良さは看護婦に打つつけであるのは間違いない。しかし私は熟慮の末その希望を撥ねつけた。

私のその決断をアビュなどは誤解している。

フローリアが傭兵たちと関わる機会を、持たせないようにしてんじやないかと彼女は考えているようなのだ。

すなわちフローリアを看護婦として働かせないのは、私の嫉妬心が原因だと。

確かにフローリアは、あのちょっとばかしガラの悪い傭兵たちに人気があつたと思う。フローリアに花をプレゼントしたり、どこかに散歩に誘おうとする輩は後を絶たないようだつた。

まあ、実際のところ、傭兵同士がお互いを牽制し合つて、フローリアの心を射止めるところまでいつた者はいないようだけど、正直言つて私はそんな状況にヤキモキもした。

しかし私がフローリアを看護婦にしなかつたのはそんな理由ではない。

そんなバカなことがあるわけないではないか。私がそいつた私情を差し挟むわけがない。

実は昔からこの塔にいる召使いたちの多くがフローリアを嫌つて、彼女を看護婦として働くことに反対していたのだ。

いや、嫌つてはいるというのは言い過ぎかもしねり。

フローリアを忌避していると言つたほうが正確かもしねり。

最初はなぜかわからなかつた。あんなに優しくて美しいフローリアが、どうしてこのように思われるのか私には想像も出来なかつた。

しかしそくよく聞いていふうちにとその理由が何となくわかつた。召使いの多くが、あのグロテスクに改造されていた人たちと長く関わっていたフローリアに、触れられるのを嫌がつてゐるようなのだ。

ましてそんな人間が医療に関わるのは問題外。召使にの多くがそのように考えているらしいのだ。

それを聞いて啞然とさせられたのは言つまでもない。  
こんな狭い塔の中でのような差別意識が蔓延しているなんて何と愚かしいことかと。

しかし召使いたちの意向を無視するわけにもいかない。そういうわけで看護婦のほうが適職かもしれないが、フローリアには掃除婦として働いてもらひついている。

まあ、彼女のきめ細かい性格と、隅々まで神経の生き届いた丁寧さは、掃除婦にも必須な能力であるのは間違いないことだ。  
彼女が働き出してから塔の中が以前よりも綺麗になつたような気にさせられるので、それはそれで良かつたことであろう。

プラーヌスはあの日以来、いつかバルザ殿がこの塔から出ていくのではないかと心の不安を口にする事はなくなかつた。  
そして実際、バルザ殿もそのような動きを一切見せなかつた。  
むしろ兵たちの訓練や、塔の建設の準備を進めるなど、いつも懸命に仕事に励んでおられるようである。

だから私は、プラーヌスがあのとき口にした不安は、ただの杞憂だつたのかと思い始めていた。

それにこんな明るい出来事もあつた。  
この塔に街から、旅の劇団がやつてきたのである。

どうやらその劇団はこの塔を定期的に訪れているようで、あるときなぜだか召使いたちが浮かれているので不思議に思つていたら、その旅の劇団が来る日が近づいていたからであつた。

普段、何の娯楽もないこの塔の住人たちにとつてそれは、日の出や春の訪れのように待ち遠しいことだったようで、その劇団が到着したとき召使いたちは狂わんばかりに喜んでいた。

一瞬にして塔は、ロガシオンの祭りの夜のように盛り上がったのだ。

私もその祭りを楽しんだことは言つまでもない。

まあ、しかし唯一、残念だつたことはこの劇団が、私とプラークスがつゝこの間、街で観た劇団と奇しくも同じだつたということである。

しかも出し物までも同じである「悲しきハイネの物語」であった。

この世界にはたくさん劇があるので、取り立ててそれが名作といつわけでもないのに、また「ハイネの物語」を觀ることになつたのは何とも言えない不運だ。

とは言えそんなことは些細なことである。

旅芸人たちの奏でる音楽に合わせて踊つたり、酒を飲んで騒いだり、私はそのお祭りを存分に楽しんだ。

旅芸人の何人かは娼婦や男娼も兼ねているようで、劇の後にはそれぞれ部屋や廊下の隅で嬌態が繰り広げられていたようだ。

私はすっかり酔い潰れ、気がつけば朝だつたが、多くの住人が破目を外して楽しんだよう。

プラークスはそのような狂騒に興味がないようだから、そこには現れなかつた。しかしあの生真面目なバルザ殿も楽しんでおられた。

そういうわけで塔は平和そのものだと私の目には映つていたので

ある。

しかしそうでないことがすぐに判明してしまつ。私の知らないところでは事態は静かに進行しているようであった。

## 第七章 1) 悲しきバルザの章 後編

バルザは最初、塔の主から三十人の部下を与えられた。

それだけでこの塔に来襲する敵を撃退するよう命じられたのだ。

しかしその三十人の部下の誰もが、盜賊まがいの傭兵か、臆病者の農奴上がりで、これまで命令や規則などに従つてきた経験のないものばかりであった。

彼らはバルザの栄光ある名声も知らなければ、その実力も知らないかった。

そんな彼らを一端の兵隊にまで鍛え上げるまでには、少なからぬ労苦と忍耐が必要であった。

しかし邪悪な魔法使いによって粉々にされたバルザの虚ろな心は、自分が自分であることを忘れるぐらい働くことで、何とか平常を保つことが出来た。

むしろバルザにとってその困難な任務は好都合であったのだ。

有難いことに戦いは連日続いた。

目下の敵である蛮族たちは弱いが、バルザの率いる部下たちも弱く、彼らを鍛えながら戦うのはバルザにとって多大なる緊張感を強められ、それは一時たりとて息の抜ける仕事ではなかつた。

それにバルザはこの大義のない戦いで、自分の部下を一人も失いたくなかった。

最初、三十人だった兵もその二倍に増やしてもらい、兵に余裕はあるが、いかに自分の部下たちを消耗させないで戦つかということをバルザは己に課してもいた。

そのせいで更にその仕事は困難を極める。

もちろん、常に全神経を尖らせて国家の任に当たっていた、騎士団団長にして、軍の最高司令官であつた頃と比べれば、その労苦は比べ物にならない。しかしこの戦場にはまた違つた心の張りがあった。

バルザは来襲してくる蛮族と戦いながら、少年の頃、騎士の従者をしていたときのことを思い出していた。

あのとき、ちょっとした油断が即、死に直結した。

生き抜くためには強くなればいけなかつた。

しかし騎士団団長にして最高司令官になつてからは大勢の部下たちに守られ、そのような気持ちを失いかけていたかもしれない。だがこの塔に来て、その頃の自分に少し戻れた気がするのだ。

やはり騎士であるバルザにとつて戦いとは、槍を振り回し、剣を振るうものである。

万の兵を率いて後方から指揮を発したり、細かな駆け引きをするよりも、敵の恐怖心を嗅ぎながら、自らも死の恐怖に身を晒すことである。

その戦士としての本能を思い出せて、バルザは久しぶりに戦う喜びのようなものを感じていた。

しかしバルザは邪悪な魔法使いの悪辣な策に嵌められ、このよつな境遇に墮してしまつたのである。

愛しのハイネがこの塔のどこかで囚われの身になつてゐるらしい。

その事実が少しでも彼の心をかすめただけで、彼の心は張り裂け

そうなくらいに苦しかった。

戦いの中でも見出せる平穏など一時の感情に過ぎない。永遠に海の中を泳ぎ続けることを宿命づけられた者の、ひと時の息継ぎみたいなもの。

しかもやうなったのは全て自分の咎なのである。

もし自分が妻以外の女性に手を向かなければ、こんな手にあつことはなかつたのだ。全てあなたのよつなことをしてしまつた自分が悪い。それがバルザの全てである。

その罪を贖う機会は訪れそつになかった。

ただこの苦しみと、自らの犯した過ちを悔いるしかない生活、それがバルザの全てである。

## 第七章 2) 悲しきバルザの章 後編

バルザはハイネに贈った指輪を手の平の上で弄びながら、彼女のことと思い出し、自分の碎けそうな心を日々奮い立たせていた。

「の指輪と、記憶に宿る彼女の思い出だけが、今、ハイネと触れることの出来る唯一の方法だつた。

ハイネは一度も彼の夢の中に出でてきはくれなかつた。  
もしかしたらハイネも死んだ妻と同じように、彼を責めているの  
かもしれない。だから夢に出てくれないのかもしれない。

バルザはこの指輪を見つめながらハイネの姿を思い描く。

ハイネは世にも珍しい銀色の髪をしていた。  
瞳は薄い青、唇は濡れたように赤く、口の下に二つの黒子があつた。乳房は桃色、白い足がすらりと伸びていた。

それら全てがバルザにとって理想で、思い描いていた理想が実態となつて現れたとしか思えない奇跡だつた。

いや、あるいはその肢体の内に美しい心が宿つていたから、その姿がより美しく見えたのかもしれない。

ハイネは美しい容姿と美しい心を併せ持つた、本当に特別な女性だつた。

もし妻とではなく、ハイネと最初に出会つていれば、誰もこのような悲惨な目にあわずに済んだのかもしれないと思つ。  
こんなことを思つるのは妻には申し訳ないことであるが、出会い順

序を間違えてしまったと。

ただそれだけのことで、これほどの狂いが人生にもたらされてしまつたのだ。

バルザの人生はこのように粉々に砕かれてしまつたのだが、しかし彼の未来に希望がまるでないわけではなかつた。

あの邪悪な魔法使いのことだから信用出来るかどうかわからないのだが、いずれ代わりの門番が見つかりなどすれば、ハイネを解放してやつてもいいというようなことを言われたことがあつたのだ。一人でどことなり、静かなところで暮らせと、あの邪悪な魔法使ひはバルザに向かつて暗に匂わせたのだ。

バルザはその希望にすがりついていた。

今は我慢して、この孤独で悲惨な状況に耐え続けていれば、いつか不幸をもたらしている星の配置は変わり、バルザにもささやかな幸福が訪れることがあるかもしれない。

もはや騎士としての栄光も、武人としての栄達も望むべくもないが、せめてハイネとし幸せに暮らせればと切に願つていた。そのいつかのためにバルザは生き続けようと思つた。

しかしバルザはときおり、ハイネを失つてしまいそうになるとさがあつた。

こんなにも愛してやまない大切なハイネが、心から消えてしまいそうになるときがあるのだ。

例えば深い眠りから不意に醒めてしまったとき、あるいは戦いのあと、疲労の極致にいるとき、バルザはハイネと過ごした思い出を何一つ思い描くことが出来なかつたり、ハイネの顔が全く思い出せなくなつたりするのだ。

バルザはそれが不思議でならなかつた。

試しに自分の妻や両親、あの憎き邪悪な魔法使いのことを思い出してみるのだが、それに関しては全く記憶があやふやになることはない。

しかしながら愛しいハイネだけは淡く夢く、霧の彼方に幻として溶けていきそうになるのである。

もちろんそんなときでも、いづれはハイネのことを思い出す。その喪失は一瞬の錯誤に過ぎない。

だけどバルザはそんな自分が怖くなる。

いつたい自分の記憶に何が起きているのかと不安に思う。

あるいは自分の頭はおかしくなりつつあるのではないかと恐怖を感じる。

バルザはときに、こんな危惧を感じることもあつた。

あの邪悪な魔法使いが自分の中からハイネの記憶を消そうとして

いるのではないかと。

妻の命と、バルザの人生を奪つただけは物足りず、奴は更にこのバルザから思い出まで奪おうとしているのだ。

しかし少し考えてみれば、それではバルザを引き留めている人質の存在がいなくなつてしまつわけである。

計算高い魔法使いがそんなことをするわけがない。

いや、だつたらこう考えた方が自然かもしねない。  
もしかしてハイネなど最初からいなかつたのではないかつて。

あれは邪悪な魔法使いが、バルザを自由に操るためにでつち上げた偽の記憶。だからハイネはときに傍く、記憶から消えそうになる。  
・  
・

バルザはその思いつきにて背筋が寒くなつた。

しかしそんなことがありえるだらうか？

いくら魔法使いといえど、そのようなことが可能だとは思えない。  
人の記憶を自由に操り、偽の記憶を植え付けるようなこと、それはルヌーヴォの神をも齎かすような、とんでもない所業。

それに確かにハイネが思い出せなくなるときはあるのだが、何の問題もなくハイネのことを頭の中に描くことが出来るほうが普通で、もしハイネが存在しないなんてことがあつたら、こんなにハイネの姿を具体的に思い描けるわけがない。

バルザは試しに思い描いてみる。

ハイネの銀色の髪を、ハイネの薄い青い瞳を、ハイネの赤い唇を、

ハイネの桃色の乳房を、そしてハイネの砂糖のよつよとに白い脚を。

バルザは何度その銀色の髪を撫で、薄い青い瞳を見つめ、濡れた  
ような赤い唇に口づけし、そしてその桃色の乳房を愛撫し、白い脚  
を優しく開かせたことか。

もしハイネがいないなんてことがあつたら、このよつよに仔細に思  
い出せるわけがないではないか。

バルザはそう考えて、自分の極端な考えを打ち消すのであつた。

## 第七章 4) 悲しきバルザの章 後編

しかしバルザはこの問題にますます心囚われていた。  
こんなことありえないと思いながら、心からその不安を完全に打ち消すことが出来なかつた。

むしろこの問題を考えれば考えるほど、ハイネは更に白い砂の中に埋もれていって、どこかに消えてしまいそうな気がするのだ。

ところどころの塔にシャグラントいう男がいた。

塔のナンバー2で、あの邪悪な魔法使いの腹心であり、その男の友人であるとも自らを紹介してきた若者である。

しかしシャグラントいう男は、あの邪悪な魔法使いと近しい関係であるにもかかわらず、その心に一点の曇りのない紳士であつた。

バルザはそのシャグラントいう男に、この心の不安をそれとなく打ち明けたことがあつた。

いや、バルザが打ち明けたというよりも、シャグラントのほうが似たような不安を話しだしたのである。

なんと彼もときおり、自分の記憶に混乱を感じるらしい。

それを聞いてバルザはまた不安を新たにした。

邪悪な魔法使いの傍にいる者同士、その不気味な共通点はただの偶然と思えないと。

とするならこの若者も、あの邪悪な魔法使いに何かされているのであろうか。

とはいえる一人は友人同士であるらしい。

あの邪悪な魔法使いは友人にもそのようなことをするのか？

わからない。

バルザは用心深くこの塔で起きる出来事を細々と観察しているのだが、何一つ彼を確信させる材料を得ることは出来なかつた。

そんな頃、この塔に旅芸人の一行が訪れるという出来事があつた。

毎年、塔で働く召使いたちのために劇を見せにやってくるらしい。バルザはそのような慰め事を馬鹿にしていたが、部下たちの執拗な誘いもあつて遅れて参加することにした。

近頃沈みがちであつたバルザを、部下たちなりに心配してくれたのかもしれない。部隊長としてはそのような誘いに乗らないわけにいかない。

しかしその出来事が、彼のその悩みを解決する端緒となるのであつた。

## 第七章 5) 悲しきバルザの章 後編

夜、中央の塔、謁見の間の下にあるホールに、塔中の召使いたちが観客として集まつた。

塔の中でも最も広い部屋だ。

バルザはあの邪悪な魔法使いもその観劇に参加するといつのなら、当然すぐにこの部屋を出でていこうと思っていた。

しかし幸いにも彼がいる気配はない。

バルザは一番後ろに座つてその劇を観ることを決意した。

バルザはこのような劇に一切興味無かつた。

街の場末か、農村の祭りでやるような出し物だらう。

バルザの住む禁欲的な騎士の世界とは無縁なものである。これまでにそのような劇を観たことなど一度もない。

しかしたまにはこのような庶民の娯楽で気晴らしするのも良いだらう。

鼻をつく酒の匂いと、バルザが嫌つてゐる、心をくゆらせる薬草の匂いが辺りに立ち込めてゐる。

ホールはどことなく紫色に煙つていた。

観客である塔の召使いたちや彼の部下たちも、普段の仕事を忘れるためか、あるいはその劇をより楽しむためか、酒とその薬草で、すすんで理性を緩めようとしていた。

今にも誰もが裸で踊り出しそうな、だらじのない空気が漂つている。

バルザがそこに到着した頃には、既に場は充分に盛り上がり始めた。

旅芸人の女たちの騒々しい踊りが、その空氣を更に増長させていく。

派手な化粧を施し、薄い衣だけを身にまとつて、扇動的な太鼓の音に合わせ、身体をくねくねと動かしながら踊つていた。

バルザは最初、眉をひそめてその様子を見ていたが、しかし彼が頑なな心もゆつくりと緩んでいった。

誰もが笑顔で楽しそうに浮かれているのだ。バルザも自然と顔がほころんでいくを止めるることは出来なかつた。

やがて踊りの時間が終わつた。すぐに即席の舞台が素早く設えられたかと思うと、この劇団の座長らしき男が現れた。子供のように小さな男であつたが、頭だけは大きく、その目つきは鋭かつた。

その座長は奇妙なくらい自信満々の口調で言つた。

「さて、今夜の出し物は何にいたしましょつか、お集まりの皆様方！」

召使いやバルザの部下たちは興奮したよつて叫びながら、人々に何かを言つてゐる。  
どうやらこれから観たい劇の名をそれぞれ叫んでいるよつてであった。

その座長はその興奮を沈めるよつて手を振りながら言つた。

「英雄譚なら『少年ピートリヤン』、世にも残酷な神々の物語がお

好みなら『巨人の足跡』、人知を超えた不思議な魔法のお伽噺が観たいなら『三人のセラフィーヌ』、あるいは涙なくして観ることの出来ない恋愛悲劇なら『悲しきハイネの物語』

「ハイネだと！」

思わずバルザは、ハイネといつ言葉に反応してしまい、声を張り上げて立ちあがつた。

他の観客たち、顔見知りの召使いたちや部下たちが振り向いて、不思議そうにそんなバルザを見てきた。

その視線に気づいて、バルザは思わず取り乱してしまった自分に恥じ入りながら座つた。

しかしハイネだつて？

「あそここの逞しい身体をなされた紳士から『悲しきハイネの物語』を希望する声が上がりました。それではそれにいたしましょうか？」

座長がそう言つと、観客たちから拍手が沸き起つた。  
座長は満足そうに頷いてさつと消えてしまった。

「いや、ちょっと待て」

バルザは慌ててそう声を掛けようとしたが、しかしホールは闇に包まれたかと思うと、美しい旋律が流れ出し、劇の幕が開いた。

## 第七章 6) 悲しきバルザの章 後編

悲しきハイネの物語。

それがどんな内容の物語であったのかよく覚えていない。バルザは物語に集中するどころではなかつたのだ。

劇が始まつてすぐに、その物語の中のハイネがこう描寫されていたことで、彼の心は驚きと混乱に満たされた。

珍しい銀色の髪、薄い青い瞳、濡れたような赤い唇、桃色の乳房、砂糖のように白い脚と、そして特徴的な口の下の一いつの黒子。

それはまさにバルザの愛するハイネと瓜二つの姿ではないか・・・。

しかしどうして、物語の中のハイネと、バルザの愛するハイネの特徴がこうも似通つてゐるのであるうか？

そうやつて呆然としているうちに劇は終わつた。

その時間はあつという間に思われたが、劇が終わつたとき、バルザ以外の観客たちは涙に咽び泣き、あれほどだらしなく浮かれていた者たちが、まるで弔いの儀式にでも参列してゐるかのように引き締まつた表情をしていたから、それは悲しいと同時に、凜と背筋を伸ばさせるような物語であつたのだろう。

劇は終わり、夜も更け、だが狂騒はますます高まつていつた。

どうやら劇団の踊り子は娼婦も兼ねてゐるようで、次々と客を取り、暗い場所にしけ込んでいくのである。

塔の召使い同士も氣の合つた者は腕を組んで次々と広間から消えていった。

ホールに残つたのは、完全に酔い潰れ寝ている者か、劇の後片付けをしている旅芸人か、そしてバルザだけであつた。

しばらく思い悩むように呆然としていたバルザは、旅芸人たちが忙しく動き回つてゐる中に入つていつた。

バルザは最初に目についた大男に声をかけた。

「やつきの劇を作つた方にお会いしたい」

「はあ？ みんな忙しいんだよ、消えな！」

確かにその大男はいそいそと楽器の手入れをしてゐるようだ。舌打ちしながらバルザにそう言つてきた。

「やつきの劇を作つた方にお会いしたい。聞きたいことがある」

「だから忙しいって言つてるだろ！ 怪我したくなかったら、さつさと言つ通りにしやがれ」

大男は凄むようにして声を荒げ、拳を振り上げて威嚇してきた。バルザはその威嚇を歯牙にもかけず、また言つ。

「作業中、申し訳のないのは承知だが、大切な話しがあるのだ。お世通り願いたい」

「おい、しつこいな、てめえ！ 何度言わせれば気がすむんだ」

そう叫びながら大男はバルザの襟首を掴もうとしてきた。

バルザはうんざりしたような表情を浮かべながら瞬時に身構える。

その大男はバルザよりも背は高く、体重は一倍以上かもしないこと。しかしこのような男を打ちのめすのはバルザにとつて訳ないこと。

「やめろ！」

そのとき大男の背後で声がした。

この声を聞いた途端、大男は半分程に縮こまり、慌ててバルザから離れていった。

バルザは声のしたほうを見た。

そこには先程の、子供ぐらいの身長しかないこの劇団の座長が立っていた。

「大切なお客様に何という口を聞いているのだ、貴様は！」

そう言いながら座長は大男に近づいていって、すれ違いざま、持つていたステッキで大男の向う脛を思い切り打ち据えた。

大男は痛そうにうずくまつていたが、少しも反抗の様子を見せることなく引き下がつて行った。

「我が劇団員のご無礼、お許し願いたい。危険な旅に生きる田々と、ときに世間の蔑むような眼差し、旅芸人は少々荒っぽい人間に育つてしまつのです。ところで何かご用でしょうか？」

座長は鋭い眼差しをバルザに向けてきた。

「はい、少しばかり尋ねたいことがござります。時間を煩わすことをお許し願いたい」

「伺いましょう」

「先程の劇をお書きになられたのはあなたでしょつか？」

バルザは礼儀正しく一礼してからそう尋ねた。

「先程の劇というのは『悲しきハイネの物語』のことでしょうか？」

「左様です」

「あのような美しい作品、私が書きましたと言いたいところですが、ご存じないのですか？　あの物語は何世代も前から語り継がれてきた有名な逸話ですぞ。私の父も、私の祖父も、そのまた祖父も知っていた。もちろん私の母も、その母の祖母も。まあ、多少は手を加えたりしましたが、基本的には伝承通り。そもそも私の仕事はこの劇団をまとめ上げることです。それは物語をゼロから書きあげることより困難なこと」

「ならばそのハイネの麗しき姿の描写、それも語り継がれている通りなのでしょうか？」

バルザは息急くよろこびに尋ねた。

「珍しい銀色の髪、薄い青い瞳、濡れたように赤い唇、桃色の乳房、砂糖のように白い脚と、そして特徴的な口の下の一いつの黒子。その部分でしょうか？」

「そ、そうです」

「そこも語り継がれた部分です。どこか気にくわないとこりでも

あつたのでしょうか？」

座長の視線がいぶかしげにバルザを見つめた。

「いいや、そういうわけではないのだが……」

そう言つたきり、バルザは口籠つてしまつた。

いつたいこの男に何を尋ねればいいのだろうか？

彼がこの劇を書いたわけではないのなら、なぜハイネのことを知っているのだと聞いても無駄であるうし、バルザの知つてゐるハイネの特徴と、劇の中のハイネの特徴がどうして同じなのかと責めても意味のないことだ。

「御用がなればお暇させてもらいますが」

バルザが黙つていると、座長がバルザの前から去ろうとした。

「ひょっと待つてくれ

バルザは慌てて引き止めて彼に尋ねた。

「あなたにこの質問をするのは筋違いかもしれませんが、しかしもつ一つ尋ねたいことがあります。魔法使いは偽の記憶を他人の頭の中に植えつけたりする能力など、あるものでしょうか？」

「どうしてそんなことを私にお尋ねられるのです？　この塔は魔法使いの塔ではないませんか。誰よりも詳しい方がおられるのに

座長はバルザを馬鹿にするように笑つた。

「はつきりとした答えじゃなくて構いません。少しでも知っていることがあればお聞かせ頂ければと思い……」

バルザは座長の嘲笑に恥じ入りながらそう言った。  
するとバルザの真剣な表情を前に考えを改めたのか、その嘲笑を  
引っ込めて座長は言つてきた。

「まあ、確かにそんな魔法を題材にした物語があるのは知つていますが、実際はどうでしょうか……」

「あ、あるのですか？」

座長の言葉を聞いて、バルザは思わず子供ほどの大きさの座長に  
詰め寄つてしまつた。

「い、いえ、はつきりそう言えるわけではないのですが、聞いた  
ことはござります」

「それが本当ならば」

やはり私は奴に騙されていたのではないか？

「この胸の中に居るハイネは、この劇の登場人物をモデルにして適  
当にでっち上げた、あの邪悪な魔法使いが植えつけた偽の記憶？」

もし本当にそんな魔法があるとしたら、その可能性が断然高まる

！

バルザは興奮した面持ちでそう叫びかけたが、寸前のところでの言葉を飲み込んだ。

だつてあのハイネが存在しないなんて、そんなこと俄かに信じられるわけがない。

ハイネがいないなどといふことがあれば、その瞬間、バルザの世界は崩壊するであろう。この世界は花も潤いもない、荒漠とした荒野になる。

それに注意しなければならないかもしれない。

この塔にやつてきた劇団の座長だ。あの邪悪な魔法使いと通じているかもしれないではないか。

「ひどく興奮なされているようだが、どうなされたんですか？」

先程までバルザの前から一刻も早く離れたがっていた座長は、今はバルザに興味深々といった様子を見せ始めていた。

バルザはそんな座長を危ぶんで、丁寧に礼を言つて彼の前から去ろうと思つたが、やはり考え直した。

ハイネが本当に実在するのか、それとも邪悪な魔法使いの魔法に拠る偽の記憶なのか、はつきり確かめておかなければならぬ。

しかしバルザの一人の力では無理だ。

協力者が必要なのだ。この旅芸人はその仕事に打つてつけなのではないだろうか。

「あなたがこの塔を訪れたのは何度目ですか？」

だが彼が邪悪な魔法使いと通じている可能性がある。

それを探らなければならぬ。そう思いバルザは尋ねた。

「さて似たような塔を廻つておりますからね」

「ということは、あの邪悪な魔法使いと何かつながりがあつて、この塔にやつてきたといわけではないのか。

「では次はどうに行かれるのでしょうか?」

「さあ、それは風が教えてくれるでしょう。北風が強くなり始めました。南にでも向かいましょうかな。それともどこか住んでおられる貴方のお知り合いが、我々のような旅芸人を求めているのでしようか?」

「残念ながらそういうわけではないのですが、しかしそまだ行き先が決まっていないというのならば、是非とも行つて欲しいところがあります」

「まあ、どこですか?」

「バルです」

「ああ、我が故郷、バル。

バルザはバルと言つたとき、切ないくらいの懐かしさと寂寥しさが、自分の胸に溢れて来るのを感じた。

「バル、いいですね」

「そしてそこでハイネといつ名前が実在するかどうか探つて欲しいのです」

バルザは「ハイネ」といつ名前を口にするとき自然と声をひそめた。

「ビー」での邪悪な魔法使いが立ち聞きしているかも知れないから。「ハイネ、ですか？　しかしハイネなどといつ名前はありふれていますが」

座長は先程までと同じ声のトーンで言つたのかもしれないが、バルザにはそれがひどく大きな声に聞こえた。バルザが声をひそめているのを知りながら、わざと嫌がらせしてきたような感じ。

バルザは思わず辺りを見渡す。そして眉をひそめながら続けた。

「バルザという騎士団団長にして、軍の最高司令官がバルにおられるらしい。いや、おられたらしいと言いえましょう。その腹心の妻に、その名の女性がいるかどうか探つて欲しいのです。しかし、その腹心はもう亡くなつてゐるとも聞く」

「バルザ殿といえば有名な御人」。そのお方の腹心とはいえ、奥様の名前を探るなどとは、なかなか骨の折れる仕事

「いや、そんなこと子供でも

そういうかけてバルザはその座長が何を望んでいるのか気がついた。

「謝礼は弾みましょ」

「おいくりで？」

「先払いで金貨、二十」

バルザが今、手元に持つてゐる全財産がそれだけだつた。あの邪悪な魔法使ひはバルザをあくまで雇つてゐるという形にしたいようで、それなりの給金は払われてゐるのだ。

「二十枚でござりますか？」

それなりの大金だ。しかしその程度では不満だといつよつた表情を、座長はあからさまに見せた。

しかしバルザは彼のその表情を見てむしろ安心した。  
この男は金次第でどうにかなる男のようだ。バルザの言つてゐることを不審に思い、あの邪悪な魔法使ひに注進に及ぶなどといふことはないであつ。

「その報告を持つてきてくれたら、同じだけの金貨を後に渡そ。  
全部で四十」

「五十で」

「わかつた」

バルザが渋々答えると、座長は満足そうに頷いた。

「実は私はあなたを一廉の人物だと思つておりました。その言葉遣い、堂々たる体躯、隠しても隠しきれない気品と威厳。こんな片

田舎で働くのは相応しからぬお人と

「私の正体を探るのがそなたの役目ではありますね」

バルザは冷たい一瞥をくれた。

「おつと、そうでしたね。ハイネという女性の存在の有無を確かめるんでしたね」

今度は、座長は声をひそめて「ハイネ」と言った。

「わかりました。約束は守ります。この職業も商売と同じ、信義によつて成り立つてゐるのです。どうぞ安心してお待ちください」

## 第七章 7) 悲しきバルザの章 後編

ハイネがもし存在しないのならば、バルザは騎士の典範を破りはしなかつたことになる。

妻以外の女性を愛してはいなかつたことになるのだから。

その事実は彼の失つていた騎士としての誇りを取り戻させてくれる。

それに何より、バルザはもうこれ以上あの邪悪な魔法使いの言いなりにならなくて済むのである。

ならば荷物をまとめてすぐにここを立ち去れる。

そしてパルに戻つて前の職に復権出来るかもしれない。

いや、もはやそれが無理でも、どこかの村で畑を耕しながら、貧しい子供たちに読み書きや剣術を教えて過ごす余生も悪くない。少なくとも邪悪な魔法使いの塔を守る番人でいるよりは。

再び人生を立て直すのだ。

邪悪な魔法使いによつて粉々に碎かれた人生を、元通りとはいかなくとも、また調和の取れたものに。

しかし自分がそんなことするつもりでないことをバルザは知つている。

この命に代えても、あの邪悪な魔法使いは殺す・・・。

彼の中には、憎悪がふつふつと煮えたぎつていた。

今までの人生で抱いたことのない、どす黒い、あの邪悪な魔法使い以上に邪悪な悪が、バルザの胸の中で音をたてて煮えたぎつてい

るのだ。

ようやく復讐の機会が得られそうだ。  
しかしそれもこれも、あの座長が持つて帰つてくる答え次第ではあるが。

果たして本当にあのハイネがいないなんてことが、ありえるのだろうか？

今、バルザの胸の中にハイネの思い出が鮮やかに咲き乱れている。  
妻や両親や仲間たちと同じ濃密で、彼女は心の中にいる。

初めてハイネを抱いたときの思い出、それは何と甘く、切ない出来事であつたろうか。あのときバルザは初めて愛を知つたと言つていい。

厳しい訓練に次ぐ訓練の日々、血生臭い戦場で過ごした青春、それがバルザの人生の全てだった。

若過ぎた日の妻との出会いは、バルザに「愛も安らぎも」にはしなかつた。

ハイネが存在しないのなら、バルザはまだ愛を知らないことになるかもしれない。

バルザはハイネのために花を摘んだことがある。

偽名を使い、王室御用達の仕立屋にドレスを作らせたことも。それをプレゼントしたときのハイネが浮かべた微笑みを今、生々しく思い出せる。そのとき嗅いだハイネの髪の香り、そして香水の香りと共に。

ハイネはありがとうと言しながら、椅子を口にしてバルザにキス

をしてきた。

「これがあの邪悪な魔法使いがでつち上げた偽の記憶だとは到底考えられない。」

やはりハイネがいないなどといったのは、一時の氣の迷いに過ぎないのかもしない。

この苦しい環境から少しでも逃れたいといつ、バルザの脆弱な精神が見せていく幻か何かなのではないか。

果たして自分はどうの答えを望んでいるのだろうか？

ハイネが存在しないとすると、すぐにでもあの邪悪な魔法使いに復讐出来る。

しかしそれと同時に、ハイネが存在しないという事実、それはいつたい何という悲しい事実であろうか。

こんなに心の中に鮮やかに生きているハイネが、実は、あの邪悪な魔法使いの拘え物であるかもしれないなんて。

それはハイネが囚われているという事実よりも悲しいことではないか！

私は何という孤独を味あわせられることになるであろうー。

バルザは声に出でずこわう叫んだ。

一睡もすることなく夜が明けていく。

今日も蛮族たちが塔に押し寄せてくるのである。何度も退治しても、性懲りもなく彼らは押し寄せてくる。

バルザはただそれらを虐殺同然に殺すだけ。

また昨日と同じ今日が始まりつつここへ。

## 第七章 8) 悲しきバルザの章 後編

バルザはひたすら待つた。

しかし座長が、もしくは彼の遣いが報告を携えて現れる気配は一向になかった。地平線の彼方から現われるのは蛮族ばかり。

バルザの目測通り、五十あまりの金貨は溜まりつつあった。

それだけの大金であっても、待つている間に稼ぐことの出来る給金で補えるであろうと計算していた。

そして実際その通りにいつている。これで後払いの金貨の心配はなくなったのであるが、しかし当の座長が現れる気配は一向にない。

バル国からこの塔までどのくらいの距離があるのかわからない。

バルザはこの塔がどこに存在しているか見当もつかないから。

森の風景や、季節の肌触りなどから、それほど離れているとは思えない。

しかし一部の呪使いが話す言葉は知らない異国の言葉で、もしかしたらバルから遠く離れている可能性もないわけではない。

だからもうあの座長がバルに着いたのか、それとも今までここ の塔に向かっている最中なのか見当もつかないのである。

もしかしたら座長は先払いだけの金貨で満足して、ここまで来ないつもりかもしない。

この森は危険である。あの蛮族たちがいつ出没して、襲ってくるとも限らないのだから。

何ならば、もつこのまま現れないほうがいいのかもしれない」と、バルザはときおり思つたりもする。

彼は自分がどちらの答えを欲しているのかわからなかつた。

ハイネが存在しなかつたほうが自分にとつて都合がいいのか、存在してくれたほうがいいのか。

いや、どちらにしてもバルザにとつて辛い事実であるよつた気がする。

それならばいつそ全てがあやふやなまま、この人生を歩み続けようか。

部下たちは彼を慕い、塔で働く召使いたちとも良好な関係を結べている。

あの邪悪な魔法使いの門番として働いているという事実を除けば、この牧歌的な人生も悪いものではないかも知れない。

騎士団団長であり、軍の最高司令官であつたときは一時も心休まるいとまがなかつたのに比べれば、ここは楽園。

バルザは騎士団団長であり、軍の最高司令官であつたとき、このような余生を夢見ることもあつた。

しかしそれは当然、あり得ないことである。

あの邪悪な魔法使いに対する憎しみと怒りが、バルザの胸の中から消え去ることなどないのだ。この屈辱を抱きながら生きるなどといつ選択肢は、名譽ある騎士バルザには想像も出来ないこと。

いざれ報告はやつて来るであろう。

あの男がバルザの下に来ない理由などない。

決して豊かとは言えない旅芸人が、金貨五十もの大金をむざむざと棒に振るとは思えない。まして旅芸人が旅を厭うわけなどないのだから。

そのもたらされた報告が、もしハイネなど存在しないという答えなら、バルザはすぐに剣を抜いてあの邪悪な魔法使いに勝負を挑むであろう。

勝つことが出来れば何も問題はないが、しかしバルザが敗れ、殺される可能性だってある。

いや、むしろそちらのほうが可能性は高いであろうと彼は冷静に判断している。

剣で魔法使いに勝つことは普通不可能なのだ。

そのときバルザが一つ憂いでいることがあった。

あの邪悪な魔法使いにバルザが負けたあと、自分の部下たちはどうなるのであるつかということを。

もちろんバルザの部下だからといって、彼らが邪悪な魔法使いに殺されるということはないであろう。

バルザはそれを憂いでいるわけではない。

バルザ亡き後も、残された部下たちは蛮族と戦わされ続けるであろうことは間違いない。

それは彼らだけでは少し肩の荷が重い仕事。

バルザは自分が邪悪な魔法使いに負けた場合のことを考えて、部下たちのために少しでも良い環境にしてやるべきだと思つていた。すなわち蛮族の問題を解決しておこうとした。

それにバルザは近頃、自分の部下たちの変わりよつに、恐怖に近い感情を抱いていた。

部下たちは殺戮に酔い始めているのだ。

バルザの訓練の結果、正規軍並みの力量を身につけた部下たちと、何の規律もない蛮族たちとの力の差は圧倒的に開き始めている。

容易に打ち勝つことの出来る蛮族たちを殺すこと」を、部下たちは楽しんでいる。

「のままでは彼らは、戦場の中で生きられない獣と化してしまつかもしない。そんな危惧もあり、この蛮族の問題はいち早く解決しておかなければならないと考えている。

バルザは意を決し、あの邪悪な魔法使いに進言してみるとこした。

なぜ蛮族があのように何度も何度も襲いかかってくるのか。

蛮族といえども何かの目的があつてのことではないのか、と。蛮族を捉まえて尋問してみてはどうつか。

バルザは奴の顔を見るのも、近寄るのも不愉快なことであつたが、部下たちのために我慢して、邪悪な魔法使いの前に跪きながら進言した。

「なるほど、それはその通りかもしれないな」

邪悪な魔法使いは満足そうな表情でそう言つてきた。

バルザがこのような提案をするのは、門番としての職務に熱心になり始めた証しだと思ったのだろう。本当はバルザが心置きなく、邪悪な魔法使いと対決するための準備であるというのに。

「わかつた、騎士殿に任せよう」

邪悪な魔法使いはそう言った。



## 第七章 9) 悲しきバルザの章 後編

バルザは攻め寄せてくる蛮族の中で最も身分の高そうな一人を捕まえ、塔に連れて帰った。

尋問は邪悪な魔法使いと、彼の腹心であり塔のナンバー2、シャグランも立ち会う中、暗くて狭い牢獄の中で行われた。

通訳は蛮族の言葉を幾らか理解出来るという、塔の馬小屋で働いている飼葉係りが勤めた。

そしてバルザが蛮族への尋問を進める。

バルザは蛮族に尋ねた。この塔の襲撃する目的は何なのか？

「古よりの宿命、と言つております」

飼葉係りが蛮族の言葉を通訳してバルザに言つた。

牢獄の前には、口髭をはやした牢番が槍を構えて立つている。蛮族自身は縄で後ろ手を強く縛られている。

バルザは鋭い視線で蛮族をにらみつけた。しかし蛮族の男はそれに怯えることなく、むしろ堂々とした視線で見つめ返している。

「古よりの宿命？なぜ君たちはそのような宿命を課せられないといけないのだ。それには必ず理由があるだろ？」

バルザは続けて尋ねた。

「宿命を果たすことが我々の生きている意味、宿命に理由などあるわけがない、と申しております」

通訳の飼葉係りが言った。

「えうか」

それは騎士にとつても同じかもしない。

宿命とは何か、生きる意味とは何か、騎士の典範を守ることとは何か、そのようなことを考えて思い悩んでも意味がない。そういう涵みを超えることこそ騎士なのだ。

「では質問を変えよう。そなたたちは誰にその宿命を課せられたのだ？」

騎士にとつてそれはルヌーヴォの神である。

「そんなことは言つまでもない、我が愛しき女神」

「女神？ 女神がこの塔を攻めると命令しているのか？ だつたらそれは戦いの女神なのか？」

騎士が信奉しているルヌーヴォの神は戦を奨励などしない。騎士は守るために存在しているのだ。

とはいへ、そのような当たり前のことを忘れてしまっている騎士は多い。

バルザですら血生臭い戦場の中で、ただ敵を殺すことだけに専心してしまい、その元々の理念を忘れてしまうことがある。しかしルヌーヴォの神は戦いを扇動することは決してありえないこと。

「違う、女神には調和の女神と嘆きの女神がいる。我々の女神は姉妹なのだ。確かに嘆きの女神のほうは憎しみを怒りに変えろと教える。しかし決して女神は戦いを奨励したりしない、と申していま

す

「つむ」

あまり有益な答えが得られていない。ただ観念的な会話をぐるぐる交わしているだけだ。

これ以上このような質問をして、有益な答えが得られるのか不安に思ひながらも、しかしバルザは更に問うた。

「戦いを奨励しない女神が、なぜそなたちを戦場に駆り立てるのだ？ それは矛盾してはいけないか？」

「我々はお前たちに奪われた女神を取り戻すために戦っているのだ、そのどこが矛盾しているのかと言つております」

「我々が奪つた女神だと？」

もしかしたら一歩前進したかもしれない。バルザは逸る心を抑えながら質問した。

「それはいつたいどういう意味だ？」

「この塔に奪われて我々は女神を失ったのだ。毎晩取り返しに來いと女神の告げがある、と」

バルザの熱い口調に応えるように、通訳の飼葉係りがそう訳して伝えてきた。

「なるほど、それを取り返すまで攻め続ける気だとこいつとか？」

これだ。

蛮族がどれほど被害を出そうと、この塔を厭きずに何度も攻めてくる理由。

この塔に奪われた女神を取り戻すために彼らは戦っているのだ。

確かにそれなら矛盾しないかもしない。女神は大義のために戦いを奨励していることになる。

「よくわかった、だつたらそれを返しあえすればこの問題は解決するといつことだな?」

そのようなこと簡単なことではないか。  
もちろんこの邪悪な魔法使いがそれを返す氣があるかどうか次第ではあるが。

「心当たりはございませんでしょうか?」

バルザは邪悪な魔法使いの目を見ることなく、彼にそつ尋ねた。  
「女神など知らないね。何のことやら僕にはまるで見当がつかないが」

そう答えるながら邪悪な魔法使いがバルザを見てくる。  
バルザは奴の視線を横顔に感じて、顔が引き攣るのを感じた。

邪悪な魔法使いはさつきからずつと不気味な薄ら笑いを浮かべていた。

騎士であるバルザが、拷問係りなどを勤めさせられている。このようなシチュエーションが楽しくて仕方ないと言った様子で、バルザと蛮族の遣り取りを見ていたのだ。

しかし女神を知らないといつ言葉に嘘はなさそうだ。

バルザは尋問を続けた。

「奪われた女神とはいつたい何なのだ？　それは我々が奪つたり出来る物なのか？」

「女神とは、この世で最も清らかで美しいもの」

「そんなものがあれば僕も欲しいものだな」

邪悪な魔法使いが笑いながらそう言った。

その笑い声はバルザの神経にとても障つた。  
もちろん彼はそんな感情を顔に出さないようにするが、しかし彼以外にもその笑い声を不快に思ったものがいたようだ。  
捕虜の蛮族だ。

邪悪な魔法使いが何を言つているのかわからないであろうに、その笑い声だけで頭にきたようで、邪悪な魔法使いに今にも掴みかかるばかりであった。

「」主人様を泥棒呼ばわりしますが

通訳が邪悪な魔法使いにそう言った。

「なんと無礼な奴だ。僕がそれを奪つたわけではないのに」

邪悪な魔法使いは蛮族を挑発するように、更に大袈裟に笑い出した。しかし不意にその笑いをおさめ、ふと考え込むような顔をした。

「しかしこの塔は先代の主から、この蛮族の襲来に悩まされているらしい。その主が奴らの大変なものを奪つたという可能性はある。そいつは本当にとんでもない男だつたようだからね」

「女神とはもしゃ、像か何かなのか？」

バルザはそう尋ねた。

「像であつて像でない。その中に女神が宿り、我々を癒し慈しんで下さるもの、だそうです」

通訳はそう訳してきた。

「女神など信じない僕たちにとって、それはすなわちただの像に過ぎないということだな」

邪悪な魔法使いが口を挟んで言つてきた。「しかしもしかすればこの塔の倉庫にあるかもしれない、シャグラント」

邪悪な魔法使いは彼の隣にいるこの塔のナンバー2のシャグラントに声を掛けた。「すまないが倉庫係にでも尋ねておいてくれ。女神の像があるかどうか」

「ああ、わかつたけど・・・」

「それを返して解決するのなら安いものだ、なあ、バルザ殿」

確かにその通りだ。むしろこれまで、その程度の行き違いでこんなにも血が流されていたということに驚きを覚えるほどである。

「なかなか有益な尋問だった。忙しい時間を犠牲にした甲斐があったものだ」

邪悪な魔法使いはバルザにそう言いながら、満足そうな様子で牢獄の中から出ていこうとしていた。

バルザは邪悪な魔法使いに返事を返そりと思い、彼のほうを振り向いた。

その瞬間、彼の心は激しく揺さぶられた。

狭い牢獄の扉を屈みこんで出ていこうとする邪悪な魔法使いの背中が、バルザのすぐ目の前にあつたのだ。

それはあまりに無防備な背中だった。

隙だらけで、少しの戦いの心得もない、まるで女のような背中。

一方、戦場から戻ってきたばかりのバルザは帶剣している。

槍を持つ牢番は牢獄の向こうにいた。

バルザの背後には何の武装もしていない通訳を務めた飼葉係りとシャグランだけ。

剣を抜きさえすれば、この憎くて堪らない邪悪な魔法使いを一瞬で殺れる状況。

しかし指先まで漲らせた殺氣を、バルザは心の底に収めた。

騎士であるバルザが、丸腰の者を背後から切り捨てるなどといふような卑怯なことが出来るはずがなかった。

邪悪な魔法使いは牢を出て、代わりに牢番が入ってきた。

邪悪な魔法使いとバルザの間に、牢番の持つた槍がきらめく。  
しかしバルザは立ち去っていく魔法使いの背中から視線を外すこ  
とが出来なかつた。

千載一遇の機会を逸したのかもしれない。  
だがやはり、不意打ちで人を殺すなど、どんな悪魔に対しても出  
来ない・・・。

## 第七章 10) 悲しきバルザの章 後編

そのあと蛮族の女神の像が、倉庫から見つかったのかどうかバルザは知らない。

その前に座長がついに報告を携えてやつてきたからである。

座長は言った。バルザ殿の腹心の妻に、ハイネなどという女性はないないと。念のため、あの劇のハイネの特徴と類似した女性がいるかどうかも調べたが、そんな噂もない。

答えは出たようだ。もはや疑つべくもないであろう。

バルザは約束通り金貨を払った。

その帰り際、座長は言った。

バル国は今、危機に瀕している。バルザといふ軍の最高司令官に裏切られたせいで、戦いに敗れ続けて。

「私の報告が少し遅れたのもそのせいでした。現在バルの中に旅人が入るのは極めて困難だつたのです」

「ならば國中で、バルザといふ裏切り者への怨嗟の声で満ちているのでしうね」

バルザは苦難に喘いでいるだろう、バルの街の光景を思い浮かべ胸が張り裂けそうになつた。

「いいえ、バルザ殿の帰還を國中の人間は待ち侘びているようでした。祖国の危機を救えるのはやはり彼しかいないと

座長が去つたあと、バルザは自分の荷物をまとめ、部下たちへの書置きを書いた。そのあと部屋を出て、塔の裏庭にある馬小屋に向かつた。

夕暮れ、太陽が北の方角に沈んでいく。

その太陽を眺めながら、そこで最後の戦いのため愛用の剣を研いでいた。

この剣である邪悪な魔法使いの首を叩き斬る。

それを考えると、黒く曇っていた胸が晴れ渡つていくようだ。

いや、奴の首を叩き落とすことは叶わないかも知れない。  
相手は魔法使い、いくらバルザの腕でもその敵を殺すことは不可能に違いない。

しかしせめて一太刀、バルザが生きた証をあの邪悪な魔法使いの身体に刻み込む。

それを置き土産に、冥府の妻に詫びに行こう。

いずれにしろその瞬間は近い。

「その剣に恨みでもおありになるのですか？ バルザ様？」

そのときさう言つて声を掛けてきた女性がいた。

バルザはその声のほうに視線を向けた。

夕暮れの逆光で、最初その女性は黒い影法師にしか見えなかつた。少しづつ目が慣れ、ようやくその女性の顔がはっきりと目に入った。

「うら若い少女のようだ。この塔の召使いの一人だろう、馬小屋にいるといつことは飼葉係りか何かだらうか。

「ファファン、夕飯よ」

いや、違つたようだ。その少女は馬小屋の外れに繫がれている犬に餌をあげている。

その少女の飼い犬なのだろうか。もしかしたら塔の掃除婦にそのような少女がいたのを見たことがあるかもしれない。

「剣に恨み？ 剣は剣です。むしろ使えば使う程、愛着がわいてくるもの」

バルザはその剣を置いて、その少女の問い掛けに応えたことじた。

「だけどとも恐ろしい表情をしておられました」

少女はその犬から視線を上げ、バルザにそう言つてきた。

「私が？」

「は、はい、まるで何というか……」

その少女はそう言つて、言葉を選ぶよりに口籠つた。

「まるで人を殺すことによく快感を覚える、殺人鬼のような顔をしていましたか？ このバルザが」

彼は口籠つた少女の後を繼いでそう言つた。「私はこの剣で數え切れないくらいの人間の命を奪つてきました。そう思われても仕方がないでしょ?」

「いえ、殺人鬼なんてとんでもありません。むしろバルザ様はこの剣を憎むような眼差しをしておられました。まるであらゆる戦いを憎む修道士様や修道女様の眼差し。バルザ様、これまで人が憎くて、その剣を振り下ろしたことはないのではないでしょ?」

少女が首を振りながら、必死に言ひ繕つて言つてきた。

「人が憎くて?」

「はい、全て何かを守るため、あるいはお国の勝利のためではすいません、私め」ときが、このよつな差し出がましいことを申し上げて。

少女は突然、我に返つたように頭を下げた。「失礼ました、バルザ様。ご無礼をお許しください」

そして慌ててバルザの前から立ち去ろうとする。

バルザは少女を引き止めるよつに言つた。

「確かに私は今、憎しみに動かされてこの剣を振り下ろさうとしています。誰かを守るためでもなく、何かを得るためにもありません。しかし私が憎むその者は、私からあらゆるものを持った。誰に聞いても正義に適つていると、私の復讐を支持してくれるでしょう」

あの邪悪な魔法使いと対決する瞬間は近い。この少女にこのようないことを言つても、もはや問題はないであらへ。

「どうしてもその人を許すことには出来ないのですか？」

その少女はバルザのその言葉に足を止め、遠慮がちにこういつてきた。

「ゆ、許すだつて？」

バルザはその少女のその言葉に愕然とした。  
なんという甘い、富廷の女どもが好んで食す、ガト・シエドリのよつな考え方。

「許すなどといふ言葉、騎士の典範にはありませんよ」

バルザはすぐなく答えた。

「ですがそれでは、いつまでも争いが終わらないではないですか？」

少女はバルザのことを憐れむような表情でそう言つてきた。  
いや、このバルザを憐れんでいるのではないのかもしれない。そ  
うではなくて、全ての生きとし生けるものを憐れんでいるような表  
情。

「そなた、名前は？」

少女のその視線を前に、バルザはふと尋ねた。

「も、申し遅れました、フローリアといいます」

少女は慌てて頭を下げそう名乗った。

聞いたことのある名前だ。確かに部下たちの間で、美しいとしきりに話題になつてゐる少女の名前。

「フローリア、そなたはたとえば、最も大切にしている物を嘲笑われたり、壊されたりした人間を許せるのですか？」

「そ、そのようなことはそのときにならなければわかりません。ですが許さないと私はこの先の人生を生きていけないと思います」

まあ、何も特別な考へでもない。パルの都にもそのような人物はウヨウヨいた。

ルヌーヴォの教会に仕える修道士や修道女などだ。

彼らの中にはこれまでの人生で、それほど大切な物を失つた経験がない者もいるであらうに、誰も彼もが一段高いところから説教を垂れてきた。

愛と許しで世界から争はなくなるであらうと説いていたのだ。

「この少女もそのような理想にかぶれているのだろう。

しかし実際にはその教会が騎士を集め、組織しているのである。確かに騎士は厳しい典範に支配されている。ただ無暗やたらに武装した組織ではない。しかし突き詰めて考えると、ルヌーヴォの教えと騎士は矛盾を来たしはしないか？ 世界は矛盾と不条理で出来ているものであるとはいえ。

「あなたはまだお若い。愛と許しでどうにかなると考えておられ

る

バルザはフローリアを叱るよつと云つた。

「ですがルヌーヴォの神様は確かにいました。片足の者はたとえ義肢を奪われても、その盗人を許せと」

やはりそうだ。ルヌーヴォの神。

その少女はその教えに影響されて、絵空事を述べているだけ。

しかし現実はその通りに行かないことをこの少女に教えてやうつか。

「ではフローリア、例えば私が

バルザはおもむろに立ち上がり、その少女に一步近づいた。「いきなりそなたの服を切り裂き、この干場の上に押し倒し

その言葉に、少女が明らかに怯えた眼差しでバルザを見上げてきだ。しかしバルザは意に介せず続ける。

「そなたの必死の抵抗を押さえつけ、ただ己の欲望を遂げるためだけに、その純潔を奪つたとする。どういう意味かお分かりですかね？ それでもそなたは許されるのか？」

「・・・そ、そんなの当然、私はバルザ様を憎みます、恨みます」

少女は実際、バルザにそのような暴力を振るわれたかのよつて涙に滲んだ瞳でそう言つてきた。

「・・・やはつそりですね」

バルザは肩に入っていた力を緩めそう言つた。

「で、でも許します」

「何だと!」

「そのような野蛮な暴力振るわれたあなたを憎んで、憎んで、憎み続けます。でも私は命を掛けたバルザ様に復讐はしません。出来ることなら、あなたがなぜそのようなことをしたのか理解しようと努めます。そして許したいと思います。それが無理ならただ時間に身を委ね、一刻も早く忘れるよう努力します・・・」

「馬鹿らしい!」

バルザは声を荒げた。

どうしてこのような屈辱を与えてきた輩を理解など出来ようか! そんなこと不可能に決まっているではないか。

だつたら私の場合、あの邪悪な魔法使いがなぜ自分をこのように呑み合わせたのか理解しなければいけなくなる。

その為にいつまでもこの塔で門番を勤めるといつののか?

何という愚かな話し。

もういい。時間の無駄だ。

このような少女と話しをして仕方がない。

「フローリア、たとえ叶わない相手でも、大切な物を奪われたのならその者に立ち向かわなければならぬ。許すというのは、ただ

自分の命を優先して逃げるということです。まして騎士は命よりもプライドを優先するもの。それが騎士を騎士たらしめている極意」

「だつたらバルザ様、こちらからも質問があります。許す人間は騎士になれないのですか？」

「そうです」

果たしてそうであつたろうか？

バルザの心にふとそんな疑問が過つた。

「騎士は非寛容なものなのですね」

「そうです」

私はもしや何か大切なことを忘れようとはしていないか？  
あまりに強烈な復讐心の下、我を失つてはいいのか。

しかしそんなこと、もはやどうでもいい。

「では怒りや恨みは永遠に続くことなのですか？」

バルザは少女のそ問い合わせに一瞬の躊躇のあと、頷いた。

「そうですか、その答えにがっかりしました」

「それは残念でした。しかし私は騎士です。あなたと違う世界に生きているのでしょう

まだ少女は何か言いたげであったが、バルザは剣を拾い上げ、そ

の少女を残してその場から立ち去った。

戦いを前にして、このよつたな会話をするべきではなかつた。

戦いに向けて高めていた集中力が、四方に散らされたような感じのだ。

騎士の間に、このよつたなジンクスが伝わつていた。「戦いを前に、戦いを引き止めようとするとする者と話すべきではない」

そのとき必ず、その戦いに負けるものだと言われてゐる。

これは不吉な前兆に思えた。

「この最後の戦いを延期しよう」というがバルザは迷つた。

だがもはやこの逸る心を抑えられそうにない。いづれにしろ魔法使いに勝てる見込みはほとんどないのだ。それなら延期するのも無駄であろう。

ふとバルザは背後に視線を感じた。

振り向くと、まだあの少女がこちらを眺めていた。

それにしてもあの少女に、とても無礼なことをしたかもしない。迫る復讐を前にして、いささか我を失っていたとしても、あれは騎士の取るべき態度では決してなかつた。

バルザはその少女に向かつて深々と頭を下げた。

「私はこの塔で！」

頭を下げるバルザに向かって、少女が大声を張り上げて言つてきた。

「父と母の命と、幾ばくかの時間を失いました。バルザ様は何を失つたのでしょうか？」

「私は……」

妻と、地位と、名譽と、誇りと、そしてハイネを失つた……。

戦わなければいけない理由は充分にあるのです。

## 第七章 1-1) 悲しきバルザの章 後編

それからバルザは最後の戦いに赴くため、この塔のナンバー2、シャグランに会いに行つた。

塔の主にとても大切な話しがあるから取り次いで頂きたいと言つと、彼は驚いたような表情でバルザを見つめて言つてきた。

「ここを去るおつもりですか？」

「相変わらずお察しが早い。あなたにはお世話になりました」

バルザは丁寧に頭を下げる。

確かにこの塔に来たときと同じ、自前の鎧を着こみ、背中には大剣を背負つた、完全武装した姿でいるが、それだけでバルザの心の内がわかるとは、彼は以前から何かを察していたのかもしれない。

「出来れば蛮族が求める女神の謎を解き、それからこの塔を去るべきでしよう。せつかく建築資材を集めようとして頂いたのに、皆の建設に取り掛かることも出来ませんでした。何もかも半ばで放棄して、この塔から逃げ出すなど、騎士にあるまじき男と思われることは覚悟しています」

「いいえ、そんなこと滅相もない。きっと、何か深い理由があるのでしよう」

「私が去ったあと、部下たちには蛮族と無理に戦わないように書きをしておきました。このまま戦いが続けば、いずれ部下たちが敗れること間違いありません。シャグラン殿、彼らが逃げることがあっても責めないで頂きたい。出来ればそのとき、あなたから塔の

主に口添えを「

「わ、わかりました、確約はできませんが努力しましょう」

「有難い、私はどこに行こうが人に恵まれる運に生まれついたようです。あなたと出会えたことを神に感謝します」

「なんて勿体ないお言葉!」

「それとこれはあなたにとって余計なお世話かもしけないが・・・」

「

バルザは「」のことにひついて言つつもりはなかつたが、彼の身を心配するあまり思わず口を出した。「あなたもお氣をつけられたほうがいい」

「えつ、気をつけたほうがいいとはいつたい何を?」

「いや、私から確かにすることは言えません。自分のことですから確信が持てないのですから。あなたがいかに判断するかの問題ですが」

バルザは親近感を抱くこの男に、邪悪な魔法使いのその邪悪さを丁寧に説明しようと思った。

しかし確信の持てないことを言つて、彼を惑わすのは心苦しい。それにもはや高ぶつた精神状態のバルザに、そのようなことを順序立てて喋るだけの余裕はなかつた。

バルザの心は飢えた獣のように逸っている。今すぐにも鞘から剣を抜いて、その剣を邪悪な魔法使いの心臓に突き立てる。

「とにかくこの塔の中で信じられるのは自分だけだと覚悟された

ほうが良いと思います。たとえご友人が相手であっても。それでは失礼』

そう言ってシャグランの前を去った。

## 第七章 1-2) 悲しきバルザの章 後編

バルザは謁見の間に向かつたため、塔の廊下を歩いた。

廊下の端には切り花が、まるで敷き詰めたように並んでいる。到底、趣味が良いとは思えないが、花は念入りに交換されているのか、それとも魔法の力のせいか、水に浸かってもいらないのになぜだか常に新鮮で、心地良い香りを放っていた。

「このよつな奇妙な光景を見るのもこれで最後であろう。そんなことを思いながら、バルザは謁見の間に向かつた。

邪悪な魔法使いは既に謁見の間の玉座に座っていた。

バルザは今にも走り出したい気持ちを抑えながら、ゆつたりとした足取りでそこに近づいていく。

「ここを去らせてもらひつ

まだ邪悪な魔法使いの表情もよく見えないぐらい離れていたが、バルザは声を張り上げて言った。

「なぜです？ ハイネがどうなつても

邪悪な魔法使いがそつ言い終わらないうちにバルザは言った。

「ハイネなどいない！

「いないだつて？」

「ああ、いない。彼女はある有名な劇場の主人公をモデルにした偽の記憶。私が彼女と何らかの関係を持ったという事実はない」

そう言いながらバルザは、邪悪な魔法使いから一瞬も視線を離さず近づいていく。

「おお、たすが、バルザ殿、見破りましたか。僕はあなたを甘く見ていたようだ。ハイネの特徴を劇から引用したのは安易過ぎただすね。それで御用は？」

「ここを去らせてもらひう

「それは困る。あなたが門番になつてくれたお陰で、実際に静かに充実した日々を送らせてもらつていたのに。もう一度考え直してもられないだろうか」

「無理だ」

「そうですか、ならば引き留めはしない

本心なのか、口だけでそう言つて居るのかわからないが、邪悪な魔法使いは即座にそう言つてきた。

しかしそんなことは今のバルザにとってどちらでもいいことだった。

「あなたに最後に尋ねたい。どうして私を門番に選んだのだ？」

「うーん……なぜだろうな、もつ忘れたけれど。多分、あなたが最強の騎士だから、かな」

「到底納得出来る答えではない。そなたのエゴのせいで全てが狂つた。祖国はいま危機に瀕し、私を待ち侘びているらしい」

「そうですか、僕に出来ることがあつたら言つて下さい。帰りの馬車や旅費は出そう。それにしても急いで別の門番を探さないといけないな。誰か適任を紹介して欲しいものですよ」

バルザは邪悪な魔法使いのその言葉を無視して言った。

「しかし祖国に帰る前にやっておかなければならぬことがある」

「はて、それはいつたい？」

バルザは大剣を抜いた。

「お前を殺すことだ！」

そう叫んで彼は、邪悪な魔法使いに向かつて突進した。

## 第八章 1) 地下の倉庫

あの不気味な女性の泣き声について少しも解明出来ていないのに、また私の仕事に面倒なのが加わった。

女神探しである。

バルザ殿が蛮族の捕虜から聞き出した情報により、蛮族たちはこの塔の前の主が奪った女神像を取り返すため、この塔に襲撃をかけていることが判明したのだ。

それを返しさえすれば、どうやら彼らもこれ以上、この塔に来襲することは無さそうだという見込み。

そういうわけで早速塔中を駆けずり回り、それを探すことになった。

当然まず、それは塔の倉庫にあるだろうと検討をつけ、地下の倉庫に向かうこととした。

予め倉庫の責任者に女神の像のようなものに心当たりがあるかどうか聞いていたのであるが、芳しい答えは得られなかつた。それでこの日で直接確かめることにしたのだ。

まあ、まだ倉庫に行つたことはなかつたので、この塔の管理者として、そこをいつか見ておかなければいけないとは思つていた。調度良い機会ではあつたわけである。

地下の倉庫は中央の塔の地下の、廊下の突き当たりにあつた。

暗い廊下のその突き当たりだけ、赤々と明かりが燈つている。鋼鉄製の扉の前には一人の逞しい身体をした番人が立つっていた。

それぞれ切れ味鋭そうな槍を持っている。

私が彼らに近づいていくと、槍をクロスに交差させて行く手を遮つて来た。

「僕はシャグラントいう、さつきの塔の主、プラーヌスから許可があつたと思つけど

「伺つております」

鋼鉄製の扉の奥から声がした。

かと思うとその扉が開き、そこから丸々と太った男が現れた。

更にその彼の後ろを、その男とよく似た体形の子供まで出てきた。

彼らは私に向かつてとても丁寧に頭を下げてきた。

「私はこの倉庫の責任者です」

丸々と太った男が言つてきた。

「本来ならどんなことがあつても、塔の主以外にこの扉を潜らせるわけにはいきません。しかし主から直々に話しを伺つております。今回は特別にお招きいたしましょう」

倉庫の責任者はいささか勿体ぶつた物腰でそう言つてきた。何だか面倒臭そうな人だと思ったが、私もそれに合わせ、丁寧な口調でお礼を言つた。

しかしその倉庫は彼が勿体ぶりたくなる気持ちも理解出来る程、大袈裟な防犯体制が敷かれているようであった。

鋼鉄製の扉の奥に、更にそれよりも大きく頑丈そうな扉がある。そこには鍵が七つもかかっていて、丸々と太った倉庫の責任者がその鍵が全て開けるまで、蠟燭の半分が溶けるくらいの時間を要した。

慣れた手つきで鍵を開けながら、倉庫の責任者はこの倉庫の防犯体制について私に喋り続けてきた。

彼の家族は九世代も前から、その倉庫の責任者としてここで暮らしてきたらしい。

彼と、いざれ彼の後を継ぐこの息子、それ以外の一族は北の塔の地下の部屋に人質として軟禁されているのだという。なんと倉庫の物が一つでもなくなればその人質は全員処刑。そういう厳しい掟があるらしい。

「それは九代前からの決まりなのかい？」

私は彼の話に驚きながら尋ねた。  
何事もルーズな塔にしては珍しいことだ。まだまだ私はこの塔のことを把握し切っていなかつたようだ。

「はい、さようです」

「ほう、それは本当に厳しい掟だね」

私は彼とその家族の過酷な人生に心から同情した。

しかしだからって私にどうこう出来る問題でもない。九代も前に決まつた掟を、九代目の倉庫の番人が守っているということは、まだこの倉庫が盗みの被害にあつたことはないということだ。  
厳しいその掟はそれなりに有効的のようで、私なんかがそれを辞

めをせるわけにもいかない。

ようやく倉庫の扉が開いた。

倉庫は想像以上に広かつた、翼を広げたアリゴンをもつて、二匹収容出来るくらいの広さだ。

「おお、これは凄いね」

私は中に一歩足を踏み入れ、思わずそんな感嘆を漏らした。

「はい、一、二、三百人の重装兵团をすぐに装備せしめるくらいの用意はあります。それに武器だけじゃありません。馬車のワゴン、カバン、像や絵画、楽器から舟のオールまで何でもあります」

倉庫の責任者はまるで自分のコレクションを自慢するかのように、誇らしげに言つてきた。

塔の責任者の言葉通り、そこには武器や防具などがかなりの数収めてあるようだ。

それも錆びたり壊れたりしていそうなものはなく、かなづきさんと管理されている。

しかしその私のその感嘆も長くは続かなかった。

その広さのわりには、収められている物の数は少ないかもしれません。パツと見、まるで夕暮れどきの品薄になつた市場のような感じと言つたらいいだろ？

それこどりやう、そこはこれと云つて価値のある資産もないようであった。

いわゆる、プラーーヌスが気に入りそうな華麗な装飾品のたぐいは何一つ所蔵されている様子がないのだ。あるいはいわば武骨な実用品ばかり。

「女神の像は見当たらなかつたんだよね？」

私は改めて、確かめるよつて尋ねた。

「はい、ござこませんでした。それにそのような物をここに収納した記録もありません」

倉庫の責任者は弔子に手を落としながらやつて言つた。

「そりが、その言葉をもちろん信じるけど、しばらく自分で探してみるよ。もしかしたら何かの手違いがあつたかもしれないし」

そういうわけで私は女神像を求めて、その広大な倉庫を歩き回つた。しかしまあ、結局そこにそんなものはなかつたわけだ。

## 第八章 2) 前の塔の主の私室

せつかく私はバルザ殿に良いところを見せようと張り切っていたのに。

いや、プライヌスだつて蛮族の問題が解決することを心から待ち望んでいるだろ？

私が探していることを知らないだろ？が、何なら蛮族たちだつてそれを望んでいるに違いない。

女神像が見つかることは誰もが一様に心待ちにしていることなのである。邪魔する者などいはずの平和への道。

だけど倉庫で女神像は見つけることは出来なかつた。

私はしばらく途方に暮れた。倉庫になければ、他にどこにあるだらうかとしばりく悩んだ。

それで思いついたのがここ、前の主の私室である。

どういう動機で、はたまたどういう方法かもわからないが、蛮族から女神像を盗んだのは、この塔の前の主であることに間違いない。だったらその前の主の私室に大事に保管されてあるのではないか。そう考えて私は前の主の私室を探すことにした。

そこは西の塔の、プライヌスの書斎兼寝室の近くにある。この塔の隅々まで歩きまわっている私であるが、西の塔だけはこれまで一度も立ち入つたことがなかつた。

プライヌスは自分の部屋の近くをウロウロされるのを厭つたのだから、彼からそこを探査をする必要はないと言っていたからだ。

しかしこういう事情だと西の塔に行かないわけにいかない。プラーヌスから西の塔に入る許可を貰い、私は前の主の私室を探すことになった。

しかし結局、その部屋にもなかつたのである。

前の塔の主の部屋は広く、乱雑に散らかっていた。

魔法書や羊皮紙の束がうず高く積もれていて、たくさんの戸棚や抽斗のついた家具が並んでいた。瓶やら水晶玉やらも足の踏み場もないくらいに散らばっている。

私は出来るだけ念入りにそこを探したつもりである。

女神の像と言つてもそれはもしかしたら手の平より小さい物かもしれない。そんなことも念頭に入れて隅々まで調べた。しかしやはり見つからない。

「一度、じつくり前の塔の主の部屋は見たかつたんだ。僕も持っていない魔法の道具や、資料があるかもしれないからね」

一向に見つからないので少し苛々しながら探していると、プラーヌスがその部屋に入ってきた。

「おお、これは人体実験で得られた結果が事細かに記されているノートだ」

プラーヌスは部屋に入つてくるや否や、傍にあつた羊皮紙の束をめぐりながら嬉しそうに言つてゐる。

「なあ、プラーヌス、いくら探してもこの部屋にはなさそうだよ。魔法の隠し扉とかそういうのは考えられないものだろうが」

「それはないね。前の塔の主の魔法は、僕が正式に主になつた時点で全て解かれたから。しかし彼がわざわざ自分の宝石を使って、何か細工をしていたのならば別だけど、まあ、そんなこと万に一つもないだろう」

「だけどどうあれ、もう僕には見つけられそうにならないな。君の魔法でどうにかならないものだろうか？」

私はプラーーヌスに助けを請つゝうそう言った。

「無理さ」

しかしプラーーヌスは私の言葉をすげなく足蹴りした。「まあ、その女神に何らかの魔法がかかっているなら、それで見つかるかもしれない。でもそれがただの青銅の塊り何かに過ぎなければ、魔法では探せないね」

「そうか、残念だな・・・」

「力になれなくて申し訳ないね、シャグラン

「いいや、そんなこと・・・」

私はプラーーヌスらしからぬ言葉に少し驚きながらそう言った。

「しかしわからないのは、どうして前の主がそのような物を盗む気になったのかだ。もしかしてその女神はそんなにも貴重な物なんか？　だったら見つけることが出来ても、僕も返す気にならないな」

「おいおい、プラス！ 本気で言つてるのかい？」

「いや、冗談さ。しかし結局、彼はそんな物を蛮族から奪つたせいで寿命を縮めた。死にたくなければ蛮族にすぐに返せば良かつたはずなのに。それは死を賭けるに値するほどのものだということだ。シャグラン、君もそのようなものに興味が出ないか？」

「だけど・・・」

「まあ、あるいはこんな可能性もある。結局、前の主はちょっと前までの僕たち同様、どうして蛮族が襲撃をかけてくるかその理由を知らなかつた。だから返そつと思つ発想がそもそも湧かなかつた。いや、違うな」

プラスは首を振つて言つた。「いくら馬鹿でも、自分が蛮族からそれを奪つたのならそれぐらいの関連性には気づくな。だつたらこの女神が蛮族の物だと知らずに手に入れたのか・・・、いや、下手したら盗んだことにすら気がつかなかつた可能性もあるな」

「どうこいつ」とや？』

「だから前の主の氣づかぬ間に、それが塔の中にあつたつてことだ。しかしそんなことがりえるのだろうか？」

「訳がわからないよ」

「うん、僕もね。まあ、いずれにしろゆっくり探せばいいぞ。時間はたっぷりある。バルザ殿が番人としている限り、そのような物が見つかろうが見つかるまいが関係ないから」

「しかしプラス、確かバルザ殿はすぐにしていくかも知れない」と君は言ってなかつたつけ？」

まだバルザがここに来た間もない頃、プラスはいくらか深刻な表情でそう言ったのだ。私はそのことをよく覚えている。

「ああ、そうだつたね。かなり勘が良い御仁であることに驚いた、今でも疑つてゐるだらうね。だけどそれ以上に彼は用心深い人間もある。まだすぐに出ていかないと、何かよほどの材料を得ない限りには」

プラスはそのようなことを言つて、また目の前の羊皮紙の束に視線を落とした。「これは凄いぞ、シャグラン、前の主はかなり人体実験を極めていたようだ」

「やめてくれよ、プラス、君までそのよつなことに手を出すのは」

プラスは思ったほど女神像探しを焦つていないようだ。蛮族がいくら攻めてこようがバルザ殿に撃退させればいいと考えているようである。

しかしプラスはそれでいいかもしけないが、バルザ殿たちにすればそうはいかないだろう。

彼らは命を賭して戦つてゐるのだ。

少しでも油断すれば命を危うくする。戦いがなくなればそれに越したことはないに違ひない。

それにこれは無益な戦いだと判明した。これ以上、殺し合いはたくさんのはずである。

そういうわけでプラーヌスのように私はのんびりしていられなかつた。

それからも女神像のありそうな場所を必死に考え、そこに足を運び、床板を剥がす勢いで隅々まで探した。

しかしやはりそれらしきものは見当たらない。

そんな頃であつた。バルザがこの塔から出ていったのは。

バルザ殿は用心深いから何とか言つて、ここからすぐに立ち去らないと言っていたプラーヌスの予想はあつさり外れたのだ。

## 第八章 3) 出会えただけの奇跡

バルザ殿がプラーヌスと会わせて欲しいと私に頼んできたとき、私はすぐに嫌な予感を覚えた。

バルザ殿の表情はいつでもシリアルな雰囲気を湛えているが、そのときは更に深刻さを帯びていて、何か悲壮な決意を胸に秘めている感じが見て取れたのだ。

その旨をプラーヌスに伝えたあと、私はバルザ殿と最後の別れをしようと塔の入り口辺りで待っていた。

バルザ殿の強さに魅せられているアビュにも声を掛けてやつた。

アビュは私の知らせに非常にショックを受けたようで、しばらく私を嘘つきだと罵ってきた。

しかしバルザ殿の置き手紙を読んでそれを知り、続々と集まってきた傭兵たちを見て、彼女もそれを受け入れたようだ。

「短い付き合いだったね。本来ならこんな田舎の塔にやつてくるような人じやなかつたんだよね？」

アビュは呆然としながら言つた。

「ああ、彼はとんでもない英雄なんだ。出会えただけで奇跡だつたんだよ」

傭兵たちも泣いていた。中には泣き叫びながらバルザ殿のつれなさを罵る者もいた。

誰もがその突然の別れを到底受け入れられないといった表情である。

今、プラークスの塔はどこに港よりも悲しい別れの場にならつとしている。

しかし当のバルザ殿は、私たちの前に一向に現れなかつた。

私たちはさすがに待ち疲れ、そして悲しみ疲れた。その後、どうしてバルザ殿はここに現れないのかを訝り、その理由を口々に話し合つた。

もしかしたらバルザ殿は寸前で考えを翻してくれたのかも知れない。

そういう希望的観測も出た。

それだつたらプラークスに感謝しなければいけない。きっと彼が説得してくれたのだから。

あるいは他に出口がないわけでもないから、そこを出たのかもしれないという意見もあつた。

バルザ殿は照れ屋なので私たちが大挙して待つてゐる前を通るのを避けたのではないかと。

しかしそうだとしたらバルザ殿はあまりに水臭い。

いづれにしろ私が代表してバルザ殿のことを尋ねに、プラークスのもとに向かうことになった。

アビュも傭兵たちも、すがりつくような眼差しで私を見送つてくる。彼らは私が携えて帰つてくる答え次第で、一安心出来るか、地獄に墮とされるかであろう。

## 第八章 4) プラーヌスは何やら陰鬱な顔で

その日、あの女性の不気味な泣き声がやけにひるむとかつた。いつもは気がつけば泣きやんでいるのに、しつこい雨のようじつまでも泣きやまない。

しかしこのときは、そんなことよりもバルザ殿のことが気に掛かつた。

いつもその泣き声が聞こえるだけで背筋に冷たいものを感じるが、今は風音か虫の音のように、私の耳の中を自然に通り過ぎていく。

謁見の間に向かうとプラーヌスは何やら陰鬱な顔で玉座に座つていた。

愛用のロッードは大理石の床に無造作に転がっている。

プラーヌスにも間違いなくその女性の泣き声は聞こえていたはずだ。しかしつもなら不機嫌な顔で、さつさとこの声をどうにかしろと言つてくるプラーヌスもそれどころではない様子で、何か違うことに深く気に取られているようであった。

「プラーヌス、少しいいかな？」

私はそんなプラーヌスを怪訝に思いながら彼に近づいていった。私の足音と声がホールに反響する。残念ながらそこにバルザ殿はいなかつた。広大な謁見の間に私とプラーヌスだけだ。

「ああ、シャグランか、もう夕食の時間なのかな」

プラーヌスが言つてきた。

深刻な表情をしていたが意外と声は穏やかであつた。それで私は

少し安心した。

「違うよ、それには少し早いだろう。ただバルザ殿が君に何の用だつたのか知りたいのさ。彼は出ていく気だつたんだろ？ 彼の部下たちは最後の挨拶をしたがつていたんだけど……」

私はプラスの発する雰囲気を見て、彼が到底バルザ殿の引き留めに成功したのではないことがわかった。  
どうやらバルザ殿は既にこの塔にいないに違いない。

「彼は出ていったよ。これからまた代わりの番人を見つけなればいけないことになつた。またゼロからのスタートだ」

プラスはうんざりしたようにそう言いながら椅子から立ち上がり、自分のロッドを拾い上げた。

「出ていったって、でもどこから？ 僕たちはずっと塔の表の出口の前にいた。彼は裏口から出たのか？」

「ああね、そんなことまで僕が知るわけがない。とにかくここにはいない」

プラスはそう言って、まるで出ていったバルザ殿の姿を求めるように窓のほうに視線をやつた。

私も彼の視線の先を辿つて、塔の下に広がる森を見た。  
しかしもちろんバルザ殿の姿は見えない。

「どうして彼は出ていてしまつたんだよ？」

バルザ殿がこんなに早くこの塔から出ていてしまつたのはプラ

一ヌスに問題があるのは間違いない。

私はそのことを責めるより、思い切ってそんな質問を彼に投げかけた。

「それについては詳しく述べないな、シャグラン。かねてより僕が察じていたことが起きたということくらいしかね」「

プラーヌスは私のほうに向きなおり、意味深な笑みを浮かべながらそう言つてきた。

その笑みを私は何度も見たことがある。

伝説の騎士、バルザ殿がこの塔の門番などを勤めるわけがないではないかと私が反論する度、プラーヌスがそんな私を馬鹿にするように浮かべてきた笑みだ。

「バルザ殿のことに関しては秘密だらけだね。結局、最後まで訳がわからぬままだった」

私は憤るよつとそう言つた。

「仕方ないさ。知らないほうがいいこともある。しかしこのタイミングで出でいかれるとは思わなかつたことは認めるよ。僕は油断していた。ここは外界から閉ざされた環境だからね。用心深い彼が確信を得る材料を得るなんて思つていなかつた。なあ、シャグラン、ここ最近、バルザ殿に何か変わつたことはなかつたかな？」

まだ問い合わせるように彼を見ていた私に、プラーヌスが逆に尋ねてきた。

「変わつたことだつて？ もう、さあ、そんなのわからないよ、特

になかつた気がするけど・・・

「例えばこの塔に旅人が来たり、バルザ殿を尋ねる者が来たり」

「わからないな、彼と顔を合わすことはそうないから。僕が知らないところで何かあつたかもしないけど」

「今思えばバルザ殿が蛮族の捕虜を捕えて、尋問したのはおかしな行動だつたと思わないか？ 嫌に職務熱心になつたと僕は驚いていたんだが、あれが一種の前兆だつたのかもしない。彼は出でいくことを決めたから、あのような行動に出たのだ」

プラーヌスは眉に皺を寄せてそんなことをつぶやいた。

私からすればそのような行動のどこに問題があるのかという感じである。そんなことに違和感を抱くプラーヌスのほうがどうかしているとしか思えない。

しかしあの尋問のことと思い出すことがあった。

「そういうえばあの尋問の日の前日、この塔に旅芸人の一団が来たね」

さして重要だと思えなかつたが、私は思い出したのでそう言つた。もうかなり前のことだから、今日のことと関係はないだろう。しかしこの塔に外部の人間が来たことといえば、私の知る限りそれくらいだ。

「旅芸人だつて？」

しかし私の予想に反し、プラスは私の言葉に引っ掛かるように声を上げた。

「あ、ああ、街から旅芸人の一団が来たんだ。プラス、君は部屋に籠つていたけど、劇をやつたり、音楽を奏でて踊つたりして夜中騒いだ」

「ああ、召使いたちが祭りの日とことど一休養を願い出た日があつたな。あの日、街から劇団が来ていたのか？」

プラスが驚くようになぞり言つた。

「うん、しかもちょうど僕たちが街で観たのと同じ劇団が来たんだよ。まあ、偶然というより、この辺りで旅の劇団と言えば彼らしかいないのかもしれないけど」

「何だつて！」

こんなに驚いたプラスを見たのは初めてかもしれない。いつでもクールで冷静な彼が、後ろから「ワッ」と言われた子供のように驚いているのだ。

しかしここからは、どの言葉で驚いたのかわからなかつたぐらいだつた。だつて何も驚く様な事を言つた覚えはないのだから。

「その劇団はどんな出し物をしたか覚えているか？」

プラスが私に掴みかからんばかりに尋ねてきた。

「もちろん覚えている。僕たちがあの日、街で観たのをまるで同じ劇だよ、何だつけ？ 題名は、確か・・・」

「悲しきハイネの物語？」

「そう、それだよ、間違いない」

「そ、そ、うか、・・・なるほどね、これで一つの謎は解けた」

先程まで驚いていたプラスが今度は声を上げて笑い始めた。余りのプラスの気分の変転ぶりに、今度は私が驚かされる番であった。

「しかしこうすることもあるものなんだね、もしかしたら本当にルヌーヴォの神は存在しているのかもしないな。それでこのよつな皮肉な運命に弄ばれる僕たち人間を見て楽しんでいるのかもしない」

プラスはまだおかしさを抑えきれないといった感じで、笑いながらそう言った。

「なあ、プラス、これはそんなに驚いたり、笑えたり出来ることなのか？」

「ああ、これがどれだけ皮肉な偶然か、君に教えてやりたいぐらいだよ。これが出来ないのが残念だ」

プラスがまた意味ありげなことを言って私を煙に巻いてきた。私は真っ暗な迷路の中に置き去りにされたような気分で、力なくプラスを見つめた。

プラスのこの秘密めいた口ぶりにはもううんざりだった。

まるで一人前の大人として扱われていない気分にされて惨めになるのだ。

それならいつそ何も言わないで欲しい。ここには秘密がある。しかし以前にはそれは言えない。そんな態度を取られると不快で仕方ない。

そのとき塔の窓の外から、馬蹄の響きと鬨の声が、風に乗つてかすかに聞こえてきた。

私とプラスは同時にそれに気づいた。

見張り台のほうからも鐘の音の鳴る音が響き始める。もう何度も聞き慣れている。蛮族襲来の報せだ。

「どうする、プラス、バルザ殿はいなくなつたんだろう？」

私は慌てて彼を見た。

「ああ、しかしそうまだ彼の鍛え上げた部下がいるだろ、奴らを向かわせるんだ」

プラスはそんなこと言つまでもないといつた態度で、塔の見張り台に向かつて歩いていった。

そこから塔の眼前で繰り広げられる戦いが見渡せられる。バルザ殿のいない部隊の戦い振りを見るようだ。

「いわば五十人程の部隊から、たつた一人が抜けただけだ。問題なく戦えるだろ？」

プラスは言った。

「でもバルザ殿の置き手紙に、彼らだけで戦うのは控えるように

書かれてあつた。彼らだけではいつか負けると

「だとしても、そんなことが許されるわけがないじゃないか。僕に殺されたくなかったら戦うように命じてくるんだ、シャグラン」

「だけど！」

しかし私のそんな危惧をよそに、傭兵たちはそのバルザ殿の意向を無視することに決めたようだ。

私たちの眼下に武装した傭兵が次々と現れ、整然と隊列を組んでいく。

彼らはバルザ殿抜きでも戦うつもりのようであった。

「彼らは君よりもずっと勇氣があるようだな

」 プラーヌスは私を馬鹿にするように呟いた。

それなら私も黙つて彼らの戦いを見守ることにしよう。

これまでこの部隊は蛮族に圧倒的に優位を示してきた。確かにバルザ殿が一人抜けただけで、負けることはないのかもしれない。

これまで副長だった者がバルザ殿に代わり、新たにこの部隊の隊長を勤めるようだつた。

バルザ殿がいなくても士気は高いのか、掛け声がここまで聞こえてくる。むしろ彼らはバルザ殿がいなくても自分たちは戦えることを示したいのかもしれない。

隊列を組み終えた部隊は、その新たな隊長の指示のもと、襲来していく蛮族に向かつて突進していった。



## 第八章 5) 虐殺の戦場

しかし私たちの予想を覆るような戦況がもたらされることになる。

初めはこっちが優勢だった。

整然とした隊列は崩れることなく、次々と蛮族を打ち取つていった。

まあ、確かにバルザ殿のいない部隊はいつもの戦い方をしていかつたと思う。

バルザ殿が指揮しているときは、敵が勢い良く向かってくると軽やかにかわし、敵が怯むと一気に襲いかかる。

見ているだけでも力量の違いがわかる戦い方で、結果的にこちらの被害を最小限に抑えて圧倒的な勝利を収めていた。

一方、この部隊は敵に真っ向からぶつかっているようだ。

そのせいか味方の兵も負傷して倒れる者が散見された。細やかな駆け引きなどせず、とにかく強い者が勝つという戦い方。

だけどその分、勝負は早々につきそうであった。

わが軍は物凄い勢いで、こちらよりも数の多い相手に押し勝つている。この部隊はバルザ殿がいなくとも充分に戦えることを証明するのかと思われた。

だけどそんな戦況が少しずつ変わつていったのだ。

まず部隊を指揮していた元副長が蛮族の矢で負傷した頃から様子は変わつた。

彼は落馬して身体を強く打ち、意識を失つて倒れ込んだ。味方が

助けに入り、何とか敵の渦に巻き込まれずに済んだが、その辺りからこちらも押され始めた。

その戦いを高いところから見下ろしていたせいか、その様はよく見て取れた。

それを期に勢いを盛り返した蛮族を前に、わが軍は少しずつ押されていく。

じりじりと後退する彼らはまだ良かつたようだ。だけどひとつたび一角が崩れると、あっという間に全軍の統制が失われた。

そこからは本当に脆かった。

陣形は乱れ、もう戦うという状況ではない。ただ虐殺から逃げ乱れているだけという状態。

「プラーヌス！　このままでは」

彼もそんなことは充分に承知していたようだ。

私がそう言うよりも早く、魔法の言葉をつぶやき私の前から消えていた。

一瞬の後、プラーヌスが現れたのは戦場だ。蛮族たちがこれまでの鬱憤を存分に払おうと、わが軍の兵を虐殺している現場。

プラーヌスはそこに現れ、魔法で蛮族たちを殺していった。しかし彼もかなり苦労しながら。

巨大な炎や雷などでは、味方も同時に傷つけてしまつやつだった。彼はそれに気をつけながら、蛮族たちを一人ずつ殺していく。それでかなり時間がかかったが、蛮族たちを何とか撃退待ってきた。

生き残った兵も命からがら塔の中に逃げ込んできた。



## 第八章 5) 医務室の惨状

その後の塔の医務室は惨禍を極めた。血の匂いと、傷の痛みに呻く声が辺りに充満して、私はとても平静ではいられなかつた。

そしてこの悲惨と呼応するように、あの女性の不気味な泣き声が聞こえてくるのだ。

まるでその女性は、どこかでこの塔の光景を見て、そのあまりの光景に嘆いているよう。

私はもう精神がどうにかなりそうであつた。

出来ればそこから逃げ出したかつたぐらいだつた。

しかし看護人よりも怪我人の数が圧倒的に多く、私の手ですら必要とされた。もちろんアビュもフローリアも他の看護人たちと共に働いている。

怪我人は医務室に入りきらないから廊下にそのまま寝かされている。

老医師ミオンは老体に鞭打つて必死に駆け回り、少しでも助かりそうな見込みの兵に治療を施している。しかし彼の表情は暗く曇つていいくばかりだった。簡単に言えば、さつきまで怪我人だった兵が次々と死んでいくからだ。

「おい、シャグラント言つたな」

老医師は私を呼びつけた。「こいつの身体をしつかり押さえておけ」とベッドの上に寝ている一人の怪我人を指差した。

「は、はい」

この兵も痛みと死の恐怖に震えていた。

何とか助けてくれと、すがりつく様な眼差しで私たちを見ている。しかし私はその助けに応えられるかどうかわからないから、彼から目を逸らさざるを得なかつた。

「おい、シャグラン、これを見ろ」

老医師はこの怪我人の血だらけの足を指差した。「このままでは右足が腐つて蛆が湧く。命を助けるためには切断せざるを得ない」

「切断だつて？」

私は当惑しながら尋ねた。

当の怪我人もその言葉が聞こえてようだ。切断という言葉を聞いて、どこからそんな力が出るのか、ベッドを飛び出そうとした。私は慌てて彼を抑えつけた。

「大丈夫だ、既にこれだけの怪我だ。神経も麻痺している。今更、足を切断するくらい痛くもないだろ」

老医師はそう言ってその患者の口をじごじ開け、ガブガブとワインを飲ませ始めた。

「更にお前は酔っぱらいだ。もう何も恐くないぞ」

「い、嫌だ！ もうこれ以上痛い思いをするのは・・・」

その兵は哀願するように言つてきた。

「死にたくなければ我慢するしかない。いくぞ！」

ミオン医師の持つた鋸は既に彼の足を切り裂こうとしていた。

やはりウイスキーぐらいでは痛み止めにはならなかつたようだ。鋸が刺さつた瞬間に患者は悲鳴を上げた。

私は何とか押さえつけようとするが、元々身体の大きい兵士である。

いくら大怪我をしていても力は私よりも強かつた。更に手負いの獣のように死に物狂いで暴れてくるから到底押さえ切れない。

「ちくしょう、だ、誰か」

私は何とか男を押さえようとしながら、手の空いている刃使いか、傷の浅い兵士の姿を探した。

しかし周りにいるのは包帯だけの怪我人か看護士の女性だけだ。私を助けてくれそうな者はいない。

「少しの我慢だ、それであんたは助かるんだ！」

私は男にそう言い聞かせようとするが、男の力は強まるばかり。逆に私がベッドに捺じ伏せられそうな勢いであつた。

しかしそこにフローリアが来た。

「大丈夫よ！」

彼女はそう言ってその兵士を抱きしめた。

それでも男は暴れ続けた。振り回した手がフローリアの顔に当たる、髪の毛が乱れる。

しかし彼女は臆せず、その男を抱きしめ続けた。すると男はよう

やく自分の前にいるのが女性だということに気づいたのか、乱暴に暴れるのをやめた。

「フ、フローリア……」

私は彼女の振る舞いに困惑わざるを得なかつた。しかし一步身体を退いて、そこは彼女に任せることにした。

「大丈夫よ、少しの我慢じゃない」

フローリアはまるで聞き分けのない幼い子供に言い聞かせるように、背中や頭を撫でながら兵士にそう囁いた。「あなたは勇氣があるわ

「い、いや、無理だ！ もう死んでもいい、早く楽になりたいんだ！」

「駄目、あなたは生きるのよ。あなたの代わりに大勢の味方が亡くなつたのに」

「知つてるよ、それくらい、でもそんなの俺が悪いわけじゃない！」

「

兵は泣きながら言つた。「バルザ様が俺たちを見捨てからだ、どうしてバルザ様は俺を見捨てたんだ？ ……」

そうだ、兵士たちの絶望には、ただ戦いに負けた絶望だけでなく、バルザ殿に見捨てられたという絶望もあるのだ。

彼らはその事実に戸惑い、やり切れなさを覚えていく。

「誰もあなたを見捨てはしないわ、バルザ様だつてさう」と

しかしそんな男を叱りつけるようにフローリアが言った。「バルザ様がそのような人じやないことはあなたが一番よくわかっているんじゃないの？ もうと何か事情があるのよ」

フローリアはバルザ殿のことをほとんど知らないはずだ。これまで接点などなかつたのは間違いない。

しかしこの男の絶望の源を察知したのか、彼を励ますようにそう言った。

「・・・そ、そうだ、た、確かにあのバルザ様に限つて俺たちを見捨てるなんて」

「あなたが死にたいなんて言つて泣くと、バルザ様はがっかりされるわ」

「ああ、バルザ様、帰つてきてくれ・・・、それで俺たちの仇を討つて下さい」

「バルザ様はきっと帰つて来るわ、それまで生きてないと！ みんな、あなたに生きて欲しいの」

「で、でも・・・」

その兵は私たちを見回してきた。私も老医師もフローリアの言葉に同意するように頷いた。

「・・・ずっと手を握つていってくれよ」

男は覚悟を決めたよつてひやうて、フローリアの手を握った。

「もちろんよ」

フローリアはせり言つて、彼の手をもう片方の手でも包み込んだ。

「おお、とても柔らかい手だ・・・」

男はその感触を味わつて、手をつむった。

彼はその感触が気持ち良いのか、幸せそうにニヤニヤと微笑み出した。

男はふと口を開けて、彼女に言った。「あんた、フローリアだろ？」

「そう、フローリア」

フローリアは老医師に合図を送つた。老医師は鋸の歯を男の足に入れた。男は痛みに叫んだが、もう慣れなかった。

気がつけばあの女性の泣き声も止んで、塔は不思議な静寂に満たされていた。

## 第八章 6) 女神に勘違いされた少女

「フローリア、俺の手も握ってくれ！」

「フローリア、俺も優しく慰めてくれ・・・」

「フローリア、あんたはまるで俺の故郷の母みたいに優しいな・・・」

怪我人たちは皆、フローリアを求めた。死んでいく者も、さつきの男のように痛みに耐えなければいけない者も。

しかしフローリアのお陰で、さつきまで苦しみと怒りと呪詛だけしか聞こえなかつたこの場所が、安らぎと優しさと、甘い思い出に満ちた場所に変貌したのだ。

私はフローリアの不思議な力に気づかざるを得なかつた。

フローリアはただ美しいだけじゃない。

いや、そんなのはただ彼女の表面的な特性の一つに過ぎないのだ。兵士たちは死の床で、美しいだけの女性に優しさを求めているわけではなさうだ。

彼女には人の心を根底から安らかにする何がある。

それは超自然的な域に達する何か。例えばとてつもなく透き通つた泉に感じる清らかさとか、聖地に聳え立つ大樹を見て覚える敬虔さとか。そういうものの前に行くと誰もが自然に感じるあの安らぎに近いもの・・・。

いや、確かに私はずっと前からフローリアの美しさに魅せられている。

そのせいであまりに過大な評価を下しているのかもしれない。しかし以前の、グロテスクに改造された人たちへの対応、そして今現在、死の淵にいる兵士たちの様子を見ていたら、そのようにしか考えられないのだ。

「はあーは

アビュがため息をつきながら私の横に座ってきた。「凄いわ、フローリアさん。もう対抗するの、やめる」

「対抗つて何さ？」

私は笑いながらそう答えた。

「だつて私とは別種の人間みたい。何て言つか器の大きさが違うわ、あんな真似、私に出来っこないもん」

「君もこの大変な中よくやつたよ」

戦いが終わってから日が暮れ、もうそろそろ新しい太陽が昇ろうとしている。私たちは一睡もせず、夜を徹して怪我人たちの看病をしてきた。

その中で安静に眠り始めた者もいれば、静かに命が尽きていった者もいた。

そんな中、アビュは気丈に振る舞っているのは間違いない。昨日

まで軽口を交わしていた相手が苦しみながら死んでいくのに立ち会つてゐるのに、彼女は逃げ出さずにいるのだ。それだけでも凄いものだ。

「そつ言つてもらえると嬉しいわ。でもフローリアさんと比べると話しにならない。誰も私のこと見てないもん。みんな、フローリア、フローリアって……」

確かにアビュの言つ通り、この空間はフローリアの慈愛に支配されているようで、誰も介入出来る余地はなさそうだった。アビュだけではなく、他の看護人たちも蚊帳の外に追い出されている。元々彼女に好感を持つていなかつた看護人たちは、本当に苦い顔でフローリアを見ていた。

「あなたたちが来てから毎日色々なことが起きてる気がする。前まではもっと、穏やかだったのに」

アビュが疲れ果てた表情でそつ言つてきた。  
その声にはいくらか私を責めるようなニコアンスが込められてゐる気がした。

「確かに僕とプラーヌスはこの塔に災厄を運んで来たのかもしけないな」

私は頷きながらそつ答えた。

「ううん、あなたは違つと思つ。でも……」

災厄を運んできたのはプラーヌスだけだ。そつ言つたげにアビュは黙つた。

アビュの気持ちもわからないではない。

策划が最初から蛮族たちの相手をしていたら、このような悲惨な結果にはならなかつただろう。

この塔は彼の塔なのだ。彼が命を削つてでも守らなければならないはず。

しかし策划だけを責めるのはやはり酷だ。

そもそも蛮族が襲来していたのは前の主の代からなのである。その原因を作つたのだつてその男だ。

前の主が蛮族から女神像を奪わなければ、こんなにも血生臭い塔にならなかつたに違ひないのだ。

私は策划の名譽のために、その事情を簡単に説明しておいた。アビュは私の言葉にあまり納得したようでもなかつたが、渋々頷いた。

「じゃあ女神像さえ見つければ、もつこんな戦いは終わるつてこと？」

私の説明を受けて、アビュが尋ねてきた。

「ああ、そうだね」

バルザ殿がこの塔を去つてしまい、それを探すのは急務になつただろう。

策划もきっと気が変わつたはずだ。このままでは策划も自ら蛮族を撃退しなければならなくなるのだ。

早く女神像を見つけるんだと私を急かすに違ひない。

しかし今夜もこのまま一睡も出来ないとなると、夜が明けてもすぐにあるを探す気にはなれない。

しかも女神像がどこにありそつなのか、もはや見当もつかないのだ。私は既に万策尽き果てている。

「それってどんなの？ 私も一緒に探そうか？」

諦めていた私を励ますようにアビュはそう言つてきた。

「ああ、有難いね、だけどよくわからないんだ。蛮族の捕虜が言うには、女神像とはこの世で最も清らかで美しいものだつて話しだけど……」

そんな説明、あまりに漠然としている。どんな形をしているのかを教えてくれればいいのに、その捕虜も見たことがないのだろう、いくらバルザ殿が尋ねてもそんな言葉しか引き出すことができなかつた。

大きさも、形も、材質も何もわからない。

「女神っていうからには、女人の像なんでしょう？」

「そうだろうね」

「でもこの世で最も清らかで美しいものって」

アビュはそう言つて少し口籠つた。何だか自分の思いつきこまゝつづくよつて。「何て言つかるんで……」「

私はそんなアビュの様子を見て、彼女がこの先を続ける前にハッとした。

アビュが何を言おうとしたのかピンと来たのだ。

「まるでフローリアさんみたいね」

そう、私もそれを考えていたのだ。

美しくて清らかなもの、それはまさに今夜のフローリアそのものではないか。

私はそんな思いつきの確かさを確かめるように、患者たちの面倒を看ているフローリアのほうに視線をやつた。

彼女は気丈にも疲れた様子を見せず、まだ一つ一つベッドを廻り、彼らの手を優しく握つてやつている。

彼らにとってフローリアは美しくて清らかな、まさに女神に違いない。

もしかして蛮族が求めている女神とはフローリアではないのか？

私は一瞬、本氣でそう思った。

しかしさすがに、そんなことがありえるわけがないだろう。

私は自分のあまりに突拍子もない思いつきに苦笑いしながら首を振つた。

彼女は普通の人間ではないか。私と同じ言葉を話し、同じように食事をし、汗をかいっていた。そんなフローリアが蛮族の求めている女神だなんて。

「まさかね」

アビュも自分の言葉に苦笑いしながらやつぱり言つてきた。

「ああ、まさかね・・・」

私もそれに同意した。

フローリアが私たちの話題が彼女のことについて話していくことに気づいたのか、もの問はずな表情でこちらを見てきた。

私たちはフローリアを女神のようだと尊んでいたなんて言つわけにもいかず、困ったように苦笑いを浮かべた。

## 第八章 7) 女神への嫉妬

フローリアはさつきから少しも休憩せずに、甲斐甲斐しく患者たちの面倒を看ている。

私はもう疲れの限界に来ていた。起きているのもやつとのよう状態だ。フローリアだつてそうだろう。

「フローリア、疲れただる、もう眠つたほつがいい」

私はフローリアの傍まで行き、そう声を掛けた。

彼女の近くにまで行つて改めて彼女の体温を感じたり、汗の匂いなどを嗅いだりしたら、いかに女神なんて考えが馬鹿げた思い込みであるとわかるだらうと思つたのだ。

やはり彼女もさすがに疲れているようだつた。

かすかに息使いの乱れを感じたし、顔色も青白い。

これまで最も働いてきたのは老医師とフローリアなのだ。

老医師は眠つてゐるが、彼女は変わらず動き回つてゐる。これで疲れるなと言つまうが無茶であろう。

だけどそのよつに疲れが顔に出てゐるフローリアを間近で見て、間違ひなく彼女が人間だという事実に私は安心した。

もし女神であつたなら、フローリアは今でも涼しい顔をしていたに違ひない。でも彼女は疲労の限界に近つようである。私はその事実に安堵感を覚えたのである。

「フローリア、やはり休んだほつがいい」

私は改めて言った。

しかしフローリアは私の言葉に静かに首を振った。

「大丈夫です、少しでも役に立てるなら、この程度の疲れは「でも君は前にも倒れたじゃないか。まだ完全にあれが治りきっていないかもしないのに」

それでもフローリアは首を振っている。

このように頑な女神なんていらないだろう。これは自分の限界を知らない子供の行いではないか。

「い、いいよ、や、休んでくれ」

私とフローリアの遣り取りを聞いていたのだろう、フローリアに手を握られながらベッドに眠っている患者が、傷の痛みに顔を顰めながら言った。

「で、でも」

フローリアが言った。

「も、もしあんたに倒れられたら、俺たちは完全に生きる気力を失うよ。なあ、みんな？」

その声はあまりに小さかったので、彼のすぐ下、ベッドが足りなくて床に寝かされている兵にしか聞こえなかつたようだ。

しかしその兵も苦しげに同意した。「ゆっくり寝てくれ……、そしてまた明日、会いに来てくれればいい

「そ、う、さ、フローリア、もう孤独で悲しい夜は終わったよ、夜明けはすぐだ」

私がそう言つてもフローリアはまだ首を振つていた。しかし私は少し強引にフローリアを部屋に下がらせることにした。椅子の上で欠伸をしているアビュも一緒に部屋から出した。

医務室に残つたのは私と元から看護士を勤めている者だけになつた。

看護士はアビュやフローリアほど職務熱心でもないから、その辺りで疲れ果てて既に眠つている。私も彼らと同じように眠ることにした。

少し強引にフローリアを部屋に下がらせたのは、彼女の健康を思いやつたのはもちろんだが、もしかしたら嫉妬の感情もあつたかもしれない。

こんな美しいフローリアを独り占めにしている患者たちに、私は情けないことに妬いていたのだ。

もはや私はフローリアという女性の虜になつていることを認めざるを得ないだろう。

私はまだまだ彼女のことを何も知らないが、もつともつと彼女のことを探りたいし、傍にいたいと思つのだ。そしたらもつと、彼女の魅力に気づくことであろう。

そんなだからもしフローリアが女神だつたりなんかしたら、私のジェラシーは果てしないものになるに違いない。

だってそうなると、フローリアを蛮族たちに返さなければいけな

いといつになるとなるのだから。そんなことに私は耐えられそうにな  
い。

まあ、しかしそういふことはあり得ないことだらう。

フローリアが女神なんて考えが改めて馬鹿馬鹿しく思われた。

だいたい私には女神というものがどんなものか見当もついてない。ただ「美しくて清らか」というフレーズに引っ掛かっただけに過ぎない。その思いつきにはとんでもない飛躍があるであらう。

疲れていた私はすぐに眠りに落ちた。

朝が来て、老医師や看護師たちが働き始めても、しばらく眠り続  
けていたようだ。私が起きたのは、塔の門番から来訪者が来たとい  
う報せを受けたときだ。

門番は床の上でだらしなく眠っている私を起こして叫びてきた。  
バルの国からバルザ様の腹心であつたと名乗る五人の騎士がやつて  
きたと。

## 第八章 8) 五人の騎士

私は寝起きのまま、顔も洗わずに、急いで塔の入り口に走った。

バルの国からバルザ殿を尋ねてやつてきた騎士だつて？

私はこの言葉の響きに、直感的に不吉さを感じた。

まずフラー・ヌスにそのことを報せたほうがいいのではないかと思つたが、まだ彼を起こすには早過ぎる。

「これくらいの事情で僕の生活サイクルを乱すなよ、シャグラーン」と叱られるかもしれない。

何か嫌な予感を覚えながらも、とはいえ私はこの事態がどれくらいの緊急性を要しているのか計りかねたのだ。

いざれにしろ密を待たずわけにもいかないだらう。まず彼らを迎えて塔を駆け下りた。

門番の言う通り、五人の騎士が塔の外に直立不動で立っていた。誰もが身分の高そうな騎士であった。

バルザ殿も装着していたような白銀の鎧を彼らもまとっている。しかしその鎧は傷つき汚れていた。今まさに戦場から落ち延びてきたといった格好。その顔も、何日も満足に食事をしていないのか、やつれ果てている。

私が彼らに近づいていくと、その騎士たちの中でおそらく最も年嵩の者が一礼してから言つてきた。

「私たちはバルザ様の腹心であつた。ある旅芸人の者に聞いたの

だが、ここでバルザ様が働いておられる。その真偽は如何に？

「バルザ殿ですか・・・」

私のこの事実を正直に認めていいものか迷った。

プライムにはつきり聞いたわけではないが、どう考へてもバルザ殿がこの塔の門番であったことは秘密である。

それどころかそこに何か後ろ暗い事情があるのは間違いないのだ。

しかし騎士たちの血走った眼差しと、有無を言わさぬ迫力に負け、私は嘘を言つ氣になれなかつた。

「確かにバルザ殿はこの塔にいました。しかしちょうど昨日、この塔を去りました」

私は出来るだけ彼らを刺激しないよう、さういつとさう言った。

「何だつて？」

しかし騎士たちの反応は凄まじきものがあつた。

「やはつこの塔にいたのか？」

と、一人の騎士が声を張り上げてきた。

「どうしてバルザ様がこんな片田舎の塔におられたのだ！　いや、それよりバルザ様はどこに行かれた？」

また別の騎士が私に詰め寄つてくる。

「答え次第ではその細い首を叩き斬るぞ!」

更に剣の手をかける者までいる始末。

「いや、・・・、その辺りの事情は私もよくわかりません、詳しいことはこの塔の主、プラーヌスに聞いて頂かないと・・・」

「ではその主とやらに会わせて頂きましょう

他の四人に比べると少しほは落ち着いていた年嵩の騎士がそう言つた。

「わ、わかりました。しかしそうまだ彼は眠つてゐる時間です。しばらく待ち頂かないと・・・」

「何だと! 眠つてゐるだと!」

また私の言葉が騎士たちを激怒させたようだ。

「もう太陽は昇つて数刻経つておる。一体いつまでその主は惰眠を貪つてゐるつもりなのだ!」

「その主、己はベッドでぬぐぬぐと眠り、我々騎士を野晒しで待たすつもりなのか?」

「いったい、ここまで我々はどうくらゝ苦労してやつてきたと思つてあるのだ!」

「もうすぐ我々の兵、百数十がここに辿り着く。こんな塔、一瞬にして打ち崩せるだけの軍であるぞ!」

「わ、わかりました。では塔の主を叩き起ししてまいります」

もう自分の力だけでは彼らの相手は出来そうになかった。彼らは最初から敵意を持つてこの塔にやつてきたようなのだ。もはやフランス人に任せることはない。

「しかしながら、急な来客でござります。しばしお持ち下さい。その間、こんな片田舎ではろくな歓待も出来ませんが、少しの食事と飲み物を用意させます。それを召し上がって下さい」

食事と聞いて彼らの表情はいくらか緩んだ。やはり飲まず食わずで、ここまでやつってきたようだ。

「わかつた、その言葉に甘えさせていただく。その間だけ少しだけ待つことにしよう。しかしどのような事情であろうと客を待たせるなど礼を失していくことだけは伝えたい」

年嵩の騎士が言った。

「わかつました。では塔の中に入り案内いたします」

## 第八章 9) 寝起きのプラーヌス

出来るだけ多くの食事を騎士たちに用意して、時間稼ぎをしておいた。その間、私はプラーヌスを起こしに行つた。

プラーヌスの寝室がある西の回廊の入り口の前で、私は緊急を知らせるベルを鳴らす。

それは私の耳には小鳥が鳴く程度のボリュームしか聞こえないが、何かの魔法が施されていて、遠く廊下を隔ててプラーヌスの耳にまで届く仕組みになつているよう。

しばらくすると不機嫌な顔をしてプラーヌスが現れた

「何事だ、シャグラン、まだ僕にとっては真夜中のような時間だぞ。こんなに早く起こすからにはよっぽどの事情が起きたのであるうな」「

「すまない、プラーヌス、でもかなりの緊急を要するはずだよ。バルザ殿を尋ねて、バルから五人の騎士がやつってきたんだよ」

プラーヌスの表情が少し曇つた。しかし彼はこう言った。「なるほど、それは確かに緊急を要する問題かもしれないな。しかし僕を叩き起こす必要はない。適当に君があしらえれば良いようなことだ」

「彼らは百数十の兵を率いてきたらしい。事の次第ではこの塔をその兵で襲撃すると

「・・・ほう、なかなか面白いことを言つ連中だな

プライヌスが不敵な笑みを浮かべた。

「既にこちらに對して、かなりの敵意を抱いていると言つていいと思ひ」

「わかつた、会つことにしよう。謁見の間に案内するのだ。騎士が五人と言つたな？」

「ああ、五人だ。誰も彼も身分が高そうで、腕に覚えがあるといつた雰囲氣だった」

「ちよつと良い。だつたら彼らを新しい門番にしてやひつではないか」

「何だつて？」

「何とこゝう愚かな者たちだ。自ら僕の塔に仕官して来るとは」

プライヌスはそう言つて自室に引き下がつて言つた。

私はまた波乱の予感を覚えながら、応接の間にいる騎士たちのもとに向かつた。

彼らは既に用意した食事を全て平らげ、私が来るのを今か今かと待ちかねていたようだ。

どうやらこの程度の歓迎では彼らの心を宥めることは出来なかつたらしい。部屋に入つた私に、騎士たちは怒鳴るよひに言つてきた。

「わざと主のもとに案内するのだー！」

「これ以上待たせると、その男の寝室に怒鳴りこむぞー。」

「すぐ近く案内いたします。覗見の間で、塔の主がお迎えいたします」

## 第八章 10) 邪悪な嘘

私が謁見の間に五人の騎士たちを連れていくと、プラーヌスは魔法使いの黒いローブに身をつつみ、既に玉座に座っていた。手には愛用のロッドを持ち、その眼差しは先程のような寝惚けた気配は微塵もない。まるで戦場にいるかのように鋭く瞬いている。

「遠路はるばる、我が塔によつこそお越しいただいた。この者にご無礼があつたのなら、この私が代わりにお詫びしましょう」

プラーヌスは椅子に座つたまま、少し居丈高にそつ言い放つた。お詫びいたしましょうと言つてゐるが、しかし少しもこれは詫びる態度ではない。どちらの対場が上なのか、はつきりと申し渡すといふ態度。

お前たちなど僕の敵ではない、跪けとプラーヌスは告げてゐるようなのだ。

ただでさえ気が短そうな騎士たちを怒らせるなんて。

私は頭を抱えたい気持ちになつたが、騎士たちは戦士ならではの勘で何かを察知したようだつた。

彼らはお互ひ顔を見合わせ、用心深そうに少し距離を取つて立ち止まつた。

「ほう、思つたよりも若い主殿ですな」

最も年嵩の騎士が口を開いた。「魔法使いの塔の主というから、棺桶に片足を突つ込んだような御老人が我々を迎えるのかと」

「残念でしたね、その予想が外れて。むしろ墓場よりも、搖り籠

との距離のほうが近いかもしません。とにかく御用は？」

「我々はバルザ様を迎えて参った。彼が言つところによると昨日まで、バルザ様が滞在されていたと聞いたが如何に？」

「バルザ殿ですか、確かに彼がここ滞在されたことは事実。しかし今はおられない」

「バルザ様がどこに向かわれたか、御存じでは？」

「いや、バルザ殿にもプライバシーがある。そういうことを軽々しく話すわけにはいかないでしょ！」

プラスは騎士たちの良識を疑いつゝ置をひそめ、さつと語った。

「な、何だと！ 我々はバルザ様の腹心であるぞ！」

プラスのその言葉を受け、さつきまで話していた年嵩の騎士だけでなく、後ろに控えていた騎士たちも声を荒げ話し始めた。

「それに関しては何も問題はないはず！」

「きっとバルザ様も我々との再会を望んでいる！」

「・・・しかしその証拠をお見せ頂ければ、何ともね

それでもプラスは、検討にも値しないと嘆息つつ首を横に振る。

「な、何だと…」

プラー・ヌスのその無礼な言葉に、当然、騎士たちは激昂した。

「我々、騎士の言葉を信じないとこいつのか」

「そなたにはこの紋章が見えないといつのか！」

「ここれはパルの騎士団であることを示す正式な紋章であるぞ…」

興奮する仲間たちを抑えるよつ、年嵩の騎士は一歩前に踏み出しながら口を開いた。

「我が祖国、パルは今や風前の灯火。不甲斐ないことであるが、我々にはバルザ様が必要なのだ！」

彼は悔しそうに、ほとんど泣き叫ぶよつこわしひ言つた。

「ほう、風前の灯火とは？」

一方、プラー・ヌスは嫌みなくらい落ち着いて返す。

「い、戦は連敗が続き、都は敵に囲まれてゐる。我々の率いていた兵も、残りはこの塔の外にいる百数人余りだけ。何とか残兵をまとめてここにまで来たのは、ある旅芸人の定かならぬ話しを聞いて」

「聞くところによるとバルザ殿は祖国を裏切り、愛人と共に隣国に走られたそうだが？」

プラー・ヌスは彼の言葉を遮つてそう言つた。

「我々はそんな噂を信じない！」

「確かにそのような噂はあるが、バルザ様に限つて考えられぬことだ！」

再び後ろの騎士たちが声を荒げ、口々に反論してきた。プラーヌスに指を突きつけ、そんな噂を信じるといふのなら、すぐに剣で叩き斬るぞといった勢い。

「ほう、そうでしたか、噂とは恐ろしいものですね」

プラーヌスは彼らの怒りに、肩をすくめる。

「バルザ様の屋敷に勤める召使いたちはまつきりと言つている。バルザ様は怪しい影にさらわれた奥様を助けるために出て行かれたと」

「それを信じなかつた高殿の愚か者たちのせいで戦は敗れたのだ！」

「その通り！ バルザ様を弾劾したせいで、逆に兵の士氣は落ちたのだから」

「バルザ様がバルを見捨てられるわけがない！」

騎士たちはまるで舞台の上の役者のようになんかを張り上げ、順々にそつと云つた。

彼らがバルザ様と言つとき、その声の中には大変な敬意と愛が込

められているのがよくわかった。

そのときだけ彼らの声が、女性が愛する男のことを語るときのように、優しく潤むのだ。

はつきり言つて彼らの居丈高な態度には不快感しか覚えなかつた。腰にぶら下げる剣をチラつかせたその振る舞い。それによつて、何が何でも自分の意志を押し通そうとする態度。

しかも彼らは明らかに私たちを敵視している。そんな相手に敬意を抱けと言われても無理な話しだ。

しかしバルザ殿を敬う気持ちは私も彼らも同じであつ。いや、私なんかよりもこの騎士たちのほうがはるか上。それだけは確かだ。

「あなた方は大変にバルザ殿を愛されているようですね」

プラーヌスも私と同じようなことを感じたのであつて、さう言つた。「わかりました。ならば私も話しましょ。しかしそんな貴方達に真実を告げるのは心苦しい」

「真実だつて？」

騎士がプラーヌスに驚きの視線を向ける。

「バルザ殿はいかにもここにおられた。どういう事情か僕の知るところではないが、旅の途上、この塔に立ち寄られ、そのまま働いておられた」

私はプラーヌスの嘘に驚いたが、それを顔に出さないよう注意した。何やらプラーヌスは企んでいるようなのだ。

更にフラー・ヌスは、とても厳肅な表情を浮かべながらひと言つた。  
「しかしども悲しいことが起きた。あなた方に告げるのは心苦しいことであるが、彼は残念ながら戦いで命を落とされたのだ」

「何だつて！」

私も彼らと共に思わず呟くんだ。「本当なのか、フラー・ヌス？」

「我らのバルザ様が？」

「そんなことありえない」

「嘘だと言え！」

しかし騎士たちの驚きは私と比べ物にならなかつた。

彼らは一様に愕然とした表情を浮かべ、お互いの顔を見合せたかと思うと、子供のように大声で嘆き始めた。

まるで世界の崩壊が迫つているのを、神から確かな情報として聞かされたとでもいうような絶望。悲惨な運命を罵りながら天を振り仰ぎ、目が血走つてゐる。

しばらくそのよつた状態が続いたが、やがて彼らは泣きやんで、口々に言い始めた。

「いったい何者に？」

「我らのバルザ様は殺されたといつたのだ？」

「これは許されることではない！」

「復讐あるのみ！」

まるで騎士たちはバルザ殿を殺したのはプラーーヌスだとでも言つ  
ように、怒りと殺氣の溢れた視線を彼に向けた。

私はそんな騎士たちを見て、自分の背筋に冷たい汗が流れるのを  
感じた。

もし彼らが剣を抜いて襲いかかってきたら、プラーーヌスは一人で  
この五人を相手出来るだろうか？

万が一にもそのようなことは起きないだろうが、彼らの怒りがど  
のような方向に飛び火するか想像がつきにくいのだ。  
それくらいバルザ殿の死は衝撃的事実。

しかしそれにしてもバルザ殿が亡くなられていたなんて……。

そのとき塔の鐘が鳴り響き出した。

「蛮族が襲来した。バルザ殿は奴らに殺されたのだ……」

プラーーヌスは彼らの悲しみと怒りを真似たような、非常にドラマ  
ティックな表情でそう言った。

それを聞いた騎士たちは、一瞬の間、不気味に黙り込んだ。その後、泣き叫ぶようにこう言った。

「蛮族だと！」

「そんなもの、我々の手でこの地上から根絶せしむやうに。」

騎士たちは復讐へとまつじがらに向かわんと、足音を高らかにならし覗見の間から出てこべ。

しかし私はその言葉を聞いて、ようやくフレーヌスが嘘をついていたことに気づいた。

## 第八章 11) 高みの見物

「どうだい、僕のアイデアは？ 彼らは蛮族に復讐するため、片端から奴らを殺していくだろう。また元一つの投石で一羽の鳥を得るが」とき策

中央の塔の見張り台で蛮族と騎士たちの戦いの様子を見下ろしながら、プーラースは言つてきた。

「是非とも彼らにはこのまま塔の門番になつてもうう」といふ

「何といつやり方だと褒めてくれよ、プーラース！」

私は呆れるように首を振りながら言つた。

「上手いやり方だと褒めてくれよ、シャグラン」

「これが上手いやり方だつて？」

「僕にとって大切なのは、誰にも邪魔されない静かな生活だ。そのためになら何でもする。純粋なものを騙そうが、大切なものを人質に取ろうが関係ない。もしそれが悪だというなら僕は悪だろうね」

いや、悪なんでものじやない。邪惡そのものだ。

私はそつとおもつたが口を閉ざした。こんなことを言つてもプーラースの心には少しも響きはしないだろう。

「どうせ君は蛮族たちが求める女神像を見つけられてないのだろう？」

逆に「ラーヌスが私を嘲るよつて言つてきた。

「そ、そりだけど……」

「あれが見つかれば奴らも必要なくなる。だつたら喜んで解放してやるさ！」

そうだ、女神像、あれを見つけて、もうこの無益な戦いに蹴りをつけよう。そうすればラーヌスもこれ以上、悪に手を染めずにしてやれるだろう。

本当にラーヌスのやり方は卑劣極まりなかつた。いや、蛮族を撃退することにだけ焦点を置けば、これほど効率的なことはないのかもしれない。

しかしそれはあまりにも冷酷で非情……。

そのときふと私の心に、鳥の黒い影がせつと横切るよつて、心を過つたものがあつた。

「な、なあ、ラーヌス」

「うん？ 何だ、シャグラン」

「もしかしてバルザ殿がこの塔を出でていつたつて言つのも嘘なんじゃないのか？」

そんな考えが私の心に過つたのだ。

「うん？ どうしてそう思つんだ？」

「実は騎士たちに言つた通り、彼は死んだんじゃない。」

そして彼を殺したのは痴じやないのか？

私は少しかすれた声でつぶやいた。

「もしさうだつたらどうする、シャグラーン？」

プラスは私をまっすぐに見つめながらソラヒテキア。

「もしやうだつたら……」

君を許すこと出来るかどうかわからないよ。

私とプラスはしばらく見つめ合つた。  
息が詰まるような瞬間だつた。なぜだかプラスがとつともなく悲しい表情を浮かべたからだ。

「馬鹿らしい、そんなわけないじゃないか、シャグラーン。彼は僕に愛想を尽かして出ていったのさ」

しかしプラスはいつもの皮肉な笑みを浮かべ、私から目を逸らした。「そんなことよりも見ろ、シャグラーン、戦争とはこういうものか。訓練された兵と鳥合の衆では動きが全く違うものだな。僕は自分の軍隊が欲しい」

騎士たち率いる兵の前に、蛮族たちは簡単に蹴散らせていく。

蛮族たちは算を乱して逃げ始めたが、騎士たちはそれを許さず蛮族たちを次々と血祭りに上げていった。

その戦い振りはバルザ殿抜きの前の兵とまるで違つ。まさに恐るべき殺人機械となつて、少しの隙も見せずに蛮族たちを殺していく。

「あまりにも一方的過ぎるな。出来れば僕が蛮族に味方したくな  
るぐらいだ」

プライヌスは笑いながら言つた。しかし私はその言葉に愛想笑い  
を返す氣にもなれなかつた。

## 第八章 1-2) 女神像のありか

とにかく女神像だ。

あれを探そう。

もう戦いはうんざりなのである。

女神像を見つけてこの戦闘に終止符を打つてやる。

私はプーラースと別れ、回廊を走った。

しかしビートに向かつて走っているのだらうか？

目的地は決まっていなかつた。ただ逸る気持ちに従つて駆けているだけ。

私は我に返るように、廊下の真ん中で立ち止まつた。

それなりに歩き慣れた塔の廊下がまるで迷路のように思える。もう少し考えをまとめてから行動しなければいけなかつたようだ。これでは時間も何もかも無駄。

そのとき私はハツとして耳を澄ました。

あの女性の泣き声が聞こえてきたからだ。

「己の悲しみを訴えかけて来るよつて、あるいは同情を求めてくるよつて、私の耳に迫つてくるこの泣き声。

「おい！ 開拓者よつて何の意だ？」

私は思わず、声の限りそう叫んでいた。「ビードリの悲惨な世界

を嘆いているんだよ？ 教えてくれ！ ここにいると言ってくれ。すぐそこに行つて君を慰めてやるから！」

もう何度も繰り返してやつてきたことだが、壁に耳をつけて、その声がどこから聞こえてくるのか耳を澄ました。

しかしもちろん壁の向こうから聞こえてくるわけでもない。それに当然、声の主は返事などもしなかつた。

「いつたいどうすればいいんだよ・・・」

プライヌスが言つた通り、私は本当に何も解決出来ていない。問題は何一つ解決せず、ただ積み重なっていくだけ。

だけど普通に考えてみれば、そんな訳のわからないものがこの私に解決出来るわけがないではないか。

女神だと、どこから聞こえてくるのかわからない女性の泣き声だと、そのような現実の範疇を越えたようなものを・・・。

「もうお手上げだ」

私は口に出してそう言つた。

全てを放り投げて、さつさと郷里に帰りたい。

仕事はそれほど多くなかつたけれど、肖像画家の仕事は遣り甲斐があつて楽しかつた。

あの生活こそが本当の私の人生。私の人生の生きる意味そのもの。・・・しかし女神像を見つけられるかどうかで、何百もの人命が左右されるのだ。

それもわかつていた。

その使命はとても重要なで、簡単に諦めてはいけないってこと。  
しかしどうすればいいのか、まるで見当がつかないのだ。

じつじよハ、じつじよハ。

私はそつづぶやきながら再び廊下を進んだ。

とりあえずこの泣き声は後回しでいい。とにかく女神像を見つけなければいけないのだ。それがまず眼下の目的。そのことだけに全力を注げる。だけど蛮族の探している女神、そしてどこから聞こえてくるかわからない女性の泣き声……何だかその一つは似てないか？

私はふとそつ思つた。

もしかしたらこの泣き声は、蛮族の求めている女神の泣いている声ではないのかって。

・・・そ、そうだ。

もしかしたら、ただそれは探し求めている物を単純につなげただけの思いつきかもしない。窮した者がやる、愚かな早合点のよつなものと笑われるかもしれない。

いや、だけどそれにしても妙にしつくつと来る気がするのだ。

この声はあの女神が泣いている声！

だったらこの女神の在り処さえわかれば、全ては解決することになるんじやないか？

少し興奮しながら私はそう思った。

しかしたとえそれでも、女神像がどこにあるのか見当がつかない事実に変わりはないし、そして同時にこの泣き声がどこから聞こえてくるかもわかりはしないのだ。

別に困難な謎が解けた訳でも少しもない。

一瞬、盛り上がった気持ちがすぐに萎えてきた。だけどもとにかく私は前に向かって歩いた。

私は行く当てもなく歩いているようで、その実、医務室を目指していることに気づいた。

そこにフローリアがいる。無性に彼女に会いたい気分なのだ。何だかプラークスの邪悪さに汚れきった私の心を、彼女の清らかさで洗い流したい、そんなことを痛切に思っていた。

やはりフローリアは女神なんじゃないのか？

何だかまた、その馬鹿げた考えに私は囚われ始める。

フローリアは前の塔の主に騙され、地下の牢獄に閉じ込められていた。

それどころか愛する父と母は人体実験の餌食になり、彼女自身もその毒牙にかかる寸前であった。

しかしそれなのに彼女は、まるでそんな境遇に汚されていないかのよう。

少なくとも、怒りとか恨みとかいう黒い感情に疊らされていない。未だに清らかで美しいまま。

そんな人間が存在するものなのか。それこそ彼女が女神であることを証明しているのではないか。

そうだ、それにあの夢……。

私は更に思い出したことがあった。以前、不思議な夢を見たではないか。

その夢の中でこの泣き声の女性が出てきて私はその者と会話した。その女性はここから解放しようと黙りてきたんだっけ。さもないと報復すると。

何だかそれは蛮族の言い分に似てはいけないか。だったら夢のあの女性は蛮族の探している女神の化身だということではないのか。

そしてその女性はゼリーニとなくフローリアに似ている気がしたのだ……。

思い出した。どうしてこんなことを今まで無視してきたのだろうか？

しかし夢の記憶なんかあやふやだから、フローリアに似ていると感じても確かではない。

しかもそんなもの所詮、夢に過ぎないのだ。全て私のそのときの気分が見せた幻だったのかもしれないではないか。

やはりどう考へてもフローリアが女神の化身だなんて馬鹿みたいな考へだ。

しかしもシフローリアとその女神が少しでも関係があるのだとしたら、もしかしたら女神像のありがたがわかつたかもしぬ。

私は何か重苦しいものが取り扱われたような気分でそう思った。

少なくともその思いつきを確かめる価値はあるはずだ。

## 第八章 13) フローリアに似た微笑み

私は戦場を走る伝令兵のような勢いで廊下を駆け、階段を下りていった。

気が急いで仕方がない。

少しでも早く、前の主が実験を行っていたあの地下の部屋へと向かう。

とはいってもあの陰鬱極まりない部屋に行かなければいけないのかと思うと、気分が進まないことは確かだつた。

しかしそんなことを言つていられる状況ではない。そんな弱気な自分を振り払うかのように全速力で階段を駆け降りた。

道に迷うことなく、すぐに地下の実験室に到着した。  
地下の部屋に通じる扉を開け、私は恐る恐る中に入った。

ランタンの光で真っ暗な地下室を照らしながら辺りを見回す。  
一瞬、ここがあの地下の部屋だったのかと疑いたくなるくらい、  
きれいに片付けられていた。と言つてもこの部屋を片付けるように  
召使いに命じたのは私だけだ。

以前、部屋に散乱していた斧や鋸などの手術道具、あるいは手足  
や内臓の切れ端などが入った瓶などは、全てなくなつてゐる。  
そこで恐るべき実験が日夜行われていたといつ名残など、まるで  
見当たらなかつた。

しかし過去のそんな事情を知らない人間でも、この部屋の闇が不  
穏な空氣を発していることは察知出来るであらう。

壁や天井などにじびついた腐臭は消えず、そのまま残り続けている。

それと同時に、恐怖や苦悶などの感情もじびついて残っている気がする。そしてそれがまだ何かを訴え続けている。

こんなところ、一度と足を踏み入れたい場所ではない。

私は吐き気を抑えながら、しかし地下の部屋の中を隅々探しながら歩き回った。

もしフローリアが女神なのだとすれば、その像は最初にフローリアと出会ったところにあるのではないか。

そう考えてこの地下室まで来たのだ。

しかしフローリアが蛮族の女神だなんて、何という馬鹿げた思いつきであろうか。今でもそんなことを思いついてしまった自分を笑いたい気がする。

フローリアは血の通つた女性だ。その温もりを私はよく知っているではないか。そんな彼女を女神だなんて馬鹿らしににも程がある。だけど同時に、その思いつきが決して的外れではないといつ氣もしているのだ・・・。

そのときランタンの明かりが、何かに反射してきらめいた。

私はドキリとして手を止めた。しかし反射したのは一瞬で、そのきらめいた何かはすぐに闇の中にまぎれて消えてしまった。

私は反射した辺りを、注意深くもう一度ランタンで照らしてみた。

しばらく探した拳銃、やがて光は部屋の中に立てかけられている、手の平二つ分くらいの大きさの女性の像を、その輪郭の中に再び捉えた。

これではないのか？

私は信じられない思いでそれをしばらく見つめた。

その女性の像は厳めしい表情で、両手にそれぞれ剣を持っている。いや、その表情は怒りに満ちているようにも見えるし、まるで泣いているようにも見えるかもしれない。

何だか夢で見た女性に似ている気がする。

最初は泣いていたが、私が話しかけると、怒りに満ちた表情でこの塔から解放しようと迫ってきた、あの夢の中の女性と瓜二つの気がするのだ。

しかしフローリアにはまるで似ていないうつだ。

やはりフローリアが女神だなんて勘違いだったのか。  
それを見てそう思った。

とはいえる探し物が本当にそこにあることは確かなのだ。その事実に驚愕せざるをえない。

私は呆然として、しばらくそれを眺めていた。

こぐらかその驚きもやわらぎ、やがて屈んでその女性の像を手に取ろうとした。そのときその隣に似たような形をしている像がもう一体あることに気づいた。

厳めしい表情で剣を構えている女性の像、その像だけでなく、もう一つ、同じような女性の像があったのだ。

しかしその女性の像は剣を持っていなくて、その代わり何かを迎えるようとしているかのように両手を広げて微笑んでいた。

私はその女神像の微笑みが、どことなくフローリアに似ている気がした。

## 第八章 14) 牢獄の捕虜

以前にも蛮族の通訳を務めた飼葉係りを連れて、私は北の塔にある地下の牢獄に向かつた。

前にバルザ殿が尋問した、蛮族の捕虜が捕えられている牢獄である。

私は優しく微笑んでいた、よりフローリアに似ている気がする像のほうは懐に潜ませ、厳めしい表情で剣を構えている女性の像だけを、蛮族に格子越しに手渡した。

捕虜の蛮族はそれを見て驚いたような顔を見せたが、しかし残念そうな表情で首を振りながら何か言い始めた。

「何と言つたんだ？」

私は通訳をすぐに見る。

「これは嘆きの女神の像。こんなものがあるから我々は戦いを止めることが出来ないんだ、とのことです」

「嘆きの女神だつて？」

「はい、確かにこれも彼らの神だそうですが、しかしこれは妹のほうだと。我々が欲しいのはこれではなくて、愛と慈しみをくれる調和の女神、だそうです」

蛮族の捕虜は、通訳が私に向かつて訳し終えるのを確かめるや否や、突然、手に持っていた女神像を牢獄の壁に叩きつけた。

それは凄まじい音をたてて、幾千もの欠片に割れて飛び散った。

後ろで控えていた牢番たちが、槍を構えて慌てて一步前へ踏み出す。

私はそんな牢番を手で制しながら言った。

「僕の夢にある女性が出てきた。最初は泣いていたが、顔を上げて恐ろしい顔でにらんできた。そしてこの塔から解放しようと、怒りに満ちた声で叫んできた・・・。夢の中だけじゃない、この塔で普通に暮らしていくとどこからともなく泣き声が聞こえたことも度々あった。全てはその嘆きの女神の仕業なのか？」

通訳が訳し始めた言葉を捕虜は幾度も頷きながら聞いていた。そして言った。

「その通りだそうです。嘆きの女神は我々を争いへとたきつける不吉な女神とのこと」

「彼女は何を嘆いていたんだ？」

「この世の悲惨の全て。嘆きを恨みに変える女神だそうです」

「この女神を壊したのだから、君たちはもう塔の襲撃をやめるのか？」

私は期待を込めてそう尋ねた。しかし蛮族が悲しそうに首を振ったのを見て、通訳が訳し終える前にその答えはわかった。

「無理だそうです。嘆きの女神は確かに我々に争いを焚きつけてくるが、それはそれ。それに関係なく、調和の女神を取り戻すこと

「」我々の宿願だと

「そうか・・・」

私は残念そうにしぶやいた。

「だけども感動しています。あなたは初めて我々の言葉に耳を傾けてくれた人だと」

飼葉係りの通訳がそう言つてきた。

「何だつて？」

私は自分の耳を失つた。

彼は感動しているだつて？

私は愕然とした表情を浮かべながら捕虜を見た。

実は私がもう一体を見つけながらも隠しているところの二つ? 思わず私は捕虜の蛮族にそう言いたくなつた。

調和の女神を渡すとフローリアを失うかもしないから、私は彼らに返すこと躊躇しているのに、それなのに感動出来るのか?

私のこの判断のせいで、蛮族の死はまだまだ増え続けるかも知れなのに、そんなことが言えるのか?

しかし何も知らない捕虜は、キラキラした眼差しで見返してくる。その純朴な瞳に見つめられるのが耐えられなくなつて、私はすぐ

に田を逸りした。

おそれらく私とそれほど年齢は変わらぬことであるが、捕虜の蛮族の田はまるで子供のよいつであった。

何といふ素朴な部族であろうか。

まるで鹿のように丸い黒目勝ちな瞳をしてゐる。こんな部族たちをこれまで私たちは大量に殺してきたといつのか。  
そしてこれからも殺し続けるのか・・・。

「わかつた、君は何とかこの牢獄から解放されるようにな差配するよ。君をここに捕えておくことにもつ意味はないから」

私はつぶやくひたすらひたすら牢獄を出た。

しかしそれは逆に彼の命を縮めるところになるかもしないとも思つた。

彼は解放されればまた武器を持つて戦われる事になるだろうからだ。だったらプラーヌスの魔法か、騎士たちの槍で返り討ちになるのは間違いないことなのだ。

## 第八章 15) シャグランの懊惱1

私は自分の部屋に戻り、疲れ果てた表情でぐつたりとベッドに座りこんだ。

そして懐から女神の像を出し、それを眺めるでもなくただ手に持つて物思いに耽った。

これを返しかえすれば、蛮族はもう一度と襲来してくることはないのであろう。

そうすることによって、プラーヌスが待ち望んでいた静かな生活が手に入る。のみならず、無益な戦いにも終止符を打てるのだ。

そもそも迷うような問題ではない。なぜ牢獄ですぐに決断しなかつたのか不思議なぐらいだ。

しかしそまだ迷い続けている。

これを返せば私はとても大切な物を失つてしまふことになるからだ。

もしフローリアが女神の化身なのだとしたら、彼女も塔から消え去つてしまつに違いないのだ。

これまで私が諦めた恋は数多い。

むしろ今まで、好きな人に向かって好きだつて言ったことなんてない。全てうやむやに諦めてきたのだ。今回だつてきっとそりどうう。

まして相手は人間じゃない！ よくわからないけど女神だそうだ。フローリアが振り向いてくれるわけがない。この恋だつて私の片思いで終わるに決まっている。

それなのに私はフローリアと離れたくない。

蛮族たちが命を賭して戦う気持ちがよくわかる気がする。私はそんな彼らと同じ気持ちなのだ。フローリアに愛されることがなくとも、彼女と離れたくない。たとえ自分の命を犠牲にしてでも。

そうだ、これからは私もせめて武器を持ち蛮族と戦おう。

血の手も血で汚すのだ。それがせめてもの償いことのものである。

その程度ではこの我儘に見合わないかもしれないけれど、それぐらいしないと気が済まない。

とにかくフローリアに会いに行こう。

私はそう思つてベッドから立ち上がった。  
会つて何をどうやって話せばいいのかわからぬけれど、彼女から何とか真実を聞き出そう。  
いや、正直言えばそんなことはどうだつていい。ただフローリアに会つて、顔が見たいだけ。

私はすぐに部屋を出て医務室に向かった。

彼女がそこにいるのは間違いないはずだ。今日も今朝から働いているに違いない。

しかし医務室を探しても彼女の姿は見当たらなかつた。もしかし

て私がこの像を発見したことになり、事態は既に変わってしまったのか？

「なあ、アビュ、フローリアはビリト？」

相変わらずキビキビと動いているアビュを捉まえて、私はそう尋ねた。

「うん、どうしたのよ、ボス、こんな顔して・・・」

「こんな顔って？」

「顔色が悪いわ。もしかしてボスも体調悪いの？ フローリアさんも朝からまた体調を崩して寝込んでるのよ。やつぱり昨日、頑張り過ぎたみたい」

「また倒れたのか？」

「うん、そうみたい」

そう言つて仕事に戻ろうとしたアビュを止めて私は言つた。

「おー、アビュ、その姿を確かめてきたか？」

「姿を確かめたかったいこひの意味よ。」

「だ、だから・・・、えーと、彼女は部屋でひやんと安静にじてゐるかどうかひとつじや」

私はじぶんもじぶんになつながらも、何とかそいつをして誤魔化した。

「うん、今日はゆっくり寝てなさいって部屋まで送つてあげたから。だってフローリアさん、フラフラになりながら働いていたんだから。どう考へても無茶でしょう？」

「そ、そうか・・・。なあ、アビュ、申し訳ないけどフローリアの様子をもう一回見てきてくれないか？」

「えつ？ まあ、ちよつと夕食の時間だから、食事を持っていくけど」

「すまないね」

「いこよ、別にこれくらい。・・・でも変な、ボス

アビュはやつひつて医務室を出ていった。

## 第八章 16) シャグランの懊惱2

フローリアは安静に眠っていたようだ。

私もアビュについていつて彼女の姿を直接確かめたかつたが、抜けたアビュの代わりに医務室で仕事をして、アビュの返事を待つていた。

アビュを信じる限り、とにかくフローリアはこの塔に確かに滞在している。

この女神像を蛮族の渡さない限り、彼女の失うことはないそうである。私はとりあえずその事実に安心しながら、その日は医務室で過ごした。

この日も蛮族との戦いで数人の怪我人が出た。あの五人の騎士がパルから率いてきた兵だ。

しかし彼らは熟達の者ばかりである。昨日とは比べ物にならない程度の軽傷ばかりだった。

それでも医務室は混乱を極めている。昨日の重傷人たちがまだまだベッドにいるからだ。彼らの様態はまだ予断を許さない状況であった。

私は彼らの看病をしながら、彼らもフローリアの不在を寂しがつている様子を見て取った。きっと昨日のようにフローリアに傍にいて欲しいのだろう。

私は彼らの為にもフローリアを失ってはいけないと思った。

彼らこそ死の淵からフローリアの神性を照らし出した張本人なのだ。彼女の清らかな光を私よりもずっと浴びたはず。

いや、しかし同時に彼らの為にも、女神を蛮族に返して戦いを終わらせるべきなかもしれないと思う。

彼らはこの傷から回復したら、また戦場に赴かなければいけないと恐怖しているかもしないのだから。

でもわからない。

わからぬまま、この日は過ぎていった。

私はこの日の夕食を一人で摑つた。いつもは歓待の間でプラスと食べる夕食。

しかし今日はプラスと顔を会わせる気になれなかつたのだ。

プラスのあまりの自分勝手な性格に辟易したせいもあるだろう。

自分の都合の為なら、誰であろうが利用するあの自己中心的な生き方。私はまだプラスがバルザ殿を手に掛けたのではないかと、いう疑念が拭いきれないでいる。

しかしプラスと会いたくない理由はそれだけではない。

何でも見通しそうなプラスだ。私が女神像を見つけたことすら、彼はどうやってか知っているかもしれないのだ。

いや、そうでなくとも、女神像の話題が出たとき、私はどうやって誤魔化せばいいのかわからぬ。

そういうこともあり、私はプラスを避けた。

そうやつてこの日は過ぎていった。



## 第八章 17) 傲慢な騎士たち

次の日、朝一番から五人の騎士がプラーヌスに目通りしたいと言つてきた。

せつかく私はフローリアと会えるのを楽しみにしていたのに、彼らの相手をせざる得なくなつた。

しかしこれも良い機会だと今日の戦いから私も加わりたい意思を彼らに告げた。

「戦いの経験は？」

一人の騎士が私を馬鹿にするように言つてきた。

「全くありません。しかし戦わなければいけない理由が出来ました、どうか戦列の端で構いませんから是非」

私は精一杯の誠意を込めて言つた。

「戦わなければいけない理由、何という感傷的な言葉か」

違う騎士が私の言葉を鼻で笑つた。「まあ、戦いたければ勝手に戦うがいい。しかし昨日の蛮族は我々が散々叩きのめした。もうこの塔に来襲することもなかり」

「そうであればいいのですが・・・」

私は説明するのが面倒だから、本当にことばを言わずやつやつて言葉を濁しておいた。

「とにかく塔の主に田通りしたい。その蛮族のこと色々と聞きたいことがあるのだ」

年嵩の騎士が言つてきた。

「わかりました、しかし前にも言つた通り、塔の主はまだ私がその言葉を言い終わらないうちに騎士たちは怒氣を込めて言い始めた。

「いい加減にして！」

「また我々を待たせるつもりか！」

「もし前のよつて待たせるのなら、その男の寝室まで我々は押しかけるぞ！」

「こんな時間まで寝ている者は宮廷にはおらずぞ！」

「いてもすぐに打ち首だ！」

しかしこれは宮廷ではありません。私たちには私たちのルールもあります。

そう口答えしようと思ったが、この頑固そうな騎士たちに通じるわけないと口をつぐんだ。

彼らもプライマスと変わりがないぐらい、血口中心的に生きているようだ。

但し、プラーヌスはたった一人、自分だけの気分に従つて生きているが、彼らは集団のルールを嵩になつて押しつけてくる。むしろそつちのほうが、タチが悪い気がする。

バルザ殿は素晴らしい人物であつたのにと私は思った。

しかし騎士にもこのように融通の効かない人間がいるようだ。それとも彼らも祖国が存亡の危機で、余裕がないだけなのだろうか。

「……わかりました。すぐに主を起こします」

いざれにしるプラーヌスを無理に起こしても彼らに少しの得もない。

騎士たちも不機嫌な状態のプラーヌスを知れば、このように愚かなことは一度と言わなくなるだろう。

私はそんなことを期待しながらそつ返事した。

## 第八章 18) プラーヌスの正体

「あなたたちの戦いを上から拝見させていただいた。それは勇ましく、かつ猛々しく、きっとバルザ殿も地下で、かつての部下たちの戦い振りを喜んでおられることであろう」

謁見の間の玉座に座つたプラーヌスは五人の騎士たちに向かって言った。

その表情は、傍目にはそれほど不機嫌に見えなかつた。

確かに相変わらず偉そ�で、まるでプラーヌスが騎士たちの主君のような口振りであるが、騎士たちは彼のその迫力に飲まれているようで、その言葉を不快に感じている様子もない。

何だかこれから穏やかな話し合いがなされるような雰囲気を感じなくもなかつた。

しかし私が鈴の音でプラーヌスを起こしたときの様子を思い出せば、このまま穩健に進みそうもない。プラーヌスは明らかに騎士たちに怒りを感じていたようだから。

「そのことで話しがある。我々一同の意見は同じであつた。バルザ様があのよくな未開の蛮族にやられるわけがないと思われるのだ。それは如何に?」

一番年嵩の騎士が言った。

「ああ、その通り。バルザ殿ほどの騎士が、蛮族ごときに後れを取るわけがないといいうのは僕も同じ意見。しかし蛮族たちは信じがたい程に卑劣だったんだ。僕は直接見たわけではないが、バルザ殿

は涙にかかるて命を落とされた・・・。なあ、シャグラン?」

「えつ?」

私がフラー・ヌスの言葉に戸惑っている間もなく、五人の中でも最も血の氣の多そうな騎士がいきり立つて言った。

「ほ、本当なのか? それは!」

「ああ、残念ながら」

フラー・ヌスは悲しげに眼を閉じた。

「ああ、何といふことだ!」

「そんなことがあつていいのだろうか!」

「この世界はきっと悪魔が支配しているに違いない」

騎士たちは口々に嘆き始めた。

また下手な嘘をついているな。

私はフラー・ヌスを見つめながら思つた。彼は同情に溢れた眼差しで騎士たちを見つめているが、きっと内心では彼らの反応を嘲笑つているに違いない。

「恐らく今日も蛮族たちは襲撃に来るだろ? 復讐のチャンスはまだいくつもあると思う。そういうわけで僕から提案なのだが、この塔の門番として働いてみたらどうだろうか。食料や住む場所は

こちらで世話をする。バルザ殿の遺体は残念ながらないが、バルザ殿が亡くなられたこの地こそ彼の墓標を建てるに相応しい地。そうすればあなたたちはバルザ殿から離れ離れにならずに済むと思つたが、「

プラーヌスは騎士たちの嘆きが終わる頃合いを見計らい、そう言った。

「バルザ殿はお一人で十万の兵に匹敵されると言われたお方だ。我々はあの蛮族十万の首を取るまで、バルザ殿を弔つたとは言えない！」

「その通りだ」

「その有難い提案、検討する必要もないほどである。我々は残つて復讐を続けたい」

「ああ、蛮族をこの世から根絶やしにすることを【誓おつ】

騎士たちはプラーヌスが植え付けた偽の怒りによつて、我を忘れていた。

彼らの近くにいるのも恐いくらいだ。動いている者なら、今にもその剣で叩き斬るのではないかという勢いなのだ。

「契約は成立しましたね。それでは私は忙しいので」

プラーヌスはそう言つて玉座を立ち上がつた。

プラーヌスは澄ました表情をしているが、内心では間抜けな騎士たちがおかしくて仕方ないことであろう。プラーヌスはこういう形で、騎士たちに対する意趣晴らしをしたようだ。

しかし私の予想よりも、ずっと平穏のままに事は終わりそうであった。プーラースのことだから、もつと直接的に苛立ちをぶつけると思つたのに。

私は無礼な騎士たちを魔法の力で捻じ伏せるプーラースンの姿を期待していたのかもしれない。どうやらそれは空振りに終わらしきで、肩透かしをくらわされたような気分なのだ。

「皆の者、少し待たれるがいい。しかしバルザ様は血を好みぬお方でもあつたぞ！」

だけど一人の騎士がそう言つて、謁見の間を去りうとしていたプーラースを引き留めた。

私もプーラースも驚いて、その騎士を見た。

「果たしてバルザ様はこのよつた復讐を望まれるであらうか？いや、きっと望まればしないであらう」

最も年嵩の騎士を含め、他の騎士たちは怒りで我を忘れていた中、その騎士は仲間たちに向かつて落ち着いた口調でそう言つていた。

騎士にもこのよつた者がいたのか。私は少し驚きながら彼を見た。もしかしたら彼はプーラースの嘘に気づいてのかもしれない。

「何を言つておるので、お主？」

しかし最も血の氣が多さうに見える、少し太り気味の騎士が怒鳴つた。「今はそんなことを言つている場合ではない

「いや、とにかく冷静になるんだ」

その冷静な騎士も負けずに声を上げた。「バルザ様は敵を根絶やしにしようなど、考えられるお人ではなかつたではないか！」

「確かにそうだ。バルザ様は敵にも敬意を持つて向かわれたお方」「確かにそうだ。バルザ様は卑劣な罷にかかるて命を失われたのだぞ！」

太り氣味の騎士は反論した。「まさかそなた、戦場に罷は付き物だとでも言つのではないだらうな！」

「そうは言わない。しかしバルザ様自身、戦場においては正と奇を併せ持たれた司令官。そんなバルザ様が蛮族如きの仕掛けた罷に引っ掛けたことが不思議だと、そもそもそなたたちはなぜ思わないのだ？」

冷静な騎士はあくまで冷静に血氣盛んな騎士を窘めた。

「た、確かにそなたが……」

「それは確かにわからない

「しかしきつと何か深い事情があつたはず」

「それがわかれば、我々は何もこんなに苦労せずに済んでいるであらう」

「塔の主よ、それは如何であろうか？」

年嵩の騎士が一步進み出てプラーヌスにそう言つた。

「そんなこと僕が知つてゐる訳がない。眞実が知りたければ、バルザ殿自身にも伺つ他ないこと」

プラーヌスは騎士たちに冷たく言い放つた。「そつと言えばバルザ殿は嘆いていたことがあつたな。自分の頭で考えられない、愚かな部下を持っていたことを」

「何だつて？」

プラーヌスのその言葉に騎士たちは反応を示した。

「バルザ様はそのようなことを言つておられたのか？」

「ああ、バルザ殿はきっとそなたたちのことを言つておられたのであるうな。自らでは何も決断出来ず、ただ無駄な話し合いで時間を使やすだけの無能な部下というのは」

私は驚きながらプラーヌスを見つめた。

どうやらプラーヌスは彼らを騙し切るのを諦めたのか、それとも騎士たちの煮え切らない態度が本当に頭に来たのか、騎士たちを侮蔑することにしたようだ。

明らかにプラーヌスの視線は先程までと変わつていた。不羨なくらい騎士たちを見下すような表情をしているのだから。

「わ、我々は確かに半人前だ。バルザ様がいなければ国を守るこ

とも出来ない・・・。祖国は今まで滅ぼしきつてゐるの――」

しかし年嵩の騎士がプラーヌスの言葉を真に受けた様子で、そう  
言って反省を始めた。

「確かにそうだ。我々にバルザ様の半分ほどの力があれば」

他の騎士もそれに次々と賛意を示し出し、さつきまで愚眷にいた血の氣の多いそな騎士までそれに倣い始める。

「ああ、バルザ様はいったいどうこうおつもつだつたんだうつか  
？」

騎士たちは各自、血口反省を始めた。もしあのときこうしていれば、自分があのときこう決断をしていれば、そういう感じで過去の自らの行動を悔やみ始めたのだ。

「ちよつと待て、騙されるな、たとえバルザ様がそう思われておられようとも、そんなことを赤の他人に軽々しく漏らすわけがないではないか」

しかしながら、冷静な騎士がそう言つて、仲間を奮め始めた。  
「確かに我々の力不足でバルは滅びようとしている。しかし今、それを悔いるときではないはず」

「そなたはそつ言つが、だが我々が不甲斐ないことも事実。どうやつてバルザ様に申し開きすればいいのか・・・」

「そだ、いくら悔いても悔い足りることはないだろ？」

「しかしどうか考へてもおかしいとは思わないが。少し冷静にならぬではないか。バルザ様の人柄を思い出すのだ。たとえあのお方が我々を不甲斐なく思つていたとしても、このようなことを軽々しく他人にお話しなられるはずがないではないか」

「・・・た、確かにそうだ」

騎士たちは我に返つたように田を見開き始めた。「バルザ様に限つてそのような愚痴を他人にこぼされるなどありえない」

「それはそうだな」

「しかしだとしたらどうこう」となのだ?」

「私はこう思つ。我々は騙されているのだと」

冷静な騎士が静かに言つた

「誰に?」

「それはおそらく、この狡知に長けた悪魔にだ!」

これまで冷静だった騎士が、その冷静さをかなぐり捨てるかのように声を荒げ、プラスチスに指を突きつけてそう怒鳴つた。

謁見の間が静まり返つた。

他の騎士は愕然としてその騎士を見た。それはあまりに思い寄らぬ考えだという感じで。

「私は思つ。この者の言つてることは全てデタラメだよ!」

「何を証拠にそんなことをおっしゃられるのか僕には理解出来ないが」

プラーヌスは邪魔臭そうに言った。

しかしむしろその展開がプラーヌスの望む方向だったのかもしれない。プラーヌスはもう既に何かを決断していたような気がするのだ。

それを証拠に、プラーヌスは困ったように眉をひそめながらも、唇がどこか嬉しそうに、微笑みで緩んでいるようだ見える。

「証拠は明らか。それは私の心の中に住んでいるバルザ様と、そなたが話すバルザ様があまりに違い過ぎること」

「確かにそうだ」

他の騎士も途端に追従し始めた。「確かにバルザ様は、未開の蛮族が仕掛けた罠などに安々とはまって、簡単に命を落とされる方ではない」

「だとしたら、もしかして…」

「そう、こいつが殺したとしか考えられない

騎士たちは一斉に鞘から剣を抜いた。

ただ彼らが剣を抜いただけなのに、彼らの身体一回り以上大きくなつたように見えた。

言葉では圧倒的にプラーヌスに後れを取っていた騎士たちだが、

剣を抜いたことで騎士としての誇りを取り戻したのかもしれない。彼らはもうやつさまでの間抜けな騎士たちではなくなったよう見えた。

「ア、プラーヌス！ どうするんだよ？」

そう言おうとしたが、しかし私は凍りついたように身動き出来なくなつた。

騎士たちの剣が太陽の光を反射して銀色に輝いている。私はその煌めきが騎士たちの発する凄まじい殺氣のように思えた。

とにかく最悪の事態が起きようとしている・・・。

「どうか、では仕方ない」

しかしプラーヌスはそんなもので吹く風と言つた感じで、漆黒のロープを翻しながら立ち上がつた。

「まあ、まだ君たちを言いくるめる余地は存分にありそつだけどね。例えはこの冷静な、少しばかり頭が回る騎士だけを上手く排除すれば、あの騎士たちなんて完全に僕の言いなりになるだろう。でも僕は呆れ返つてゐるんだ。もうこんな茶番劇に付き合ひきれない。あなたたちはあまりに愚かだ。この程度の者たちを門番にしても大した役には立たないだろ？」

プラーヌスは愛用のロッドを構えながら言つた。「その通り、バルザ殿を殺したのも僕だ。そして彼を騙し、この塔に拉致したのもこの僕だ」

「ついに正体を現したな、悪魔め！」

剣を抜いた騎士たちは、もはやプラスの言葉に動搖しなかつた。重心を下げ、いつでも彼に襲いかかれるようじりじりと距離を詰めてくる。

「敵は二人だけだ。たとえ魔法使いであろうと、五人の騎士に敵うわけがない！」

私は自分も彼らの敵として数えられたことに困惑しながらも、しかし今更言い逃れできるとも思えなかつた。

ただ生き残りたければプラスを頼るしかない。

しかしバルザ殿を殺したのも僕だつて？

プラスは今、はつきりそう言つたよな・・・。

「確かに五人の騎士を相手にするのは困難だ」

プラスは私の動揺をいささかも気にすることもなく、五人の騎士に向かい合う。「いくら僕でも死を覚悟せざるを得ない状況だろうね。しかし君たち五人をまとめて戦う方法は既に見つけ出している

「何だと！」

「但し戦うのは僕じゃない。後ろを見ろ、騎士たちよ、バルザ殿が冥府から蘇られたぞ！」

## 最終章 1) 摺れる記憶

バルザの幻を見て混乱した騎士五人を殺すのは、プラーヌスにとって訳ないことのようであった。

まるで血の沼から這い上がってきたかのような血塗れのバルザが、大剣を振り上げて騎士たちに迫ってくるのだ。生前のバルザを慕つていなかつた者でも、あのような亡靈の姿を見たら取り乱すであろう。まして相手はバルザを神のよつて崇める騎士たちである。彼らの混乱は痛ましい程であった。

その混乱に付け入つて、プラーヌスは騎士たちの息の根を次々と止めていった

「プラーヌス・・・」

私は無残な五人の騎士の死体を見つめながらつぶやいた。

「召使いたちに死体を片づけさせぬつて命じておこしてくれ、シャグラン」

「プラーヌス!」

私の声に驚いたようにプラーヌスが私を見た。

「君は何てことを!」

「何てことだつて? 一いつがやらなければ君も殺されていたよ。」  
「うごうときは責めるのではなく、命の恩人に感謝するのが普通じ

やないのかい？」

しかし私は彼の言葉を無視して言った。

「バルザ殿を殺しただつて？」

「うん？ もつきどくにまぎれてそんなことを言つたかもしれないね。しかしそんなの、奴らを謀るための出まかせだよ」

プラーヌスはまだ憤けるつもりのようであった。

しかしこの様を見れば、そのような嘘はもう通じない。五人の騎士は心臓を突然停止されたようで、ひどく苦しげな表情で倒れいる。

もしかしたらあのバルザ殿もこのように彼に殺されたのか・・・。

自分に刃向かう者がいれば、プラーヌスは躊躇なく殺す。それは間違いない気がする。

「もうここにはいられないよ」

私は彼に言った。

「何だつて？」

プラーヌスは私が予想したよりも驚いた表情で私を見た。しかし私ははっきり申し渡した。

「この塔を去らしてもうひ

「・・・シャグラン、何を言つてゐる。そんなことが許されるわけがないだろ」

「昨日、女神像は見つけたよ。この世で最も清らかで美しいもの。・・・多分、フローリアは女神の化身だつたんだ。それで僕は返すのを躊躇してしまつたが、もうこの塔から出していくからそういうことを関係ない。ほり、これだよ」

私は懐から女神像を取り出し、それをそつと床に置いた。

「これで戦いは終わるだらう。君はもう誰かを騙して、この塔を守らせる必要もなくなるはずだ。念願の静かな生活が手に入る。あの不気味な泣き声も止んだはずだしね。これがせめてもの置き土産だ」

「よくやつた、シャグラン。君はやはり優秀な男だ。僕は尚更、君が必要になつたね」

プラーヌスは私を宥めるよつて優しい口調で言つてきた。

「もう無理だよ」

しかし私は首を振る。「もう君にはついていけない」

「何を愚かなことを言つてゐるんだ。僕は何をしてでも君を引き留めるぞ」

プラーヌスは私のそんな言葉など取るに足らないことだと嗤つて鼻で笑つた。「まあ、僕に出来ないことなんてないことを君も知つてゐるだろ? 何が何でも出ていくと言つなら、今日の日の君

の記憶を消す」とある

「な、何だつて？」

「ラーヌスがさらりと言つた言葉に私は愕然として眼を見開いた。

「君は僕がこの五人の騎士を殺したのも見なければ、バルザ殿を殺したのも知らないことにしよう。そんなのは僕にとって容易いことなんだ」

「フ、ラーヌス！」

それが嘘でも脅しでもないことを私は知つている。

実際、彼は以前、前の主に囚われていた者たちの記憶を消したのを私は見ている。

それはこの塔から彼らを自由にするために必要な作業だったが、彼らは確かに彼によつて記憶を消されたのだ。

「ぼ、僕の記憶を奪つだつて？ そんなこと許されるわけがないじゃないか！」

「いや、友情を維持するためにはこいつこいつとも必要さ」

「友情？ こういうことを友人にする人間なんていないさ！ そんなことは悪魔の所業だ！」

「友人を悪魔呼ばわりとは君も酷いね

「いや、酷いのは君じゃないか！」

私はそう言い返しながら、ハツとして思った。

私はこの塔に来て以来、ずっとと考えていたことがあった。  
一体いつからこの魔法使い、プラーヌスと友人になったのかってことだ。

私たちは別に同郷でもなければ同窓でもない。

まして一介の肖像画家である私と、魔法使いのプラーヌスに何の接点もない。そもそも出会うはずのないような間柄、それなのに。

私はいくら思い起こしても、どうやって彼と友人になったのか思い出せないのだ。

もしかして既に私はプラーヌスに記憶を消されたことがあるのか？

「なあ、プラーヌス、本当に僕たちは友達なのか？　幾ら記憶を思いめぐらせても思い出せないことがあるんだ。どうやって僕たちは出会い、このよつな仲になつたのか・・・」

「ひどいな、シャグラン、僕は君の命の恩人だろ？　あれは何年前だ。君が夜盗に襲われたとき僕は助けたことがあつたじゃないか？」

「ああ、そ、そうだった」

そんなことがあると言われたらある気がする。

しかしその記憶は奇妙で、とても不安定で、消えたり浮かんだりして、明らかに他の記憶と切り離されているのだ。

もしかしたらこの記憶をプラーヌスに消されたことがあるのか？

いや、そんなはずはない。

もしそうだつたら彼から言ひはずがないではないか。むしろその逆じやないのか？

私とフラー・ヌスはそもそも友達なんかじゃない。

彼は私に偽の記憶を植え付けた？

「なあ、フラー・ヌス、一つ聞きたいことがあるんだけど・・・」

「ああ

「結局は失敗したけど、君はバルザ殿をどうにかこの塔の門番として働かせることが出来たよな。どうしてそんなことが君に可能だつたのか・・・。バルザ殿は世にも名高い騎士だ。塔の門番を勤めるような身分じゃない！」

「シャグラン、君はずつとそれを疑問に思つっていたな」

「実はバルザ殿から聞いたことがあるんだ。彼も僕と同じような、妙な記憶の混乱を抱えているって」

「・・・妙な記憶の混乱か。面白い言葉だ」

「そして去り際、彼は言つてきた。あなたも気をつけたほうがいい  
いつて・・・」

「なるほど」

「君はもしかして僕たちに何かした？」

私はプラーーヌスの瞳を、真っ向から見つめながらそう言った。

今までこんなふうに彼を見たことはないかもしれない。私はいつもどこかでプラーーヌスを恐れていたのだ。

だけどそんな関係が友情だなんて呼べるのか？

そうだ、私はずっとこの友情に疑問を感じていたのだ。

もしかしてプラーーヌスは私の記憶を操って、無理にこの友情をでっち上げたのではないか？

しかし同時に私はこのような疑問も感じる。

どうして私にそんなことをする必要があつたのかって。

バルザ殿をこの塔の門番にするために、プラーーヌスが手を貰へすのは理解出来る。

彼は有名で優秀だ。プラーーヌスがバルザ殿を欲しがる気持ちはわかるというもの。

だけど私は？

私はどこにでもいる無名の画家に過ぎないのに・・・。

「あまりにも直接的な質問なので、どうやって答えていいのかわからぬいね」

プラーーヌスは困ったように眉をひそめそう言った。「まあ、君はいずれにしろ今日の記憶は失う。だから何もかも喋つてやつてもいいんだけど、それもこわさか抵抗を覚える・・・」

「記憶を消すだつて？ プラーーヌス、まだそんなことを言つてゐるのか！ なぜそこまでして僕を引き止めておかなければいけないん

だよ？僕は君に恩がある。バルザ殿は大切な人だったが、それ以上に君には恩義を感じているよ。だからもし君が僕に妙な魔法をかけていたとしても、決してこのことは口外しない。僕だってもう面倒は嫌だ。バルザ殿の件も黙っている。君を窮地に陥れたりするわけないさ。なのにどうしてこの塔から解放してくれないんだよ！」

「それは僕が君のことと、大好きだからとしか言いようがないな

「何だつて？」

私はプラークスの言葉に耳を疑つた。

「仕方がない。全て話そうか。実はいつか言おうとは思っていたんだ。いや、もしかしたら君なら思い出してくれるかと期待しているんだけどね」

「な、何をだよ？・・・」

「確かに僕が君の命を助けたというのは嘘だ。あれは君の想像通り、僕が植え付けた偽の記憶だよ」

や、やっぱりそなのか・・・。

「僕たちが出会ったのはそれよりもっと前、僕も君もずっと幼い頃

「幼い頃？」

「ああ、僕がようやく幾つかの魔法を覚え始めた頃のことだ」



「その頃、僕は本当に貧しかった。だけど母は僕を世界一の魔法使いにしようと必死に働いてくれていた」

プライムスはまるで他人の人生を語るよつて淡々と話し始めた。

「君も知つての通り、魔法使いになるには血の滲むような努力や、生まれ持つた才能だけではなく、大変な財力も必要とされる。なにせ魔法を使うには宝石が必要だからね。僕は才能は余りある程備わっていたけど貧しかった。だから母は自分の身を売つて金を稼いでいたんだ。すなわち売女だつたのさ。母は僕に似てとても美しかつた。だからけつこう稼いでくれたみたいだけどね、しかし魔法使いになるにはそれでも到底足りなかつた」

「そうなのか・・・」

私は彼の生い立ちに少し痛ましさを覚えながら言った。

「ああ、でもそんなことはどうでもいいんだ。驚くべきは身を売つてでも、母は僕を魔法使いにさせたかったってことだよ。その意気込みは驚くべきものだった。ほとんど狂気に近かつたと思うね。実は僕自身、そんな母にかなり戸惑わされていたことも事実だ。だけど母のお陰で僕はこうして魔法使いになれたのも間違いないことだ。とても感謝している」

「あ、ああ」

「おつと前置きが長くてすまない。まだ君は出てこないけど、も

う少し辛抱強く聞いてくれ。とにかくそんな母がね、タチの悪い客に引っ掛けつて、ボロボロに犯された拳銃殺されたのさ。やつたのは街のゴロツキだよ。当然、僕は復讐を考えた。しかし僕はまだ幼くて無力だった。魔法は使えるけど、肝心の宝石に余裕がなかつたわけだ。宝石を持たない魔法使いは丸腰の騎士よりも弱い。魔法使いを志したのを、このとき後悔したときはなかつたよ。剣術でも学んでいれば、さつと報復出来たからね。色々と調べてわかつたけど、そいつらは一、三十人ものグループを成していた。簡単に手は出せない。そいつらを全て殺し尽くすには、けつこうな数の宝石がいる。それで君がようやく登場だ。まだ思い出せないか？

「まだ何も・・・」

私は首を振つた。しかし何て残酷で血生臭い話なんだ。母が売春婦だとか、一、三十人相手に復讐だとか、私にとつてはあまりに無縁な世界。まるで舞台の上のよつた話ではないか。

「仕方ない、ではもう少し話しあを続けよう。それで僕は復讐のために宝石を盗むことにして、ある街の宝石店を一つ一つ物色していった。そのとき偶然目に着いた宝石店の名が確か、・・・『メイン

宝石店』

「メイン・・・」

私のファミリーネームはメイン。父の営んでいた店がメイン宝石店だった。

それを聞いて私は思い出したことがあつた。

幼い頃、宝石商をしていた父の店に泥棒が入つたことがあつた。

いや、宝石店が襲われることはよくあることだった。だからちょっとした部隊並みの数の用心棒を、父は常に雇っていた。そんなことは別に印象的な事件でも何でもない。

しかしこのとき珍しかったのはまだ子供の、僕と同じ歳くらいの魔法使い見習いが侵入してきたことだった。街の宝石店だからと甘く見ていたのだろう。余りにも無知で、向こう見ずな子供。

父と、用心棒を兼ねた従業員は、子供であろうが容赦なく、捕えたその泥棒を殴りつけた。

あれは満月の夜だと思う。月明かりの中、私は自分の部屋の窓から、店の前で繰り広げられている暴力の一部始終を見ていた。

父は特別残虐な人じやなかつたけど、自分の命よりも宝石が盗まれそうになつたことに逆上していた。

まあ、父の気持ちもわからないわけじやなかつた。これを売つて生計をたてているのである。それを盗もうとする相手に厳しく対応するのは当たり前だつたかもしれない。

だけど私は、ほとんど自分と年齢の変わらない子供が酷く殴りつけられているのを見て、まるで自分の友人が殴られているような気持ちになつたのだ。

そうじやなくても父は宝石強盗を必要以上に手酷く殴りつけることが多かつた。いつも宝石を守るのに汲々としていた。まるでそれだけが生きがいの守銭奴のような人だつた。

もうそんな父に嫌気がしていただ。私はそういう父を否定したい気分だつたんだと思う。

父たちはその子供を縄で縛つてから、夜警を呼びにその場を少し離れた。私は彼のことが気になつてこゝそり様子を見に行つた。

「そつそ、あのときの愚かなガキがこの僕さ」

プライムスは言った。「シャグラン、君は僕の縄を解いてくれて、早く逃げるよう言つてくれたね。僕はそのとき、本物の天使が現れたのかと思ったよ。まあ、あまりに手酷く手殴られて、意識がかなり朦朧としていたせいもあるけど、君の優しい言葉に僕が感動したことは確かだ」

プライムスは私の反応を確かめるように少し黙ったあと、また話しだした。

「しかしあのときの僕に逃げる切る体力なんて残つてなかつた。君がせつかく縄を解いてくれても、指を動かすのがやつとだつた」

それで君はとんでもない提案をしてくれたんだ。

プライムスはまるでそのときの、子供の私にでも語りかけるように、一瞬優しい表情を浮かべた

「『魔法を使つたら逃げられるだろ』『うう』そう言つて、君の父の宝石をくすねて僕に渡してきたのさ」

「・・・そ、そんなの、まるで覚えていないな

私は首を激しく振りながら言った。

本当に細かいことまで覚えていないのだ。

それは幼少の私にとつて、とても印象的な出来事で、人生の岐路と言つてもいい事件なのだけど、この記憶もあやふやでまるで夢のよつ。

「まあ、無理もないね。実はあのとき、僕の縄をとき、更に逃げるための宝石まで用意してくれた恩義のある君に向かつて、僕は魔法を使つたんだよ。宝石一つじゃ足りない。もっと持つてくれ。そうやって君を操つたのさ」

プラスは過去のその行いを恥じるよつに、少し照れ臭そうに笑つた。

私は彼の言葉に呆れてか、あるいは驚いたからか、いずれにしろ何も言葉が出てこなかつた。

プラスはそんな私の様子を気遣つように見つめながら更に言つた。

「それで君はありつたけの宝石を持ってくれた。両手でも持てないくらいの宝石だつた。僕はそれを前に歓喜に打ち震えたよ。一瞬、傷の痛みも吹き飛ぶほどに。これで奴らに復讐出来るつて思つたし、これだけあれば魔法の修行にも使えるつてね。結果的にこの大量の宝石のお陰で、僕は魔法使いとして若くして成功出来たと思う

プラスは少し間を置いてから言つた。「しかしそれを持つて逃げようと思ったとき、運悪く、君の父と従業員たちが夜警を連れて戻ってきた。そこから先は覚えているだろ?」

「・・・あ、ああ。父も従業員たちも、そして夜警もみんな死んでいた。僕は氣絶して朝まで眠つていたけど、自分の判断のせいで

こんなことになつたと自分を責め続けた。それにこの事件を期に宝石店だつて潰れた。それなりに裕福だつた人生はあの日で終わった

「うん、あれは僕がやつたんだ。すまなかつた、シャグラン。君の父まで手にかけて・・・殺すつもりはなかつたけど、逃げるためには仕方なかつた」

プラークスは珍しいことに、申し訳なさそうに少しだけ頭を下げてきた。

私はそんな彼の姿をまともに目つめながら、何も言葉を返さなかつた。だつて何を言われようと許せるわけがないではないか。父は周りの人から慕われたり、信用されたりするような人間ではなかつたかもしれないけど、それでも私の父なのだ。この世界でたつた一人の存在である。

それなのにこれくらいで許せるわけがない。プラークスが母の死に報復したのと同じ心境だ。

しかしプラークスはまだ私から許しを得られるとでも思つているのか、言い訳をするように話し続けた。

「僕はしばらくの間、母の復讐に夢中で、その事件を自分の中でも上手く処理する時間がなかつた。いや、考へないようにしていたと言つていいと思う。しかし復讐を果たしても、どうにも心が晴れないんだ。そしてなぜか君の顔が何度も夢に出てきた。それで気づいたわけさ。僕は君の優しさにとんでもなく魅了されていたつてことを

「な、何なんだよ、それ。人の人生を無茶苦茶にしておいて・・・

」

私はせつと同じように無視してやろうと思つたけど、思わず彼の言葉に笑いそうになつた。だつてあまりに勝手なプラスの言葉に呆れ返つたからだ。いや、実際、私は声を上げて笑つてやつた。

「馬鹿じゃないのか、プラス、君はいつたいどこの喜劇役者なんだよー！」

「ああ、笑えるだら？ でも本当なのさ。それどころか僕は君と友達になりたかった。是非、成功と富を、君と分かち合いたいと思つたのさ。それでこの塔を手に入れたあつきに、君の記憶をいじつて、ここに呼び寄せた、そういうわけさ」

プラスは全てを話し終えたのか、少しすつきりした表情で私を見てきた。

そのすつきりした表情に、子供のような無垢さを私は感じた。そのプラスの表情が、宝石店を襲つたあの魔法使い見習いの少年の顔とつながつて一つになる。

間違いない、彼が真実を告白しているのは確かな気がする。

もちろんプラスにはどんなデタラメでも信じ込ませる力があるのだろう。これだつて偽の記憶かもしれない。

しかしもはや嘘を言つても意味のない場面。

「・・・な、なるほどね、色々と、わからなかつたものがわかつてきたことは確かかもしれない」

私は呆れて何も喋る気になれなかつたが、何とか絞り出すように

言った。「幼い日のあの事件の真相、空白の記憶の理由。そして僕と君に関わる、何もかもが偽りだつたつてことがよくわかった……」

すると私も驚くべうい、フラー・ヌスが声を張り上げて私の言葉を否定してきた。

「僕と君に関わる何もかも偽りだつたつて？ シャグラン、そんなことないさ！」

「ビ、ビツヒセ？』

「少なくとも僕が君に感じる友情は本物だつたよ……」

「こ、これが本物の友情だつて？」

今度は私が声を張り上げる番だつた。

「フ、フラー・ヌス、本気でそう思つてゐるのなら君はあまりに悲しい男だよ。あまりに悲しくて、じつちが泣きたくなつてへる……」

私は泣き叫ぶように言つた。

本当ならフラー・ヌスを殴つてやりたい氣分だ。しかし彼に近寄るのも面倒。精一杯の憐れみと軽蔑を込めてこう言つてやるだけで十分であるひ。

「君は今まで友達なんていなかつただろ？ よくわかるよ、君こそ寂しい生い立ちがね！」

本当に寂しい奴だ。

憐れで憐れで仕方がない。

もつ彼に投げかける言葉なんて何も思いつかないぐらいい・・・。

「・・・何を泣いてるんだよ、シャグラン」

プーラースが困惑したように私に向ってきました。

「な、泣いてなどいなさい。ただあまりに君が愚かだから、情けなくて仕方がないのさー。」

更にやがて言ひしやがつとしたとき、鐘の音が塔に鳴り響いた。

蛮族が来襲した合図だ。

こんなときに邪魔をしやがつて！ 何て惡々しい連中だ。  
私は普段のプーラースがやるよつて、苛々した眼差しで鐘の音の  
あるほんに田をやつた。

「また来たな。話しあはしねりへ中断だ」

しかしプーラースはずつと冷静にやつ言つた。私と彼の間に置か  
れていた女神像を見ながら。

むしろ彼はようやくこの場面から解放されてホッとしているのか  
もしけない。

「あ、ああ・・・」

確かにもう泣いている場合じゃない。まして苛々している場合で  
は。

これで全ての戦いに終止符を打たなければいけないのだ。それがこの塔で最後の私の務めであろう。これから自分の身がどうなるのかわからないが、せめてこれだけはやり遂げなければ。

私はその女神像を拾い上げた。

まだまだプチーヌスに言いたりないことがあるような気がしたけれど、そのような感情を振り払うように、塔の出口に向かって全速力で走った。

## 最終章 3) 戦いの音

しかし頭が混乱する。プラーヌスの言つた言葉が私の中で渦巻いて、一向に整理出来ない。いつたいどつこつことなんだ？

とにかく私はプラーヌスに利用され通しだつたつてことか。プラーヌスは友情がどうとか言つていたけれど、結局はそういうことなんだろう？

それに私はもう一つの事態でも頭を悩ましている。

これを渡せばフローリアとも逢つことが出来なくなるといつ事実。その前にせめて一言、フローリアと別れを告げるべきだったと私は後悔した。

プラーヌスなんかの問題に時間を取られたことが腹正しい。あんな告白は何もかもが落ち着いてからで良かったと今になれば思う。

いや、もしかしたら少しくらいフローリアと話す時間はあるかもしない。私は廊下を駆けながらふと思つた。

蛮族の来襲を知らせる鐘は高い見張り台にある。かなり早い段階で蛮族の襲来を察知出来るのだ。まだ蛮族がこの塔に到着するまでに少しくらいの時間に余裕はあるはずなのだ。

あわよくば一言くらいい、フローリアと言葉を交わせるのではなかろうか。だつてこのままでは哀し過ぎる。

そのまま彼女と別れの挨拶を交わすことなく一度と逢えなくなるなんて絶対に嫌だ。ああ、この偽りばかりの世界で、ただ彼女だけが眞実に思える。

私は一瞬、フローリアのいるほうに足が向かいかけた。彼女の体調が戻つたなら医務室で働いているはずだ。それがまだなら部屋で眠つてゐるであらう。

しかしそのとき窓の外から戦いの音が聞こえてきた。

鉄と鉄がぶつかり合つ金属音、馬蹄の響き、怒号と悲鳴が。

私はどうしてこのような戦いの音が聞こえてくるのかしばらく理解出来なかつた。だがすぐに思い出した。

私はすっかり忘れていたのだ。五人の騎士たちが連れてきた兵が百数十人いたことを。

彼らは塔の外で幕舎を張つて待機していた。どうやら蛮族の襲撃に対し、すぐに撃退に向かつてしまつたよう。

これでフローリアと逢つている時間はなくなつたようだ・・・。一刻でも早くこの戦いを終わらせなければ。

私は彼女と逢うのを諦め、塔の出口に向かつて走つた。

## 最終章 4) 雷鳴

外に出る扉を開けた瞬間、血の匂いがムツと嗅覚を刺激してきた。

「やめろ！」

そんな声が届くわけないことはわかつていただが、私は叫ばざるを得なかつた。

五人の騎士が率いてきた百数十の兵は傲然と蛮族たちに襲いかかつていつた。

蛮族を心の底から憎しみ、蛮族への復讐を果たそうとしているのだ。

そもそも兵たちをこの復讐に駆り立てたのはブラーーヌスの策だ。彼らは蛮族がバルザ殿を殺したという嘘にすっかり騙され、怒りに燃えているのだ。

「もう戦いは終わつたんだ」

私はまた叫んだ。

しかし戦場の真只中に私の声が聞こえるわけなかつた。その間にも蛮族たちは次々に殺されていく。

正規に訓練を積んだ兵たちは組織立つて弓矢を放ち、その攻撃に怯んで背中を見せた蛮族を馬上から槍で突き刺していった。戦いは狩りに似た虐殺だつた。

私はこの虐殺にびくびくして割つて入つていいかわらず、ただ手

をこまねいてそれを見るしかなかつた。

これではこの女神像を蛮族に返すことなど不可能だ。その前に蛮族たちは殺されつくしてしまつに違ひない。

どうにかしてこゝちに注意を惹かなければならぬ。しかしそれをするには私はあまりに無力で無策だつた。

「僕に任せらるんだ」

そのとき私の横にプラーヌスがやつてきてやつと話つた。

プラーヌスは懷から宝石を幾つか取り出した。

彼はその数を調節してから、ロッドを掲げ、何か言葉をつぶやいた。するとそれまで晴れ渡つていた空がにわかに曇り出した。  
どこからともなく黒い雲が現れ、それが徐々に大きく発達していく。

その雲が雷を孕み、不穏な音を鳴らし始めた。

「何をするんだよ、プラーヌス？」

私は問ひ詰めるよつて尋ねた。

「もう誰も殺しはしないぞ。こゝに注意を引いてやるだけだ」

プラーヌスは一呼吸置いてから、ロッドを振り下ろした。

すると眼を鋭く射るよつて光が瞬き、地面を搖るがすよつた爆音が戦場に響いた。

そのあと、辺りは一瞬死のよつて静まり返つた。兵も蛮族も驚きのあまり戦いを一時やめて、雷の落ちたほうを呆然と見つめていた。



## 最終章 5) 沈黙する戦場の口の中で

プライヌスの放った雷がビーム落雷したのかよくわからなかつたが、辺りはもうむつたる煙でしばりて視界も定かではなかつた。

私はその煙の立ち込める中を蛮族たちの死体を跨ぎ越しながら、出来るだけ戦場の真ん中へ、兵と蛮族たちが密集する地帯に歩みを進めた。

先程までの喧騒が嘘のよつて、戦場は静まり返つてゐる。

彼らはこれまで戦つていたことを一時忘れ、ノロノロと戦場の中にやつてくる私を呆然とした表情で不思議やつて見てきた。

「全て終わつたんだ、蛮族たちよ。もう一度と塔に近寄るんじやない」

私はそつと置いて、一番身分の高そうな蛮族に女神像を手渡した。

その蛮族はそれをしばらく不思議そうに見つめていたが、事態を飲み込めたのか突然に悲鳴のよつな歓声を上げ、仲間たちを集めて向ひのほうに走り出しついた。

私は次に、騎士たちが連れてきた兵たちのほうに注意を向けた。しかし彼らにどうやって説明をしたらいのかわからなくて、そのまま沈黙してしまつた。

彼らに何かを渡せば戦うこと止めてくれるのか？ そんなものはないのだ。だからといって本当のことを言えば、蛮族に対する剣

は収めるかもしれないが、今度は私たちが彼らと戦わなければいけなくなる。

すなわち打つ手など何一つない……。

そうやって困り果てていた私の横にプラーヌスがやつてきた。

「僕がこの塔の主だ。バルの国の兵たちよ。すぐに剣を引いてくれ。彼らは実はバルザ殿の仇などではない」

「フ、プラーヌス」

私はその言葉に驚きながら彼を見つめた。

いや、驚いているのは私だけじゃない。プラーヌスの言葉を聞いた兵士たちは、混乱した表情で互いの顔を見合させた。

彼らはしばらくまごついていたが、整列していた兵の一ヶ所が崩れて、馬に乗った兵士が一人、ゆっくりとしつこく近づいてきた。

「この兵たちの中で一番身分の高いのは君か？」

プラーヌスはその男を見て言った。

初老の男だ。騎士のような武装だが、塔に来た五人の騎士たちよりも着ている鎧や、持っている武具はずつと粗末そうだ。

「ああ、その通り。だがいつたいどういうことなんだ？ 我々の上官である五人の騎士様が塔を訪れたと思うが」

「彼らは五人とも死んだ」

プライヌスはそう言った。

「何だつて？」

馬上の兵士は絶句した。後ろの兵士たちも騒然とし始めた。

「どう、どうしてだ？」

「つまり僕が殺したからだ」

プライヌスは少し言い難そうであったが、はつきりとそう言った。すると兵士たちはいつそうざわめいた。ざわめいた後、さつきまでの戸惑いに代わって、プライヌスに対する殺氣と憎しみが、兵たちの間に漲り始めたのが手に取るようになかった。

「なぜそんなことを？」

リーダー格の馬上の兵士は信じられないと言った表情で叫んだ。

「それは、バルザ殿を拉致したのが、この僕だからぞ！」

その言葉はさっきの言葉よりも衝撃的だったようだ。兵たちは言葉もなく、ただ茫然とした表情でこっちを見つめてきた。

プライヌスはそんな彼らに向けて切々と話し始めた。

「君たちは僕が憎くて仕方ないであろう。復讐を果たさないと気が済まないに違いない。だけど僕も殺されるわけにいかない。もちろん君たちを手に掛けたくもない。頼む、大人しく兵を退いてくれ

ないか」

誰一人、何も答えなかつた。

依然として沈黙を続け、ただこちらをにらむわけでもなくじつと見つめてくるだけだ。

「都合の良過ぎる頼みだとはわかつてゐる。許して欲しいとは言わない。僕を恨んだままでいい。引き下がつて欲しい」

そう言つたフーラーヌスに向かつて、突然、一人の兵士が叫び声をあげながら突進してきた。

彼は無念そうにロツドを掲げて、突進してきた兵士の鼻先に炎を浴びせ掛けた。その兵は炎に驚いて尻餅をついた。

「お願いだ」

フーラーヌスは哀願するよつて言つた。

しかしその一人の兵士の行動によつて目を覚ましたのか、さつきまで呆然とするだけであつた他の兵士たちの目にも、彼に対する憎しみが甦つてきたようだつた。

武器を握り直し、少しずつこちらにじり寄つてくる。

兵たちは襲いかかつてくる寸前の獣のように全身を震わせてゐた。塔の中で五人の兵士たちがフーラーヌスに襲いかかつてきつた時とまるで同じ空氣。

やはり戦いになるのか。

私は無念を噛みしめながら思つた。覚悟を決める必要があるかも

しない。

しかしプラスもこれ以上、無益な殺戮は犯したくないようであることは確かだ。

だってあのプライドが高くて、傲慢なプラスが、さつき兵たちに許しを請つたのだから。私からすればそれは驚くべき出来事だった。

これまでのプラスとまるで変わった気がする。

何だかそんな態度を見て、彼は私に対しても謝りうとしているんじゃないかなって気にはならなかった。少しは心を入れ替える。だからこれまでのことのことを水に流してくれ、そう言つているかのよ。

何か逃れる方法はないのか？

だからこそ痛切にそう思つた。もちろんそれだけで、プラスのこれまでの行いを水に流せるわけではないけれど、何が何でもこの戦いをやめさせたいのは確か。

とにかく私は兵たちのほうに注意を払いながら必死に考えた。とはいえたが、何も浮かんでこなかつた。バルザと五人の騎士を殺した罪が許されるための方法など、いつたいあるのだろうか。

しかし私が絶望的な思いに駆られたそのとき、突然とてつもなく大きな声が遠くのほうから湧き上がってきた。

それはこの緊張感に満ちた場面に相応しからぬ歓声だった。  
まるで闘技場で勝利した闘士を讃えるとき、あるいは最頂の俳優を目にしたときのような歓声。

私は驚いてそちらに目をやった。兵士たちもその声のまづを振り向いた。

私たちから少し離れた場所で、生き残りの蛮族たちが集まって何事か叫びながら騒いでいた。

彼らはまるで子供のように無邪気に飛び跳ねている。どうやら女神の像が返ってきた喜びを盛大に祝っているようだった。

## 最終章 6) 調停

その歓喜の大爆発の後、一瞬また静まり返ったかと思つと、今度はとても静かで清らかな時間が流れ始めた。

蛮族たちは大地にひれ伏し出した。

どうやら祈りの時間のようなものが始まつたようだ。

私もブラー・ヌスも、殺氣立つていた兵士たちも、思わずその光景に心を奪われた。

それは見ているだけで、いちじらも静謐で清らかな気分にさせられるような光景であったのだ。

蛮族たちは本当に心から祈りを捧げ、感動にむせび泣いている。私の胸の中にも、ある種の崇高な感情が呼び起こされた。それは兵士たちも同様のようで、その光景を見惚れているように眺めている。

蛮族たちのその祈りと陶酔の時間はどういうであつたろうか。やがて女神の像を持つた蛮族を先頭に、蛮族の群れはゆっくりと引き上げ始めた。

砂糖に集まる蟻のように、懲りずに何度もこの塔に襲撃を繰り返してきた蛮族たちが、自らの意思でその槍を納めよつとしている。

これで一つ、難題は解決したようだ。

私はホッとしため息を吐きながらそう思った。蛮族のこの様子を見る限り、もう一度とこの塔に襲撃をかけてくることはないであろう。

私にとつてその代償は大きかつたけれど、しかし平和が何よりなのだ。その光景を見る限り、自分の行動は正しかつたのだと確信せざるを得ない。

だがまだ難題が残つている。

私は兵士たちに目をやつた。

リーダー格の馬上の兵士がブランヌスをじっと見ていた。ブランヌスも彼を警戒するように見つめ返している。

馬上の兵はまだ怒りで震えているようだ。引き上げていく蛮族たちの姿も、彼の殺氣をいささかも減じはしなかつたよう。

彼は剣を振り上げ、大声で号令を掛けようとした。「全軍、この魔法使いを打ち取れ！」

しかしその言葉を言い終わらぬうちに、またもやそれを遮るように声がした。

「やめるんだ！ もう戦いは終わった」

私たちは驚いて、一斉にその声のするほうを見た。馬上のリーダー格の兵士も、彼の配下の兵士も、それにブランヌスですら、意外そうにその声に眉をひそめていた。

塔のほうから何者かが歩いてくる。大柄の逞しい男だ。胸に女性を抱え、じつに向かって堂々とした足取りでやってくる。

「バルザ様！」

誰かが叫んだ。

バルザ様だつて？

私は目を凝らしてその人影を見つめた。

確かに見覚えがある。極端に背筋を伸ばした美しい姿勢、頼りになりそうな広い肩幅、まるで勇気と希望を形にした、そのシルエット。

本当にそれはバルザ殿だった。

私は咄嗟に、プラーヌスがまたもや魔法でそのような幻を拵えたのかと当然考えた。その偽のバルザを使って、この兵たちを引き上げさせようとしているのだと。

だってバルザ殿は死んだはずだ。あの日から一、二日は経つてゐるはずである。生きていたとしたひ、これまでどこにいたのか？

しかし当のプラーヌスも、そのバルザ殿に似た何者かを怪訝な眼差しで見つめている。

「我々も引き返そ」

その本物か偽物か定かならぬバルザ殿が、兵たちに向かつて大声で言った。

「バルザ様、ご無事でしたか！」

馬上の兵士が馬から転げ落ちるように飛び降りて、そのバルザ殿

に似た何者かに駆け寄った。「この男からバルザ様を殺めたという言葉を聞いて、私たちは危うく騙されたところでした！」

バルザ殿に似た者はプラー・ヌスを意味ありげな視線で見ながら言った。

「ああ、確かに私はこの男に敗れた。しかし寸前で私の命を奪うこと躊躇したようだ。おそらく数日間意識を失っていたが、まだ私は生き永らえている・・・」

「な、バルザ様が敗れたですと」

「ああ、私は負けたのだ・・・」

バルザ殿に似た何者かが屈辱を噛み締めるように呟いた。  
だけど私はその表情を見て確信した。どうやらこれは本物のバルザ殿のようだつて。

先程プラー・ヌスが呼びだした幻とはまるで違う。このバルザ殿には明らかな実体のようなものがあるように見える。重みがあるように見える。

それに何より誠実そうで、何事に対しても真剣なこの眼差し。少しあつれて、疲れ果てたような表情をしているが、間違いなくあのバルザ殿だ。

「すまない、皆の者」

どうやら本物に間違いないバルザ殿が兵たちに頭を下げた。「私は自分の失った誇りや、復讐の怒りにとらわれ、祖国のことを失念していた。一日でも早くバルに戻ることを第一に考えるべきであつ

たのに、このバルザ、私情に眼を瞑らせてしまつた。それは騎士としてあるまじき行動。私はこの事件で自分がいかに愚かで弱い人間であるかを悟つた・・・。騎士と名乗っていることが恥ずかしいくらいに・・・。全軍今よりすぐ、パルに戻るぞ！」

「し、しかし、この者は？」

リーダーの男がバルザ殿の言葉に驚きながら断固として反論した。

「・・・確かに失つたものは余りに多い。謁見の間にあつた五人の騎士の死体も見た、存亡の危機にある祖国のことも聞いてた、それに我が妻はこの男に殺された」

バルザは胸に抱えている女性を悲しそうに見つめた。

「なんですか？」

バルザ殿のその言葉に、再び兵士たちの間に大きな動搖が広がつた。

私もその言葉に驚愕<sup>ショック</sup>したことは言うまでもない。プラーヌスはあの五人の騎士のみならず、女性まで手にかけていたとは。

「しかしもはや殺し合ひは無益。ましてこの戦いは私の私闘でもある。そなたたちを巻き込むわけにはいかない」

「ではこの邪悪な男をそのまま生かしておくれですか？ 我々はバルザ様の復讐に喜んで従いますぞ！」

リーダー格の男だけでなく、他の兵士も口々にそう言つた。

「私だってこの塔の主が憎い。この男の行動を理解する気にもなれない。まして許すことなど永遠に不可能」

バルザ殿は込み上げてくる感情を抑えるようにしてブローヌスをにらんでいた。

「・・・しかし、全軍、ただちにバルに引き返す」

バルザ殿は振り払つようにブローヌスから視線を話し、兵たちに号令をかけた。

兵たちはいくらか不満なようであつたが、バルザ殿の勢いに押され、皆、渋々頷き始めた。それを確かめてからバルザ殿はふと視線を緩め私を見てきた。

「シャグラン殿、女神像を見つけられたのですね。お手柄です。あなたのその行動がどうやらこの無益の戦を止めたようです。そしてもう一つの戦を止めるのはこのバルザの役目。彼への怒りが收まるることはありますかが、我々は引き上げます」

異論はないな?

バルザ殿が再びブローヌスに向き直りそう言った。

「ああ、もちろんね」

「今日で私はこの塔の門番を辞任するが?」

「止めはしないさ。あなたがバルの国を救うのを僕は願っている

「ついてこれない者は置き去りにする！」

バルザ殿は馬に飛び乗り、そう言った。「ただちにバルに向けて全軍全力疾走！」

## 最終章 7) 邪悪な友人

百数人の兵は塔の前から去つていった。

しかし誰一人納得して去つていく兵はいなかつたようだ。最後まで憎しみの籠つた視線で私たちをにらみつけていった。

私たちは黙つてそれを受け止めるしかなかつた。兵は去つていつたが、彼らの恨みは決して消え去ることはないだろう。それは間違いない。

「とはいえた全で解決したようだな」

去つっていく兵たちを見守りながら、プラーヌスが言つた。

「あ、ああ」

私はプラーヌスの言葉に頷いた。

しかしながら私たちの問題は何も解決していない。いや、むしろ私はいつそう混乱をし始めたと言つていい。

蛮族が襲来する前、あの告白を聞いた直後は怒りしか感じなかつた。すぐにでもこの塔を出て行こう、そう決心が定まつていた。

だけど今は、この戦いをおさめるためにプラーヌスが取つた行動に、私は少しばかり感心しているのだ。

それにゆつくりと響き出したのかもしない。プラーヌスが告白した言葉がようやく今になつて、それなりに理解出来るものになりつつある。

プラークスが私を必要としている。それは間違いない事実である。

それにさつき、プラークスから逃げるチャンスはあったと思つ。バルザ殿に向かつて、私もプラークスの被害者だから匿つて預けないかと願い出れば、あの場面では彼も手は出せなかつた氣がするのだ。

しかしそれは出来なかつた。

いや、する氣になれなかつた。

私の考えが変わりつつあつたからだ。

「わかつたよ、プラークス！」

私は言つた。「まだしばらぐ」の塔に居よつ。はつきり言つて君のことはよく理解出来ない。かなり自己中心的で自分勝手だし、とにかくその性格には驚かされることばかりだ。しかも結果的に君が僕の父を殺めたことは確か・・・。それを考へると、これからも君と共に時間を過ごすなんてとてもじやないけど無理だけど

私は一呼吸置いてから言つた。

「でも君が邪悪な人間じやない」とはわかる。それにいくつもこのから出ていくと言い張つても、どうせ記憶を奪う気なんだろ？それならまだしばらくこの塔に居るよ。許したわけじやないけど、さつきの行動で見直したことは事実だから

私は努めて明るく、さつきまでの深刻な遣り取りなどなかつたふうな口調で言つた。

「そうか、シャグラン、嬉しいよ」

するとフレーヌスは少しホッとしたよつて呟いた。

「それにつきりバルザ殿をもその手で殺めたのかと思つていた、だけどいぐり君でもそこまで出来なかつたわけだ」

私は言つた。

「いや、まあ実はそれに関する誤解がある。僕は彼を殺したつもりだつた。魔法で彼の心臓を止めたはずだつたんだ。それで彼の妻の死体を安置していた部屋に置いておいた」

フレーヌスは少し言い難そうにそつと言つてきた。

「えつ？」

「だからさつきにこっちに向かつて彼が歩いてきたときは本当に驚いたよ。いつたい何事が起きたのかしばらく理解出来なかつたらいだ」

「・・・え？」

「しかしまあ、バルザ殿は國宝に匹敵する高価な宝具。殺そつと思つたけど、僕もどこかで手心を加えたのかもしれないね」

「・・・あ、あれ、そ、そつだつたのか。で、でも、それでも見直したよ。とにかくすぐ塔を出ると言つた言葉は撤回する

「うん、それは本当に嬉しいよ」

プライムスは安心したように私の言葉に頷いた。しかし彼は何だか申し訳なさそうな表情を浮かべ、私にこう言つてきた。

「でも君の記憶は奪つ。やはりあんな告白はするべきじやなかつた」

「えつ？」

私はプライムスの言葉に呆然とした。

「すまないね、あんなことはなかつたことにしたいんだ」

「ちよつと待てよ、プライムス！ もう水に流すつて僕は言つているんだぜ？」

「わかつてゐる、でもね」

プライムスは残念そうに首を振りながら、懐から宝石を取り出した。

「ま、待つてくれよ、プライムス！」

私はどうにか彼を翻意させよつと思いつくがまま喋つた。「こんなことをしてては君は永遠に友情なんてものを知ることは出来ないぜ。君にとって恥ずかしいかもしれないけど、そういう本音をぶつけ合つことが友情といつ」

だけビプライムスは私の言葉を無視して、何か魔法の言葉を唱え

出した。

私は思わず彼の仕草をマジマジと観察してしまった。しかしすぐ  
に事態を理解して、とりあえず全速力で彼から逃げようとした。

しかしやがて足がもつれていき、その場に倒れた。

「すまないね、シャグラン」

そのよつな言葉が聞こえた気がするけど、しかしその記憶を忘れ  
されてしまうのだろう。私の心は徐々に真っ暗になっていく・・・。

## Hペローグ 1) 悲しきバルザの章 Hペローグ

心臓が強烈に痛い。

意識してそれを動かさないと、今にも力なくその鼓動を止めてしまいそうだ。

バルザはその痛みに顔を顰めながら目覚めた。

私は生きているのか？

目覚めてすぐにバルザが思ったことはそれだ。

あの邪悪な魔法使いに私は負けたのに、しかしビックやう生き永らえてしまったようだ。

あの瞬間のことがありありと思い出される。

勝負は呆気なかつた。バルザの剣があの邪悪な魔法使いの身体に届くはるか前に、邪悪な魔法使いの魔法によつてバルザの肉体に異変が起きた。

そう、この痛み、まるで心臓を轟掴みにされたような痛みが襲つたのだ。

それでバルザは力なく倒れた。

まるで勝負にもならなかつたと言つていい。惨めな程の完敗である。

しかしその敗北には何の爽やかともない。自分よりも圧倒的に強い戦士に出会えた感動とは無縁の、ただ負けただけの戦い・・・。

「心臓の痛みは、そのビリジョウもない惨めさも起因しているかもしねえ。

バルザはふと、隣で誰かが眠っていること這気がついた。彼が寝かされていたのと同じ、石で出来た台の上、痛む心臓を抑えながら、その人物のほうに手をやった。

それは妻だった。

顔色は生氣なく蒼ざめ、唇は色が抜けたように乾いている。しかし間違いなく妻だ。

「・・・おお、我が愛！」

バルザは思わず感極まり、倒れ込むよつこじて彼女の胸に顔をうずめて泣いた。

彼は妻の姿を見て、自分がいかに彼女のことを愛していたのかを瞬時に思い出した。

ハイネへの感情、あの偽の想い出、それは全て妻に向けた愛、あるいは妻と共有したかつたこのバルザの希望だったのだ。

それをあの邪悪な魔法使いに上手く利用された。その挙句の果て彼は妻への愛まで失いそうになつたこともあつた。

しかし彼が失つたのはハイネではなく、妻だったのだ。

私がこれまで愛したのはこの女性しかいない。

確かにその結婚生活は上手くいかなかつたが、それは嘘偽りのない事実。今はそれを堂々と言える。

しかしどうやらその妻は死んでいるようだ。

彼女が息をしていいないのは明らかだった。体温はなく、石のように冷たい。

だがその姿は腐敗することなく、生きていたときの姿をそのまま留めていた。

バルザはそれを不思議にも思わなかつた。これは魔法使いの魔法の仕業である。この塔に飾られてあつた花は、一つとして枯れたり萎えたりするものはなかつた。妻も同じ魔法の支配下にあるのだろう。

「……」

「……」

バルザは悲しみから顔を上げ、そう思った。

外から戦いの音がする。聞き慣れた鬨の声、鉄と鉄がぶつかり合う音。

目覚めてすぐに戦場の音が聞こえてくるなんて、私はやはり戦いに呪われているようだ。

「戦場が私を呼んでいる……」

今すぐに行かなくては。

バルザは立ち上がつた。

しかし戦場へ赴こうといふのに、バルザは石畳の床に無造作に置かれた愛用の剣は拾わず、その代わりのその空いた両手で妻の遺体を抱き上げた。

外で何が起きているのかわからない。

しかしもうパルに帰らなくてはならないのだ。

バルザはあの邪悪な魔法使いにその顔を告げるため、塔の外の戦場に向かつた。

## ヒローゲ 2) シャグランの勘違い

塔の中で迷子になつてゐる。

ある程度は勝手知つた塔のはずなのに、どれだけ歩いても見覚えのある場所を見つけられない。

私は焦つていた。このままだと自分の部屋に永遠に帰られないんじやないかつて。下手したら私はこの塔の中で餓死してしまうんじやないか。

そのときふとちよづ廊下を曲がりつとしている召使いの後ろ姿を見掛けた。

見たことのない横顔だつたけれど、私は慌てて彼を追いかけた。とりあえず彼の後をついていけば、自分の部屋に帰られるはずだと思つて。

しかし不思議と身体が重くて全くスピードが出ない。いくら足を動かしても、手を動かしても思つよう前に進んでいかない。

そのうちに彼の後ろ姿はどんどん遠ざかっていく。せつかくのチャンスを逃してしまふうだと、私は絶望感に打ちひしがれていた。

そのときこれが夢だと気づいた。

これが夢なら迷子になつたままで、目覚めさえすれば自分の部屋に帰られるわけか。

私は目覚めつつある意識の中そつ考えてホッとした。だったらもう必死になつて追いかける必要はない。

私はそんな安心感を覚えながら目覚めた。

しかし見上げた天井にまるで見覚えがなかつた。夢から覚めても私の迷いは続いていたのだ。

ハナシ、だいたい

私は焦りながら身体を起こした。

「あつ、起きた？」

声のほうを見るとアビゴが立っていた。

「ア、アビゴ？」

天井は見覚えないが、見渡すとよく見知っている部屋だ。「……良かった、なんだ、ここは医務室か……」

「何よ、いきなり大声あげて」

「・・・迷子になつた夢を見たんだよ。夢から覚めてもまだ知らないといふだつたんで、正夢になつたのかとなり焦つた」

「そんな」とあるわけないじゃない」

アビュはおかしそうに笑つた。

「やあやうだね」

その笑い声に改めて帰つてこられたことを実感しながら私も言つ

た。

だけど私はどうしてこんなとこで寝て いるんだ？ 別に病気も

怪我もした記憶もなければ、そのような感触もないの。」

「そのことをアビュに尋ねた。

「やつぱり迷子じゃない。何も覚えてないの?」

「あ、ああ・・・、まるで何も」

それに何かとんでもない空白感を感じるのだ。

空白感、あるいは欠落感と言えばいいのか。これまで感じたことのない虚しさ。夢の中で味わった心細さがそのまま続いている感覚。とても大切な物を失つたあの喪失感。

いや、どう説明してもこの感覚は上手く説明出来ない。とにかく私はカラッポを抱えている。

「主にいつやって」

アビュは胸の前で何かを抱えるような仕草をした。「お姫様みたいに抱かれながら、医務室に運ばれてきたのよ。そのときはびっくりしたわ、色んな意味で」

わ、私がブーナスに?

「まあ、戦いが終わって、ホッとして気絶したみたいだつて主は言つてたけど」

「戦いが終わつただつて? 何の戦いだよ?」

私はまたもやアビュの言葉に驚かされた。

「蛮族との戦いよ。それも覚えてないの？ ボスが女神像を見つけて、それを彼らに返したらしいじやない。それで蛮族たちはすつごい喜んで帰つていったんだから。それ以来、もう来襲してこないし。本当に大手柄よ」

「蛮族に女神像を返した？ ほ、僕が？」

まるで覚えていない。アビュはまるで他人の出来事を喋つてきているようだ。

確かに女神像を見つけたのは覚えている。地下の牢獄にあったのだ。だけど私は返すのを躊躇していた。

あれを返せばフローリアがこの塔からいなくなつてしまふからだ。それなのに私の知らない私は、そのようなことを決断したのか・・・。

もしかしたらそんな重大な決断に自分の理性が耐えきれなくて、一時的に記憶を失つてしまつたのかもしれない。

いや、そうだったらあまりに情けないのだけど、別に外傷もないようだからそうとしか思えない。

「そうか、そうだったのか・・・」

私は複雑な気持ちでそう言つた。底がポカッと抜けてしまったような果てしない寂さを感じる。

これでもうフローリアと一度と逢うことは不可能になつたわけか。願うべくはせめて、その私の知らない私が最後にフローリアと気のきいた別れの挨拶を交わしたことを探るぐらいだ。

「アビュ、君はフローリアとちゃんと別れることが出来たかい？」

私は言った。

「へ？ ハリコツー」と、

アビュが首を傾げて言つてきた。

「だ、だからフローリアはもうこの塔からいなくなつただろ？」「もしかしたらアビュはまだ気づいていないのか。私の行動によつて彼女が消え去つてしまつたこと」。

「彼女は女神だつたわけだ。それで僕が蛮族に女神を返したことによつて、もつ」

私がそつ説明しよつとしたらアビュが遮つてきた。

「ちゅ、ちゅつと待つて、何言つてんのよ。フローリアさん、いるよ、普通に」

「ええ？」

な、何だつて？

「やつぱり頭でも強く打つたんぢゃない。何なの真面目な顔して、フローリアは女神だつたつて。まだそんなこと言つてたの？ 聞いてこるこつひが恥ずかしくなるような勘違いなんですね」

「・・・えつ？」

「まあ、別にどうでもいいけど、ボスが誰に憧れよつが

そう言いながらアビュは不機嫌な表情で唇を尖らせ始めた。「バルザさんも元気みたいだつたし、いつか私はパルに遊びに行くからや」

「な、何だつて？」

これで何度もだらうか、アビュの言葉に驚かされるのは。どうやら私が失った記憶の中であらゆることが起きていたようだ。

「君はバルザ殿にも会つたのか？」

「ううん、会つたわけでも喋つたわけでもないし、何があつたのか私もよくわからんんだけど・・・とにかくパルから迎えに来た兵を連れて帰つちやつた」

と言つことはバルザ殿は生きている・・・。  
いや、そんなことよりもフローリアがまだこの塔にいるだつて？

そのとき扉の方でカタカタと物音がした。

「ああ、女神さんが來たわ」

アビュは嫌みな口調でそう言つて私に舌を出してきた。しかし本当に開いた扉の向こうにフローリアの姿が見えた。

「フ、フローリア・・・」

私はまるで亡靈でも眺めるように彼女の姿を見た。そんな私をフ

ローリアはいぶかしげに見返してきた。

「どうしたんですか？ そんな驚いた顔して・・・」

## Hペローグ ③) 魔法使いとの友情

その日の夕暮、謁見の間でプラーヌスと会つた。

「訳がわからない」とだけだよ、『プラーヌス』

私は彼の顔を見て早々、訴え掛けるように言つた。「どうして一時的に記憶がないのかわからないし、それに女神像のことでは僕はほとんどない勘違いをしていたようだ」

私は自分が抱いたその勘違いについて、『プラーヌス』に簡単に説明した。すなわちフローリアを女神だと思い込んでいたあの勘違いのことである。

すると彼は何だか訳知り顔で言つてきた。

「まあ、人は誰でも恋をすれば、その相手を天使だと女神だとかに勘違いするものさ」

「そ、 そうなのか」

「ああ、僕も若い頃、そんな勘違いをしたことがある。そんなことより、意識が戻つて何よりだよ、シャグラン。最後に覚えていることは何だい?」

『プラーヌス』はまるで、私の病状を診断する医者のような口調で尋ねてきた。

「最後に覚えていること? そうだな、地下の実験室で女神像を見つけて、それからこれをどうするか一晩中悩んでいたことかな。

結局、僕はそれを蛮族たちに返したんだよな

しかし蛮族に私にその女神像を渡した記憶がないから、まだフローリアが女神ではなかつたという実感がイマイチ沸かない。まだ女神像はこの塔のどこにあるのに、皆で寄つて集つて私を謀つている可能性もなくもないはず。

私は冗談めかしてそう言つた。しかしフローリアは私の言葉を一笑に伏した。

「いや、あれはとても感動的な光景だつたよ。蛮族たちは本当に歓喜にむせび泣いていた。塔の召使いも、騎士が連れてきた兵も心を打たれていた。殊勲者の君があれを覚えてないなんて勿体ないな」

「そうか・・・」

それを見ていないので、私は蛮族の問題が解決したという実感もないのだ。まだ私だけ戦場の只中に取り残されたままの気分。とにかく全てがすつきりしない。

「それにこいつら謎も残つてゐると思うんだ」

私はそのままつくりしない表情をフローリアに向けたつた。「フローリアは女神でもないのに、だつたらどうしてあの地下の実験室にあの女神像があつたのか? ただの偶然だつたと片付けられないと思う。それと女性の泣き声が聞こえていたじゃないか。あれもどうやらその女神と同種のものようだつた。蛮族の捕虜に聞いたんだけど、あれは嘆きの女神だそうだ。その一つの女神がどういうわけでこの塔に紛れこんだのか、まだまだ謎だらけだよ」

「ああ、そうだな。まあ、それについては君が意識を失つて眠っている間、僕なりに考えたんだけども」

「 プラーヌスが言つてきた。『もしかしたら全ては、前の主の行つていたあの実験にあつたのかもしれない』と僕は考へている」

「あの実験？」

「ああ、人の道を踏み外した、目を覆う程に残虐なあの人體実験だよ。僕は前の主が残した人體実験の記録を記したノートと、彼が書いていた手記をじつくりと読んだ。彼は塔の召使いたちにも内緒で、近隣の村や街から人體実験用の人間を拉致してきたようなんだ。まあ、そんなこと魔法の力があれば容易い。とんだ才能の無駄遣いだけどね。それでどうやら、前の主はこの森に住む蛮族にも手を出したようだった」

「あ、ああ」

「はつきりとそう書かれていたわけではないんだが、偶然、彼は蛮族の神職にあつた者を拉致したのかもしれない。その日以来、彼は蛮族の襲来やあの女性の泣き声に悩まされ始めたようだからね。そう考へてもいいと思つ」

「意図せずに前の主は女神を拉致してしまつっていたわけか・・・」

「ああ、それで彼は墓穴を掘つたんだ。確實にその影響で寿命を縮めたのは間違いないからね。全てはそれが命取りだつたんだよ。彼からすればそれは女神どころか死神だつたつてわけさ」

「 どうか・・・」

そう言わると納得出来るかもしない。やはりフローリアが女神だったなんて、こっちの思い込みだったって。

あんなのはフローリアの魅力に魅せられた私の恥ずかしい勘違いだったのだ。確かに私が惑わされるに充分な、いくつかの偶然の符合はあったと思う。だけどプラスの説明のほうがずっと筋が通っている気がする。

「とにかく君のお陰で全ては解決したのさ」

まだ混乱している私を尻目に、プラスはとても晴れやかな表情を浮かべて言つてきた。「全ての問題がこれで終わつたんだよ、シャグラン。あの女性の不気味な泣き声も止んだ。蛮族の襲来も終わった。これで僕は門番のことでも悩まされることもなくなつた。ようやくこの塔は僕の塔だと心から言えるようになった」

そう言つたプラスの瞳に希望のようなものさえ輝いているかもしれない。とにかく彼は上機嫌に微笑んでいた。

「これからは問題解決のために時間を費やすのではなくて、この塔により快適にするために神経を注げられる。シャグラン、早速、ルーテティアの街に行こう」

「ルーテティア！」

ずっと昔から、私の憧れる芸術の都、ルーテティア！

「そこでありつたけの宝飾品や家具、調度品を買つんだ。この塔を僕の宮殿に相応しい美しい場所にしていく。新しい料理人も雇お

う。上芸家や建築士も必要だ。不必要な召使いたちは切つて、新しい召使いに挿げ替える。これからも忙しくなるぞ」

「あ、ああ、そうだね・・・」

でもそういうのが全て終わったら、もう街に帰つてもいいかな？

喉までそんな言葉が出かかった。

だつてもう私は充分に働いた氣がするのだ。女神像も見つけたし、不気味な女性の泣き声も解決した。もう私はこの塔に十二分に貢献したのではないだろうか。

しかしプラスの浮かれた表情を見ているとそんなことを言つ気になれなかつた。

まあ、もしかしたら少なからず私も、この塔に居心地の良さを感じるようになってきたからかもしねれない。

それにこの塔にはフローリアもいる。アビュもいる。そしてたくさんの方もいた。彼らとも知り合い、友情が芽生えつつあるのだ。

そして何よりもこのプラスも。

この塔に来た当初は久しぶりに再会したせいか気詰まりを感じていたけど、もうそのようなのも感じない。

プラスと別れることも、今となつては寂しいことだ。

私の人生はここに根を下ろし、そして何らかの花が咲こうとしているのかもしれない。それを捨て去るのはあまりに勿体ない。

私はそう思つて、 プラーヌスの言葉に頷いた。

「よし、 では出発だ」

プラーヌスは頷いた私を満足げに見ながらそう言った。

「はつ？ い、 今から？」

「ああ、 早速出発すると言つたではないか」

「ちよつと待つてくれよ、 プラーヌス。 僕はまだ頭がボートとして、 イマイチ現実が掴めてない」

「それがどうしたのさ、 シャグラン、 僕は君が目覚めるのをずっと待っていたんだ。 こつちはもう準備万端なんだよ」

さあ、 行こう。

そう言つて彼は私の手を取つた。

終わり。

## ハローゲ ⑩ 魔法使ことの友情（後書き）

これでか読みにいく文章の、この小説を最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。終わりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9366s/>

---

私の邪悪な魔法使いの友人

2011年11月13日22時09分発行